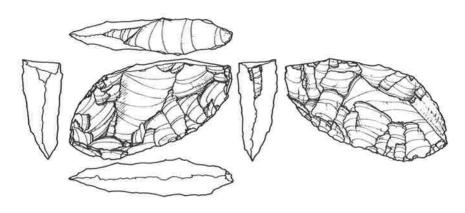
柳久保遺跡群VIII

(62E5 頭無遺跡旧石器~平安時代編)

(60~61E2 柳久保遺跡旧石器·縄文時代編)



頭無遺跡出土の細石刃核

前橋市埋蔵文化財発掘調査団



赤城山と柳久保遺跡群



頭無遺跡全景



頭無遺跡第Ⅱ・Ⅲ文化層調査区



頭無遺跡第Ⅰ文化層調査区



1 頭無遺跡第Ⅱ・Ⅲ文化層の石器



2 頭無遺跡第 I 文化層の石器



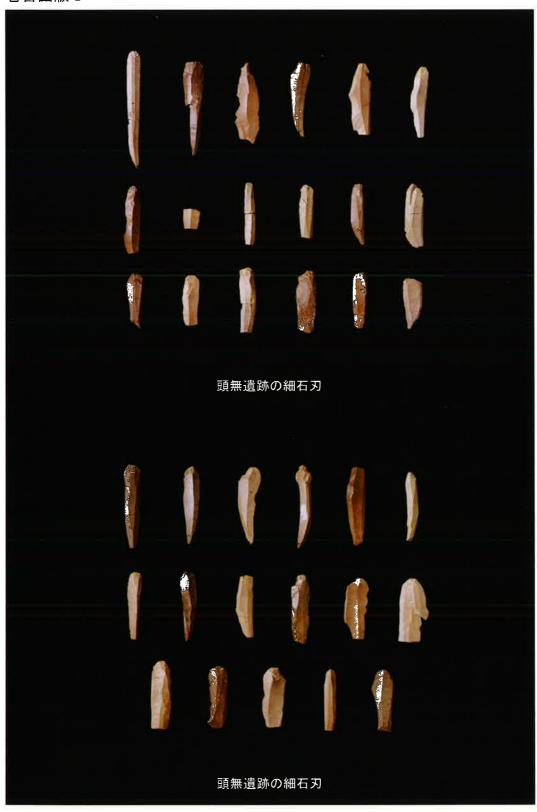
頭無遺跡の標準土層



巻首図版6







はじめに

昭和59年度に開始された柳久保遺跡群の調査も、昭和62年度の調査を持ちまして無事に完了することができました。発掘調査の範囲は20万㎡におよぶ広大な面積であり、多くの新知見と貴重な歴史遺産がもたらされました。

その中でも「田部」という文字が書かれた多数の土器は、今から1,300年前の律 令制下の地方社会を考える上で、大変興味深い資料を提供してくれました。

また、「鬼」や「馬」が描かれていた土器は、今から1,000年前の平安時代の人々が豊作を祈って奉納した品々であり、こうしたお祭りの仕方は大同2 (807) 年、斎部広成撰によるところの『古語拾遺』の「御歳神」項の記載と見事に重なり合うものでもありました。

そして、今年度の調査成果として特筆されるものは、遠くシベリアや沿海州と共通した技術を持つ、今から13,000年前の旧石器時代の石器が発見されたことです。 国際交流が叫ばれている昨今ですが、13,000年前の前橋に、そうした東アジアの技術がもたらされた足跡の片鱗をみることができました。

また、今回みつかった縄文土器の多くは、今から8,000年前の縄文時代早期の沈線文土器群で、群馬県内でもほとんど資料がなく、当時の文化を考える上で貴重な発見となりました。

最終年度に当たりましたて現地説明会を開催しましたところ、多数の皆様方がお越し下さいました。今後は、貴重な歴史遺産を公開できるような施設の整備に努めたい所存であります。

最後に4カ年にわたる発掘調査を無事に完了することができましたことは、前橋 工業団地造成組合の関係者のご理解と、多くの関係機関や各方面の方々のご配慮の 賜物といえます。

ここに長年の調査に対するご厚意に深く感謝申し上げ、お礼といたします。

昭和63年3月25日

前橋市埋蔵文化財発掘調香団

団長 関口和雄

例 言

- 1 本報告書は、前橋工業団地造成組合(管理者 清水一郎)が造成する城南住宅団地に係る埋 蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は下記の通りである。

柳久保遺跡群頭無遺跡 (62E5) 前橋市荒子町字頭無1327-6番地ほか 柳久保遺跡群柳久保遺跡 (60~61E2) 前橋市荒子町字柳久保1310番地ほか

3 発掘調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が前橋工業団地造成組合と委託契約を締結し実施した。調査担当および調査期間は以下の通りである。

遺跡名 柳久保遺跡群頭無遺跡(62E5) (かしらなしいせき)

担当者 前原 豊 関根吉晴

期 間 昭和62年4月21日~10月21日

遺跡名 柳久保遺跡群柳久保遺跡 (60~61E2) (やなぎくぼいせき)

担当者 遠藤和夫 前原 豊 福田瑞穂 関根吉晴

期 間 昭和60年5月13日~12月27日·昭和61年5月2日~12月20日

4 本書の作成は以下の通りである。

編 集 前原 豊 関根吉晴

本文執筆 関根(第1部I・III・V 第2部I・III 第3部II)・加部二生(第2部V) 福田(第1部V-1の遺構)・綿貫綾子(第1部Vの遺物) 前原(第1部II・IV 第2部II・IV 第3部I・II-2・III)

挿図作成 阿部シゲ子 石田博子 新保タマ子 高橋キョ子 渡木秋子 巾 千恵子 茂木 順 本木みのる 吉田松江 株式会社パスコ 遺物写真 小椋写真事務所 空中写真 株式会社パスコ たつみ写真スタジオ 遺跡測量 株式会社測設 国際航業株式会社

- 5 細石刃文化の調査にあたっては國學院大學教授 小林達雄氏、東海大学講師 織笠 昭氏にご指導をいただいた。石器石材の鑑定は飯島静男氏(群馬地質研究会員)に依頼した。 また、関東ローム層中のテフラ分析は(株)パリノサーヴェイ、プラント・オパール分析は古環境研究所に委託した。黒曜石の原産地推定は立教大学教授鈴木正男氏と野田市立博物館金山喜昭氏のご厚意によるものである。
- 6 頭無遺跡の整理と報告書の作成は、昭和63年2月15日~3月15日まで行った。 柳久保遺跡については発掘調査後の遺物、図面整理を昭和61年1月8日~昭和61年3月20日・昭和62年1月8日~2月10日まで断続的に行い、報告書の作成は昭和63年2月10日~3月10日まで行った。

なお、頭無遺跡の縄文石器については時間的制約から図化を行っていない。今後機会を改めて公 表していきたい。

- 7 発掘調査で出土した遺物は、本調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護室収蔵庫で管理されている。
- 8 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、下記の機関、諸氏よりご助言・ご指導をいただきました。 ここに御礼を申し上げます。(敬称略)

麻生敏隆 麻生 優 荒井幹夫 安斎正人 安蒜政雄 飯島義雄 井川達雄 石井克巳 植田 孝 植田 真 大塚昌彦 岡村道雄 織笠 昭 織笠明子 加藤 稔 金山喜昭川島雅人 小島純一 小管将夫 小林達雄 坂爪久純 佐藤宏之 佐藤正俊 渋谷孝雄 志村 哲 白石典之 白石浩之 鈴木忠司 諏訪間順 関矢 晃 大工原豊 武田昭子武田耕平 田辺早苗 田中 敏 堤 隆 手塚 孝 富樫雅彦 戸田正勝 都所敬尚中東耕志 野尻 侃 能登 健 芳賀英一 橋本勝雄 巾 隆之 原川雄二 比田井民子古郡正志 誉田 実 前原照子 増田 修 松村和男 松本 保 松本浩一 丸山泰徳宮田 毅 山中一郎 群馬県教育委員会文化財保護課 群馬県埋蔵文化財調査事業団

凡 例

1 本調査は公共座標をもとに遺跡全体に4×4mグリッドを設定し、南北軸をX軸とし、東西軸を Y軸として呼称した。各グリッドの名称は北西杭をあてた。なお、頭無遺跡のグリッド呼称は読 み替えを行った。全体図には読み替えたグリッド名と本来のグリッド名の双方を示した。 グリッドと公共座標の関係は、

Y100ライン=IX系+424,000m・X100ライン=IX系Y軸-600,000mである。

- 2 挿図に、建設省国土地理院発行の1/20万地形図(宇都宮)と1/5万地形図(前橋)を使用した。
- 3 本遺跡の略称は、頭無遺跡・・・62 E 5、柳久保遺跡・・・60・61 E 2 である。
- 4 各遺構の略称は次の通りである。
 - JD・・・縄文時代の土坑 S・・・集石 U・・・埋設土器 Z・・・石器配置遺構
 - IO・・・縄文時代の落ち込み
 - H···· 土師器使用の住居址 I····井戸 E···・粘土採掘坑 K···炭窯 D···・土坑
- 5 遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。
 - 遺構 石器配置遺構・集石・埋設土器・焼土・・・1/10 住居址・土坑・井戸・・・1/60 粘土採掘坑・・・1/120 旧石器時代遺物分布図・・・1/100 全体図・・・1/400

遺物 土器・石器・・・1/3 一部の土器・・・1/2・1/4 一部の石器・・・2/3・1/2・1/6

6 スクリーントーンの使用は、遺構平面図 焼土・・・点、遺物実測図 繊維含有土器の断面・・・点、 石器使用痕・・・斜線、石器磨滅痕・・・淡点である。

目 次

はじめ	と
第1部	頭無遺跡の調査
I	調 査 の 概 要・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
Π	旧石器時代の文化層・・・・・・・・・・・・・・・・3
Ш	縄文時代の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
IV	縄文時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
V	古墳・平安時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・31
第2部	柳久保遺跡の調査
I	調 査 の 概 要・・・・・・・・・・・・111
II	旧石器時代の遺物・・・・・・・・・・・・112
Ш	縄文時代の遺構・・・・・・・・・112
IV	縄文時代の遺物・・・・・・・・・・・115
V	弥生時代の遺物・・・・・・・・・・・・123
第3部	成果と問題点
I	旧石器時代の文化層と遺物・・・・・・・・・・・158
П	縄文時代の遺構と遺物・・・・・・・160
Ш	弥生時代~平安時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・163
第4部	付編
1	頭無遺跡火山灰土壌のテフラ分析(パリノ・サーヴェイ株式会社・早田勉)・・・・・ 175
2	頭無遺跡火山灰土壌のプラント・オパール分析(古環境研究所・杉山真二)・・・・ 182
3	頭無遺跡出土の細石刃文化石器群について(國學院大學・小林達雄)・・・・・・・ 188
4	植物珪酸体分析による遺跡周辺の古環境推定(杉山真二・前原豊・大工原豊)・・ 191
5	柳久保頭無遺跡における火山灰の再検討(早田勉・新井房夫)・・・・・・・192

写真図版

苍自	Ţ	亦拠川と柳外木退跡群		苍自	Б	與悪退跡の神石帝 (1)	
	2	頭無遺跡の旧石器文化層調査			6	頭無遺跡の細石器 (2)	
	3	頭無遺跡の旧石器文化石器群			7	頭無遺跡の細石器 (3)	
	4	頭無遺跡の標準土層			8	頭無遺跡の細石器(4)	
付		表	頁				頁
Tab.	1	頭無遺跡第I文化層のブロック別 石器集計表	33	Tab.	9	頭無遺跡包含層の縄文土器集計表	45
	2	頭無遺跡第I文化層のブロック別 石材一覧表	33		10	頭無遺跡縄文土坑の石器集計表	46
	3	頭無遺跡第Ⅰ文化層の器種別石材	33		11	頭無遺跡遺物観察表	47
	4	一覧表 頭無遺跡第Ⅰ~Ⅲ文化層の石器観 察表	34		12	柳久保遺跡縄文土坑の土器集計表	125
	5	頭無遺跡第I文化層接合資料一覧	42		13	柳久保遺跡縄文土坑の石器集計表	125
	6	表頭無遺跡縄文土坑計測表	44		14	柳久保遺跡包含層の縄文土器集計表	125
	7	頭無遺跡縄文土坑の土器集計表	45		15	柳久保遺跡包含層の縄文石器集計表	126
	8	頭無遺跡縄文土坑の石器集計表	45		10		120
		SYMMEN HONE THE PROPERTY OF	10				
挿		図	頁				頁
Fig.	1	柳久保遺跡群の位置	49	Fig.	23	頭無JD-21~24······	71
	2	柳久保遺跡群位置図	50		24	頭無JD-25~27·····	72
	3	柳久保遺跡群周辺図	51		25	頭無JD-28~30·····	73
	4	柳久保遺跡群全体図(1)	52		26	頭無JD-31~34·····	74
	5	柳久保遺跡群全体図(2)	53		27	頭無JD-35~38·····	75
	6	柳久保遺跡群調査経過図	54		28	頭無JD-39~41·····	76
	7	頭無旧石器時代の調査区域図	55		29	頭無S-1~3号集石	77
	8	頭無全体図(1)	56		30	頭無S-4~7、Z-1・2······	78
	9	頭無全体図(2)	57		31	頭無1~4号燒土	79
	10	頭無標準土層図	58		32	頭無J0-1~3・5~7	80
	11	頭無第 I 文化層遺物分布(1)	59		33	頭無J0-8~12·····	81
	12	頭無第 I 文化層遺物分布(2) ········	60		34	頭無縄文包含層の遺物分布(1)	82
	13	頭無第 I 文化層遺物分布(3) ··········	61		35	頭無縄文包含層の遺物分布(2)	83
	14	頭無第Ⅱ・Ⅲ文化層分布	62		36	頭無縄文包含層の遺物分布(3)	84
	15	頭無 I 文化層垂直分布(1)	63		37	頭無H-1号住居址	85
	16	頭無 I 文化層垂直分布(2)	64		38	頭無H-1号住居址竈	86
	17	頭無Ⅱ・Ⅲ文化層垂直分布···········	65		39	頭無H-2、I -1·····	87
	18	頭無JD-1~6·····	66		40	頭無E-1号粘土採掘坑	88
	19	頭無JD-7~10·····	67		41	頭無K-1~3、D-1~3······	89
	20	頭無JD-11~13·····	68		42	頭無第 I 文化層の旧石器(1)	90
	21	頭無JD-14~17······	69		43	頭無第Ⅰ文化層の旧石器(2)	91
	22	頭無JD-18~20·····	70		44	頭無第Ⅰ文化層の旧石器(3)	92

			頁				頁
Fig.	45	頭無第Ⅰ文化層の旧石器(4)	93	Fig.	69	柳久保S-3・5号集石	136
	46	頭無第Ⅰ文化層の旧石器(5)	94		70	柳久保縄文包含層の遺物分布(1)	137
	47	頭無第Ⅰ文化層の旧石器(6)	95		71	柳久保縄文包含層の遺物分布(2)	138
	48	頭無第Ⅰ文化層の旧石器(7)	96		72	柳久保縄文包含層の遺物分布(3)	139
	49	頭無第Ⅱ・Ⅲ文化層の旧石器	97		73	柳久保縄文包含層の遺物分布(4)	140
	50	頭無包含層の縄文土器(1)	98		74	柳久保U-1、縄文包含層の土器(1)	141
	51	頭無包含層の縄文土器(2)	99		75	柳久保縄文包含層の土器(2)	142
	52	頭無包含層の縄文土器(3)	100		76	柳久保縄文包含層の土器(3)	143
	53	頭無包含層の縄文土器(4)	101		77	柳久保縄文包含層の土器(4)	144
	54	頭無包含層の縄文土器(5)	102		78	縄文包含層の土器と弥生土器(5)	145
	55	頭無包含層の縄文土器(6)	103		79	旧石器・縄文包含層の石器(1)	146
	56	頭無土坑・包含層の縄文土器(7)	104		80	柳久保縄文包含層の石器(2)	147
	57	頭無包含層の縄文土器(8)	105		81	柳久保縄文包含層の石器(3)	148
	58	頭無Z-1·2、縄文包含層の石器	106		82	柳久保縄文包含層の石器(4)	149
	59	頭無H-1・2、I-1の土器	107		83	柳久保縄文包含層の石器(5)	150
	60	頭無 I -1、E-1の土器	108		84	柳久保縄文包含層の石器(6)	151
	61	柳久保遺跡群縄文遺構分布割付図…	127		85	柳久保縄文包含層の石器(7)	152
	62	柳久保遺跡群縄文面全体図	128		86	柳久保縄文包含層の石器(8)	153
	63	柳久保JD-24·26·35·····	130		87	各遺跡の縄文包含層遺物分布(1)	167
	64	柳久保JD-36・38・40・41	131		88	各遺跡の縄文包含層遺物分布(2)	168
	65	柳久保JD-42·56~58·····	132		89	各遺跡の縄文包含層遺物分布(3)	169
	66	柳久保JD-59・61・64、0-4······	133		90	各遺跡の縄文包含層遺物分布(4)	170
	67	柳久保焼土跡・U-1、Z-1	134		91	各遺跡の縄文包含層遺物分布(5)	171
	68	柳久保S-1・2・4号集石	135				
写真	包	l版					
PL.	1	頭無全景		PL_{ϵ}	17	頭無の粘土採掘坑・炭窯・土坑	
	2	頭無全景			18	頭無の旧石器時代遺物	
	3	頭無標準土層			19	頭無縄文包含層の土器	
	4	頭無第Ⅱ・Ⅲ文化層調査区			20	頭無縄文包含層の土器	
	5	頭無第Ⅱ・Ⅲ文化層調査区			21	頭無縄文土坑・包含層の土器	
	6	頭無第I文化層調査区			22	頭無縄文包含層の土器	
	7	頭無の縄文土坑			23	頭無縄文包含層の土器・Z-1の石器	
	8	頭無の縄文土坑			24	柳久保Z-2・縄文包含層の石器	
	9	頭無の縄文土坑			25	柳久保全景	
	10	頭無の縄文土坑			26	柳久保の縄文土坑	
	11	頭無の縄文土坑			27	柳久保の縄文土坑・集石	
	12	頭無の縄文土坑			28	柳久保のZ-1、U-1	
	13	頭無の縄文土坑			29	柳久保の縄文包含層の土器	
	14	頭無の縄文集石			30	柳久保の縄文包含層の土器	
	15	頭無の住居址			31	柳久保の縄文包含層の土器	
	16	頭無の井戸			32	柳久保の縄文土器、旧石器・縄文石器	

第1部 頭無遺跡の調査

I 調査の概要

1 調査目的

頭無遺跡の位置については、Fig. 3を参照願いたい。頭無遺跡は柳久保遺跡群内の南東部にあたる標高109mの丘陵性台地に立地する。宮川によって開析された谷を西側に臨むこの台地は、南西に緩傾斜を持ち沖積地との比高 4~5 mを測る。昭和59度に実施した試掘調査では、縄文時代の土坑数基と平安時代住居址数軒の存在が予想されたに過ぎず、短期間の発掘調査で完了可能と想定された。しかし、調査が進むに従い旧石器時代の文化層、縄文時代早期の遺構や遺物、古墳時代の住居址、平安時代の遺構や遺物という重要な遺構と遺物の検出となった。そのため、調査にあたっては拡張可能な範囲は発掘調査を実施し、綿密な記録保存に努めるよう心がけた。

2 調査経過

調査にあたっては、公共座標に基づく20m方眼杭が植杭してあるため、それを利用してグリッド設定した。さらに、4m方眼杭を調査基本杭とし、グリッドの呼称は北西杭を基準にした。グリッドの呼称は、南北方向をX軸、東西方向をY軸としたが、今回は数字が大きくなるため、便宜的に読み替えを行なった。実際には、Fig. 8を参照願いたい。

読み替えは、北方向をアルファベット、東西方向を数字で呼ぶことにした。

X150ライン=Pライン Y120ライン=0ラインとした。

昭和61年度事業で重機による表土掘削と大まかなプラン確認、さらに、4m方眼杭の設置が実施してあったため、昭和62年度の調査は4月当初から着手できた。調査準備で現地に訪れた時に霜と季節風によって多くの遺物が浮き出ていた。そのため、調査開始前にこれらの遺物をグリッド毎に収集し、分類・集計を行った。その結果、次のようにわかった。

- ① 調査区の北側に縄文時代包含層がまとまる。
- ② 南側に旧石器時代細石刃文化層が存在する。

このように遺跡の内容が把握できたため、調査区を大きく北と南の2つに分け、掘り下げ作業と記録作業を交互にすることによって効率良く調査を展開することができた。初段階に古墳・平安時代の遺構の調査と、その間隙をぬって旧石器時代第I文化層と縄文時代包含層の調査を実施した。次に縄文時代包含層の調査完了後、調査区全域のソフトローム層を重機で取り除き、「陥し穴」な

どの縄文時代遺構の検出につとめ、最後に旧石器時代下面である第Ⅱ・Ⅲ文化層の調査を行い完了を迎えた。

遺構の掘り下げは、原則として「使用面」と「掘り方面」の2工程に分けて行った。図面は縮尺 1/20で平板測量および簡易遣り方測量で作成し、必要に応じて1/10、1/40の縮尺図も作成した。旧石器時代および各遺構の遺物については平面分布図を作成し、出土状態などの各種属性を台帳に記載してから取り上げを行った。遺物包含層の遺物は、4 mグリッドで層位をわけて一括取り上げを行なった。

発掘調査は昭和62年4月21日から10月21日までの6カ月間、遺物整理と報告書作成は昭和63年2月15日から3月15日までの期間に実施した。なお、時間的制約から縄文石器の図化を行っていないため、今後機会をみて公表していきたい。

3 遺跡の要約

頭無遺跡の12,000㎡の調査区からは旧石器時代第Ⅰ~Ⅲ文化層、縄文時代草創期~後期、古墳時代前期、平安時代前期の遺構と遺物が検出された。

旧石器時代では、第Ⅰ文化層から細石刃核・細石刃・荒屋型彫器や第Ⅱ・Ⅲ文化層からナイフ形石器や台形様石器等、総数435点の石器が出土した。

続く縄文時代では、土坑41基、集石7基、焼土跡4基、石器配置遺構2基と落ち込みが11カ所が確認された。この中で33基の土坑はいわゆる「陥し穴」であり、4~5基単位で群構成が認められた。遺物は、包含層を中心に草創期撚糸文系土器群・押型文土器をはじめ、多量の早期沈線文・条痕文系土器群が出土した。この他に前期前半の繊維縄文・竹管文系土器群、中期の勝坂式土器・加曽利臣式土器、後期の加曽利B式土器が僅かに出土した。また、それぞれの土器群に伴う石器類も多数出土した。

この他、古墳時代の住居址1軒、平安時代の住居址1軒、土坑3基、井戸1基、粘土採掘坑1基 が検出されている。

4 層 序

頭無遺跡の層序は、基本的に他の台地と大きな変化はないが、XI層が水性堆積となっている。 表土を剥ぐと部分的にII層のAs-C混土層が残るが、ほとんどはIII層である軟質ローム層上面があらわれた。各時代の遺構確認面は、古墳時代から平安時代がII、III層上面であり、縄文時代がIV層上面である。

【層序説明】

I 層 灰黄褐色粗砂層。耕作土層。As-B (1108年) を50%以上含む。

- Ⅲ 層 黒褐色粗砂層。粘性をわずかに有し、軟らかいが締まっている。As-C(4世紀前半)を 20~30%含tg。
- Ⅲ a 層 黄褐色軟質(ソフト)ローム層。縄文時代遺物包含層。また、古墳時代以後の遺構は、 この層の上面で検出される。
- Ⅲ b 層 黄褐色軟質 (ソフト) ローム層。縄文時代遺物包含層。粘性を有し、軟らかいが締まっている。暗褐色土のブロックを半分近く含む層である。
- IV a 層 黄褐色硬質ローム層のブロック。縄文時代遺構確認面。As-YP(約1.3~1.4万年前)の ブロックを30~40%含む。
- Ⅳ b層 黄褐色硬質ローム層。層中にAs-SP(約1.5万年前)を霜降り状に含む。
- V 層 黄褐色硬質ローム層。As-BP(約1.6~2.1万年前)が多く含まれる。
- Va層 軽石層。As-BP純層。
- VI 層 黄褐色硬質ローム層。
- VII 層 明黄褐色微砂層。風化土壌。粘性を有し締まりは弱い。AT (約2.1~2.2万年前) の含有が 最大値となる。
- WIa層 暗褐色ローム層。暗色帯。粘性が強く締まり有り。
- WIIb層 にぶい黄褐色ローム層。暗色帯。
- IXa層 明黄褐色硬質ローム層。粘性・締まりとも極めて強い。
- IXb層 明黄褐色硬質ローム層。
- IX c層 明黄褐色硬質ローム層。
- Xa層 明黄褐色軽石層。Hr-HP(4.1万年前)。比較的大粒な軽石層。
- Xb層 明黄褐色火山灰層。Hr-HP。
- Xc層 明黄褐色軽石層。Hr-HP。
- XI 層 灰黄色粘土層。マンガン・鉄分塊が入る。水性堆積の非常に粘性が強く締まっている土層。

Ⅱ 旧石器時代の文化層

試掘調査では旧石器時代の遺物は確認されなかったが、調査前に地表に浮き出ている遺物の収集を行った際に、細石刃1点が認められた。その付近の探索を丹念に繰り返した結果、細石刃をはじめ、剥片・砕片数点が検出されたため、発掘調査の必要性が生じた。東西40m、南北36mの範囲を調査した結果、旧石器時代の文化層が3枚検出され、上層より第Ⅰ、第Ⅲ、第Ⅲ文化層と呼んだ。それぞれ各文化層の検出された石器の点数は、第Ⅰ文化層が426点、第Ⅱ文化層が5点、第Ⅲ文化層が4点であった。

1 第 I 文化層

1) 概要

① 調査概要 (Fig. 7~9 PL. 1・6)

調査範囲は表面採集を繰り返した結果からU-54グリッドから珪質頁岩の剥片類がまとまって採集できたため、この範囲をカバーする形で掘り下げを進めた。ネジリ鎌を使用してソフトローム層からハードローム層の上面まで丁寧に掘り下げを行なった。また、石器類の集中カ所について掘り下げた土についてはフルイかけを行なったが、丁寧な掘り下げ調査のため遺物を検出できなかった。

② 出土遺物 (Fig. 42~48 PL. 18)

第 I 文化層出土の石器は細石刃核 1、細石刃核関連用品 5、細石刃124、彫器 9、彫器削片15、削器 9、掻器 2、凹刃削器 1、敲石 1、使用痕のある剥片16、剥片212、砕片31の合計426点である。 他の多くの細石刃文化遺跡と同様に礫群は確認されず、焼土・炭化物の分布も認められなかった。

第 I 文化層の石器426点の石材内訳は、珪質頁岩355点 (83.3%)、黒色頁岩26点 (6.1%)、黒色 安山岩18点 (4.2%)、黒曜石13点 (3.0%)、粗粒安山岩8点 (1.9%)、ホルンフェルス3点 (0.7%)、頁岩2点 (0.5%)、チャート1点 (0.2%)である。黒曜石13点のうち12点は同一母岩であった。同一母岩資料のうち剥片No.457 (U-57GNo.10)の分析を立教大学教授鈴木正男氏に産地同定分析を依頼した結果、箱根系畑宿産という回答を得ている。

③ 遺物の出土層位 (Fig. 15・16 PL. 6)

石器の出土層位は \mathbf{III} a $\sim \mathbf{III}$ b 層から始まり、さらに下の \mathbf{IV} a 層(As-YP)、 \mathbf{IV} b 層(As-SP)上面まで検出された。このように 4 層にわたってみられた石器の垂直分布は、幅の小さいもので40cm、大きいもので70cmを測り、平均すると60cm前後の幅が認められた。

III a、III b層は縄文時代包含層であり、この層位から出土がみられるということは、軟質ローム層が形成される段階で混入したものといえる。従って、本文化層の層位は遺物垂直分布の集中から、IV a 層 (As-YP) 下部からIV b 層 (As-SP) 上部であり、テフラ編年においてはAs-YP降下以前で、As-SPの降下以降に位置づけられる。

ちなみにAs-YPの年代は前橋泥炭層中13,140±230B.P.以降(新井1964)という年代が測定されている。As-SPは下位の示標テフラとの層位から約1.5万年前と算出されている。ちなみに本文化層の年代は14,000年B.P.前後と位置付けられる。

④ 遺構及び焼土跡・炭化物

掘り下げ作業中に遺構や焼土跡、炭化物の存在について注意を払って観察したが、特に認められなかった。

2) 遺物の平面分布

遺物の平面分布は $Fig. 11 \sim 13$ で図示したが、 $S \sim Y$ 、 $49 \sim 57$ グリッドにかけての径32mの範囲の面積約800 ㎡にみられた。さらに西側と南側に延びることが予想されるが、西側部分はすでに昭和50年代に宅地造成のため土取りが実施されており、南側については市道により削平を受けているため現存しない。

これらの出土遺物は、あるまとまりをもって構成されている。このまとまりは径 $2.5m\sim5m$ の比較的小規模なものである。ここでは一応 $1\sim10$ ブロックにわけてそれぞれの特徴を説明する。また、ここでの「ブロック」は、単なるまとまりとして用いた。

1ブロック

ブロックのなかで最も北のU-50グリッドに位置している。遺物は径3.5mの範囲に53点が集中して検出されている。細石刃5、使用痕のある剥片1、剥片34、砕片13点と剥片が多数を占める。石材はすべて珪質頁岩(100%)で構成される。

2ブロック

1ブロックの東4mのU-53グリッドに位置している。遺物は長径5m、短径4mに41点がまとまって検出されている。細石刃3、彫器4、彫器削片4、掻器1、削器2、使用痕のある剥片1、剥片24、砕片2点で構成される。多くの器種を持ち、彫器や彫器削片が目立っている。石材は珪質頁岩24、黒色頁岩2、黒色安山岩8、黒曜石4、頁岩2、チャート1点と種類が多い。

3ブロック

1ブロックの南西10mの位置であるU-53グリッドに所在する。径3mの範囲から遺物が59点検出されている。石器は細石刃核1、細石刃25、彫器削片3、使用痕のある剥片3、剥片24、砕片3点で構成される。石材には珪質頁岩が48点と多数を占めるが、その他に黒色頁岩5、粗粒安山岩8点もみられる。

4ブロック

3ブロックの東に近接して所在する。U-50グリッドを中心にして分布する。4aと4bの2つのブロックに細別したが、大きく4ブロックに包括される。4aは長径5m、短径3m、また、4bは長径3m、短径2mと小規模であり、4aの南に近接して所在する。4ブロックでは遺物が61点検出された。石器は細石刃7、彫器4、彫器削片5、敲石1、剥片39、砕片5点で構成される。石材は珪質頁岩が56点と約90%を占めるほか、黒色頁岩4、ホルンフェルス1点がみられる。

5ブロック

3ブロックの南4mのU-54グリッドに所在する。長径5m、短径3.5mを計り64点の石器が比較的まとまりをもって分布する。器種は細石刃核関連用品2、細石刃23、彫器1、使用痕のある剥片5、剥片31、砕片2点で構成される。石材は珪質頁岩が58点と圧倒的に多いが、その他に黒色頁岩5、黒色安山岩1点が用いられている。被熱石器と思われるものが4点出土している。

6ブロック

4ブロックの南東に近接して検出された。U-56グリッド。長径2m、短径3.5mと小規模である。

石器は細石刃9、削器3、使用痕のある剥片2、剥片4、砕片1、合計19点出土した。石材は珪質 頁岩だけで構成される。被熱石器が2点出土している。

7ブロック

6 ブロックの東 7 mに位置する。U-55グリッド。長径4.5m、短径 3 mの範囲に31点の出土遺物が認められた。石器は細石刃8、削器 1、剥片22点がみられる。石材は珪質頁岩14、黒色頁岩 5、黒色安山岩 8、黒曜石 4点で構成される。

8ブロック

5ブロックの南4mに位置する。T-57グリッド。長径2.5m、短径1.5mと狭い範囲から18点の石器がみられた。石器は細石刃関連用品2点をはじめとして、細石刃4、彫器削片1、削器2、凹刃削器1、剥片8、砕片1点が出土している。石材は珪質頁岩が15点あり、その他に黒曜石2、ホルンフェルス1点がある。被熱石器が1点出土している。

9ブロック

8 ブロックの南東 5 mに位置する。U-56グリッド。径2.5 mの範囲から13点の石器が出土した。石器は細石刃 3 点をはじめとして、掻器 1、使用痕のある剥片 1、剥片 7、砕片 1 点が認められた。石材は珪質頁岩が11、黒色安山岩 1、黒曜石 1 点で構成される。

10ブロック

7ブロックの南5mに位置する。W-57グリッド。南は道路になっているため、さらに延びていたものと考えられる。ここでは31点の遺物が検出された。内訳は細石刃が27点とまとまって出土し、他には使用痕のある剥片1、剥片2、砕片1点がみられた。石材は珪質頁岩が29点と多数を占めるほか、黒曜石2点もみられた。被熱石器が1点出土している。

この他にブロック外で、細石刃関連用品1、細石刃2、削器1、使用痕のある剥片1、剥片11の計16点が検出され、表採では、細石刃6、彫器削片2、削器1、使用痕のある剥片1、剥片5、砕片2が認められた。

3)接合資料

珪質頁岩の個体別資料の分類は今回実施しなかった。珪質頁岩の母岩分類が困難なことや時間的な制約があったためである。今後機会をとらえて母岩分類を試みていきたい。なお、接合資料については以下の36資料があげられる。

接合資料1

珪質頁岩製の削器と使用痕のある剥片の接合資料である。2ブロックとブロック外の接合で0.2mを測る。

接合資料2

珪質頁岩製の細石刃核関連用品の2点の接合資料である。5ブロック内での接合で0.13mを測る。 接合資料3 黒曜石製の剥片2点の接合である。8ブロック内での接合資料であり、0.12mを測る。

接合資料4

珪質頁岩製の削器2点の接合資料である。6ブロック内でのまとまった接合で0.1mを測る。被熱を受けている。

接合資料 5

珪質頁岩製の彫器2点の接合資料である。2ブロック内でのまとまった接合で0.15mを測る。

接合資料 6

珪質頁岩製の彫器2点の接合資料である。4ブロックと2ブロックの接合で0.15mを測る。

接合資料 7

黒曜石製の細石刃2点の接合資料である。7ブロック内での接合で5.6mを測る。

接合資料8

珪質頁岩製の細石刃3点の接合資料である。3ブロック2点と2ブロック1点の接合で16.7mを測る。

接合資料9

珪質頁岩製の細石刃2点の接合資料である。6ブロック内でのまとまった接合で0.1mを測る。

接合資料10

珪質頁岩製の細石刃2点の接合資料である。3ブロック内でのまとまった接合で1.4mを測る。

接合資料11

珪質頁岩製の細石刃2点の接合資料である。5ブロック内でのまとまった接合で0.18mを測る。被熱を受けていると思われる。

接合資料12

珪質頁岩製の細石刃2点の接合資料である。3ブロック内でのまとまった接合で0.1mを測る。

接合資料13

珪質頁岩製の細石刃3点の接合資料である。5ブロック内でのまとまった接合で0.15mを測る。

接合資料14

ホルンフェルス製の剥片2点の接合資料である。8ブロックとブロック外の接合で7.3mを有する。

接合資料15

黒曜石製の剥片3点の接合資料である。2ブロック内の接合で0.1mを測る。

接合資料16

黒色安山岩製の剥片2点の接合資料である。2ブロックと10ブロックの接合で11.5mを有する。

接合資料17

黒色頁岩製の剥片2点の接合資料である。3ブロック内の接合であり、0.1mを測る。

接合資料18

珪質頁岩製の剥片2点の接合資料である。5ブロックと1ブロックの接合で17mを測る。

接合資料19

珪質頁岩製の剥片2点の接合資料である。4ブロック内の接合で3.4mを測る。

接合資料20

珪質頁岩製の砕片と剥片の接合資料である。4ブロック内での接合で0.1mである。

接合資料21

黒色頁岩製の剥片2点の接合資料である。4ブロック内で剥片と砕片であり、0.1mを測る。

接合資料22

黒色安山岩製の剥片2点の接合資料である。2ブロック内での接合であり、2.3mを測る。

接合資料23

黒曜石製の剥片2点の接合である。10ブロック内において接合で2mを測る。

接合資料24

珪質頁岩製の細石刃2点の接合資料である。10ブロック内での接合で0.1mである。

接合資料25

黒色頁岩製の剥片3点の接合資料である。3ブロックから2点、ブロック外から1点の接合で22.5mを測る。

接合資料26

珪質頁岩製の剥片3点の接合資料である。1ブロックが2点、7ブロックが1点で構成され、接合は18.4mと離れる。

接合資料27

黒色頁岩製の剥片4点の接合資料である。5ブロック内の接合で0.1mと短い距離での接合である。

接合資料28

珪質頁岩製の剥片2点の接合資料である。5ブロック内での接合で0.1mを測る。

接合資料29

珪質頁岩製の剥片2点の接合資料である。4ブロック内で0.1mを測る。

接合資料30

玤質頁岩製の細石刃2点の接合である。6ブロックと10ブロックの接合で7.1mを有する。

接合資料31

粗粒輝石安山岩剥片3点の接合である。3ブロック内の接合で0.2mを測る。

接合資料32

黒色安山岩製剥片2点の接合である。7ブロック内で0.1mを測る。

接合資料33

黒色安山岩製の剥片2点の接合である。7ブロック内で2.5mの接合距離である。

接合資料34

玤質頁岩製の細石刃2点の接合である。5ブロックと3ブロック間の接合で2.4mを測る。

接合資料35

珪質頁岩製の細石刃2点の接合である。10ブロック内で0.1mを測る。

接合資料36

珪質頁岩製の剥片2点の接合である。5ブロック内で0.1mを測る。被熱を受けていると思われる。

4) 出土石器

細石刃石核 (Fig. 42)

187は珪質頁岩製の細石刃石核である。丁寧に調整された両面加工のブランクを素材とし、打面は石核の長軸方向からファーストスポールとスキー状スポール剥取の2回にわたる打撃によって設定される。細石刃の剥取は打面調整を行っておらず、細石刃を連続的に剥離するまで至らず遺棄されている。打面は作業面からみると、右側面から左側面にかけて傾きを有する。なお左側面の後方の稜線部分に顕著な摩耗痕が約3×2cmの範囲に限定して存在する。

細石刃石核ファーストスポール (Fig. 42)

140は珪質頁岩製の両面調整の細石刃石核ブランクより作出されたファーストスポールである。細石刃石核187とは母岩が異なるが、同様に左側縁から右側縁に傾きを有する。

細石刃石核作業面調整剥片 (Fig. 42)

255は珪質頁岩製の細石刃石核作業面調整剥片である。ファーストスポール140と同一母岩の可能性が強いものである。

細石刃石核調整剥片(Fig. 42・43)

116は細石刃石核の作業面と右側縁の部分であり、調整の際に誤って剥離されたものと思われる。 この他に44・109・240・516・539も同様に細石刃核に関係する調整剥片と思われる。

削器 (Fig. 43・45)

428・433・524・588・256のいずれも縦長剥片を素材として用いている。433は凸字形になるものと 考えられる。 494+495は被熱を受けた削器である。

播器 (Fig. 43)

453は、刃部を欠損しているが、素材の厚さ、基部側にくびれをもつ凸字形である事から角二山型 掻器と考えたが、荒屋型彫器の可能性もある。

彫器 (Fig. 45)

245・392・545+551、359・353・396+535・522のいずれも珪質頁岩製であり、合計 7点が出土した。 両側縁には急斜度調整がなされ、ファシットは左肩に一条施される。また353・392・396+535・52 2はファシット面から器体の背面に、フラットグレーバー状剥離が若干なされている。353・359・3 92・396+535・522は縦長剥片を用い、245と545+551は横長の剥片を用いている。

細石刃 (Fig. 44·46~48)

(1) 点数及び数量

総数124点である (Tab. 1)。総重量は48.4gである。総点数は遺物取上げの点数であり、もと

もと 1 点の細石刃が 2 点以上に破損していても破損した点数で数えている。その後の接合作業により、折れ面どうしで接合した細石刃を確認した。接合作業の結果で再集計した細石刃の点数は112 点である。

(2) 細石刃の石器石材

細石刃の石材は、珪質頁岩と黒曜石の2種類で構成される(Tab. 3)。総数124点のうち珪質頁 岩120点、黒曜石が4点と圧倒的に珪質頁岩が多数を占める。また、珪質頁岩の調整剥片は多量に出 土しており、珪質頁岩を使用した細石刃生産が主体を占めており、黒曜石を使った細石刃生産は調 整剥片も6片と少なくその実態も明らかでない。

(3) 細石刃の残存部位

実測できなかったものも含め、細石刃の残存部位をA~Hの8分類に分類した(図 1)。対象は112点である。分類については、A…完形、B…先端部欠損、C…頭部欠損、D…下半部欠損、E…上半部欠損、F…頭部残存、G…中間部残存、H…先端部残存であり、詳細は表 1 のとおりである。ただし、先端が僅か 2 mm程度欠けたものはA…完形に含めた。集計結果をみるとB…先端部欠損40点(36%)、A…完計23点(21%)、D…下半部欠損22点(20%)、G…中間部残存18点(16%)が多くを占めている。

(4)細石刃の大きさ

長さ・幅についてそれぞれ最大長・最大幅を示して 1 mm単位で計測した(図 $2 \sim 4$)。詳細は石器観察表を参照。長さについて 5 mm単位で区分した数量で見ると、完形と破損を含め、細石刃全体では $16 \sim 20 \text{ mm}$ が26点で最も多く、次いで $11 \sim 15 \text{ mm}$ が22点、 $21 \sim 25 \text{ mm}$ が21点である。

幅は $7\sim 8\,\text{mm}$ が50点と圧倒的に多い。次いで $5\sim 6\,\text{mm}$ が31点、 $9\sim 10\,\text{mm}$ が28点である。それ以下の幅のものは存在しない。また $11\sim 12\,\text{mm}$ が 4点、 $13\sim 14\,\text{mm}$ が 4点である。このことから主に $5\sim 10\,\text{mm}$ の細石刃を目的に剥離したことが推測される。

(5) 細石刃の微細剥離痕

微細剥離痕については表 2 のとおりであるが、中間部のものには少なく、A…完形、B…先端部欠損、D…下半部欠損に多い。

彫器削片 (Fig. 44)

彫器削片とした石器は、彫器の彫刻刀面作出に伴って剥離された削片で、彫刻刀スポールともいう。背面および左右側面に彫器背面・彫器背面調整痕、彫器調整加工痕、先行彫器削片剥離面、彫器腹面を取り込んで剥離されたもので、主要剥離面が最終剥離面(ポジ面)、断面形が薄い台形・三角形を有する属性を持つものを彫器削片とした。 図示したのは71・183・200・263・351・361・404・405・483・514・525・533・542でこの他図示しなかった175と425の2点があるため計15点である。483はファーストスポールである。263・361・401以外は背面に旧ファシット面とそれを切る急斜度調整が観察される。

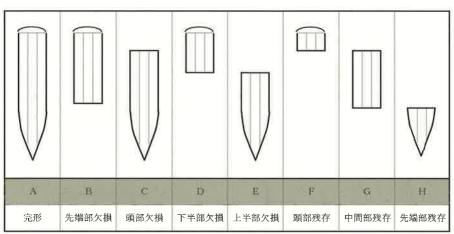


図1 細石刃の分類

表1 細石刃の部位

		HO A IN HIGH	
现存	記号	集計	構成比
完形	А	23	21%
先端部欠損	В	40	36%
頭部欠損	С	7	6 %
下半部欠損	D	22	20%
上半部欠損	E	1	1 %
頭部残存	F	0	0
中間部残存	G	18	16%
先端部残存	Н	1	1 %
160	Bt-	112	100%

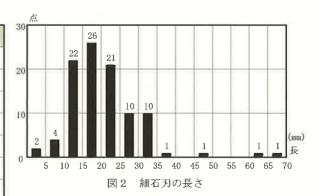
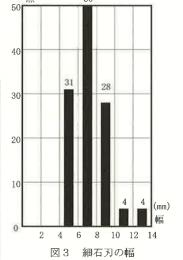
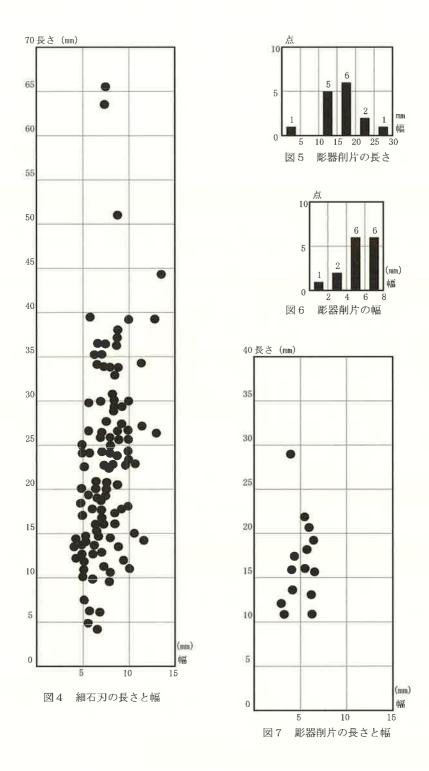


表 2 細石刃の微細剥離痕

24 = 115 = 124 = 124 12								
现在	記号	25.000	側離あり	剥離なし	比率 (%)			
完形	A	23	3	20	13%			
先端部欠損	В	40	7	33	18%			
頭部欠損	С	7	1	6	14%			
下半部欠損	D	22	5	17	23%			
上半部欠損	E	1	0	1	0			
頭部残存	F	0	0	0	0			
中間部残存	G	18	1	17	6 %			
先端部残存	Н	1	0	1	0			
合	St-	112	17	95	18% (平均)			





(1) 彫器削片の点数、重量

総数15点の総重量は40gである。総点数は遺物取上げの点数であり、もともと1点の彫器削片が2点以上に破損していても破損した点数で数えている。その後の接合作業により、折れ面どうしで接合した彫器削片もある。

(2) 彫器削片の石材

15点中15点と100%珪質頁岩である。

(3) 彫器削片の大きさ

彫器削片の長さ・幅について次のように分析した。長さ・幅はそれぞれ最大長・最大幅を示し1mm単位で計測した。詳細は石器一覧表を参照のこと。

①長さ 長さについては破損した彫器削片も破損状態のまま示した。このため、実際に剥離された彫器削片の正確な長さとは異なる。破損も含め、 $0\sim5$ mm以下1点、 $11\sim15$ mm・5点、 $16\sim20$ mm・6点、 $21\sim25$ mm・2点、 $26\sim30$ mm 1点であった。

②幅 幅については、破損による変動が小さいので実際に剥取された彫器削片の幅を反映しており、数値の把握に有効である。また、彫器削片の幅から彫刻刀形石器にどの程度の幅を持つ彫刻刀面が形成されたのかを間接的に推定するのにも有効である。幅を $2 \, \text{mm}$ 単位で区分して数量をみると、 $0 \sim 2 \, \text{mm} \, 1 \, \text{点}$ 、 $3 \sim 4 \, \text{mm} \, 2 \, \text{点}$ 、 $5 \sim 6 \, \text{mm} \, 6 \, \text{点}$ 、 $7 \sim 8 \, \text{mm} \, 6 \, \text{点}$ であった。このことから彫器からは主に幅5 $\sim 8 \, \text{mm}$ の彫器削片が剥取され、彫器にはこの幅に対応する彫刻刀面が作出されたことが推測できる。

5) 石器石材

石器石材については(Tab. 2・3)に示したとおりである。総数426点のうち珪質頁岩が354点を占める。在地の石材である黒色頁岩や黒色安山岩は45点、鈴木正男氏による分析の結果、箱根畑宿産と判明した黒曜石が13点である。そのほか粗粒安山岩8点、ホルンフェルスが3点、頁岩2点、チャート1点である。このように東北日本を中心とした珪質頁岩を主体とした細石刃文化石器群としてとらえられる。また、地元石材で黒色頁岩や黒色安山岩を使ったトールが存在しないこともつつ特徴として捉えられる。

6)被熱石器

明らかに被熱石器として判断できたものは6ブロックから出土した接合資料4であるFig. 44、494+495の珪質頁岩製の削器である。全体的に高温の被熱によりクレーター状の剥落が生じ、色調も黒色化している。このほかに明らかに被熱石器と判断できたものは、すべて珪質頁岩であった。8ブロックのNo.130の砕片、No.636の細石刃、5ブロックのNo.129の剥片であり、合計5点である。

このほかに色調が灰色に変化したものも被熱石器と考えられる。参考までに5ブロックの接合資料36であるNo.90+115のうち115が色変していた。また、5ブロックから出土した接合資料11のNo.86

+138の細石刃であるNo.138も灰色に色変し、同じ5ブロックのNo.215の色に変化がみえた。このように被熱石器 5 点と被熱石器と思われるものが 4 点、合計 9 点が存在する。

2 第Ⅱ文化層

本文化層はVa 層(As-SP)下部に位置づけられ、ナイフ形石器 2 点と剥片 3 点が出土した。 6 92はY-52グリッドのVa 層から出土した黒色頁岩製のナイフ形石器である。 縦長剥片を素材とし、調整加工は一側縁に急傾斜のブランティングが施され、切り出し状を呈する。

688はX-51グリッドのVa層から出土した黒曜石製の台形様石器である。縦長剥片を素材とし、 裏面基部に平坦剥離が施される。

684+685+686は礫面をもつ黒色安山岩の剥片で3点が接合した。3点ともU-56グリッドで認められ、684がV層、685・686がWII層から出土している。

3 第Ⅲ文化層

本文化層はAT(WI層)下のWI層(暗色帯)から検出された。4点の状態で検出されたが、接合の結果、台形様石器2点と調整痕のある剥片1点となった。

689+690は接合し、1点の台形様石器となった。689はX-51グリッドのWIa層から出土し、690も同じグリッドのWIb層から出土した。689+690は黒色安山岩の横長剥片を素材とし、台形状に作出されている。調整は背面の基部と腹面の右側縁に平坦剥離がなされる。687はX-50グリッドのWIIa層から出土した黒色頁岩製の調整痕のある剥片である。691はX-51グリッドのWIIa層から出土した。黒色安山岩製の丈の短い縦長剥片を素材とした台形様石器である。腹面から背面方向に急傾斜の調整が基部に数回施される。

Ⅲ 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構全体図はFig. 8~9であり、Fig. 34~36に土器・石器の包含層遺物分布図を掲載したので両者を併せて参照していただきたい。赤城南麓ではソフトローム層であるⅢ層が縄文包含層となっており、縄文時代の各時期の遺物が混在した状態で検出される。しかし、遺構についてはⅢ層でもわずかに検出できるが、多くはⅣ層まで達しないと検出できない。

調査の結果、縄文時代の遺構は土坑41基(Tab. 6)、集石7基、焼土跡4基、石器配置遺構2基、落ち込み11ケ所が検出された。遺構分布をみると、鞍部から斜面にかけて集中がみられる。

1 土 坑

JD-1号土坑 (Fig. 18、PL. 7)

(位置)W-5グリッド(方位)N-76° -W(形状)楕円形を呈する。長径175×短径70cm、深さ80cmをと小形である。坑底穴は2個存在する。坑底穴の規模はP1・径21cm、深さ55cm、P2・径21cm、深さ45cm。

ID-2号土坑 (Fig. 18、PL. 7)

(位置) X-20グリッド (方位) N-96°-W (形状) 楕円形を呈する。長径224×短径119cm、深さ124cm。 坑底穴は2個存在する。 坑底穴の規模はP1・径14cm、深さ31cm、P2・径18cm、深さ27cm。 (遺物) 土器片47点、石器2点が出土している。

JD-3号土坑 (Fig. 18、PL. 7)

(位置) R・S-6グリッド(形状) 不整形。長軸、短軸、深さとも計測不能。(遺物) 石器 2 点が出土している。(備考) 調査の結果、壁・坑底穴等不明瞭であり、落ち込みと考えられる。

JD-4号土坑 (Fig. 18、PL. 7)

(位置) S-28グリッド (方位) N-22°-W (形状) 楕円形を呈する。長径148×短径77cm、深さ19cm。 (遺物) 土器片 6 点が出土している。 (備考) 規模と形態から落ち込みと考えられる。

JD-5号土坑 (Fig. 18、PL. 8)

(位置)S-22グリッド(方位) $N-166^\circ$ -W(形状)不整な楕円形を呈する。長径206×短径84 cm、深さ22cm。(遺物)土器片 1 点が出土。(備考)形態・規模から落ち込みと考えられる。

JD-6号土坑 (Fig. 18、PL. 8)

(位置) W·X-3・4 グリッド (方位) N-36°-W (形状) 楕円形。長径157×短径76cm、深さ79cm。 坑底穴は2 個存在し、P1・径16cm、深さ37cm、P2・径17cm、深さ32cm。

JD-7号土坑 (Fig. 19、PL. 8)

(位置) $X \cdot Y - 3 \cdot 4$ グリッド (方位) $N-20^\circ$ -W (形状) 楕円形を呈し、規模は長径214×短径93cm、深さ119cm。坑底穴は2個存在し、 $P1 \cdot 径18cm$ 、深さ43cm、 $P2 \cdot 径17cm$ 、深さ41cm。(遺物) 土器片1点が出土している。

JD-8号土坑 (Fig. 19、PL. 7)

(位置) V・W-6グリッド (方位) N-121°-W (形状) 楕円形を呈する。規模は長径208×短径130cm、深さ117cm。坑底穴は3個存在。P1・径16cm、深さ33cm、P2・径13cm、深さ23cm、P3・径15cm、深さ18cm。 (遺物) 土器片を1点検出。

JD-9号土坑 (Fig. 19、PL. 8)

(位置) X・Y-21グリッド (方位) N-87°-W (形状) 楕円形。長径230×短軸115cm、深さ105cm。坑底穴は2個存在する。規模はP1・径12cm、深さ37cm、P2・径14cm、深さ33cm。(遺物) 土器片が48点、石器が4点出土している。

JD-10号土坑 (Fig. 19、PL. 9)

(位置) R·S-15グリッド (方位) N-64°-W (形状) 楕円形を呈する。長軸222×短軸122cm、

深さ104cm。坑底穴は2個存在。P1・径25cm、深さ30cm、P2・径20cm、深さ39cm。(遺物)土器 1個体(Fig. 50-6)が出土。

JD-11号土坑 (Fig. 20、PL. 9)

(位置) V-23・24グリッド(方位) N-55°-W(形状) 楕円形を呈し、長径248×短径143cm、深さ127cm。坑底穴は2個存在し、P1・径20cm、深さ28cm、P2・径14cm、深さ29cm。(遺物) 土器片7点が出土している。

JD-12号土坑 (Fig. 20、PL. 9)

(位置)U-13グリッド(方位)N-61° -W(形状)楕円形を呈し、長径243×短径151cm、深さ144cm。また、坑底穴は3個存在する。P1・径13cm、深さ28cm、P2・径13cm、深さ29cm、P3・径15cm、深さ29cm。 (遺物)土器片1点が出土。

JD-13号土坑 (Fig. 20、PL. 9)

(位置) U・V-21・22グリッド(方位) N-73°-W(形状) 楕円形。長径350×短径188cm、深さ126cm。 坑底穴は3個存在。 P1・径13cm、深さ27cm、 P2・径15cm、深さ25cm、 P3・径15cm、深さ23cm。 (遺物) 土器片7点、石器1点が出土している。

JD-14号土坑 (Fig. 21、PL. 9)

(位置) V・W-27グリッド (方位) N-90°-W (形状) 楕円形を呈する。長径202×短径 103cm、深さ120cm。坑底穴は3個存在し、P1・径12cm、深さ28cm、P2・径11cm、深さ28cm、P3・径9cm、深さ21cm。 (遺物) 土器片が1点出土している。

JD−15号土坑 (Fig. 21、PL. 10)

(位置) Y・Z-50グリッド(形状)不整形を呈し、規模は計測不能。(備考)プラン確認において土坑として調査を始めたが、形態等により落ち込みと考えられる。

ID-16号土坑 (Fig. 21、PL. 10)

(位置) R・S-35・36グリッド(方位) N-57°-W(形状) 楕円形を呈し、長径216×短径117 cm、深さ110cm。坑底穴は2個存在し、P1・径14cm、深さ23cm、P2・径15cm、深さ26cm。(遺物) 土器片5点、石器3点が出土している。

JD-17号土坑 (Fig. 21、PL. 10)

(位置) T-34グリッド(方位) $N-45^\circ-W$ (形状)楕円形。長径256×短径166cm、深さ82cm。また、坑底穴は2個存在する。 $P1\cdot径15cm$ 、深さ29cm、 $P2\cdot径17cm$ 、深さ33cm。(遺物) 石器が1点出土している。

JD-18号土坑 (Fig. 22、PL. 10)

(位置) S・T-32グリッド(方位) N-91°-W(形状) 楕円形を呈し、長径211×短径130cm、深さ118cm。 坑底穴は3個存在。 P 1・径16cm、深さ27cm、 P 2・径15cm、深さ27cm、 P 3・径16cm、深さ30cm。 (遺物) 土器片が3点出土している。

JD-19号土坑 (Fig. 22、PL. 10)

(位置) T・U-30・31グリッド (方位) N-15°-W (形状) 楕円形。長径244×短径139cm、深さ113cm。 坑底穴は3個存在し、P1・径17cm、深さ41cm、P2・径12cm、深さ33cm、P3・径12cm、深さ39cm。 (遺物) 土器片が3点出土している。

JD-20号土坑 (Fig. 22、PL. 10)

(位置)R・S -31グリッド(方位)N -90° -W(形状)楕円形を呈する。長径224×短径 150cm、深さ124cmで、坑底穴は2個存在する。P 1・径17cm、深さ14cm、P 2・径15cm、深さ22cm。 **J D**-21号土坑(Fig. 23、PL. 11)

(位置) $T \cdot U - 26$ グリッド(方位) $N - 37^{\circ} - W$ (形状)楕円形。長径236×短径113cm、深さ99 cm。坑底穴は2個存在。 $P \cdot 1 \cdot 215$ cm、深さ33cm、 $P \cdot 2 \cdot 215$ cm、深さ32cm。

JD-22号土坑 (Fig. 23、PL. 11)

(位置)R・S -26 グリッド(方位)N -37° - W(形状)楕円形を呈する。長径245×短径100cm、深さ86cmを測り、坑底穴は2個存在する。P 1・径17cm、深さ36cm、P 2・径17cm、深さ34cm。

JD-23号土坑 (Fig. 23、PL. 11)

(位置) W・X-19・20グリッド (方位) N-90°-W (形状) 楕円形を呈し、長径231×短径140 cm、深さ107cm。坑底穴は3個存在。P1・径21cm、深さ25cm、P2・径17cm、深さ32cm、P3・径15cm、深さ31cm。 (遺物) 土器片1点、石器1点を出土している。

JD-24号土坑 (Fig. 23、PL. 11)

(位置) $X-17\cdot18$ グリッド(方位) $N-49^\circ$ -W(形状)楕円形。長径222×短径148cm、深さ110cm。坑底穴は3個存在する。 $P1\cdot径14cm$ 、深さ30cm、 $P2\cdot径19cm$ 、深さ39cm、 $P3\cdot径9cm$ 、深さ19cm。(遺物)土器片が1点出土している。

JD-25号土坑 (Fig. 24、PL. 11)

(位置) $X \cdot Y - 16$ グリッド(方位)N - 68° -W(形状)楕円形を呈し、長径234×短径121cm、深さ109cm。坑底穴は3個存在し、規模は $P1 \cdot$ 径15cm、深さ15cm、 $P2 \cdot$ 径15cm、深さ31cm、 $P3 \cdot$ 径18cm、深さ34cm。

JD-26号土坑 (Fig. 24、PL. 11)

(位置) U・V-16・17グリッド (方位) N-53°-W (形状) 楕円形。長径290×短径166cm、深さ106cm。 坑底穴は2個存在し、P1・径15cm、深さ44cm、P2・径16cm、深さ40cm。 (遺物) 土器片が2個出土している。

JD-27号土坑(Fig. 24、PL. 12)

(位置)Y-12グリッド(方位) $N-50^\circ$ -W(形状)楕円形を呈する。長径250×短径150cm、深さ121cmで、坑底穴は3個存在。規模はP1・径14cm、深さ27cm、P2・径15cm、深さ22cm、P3・径15cm、深さ24cm。

JD-28号土坑 (Fig. 25、PL. 12)

(位置) R·S-12グリッド(方位) N-81°-W(形状) 楕円形を呈し、長径267×短径129cm、

深さ128cm。坑底穴は2個存在。規模はP1・径14cm、深さ50cm、P2・径13cm、深さ47cm。

JD-29号土坑 (Fig. 25、PL. 12)

(位置) $V \cdot W - 4 \cdot 5$ グリッド(方位) $N - 48^\circ - W$ (形状)楕円形。長径269×短径131cm、深 さ89cm。 坑底穴は 2 個存在し、 $P \cdot 1 \cdot 41$ で $P \cdot$

JD-30号土坑 (Fig. 25、PL. 12)

(位置) V・W-6・7グリッド (方位) N-52°-W (形状) 楕円形を呈する。長径222×短径139cm、深さ98cmで、坑底穴は2個存在する。規模はP1・径17cm、深さ36cm、P2・径17cm、深さ39cm。 (遺物) 土器片2点、石器4点が出土している。

JD-31号土坑 (Fig. 26、PL. 12)

(位置) $T \cdot U - 8$ グリッド(方位) $N - 100^\circ$ -W(形状)楕円形を呈し、長径202×短径 112cm、深さ165cm。 坑底穴は 2 個存在。 $P \cdot 1 \cdot 421$ cm、深さ47cm、 $P \cdot 2 \cdot 421$ cm、深さ43cm。

JD-32号土坑 (Fig. 26、PL. 12)

(位置) P-22グリッド (方位) N-77°-W (形状) 楕円形。長径196×短径100cm、深さ98cm。 坑底穴は2個存在。P1・径13cm、深さ41cm、P2・径20cm、深さ37cm。

JD-33号土坑 (Fig. 26、PL. 12)

(位置) $S \cdot T - 5 \cdot 6$ グリッド(形状)不整形。規模は計測不能。(遺物)石器 1 点が出土している。(備考)縄文土坑として調査したが、壁・坑底の形状より落ち込みと考えられる。

JD-34号土坑(Fig. 26、PL. 13)

(位置) T・U-9グリッド(方位) N-63°-W(形状)楕円形を呈する。長径295×短径 205cm、深さ143cmで、坑底穴は3個存在する。P1・径17cm、深さ42cm、P2・径16cm、深さ49cm、P3・径23cm、深さ40cm。(遺物)石器1点が出土。

JD-35号土坑 (Fig. 27、PL. 13)

(位置) O・P-28・29グリッド (方位) N-40°-W (形状) 楕円形を呈する。長径293×短径1 55cm、深さ109cm。 いわゆる「陥し穴」であるが、坑底穴は存在しない。

JD-36号土坑 (Fig. 27、PL. 13)

(位置) T-37グリッド (形状) 円形を呈する。径51×深さ40cm。

JD-37号土坑 (Fig. 27)

(位置) $N \cdot O - 38$ グリッド (方位) N - 53° -W (形状) 楕円形を呈する。長径253×短径161cm、深さ118cmで、坑底穴は2個存在する。 $P \cdot E$ 16cm、深さ34cm、 $P \cdot E$ 2・径15cm、深さ27cm。(遺物) 土器片1点が出土している。

JD-38号土坑 (Fig. 27、PL. 13)

(位置) X・Y-39・40グリッド (形状) 円形。径54cm、深さ36cm。 (遺物) 石器4点が出土している。 (備考) JD-40号と重複する。

JD-39号土坑 (Fig. 28、PL. 13)

(位置) K-39グリッド (方位) N-3°-W (形状) 楕円形を呈する。長径194×短径131cm、深さ90cmで、坑底穴は3個存在する。P1・径13cm、深さ14cm、P2・径11cm、深さ35cm、P3・径13cm、深さ25cm。

JD-40号土坑 (Fig. 28、PL. 13)

(位置) $L-39\cdot40$ グリッド(方位) $N-37^\circ-W$ (形状)楕円形。長径241×短径142cm、深さ99 cm。 坑底穴は2個存在し、 $P1\cdot径14cm$ 、深さ39cm、 $P2\cdot径15cm$ 、深さ29cm。(遺物) 土器片2点が出土している。

JD-41号土坑 (Fig. 28、PL. 13)

(位置) X-40グリッド (形状) 円形を呈し、径60cm、深さ36cm。 (遺物) 石器 1 点が出土している。 (備考) 1 D-38 号と切り合っている。形状は 1 D-38 号と類似する。

2 集 石

S-1号集石 (Fig. 29、PL. 14)

(位置) $U-27 \cdot 28$ グリッド(標高)109.1 m(形状)磔の分布は径80 cmのほぼ円形を呈し、径10 cm程の自然石、割石がみられ、多くは赤化・ヒビがみられた。

S-2号集石 (Fig. 29、PL. 14)

(位置) K-43グリッド(標高) 106.6m(形状) 径70cm程の円形を呈する。石の大きさは小さいもので約10cm、大きいもので約20cm。ほとんどが自然石であり、赤化・ヒビが認められた。

S-3号集石 (Fig. 29)

(位置) R・S -38 グリッド (標高) 108.5 m (形状) 径 $7 \sim 10$ cm 程の赤化がみられる。自然石が数 個まとまって出土した。

S-4号集石 (Fig. 30)

(位置)O-44グリッド(標高)107.9m(形状)径 $5\sim10$ cm程の自然石がまばらに点在する形で認められた。

S-5号集石 (Fig. 30)

(位置) $O \cdot P - 42$ グリッド (標高) 108.1 m (形状) 径5 $\sim 10 \text{cm}$ 程の自然石がまばらに点在する形で認められた。

S-6号集石 (Fig. 30)

(位置)K-43グリッド(標高)107.3m(形状)径 $10\sim15$ cm程の赤化・ヒビ割れした自然石が数個まとまって検出された。

S-7号集石 (Fig. 30)

(位置) $J \cdot K - 43$ グリッド (標高) $107.1 \mathrm{m}$ (形状) 径 $5 \mathrm{cm}$ 程度の自然石が数個まとまって認められた。

3 焼土跡

1号焼土跡 (Fig. 31)

(位置) T-46グリッド (標高) 108.1m (形状) 不整な楕円形を呈する。長径130×短径110cm、深 20cm。焼土層は1層であり、全体的に良く焼けていた。

2号燒土跡 (Fig. 31)

(位置) X-40グリッド (標高) 108.8m (形状) 不整な楕円形を呈する。長径80×短径60cm、深さ 10cm。 焼土層は 2 層あり、 1 層が良く焼けている。

3号焼土跡 (Fig. 31)

(位置) 0-37・38グリッド (標高) 108.0m (形状) 径50cmの円形を呈し、深さは10cm。焼土層は 1層で、良く焼けていた。

4号焼土跡 (Fig. 31)

(位置) Z-39・40グリッド (標高) 109.0m (形状) 不整な楕円形を呈する。長径130×短径50cm、深さ10cm。焼土層は1層である。焼けたローム土も認められた。

4 石器配置遺構

Z-1号石器配置遺構 (Fig. 30、PL. 14)

(位置) Y-20グリッド(標高) 109.6m(形状) 打製石斧 3 個が刃部を北に向け、重なった状態で出土した。周辺を精査したが掘り込みは、認められなかった。

Z-2号石器配置遺構(Fig. 30、PL. 14)

(位置) O-41グリッド(標高) 108.0m(形状) 打製石斧未製品2個で構成され、長軸を東西に向け、重なって出土。周辺を精査したが掘り込みは認められなかった。

5 落ち込み

JO-1号落ち込み (Fig. 32)

(位置) Z-25・26グリッド(標高) 109.6m (形状) 楕円形を呈する。長径110×短径66cm、深さ15cm。(備考) ハードローム土が多く認められた。

JO-2号落ち込み(Fig. 32)

(位置) U-22・23グリッド(標高) 109.0m (形状) 径100cmの円形を呈する。深さは30cm。

IO-3号落ち込み (Fig. 32)

(位置) S・T-53グリッド(標高) 107.5m (形状) 不整形を呈する。径141cm。

JO-5号落ち込み (Fig. 32、PL. 14)

(位置) Q-36グリッド(標高) 108.4m(形状)不整な楕円形を呈する。長径 $120\times$ 短径81cm、深 230cm。

JO-6号落ち込み (Fig. 32、PL. 14)

(位置) R・S-36グリッド(標高) 108.6m (形状) 楕円形を呈し、長径100cm、短径54cm、深さ45cm。

IO-7号落ち込み (Fig. 32)

(位置) V・W-34グリッド(標高) 108.9m(形状)不整な楕円形を呈する。長径138×短径105 cm、深さ30cm。

JO-8号落ち込み (Fig. 33)

(位置) U-31・32グリッド (標高) 109.0m (形状) 不整な楕円形を呈する。長径114×短径70cm、深さ30cm。

JO-9号落ち込み (Fig. 33、PL. 14)

(位置) W-31グリッド(標高) 109.3m (形状) 不整な楕円形を呈する。長径165×短径120cm、深さ36cm。

JO-10号落ち込み (Fig. 33)

(位置) Y-36・37グリッド(標高) 109.2m(形状) 不整形を呈する。深さ18cm。

JO-11号落ち込み (Fig. 33、PL. 14)

(位置) Z - 39・40グリッド(標高)109.0m(形状)不整な楕円形を呈する。長径75×短径60cm、深さ18cm。

JO-12号落ち込み (Fig. 33)

(位置) Y・Z-53グリッド(標高) 107.5m (形状) 不整形を呈する。深さは39cm。

IV 縄文時代の遺物

1 土器

本遺跡から出土した縄文式土器は草創期から後期にわたる土器群の分類については、『柳久保遺跡群V』で用いた分類に従った。

I群土器 草創期 表裏縄文系土器 (今回は該当なし)

Ⅱ群土器 草創期後半 撚糸文系土器群

Ⅲ群土器 早期前半 無文系土器群

IV群土器 早期前半 無文繊維系土器群(V群とVII群の無文部に帰属)

V群土器 早期前半 貝殼沈線文系土器群

VI群土器 早期前半 押型文系土器群

VII群土器 早期後半 条痕文系土器群

WI群土器 前期前半 繊維縄文系土器群

IX群土器 前期後半 竹管文系土器群

X群土器 中 期 勝坂式土器群、加曽利E式土器群

X1群土器 後 期 加曽利B式土器群

調査した12,000㎡の区域からの出土総数は6,486片で、そのうち包含層からは6,348片、遺構から138片が出土している。これらの土器を『柳久保遺跡群V』の報告書の分類に従って分けたものがTab.6である。今回の調査では草創期前半の土器は検出されなかったためI群土器はない。

包含層から出土したもののうち出土量が多いものは、V群土器とWI群土器で、分類不能な細片などを除いて総数は2,999点である。内訳は、V群土器が1,144点(38%)、WI群土器が1,244片(41%)を占めている。

また、『柳久保遺跡群 V』 発掘調査報告書でIV群土器としたものは、今回の調査でその実態が明らかとなった。それは $7\sim9$ 、 $11\sim14$ 等の復元によって判明した。すなわち、前回のIV群土器としたものは V群土器とVII群土器の無文部を構成していたものであった。従ってIV群土器の所属については、本書をもって正式な見解といたしたい。

1) 遺構出土の土器

+坑 (Fig. 50 · 56、PL. 20~22)

土坑出土の土器や石器については、遺構の性格が、いわゆる「陥し穴」と考えられるものがほとんどであるため、遺構に直接的に結びつくものはない。しかし、土坑出土の土器については、Tab. 6に示したとおり、VII群土器が圧倒的な数を占める。このことは、VII群土器と土坑の時期的な関係についての蓋然性の高さを物語っていると考えられる。

JD-2号土坑 $1\sim7$ はWII群土器である。繊維を含み全体に黄~赤褐色を呈する。器表面に撫で状の擦痕が観察されるもの($3\cdot6$)、無文のもので荒れたもの($1\cdot2\cdot4$)、平滑化がなされている無文のもの($5\cdot7$)に分けられる。内面は $1\sim7$ とも荒れている。胎土には白色鉱物を多く含み、片岩も入る。8はIX群土器である。色調は赤褐色を呈し、浮線文が 1 条横位に貼付され、その下にLRの単節斜行縄文が施される。

 ${f JD}-9$ 号士坑 $1\sim 9$ までは ${f WI$ 群士器である。色調は黄~赤褐色をなし、外面に絡条体条痕が施されるもの(2)、無文($1\sim 3\cdot 9$)に分けられる。内面は荒れている。胎士には白色鉱物を混入するほか、片岩も認められる。

JD-10号土坑 1層からX群土器である6の深鉢が完形の状態で横転して出土した。

JD-11号土坑 1・2ともWI群土器である。1は絡条体条痕が外面に、2は貝殻条痕文が内外面に施される。ともに繊維が混入され、黄褐色を呈する。

JD-12号土坑 1は内外面に貝殻条痕文が施される。繊維の混入がみられ、色調は赤褐色である。

胎土に砂粒が多くみられ、片岩の混入もみられるV群土器である。

JD-13号土坑 $1\cdot 2$ とも内外面に条痕が施されるが 3 は無文である。 3 点とも繊維混入が認められ、 1 は赤褐色、 $2\cdot 3$ は黄褐色を呈する。 JD-14の 1 は繊維を含み、外面に絡条体条痕が施される。 色調は黄~赤褐色を呈する。 胎土に白色鉱物を多く含む VIII 計出器である。

JD-16号士坑 1~3も同じくVII群士器である。1・2は無文であり、3は絡条体条痕が内外面に施される。黄~赤褐色を呈し、繊維が含まれる。胎士には白色鉱物をはじめ砂粒が多く入る。

 ${f JD}-18$ 号土坑 $1\cdot 2$ ともWI群土器である。1は無文である。 $1\cdot 2$ とも繊維を含み、黄褐色を呈する。2は横位に沈線が1条みられる。

JD-19号土坑 1は外面に擦痕状の撫でが入るが、平滑化がなされている。2は無文である。ともに繊維が混入され、黄褐色であるWI群土器である。

JD-23号土坑 1は無文である。外面は丁寧な撫でによって平滑化がなされる。繊維の混入がわずかにみられ、黄褐色を呈するⅧ詳土器である。

JD-24号土坑 1は外面に絡条体条痕が施される。繊維を含み黄褐色を呈するWI群土器。

 ${f JD-26号土坑}$ 1・2とも ${f WII}$ 群土器で外面に絡条体条痕が施される。繊維の混入がみられ、黄~赤褐色を呈する。

JD-29号土坑 1は外面にRLの斜行縄文が施される。内面の平滑化がみられ、黄褐色を呈し、 胎土に多量に繊維を含むW群土器である。

JD-30号土坑 1は貝殻条痕文による調整が外面になされる。2は無文である。ともに繊維を含み黄褐色を呈し、2は胎土に多量の砂粒を含むⅧ群土器である。

JD-37号土坑 1は貝殻条痕文による調整が外面にみられ、内面は平滑化がなされる。繊維の混入があり、赤褐色を呈するWI群土器である。

 ${f JD-40号土坑}$ 1は外面に条痕が施される。 2は横位の幅をもった撫でがみられる。 2点とも繊維の混入がみられ、赤褐色をなす。 1は胎土に片岩を多量に含む ${f V}$ 群土器である。

2) 縄文包含層出土の土器

Ⅱ群土器 草創期後半撚糸文系土器群(Fig. 56-17~21、PL. 22)

本群は6点と少ない。このうちの5点を図示した。 $17\sim19$ は原体Rの密な撚糸文がみられ、20は絡条体条痕であり、21は粗い撚糸文がみられる。色調は黄~赤褐色を呈し、焼成の良好な土器である。

分 布 U-20GとK-40G付近にまばらに分布する。

Ⅲ群土器 早期前半無文系土器群 (Fig. 56、PL. 22)

本群は5点と極めて少なかった。このうち2点を図示した。22・23は口縁部であり、やや肥厚し 丸棒状となる。色調は黄褐色をなし、胎土・焼成とも良好である。 分 布 大きく3カ所 (P-10G、U-25G、F-40G) にまばらに分布している。

V群土器 早期前半貝殻沈線文系土器群(Fig. 51・52・56、PL. 19・22)

本群は1,144点と量的に多くVII群土器に次いで、本遺跡の縄文式土器の主体をなしている。VII群土器との分類は、調整や混入物などで著しく類似するため困難を極めたが、本群のものは繊維の混入が少ないことや胎土が締まっていることから分離した。胎土、文様から次の9類に分けられる。

1 類 綾杉状の沈線文で構成されるもの (Fig. 56・30)

2点は同一個体である。29はJD-8から出土しており、口縁部片である。やや内削ぎ状の口縁 直下から、浅く太い沈線が綾杉状に多段に施文される。白色鉱物を多量に混入している。

2 類 沈線文と貝殻腹縁文で文様構成されるもの (Fig. 51・52・56)

7は胎土には小砂粒を多く含み、赤褐色を呈し、硬い焼きの土器である。底部片の接合はみなかったが多くの破片より復元できた。器形はキャリパー状に開き、平口縁である。口縁裏側に篦による刻み目が入る。口縁部文様帯は2条の沈線と刻み目によって上下を区画され、その中に雷文が施文される。雷文には貝殻文で区画の内外を交互に充填している。頸部は波状文と平行線文で区画され、体部文様帯はやや間隔のあいた貝殻腹縁文が綾杉状に施文され、更に波状文と平行線文で区画される。胴部から底部にかけて縦位の細い篦磨き痕が顕著にみられる。9は7に比べやや小形で器厚が薄く、器形は胴部から直線的に開いたキャリパー状を呈し、口縁は波状を呈する。破片が少ないため不詳な部分が多いが、口縁部文様帯は菱形の文様とその間に弧線文が配され、体部文様帯は平行線と貝殻文で構成される。36は細く浅い沈線が1条みられ、貝殻腹縁文が押捺される。黄褐色を呈し、白色鉱物を混入する。

3 類 沈線文で構成されるもの (Fig. 51・56)

8は尖底の底部から開いてくるキャリパー状の器形である。口縁は波状を呈し、4単位構成とみられる。波頂部は軽くつまみ上げられ、刻み目が入る。また、口縁裏側に篦による刻み目が施される。口縁部文様帯は口縁に沿って沈線文がみられる。この沈線は部分的に結節沈線となる。さらに2条の沈線と刻み目で区画され、その中に入り組み文が配される。頸部には波状文と沈線がひかれ、体部に平行線で区画された中にS字状の入り組み文が展開される。31・33~35は同一個体片である。口唇に刻み目が入り、平行線と波状文や刻み目によって構成される。工具は半截竹管文と細い篦状のものを使用する。また、赤色鉱物を多量に含む。32は口唇に刻み目が入り、キャリパー状の器形を呈する。太い沈線により区画文様が入る。胎土に結晶片岩粒の混入が多量に認められる。

- 4 類 平行沈線文で構成されるもの (Fig. 56)
 - 3点とも2本同時沈線により浅い沈線が施文される。内面は平滑化がなされる。
- 5 類 平行沈線文と刺突文で構成されるもの (Fig. 53・54・56)

A種 4本歯の櫛歯状工具による沈線文と刺突文で文様構成されるもの(12・43~45) 12の文様構成は4単位で縦位の平行線が縦位に施され、その間に弧線が描出され、櫛歯の刺突文 で充填される。43~45も同一文様である。

B種 3本歯の櫛歯状工具により沈線文と刺突文で文様構成されるもの常世式土器 (11)

11は大形のキャリパー状を呈する深鉢である。胎土には繊維の混入がわずかに認められ、結晶片岩粒の混入が多くみられる。口縁は波状を呈し、口唇には櫛の刺突がみられる。内外面とも貝殻条痕文が施された後に、外面の上半部に平行線と鋸歯文を交互に重ねた菱形の文様で構成される。また、櫛の刺突が縦位に1単位だけみることができた。

6 類 平行線文と列点刺突文などにより文様構成されるもの (Fig. 52・56)

10は外傾したキャリパー状をなし、4単位の波状口縁の深鉢である。器厚は薄く仕上げられ胎土も黄褐色を呈し、内外面とも丁寧な調整で仕上げられている。口縁裏側に篦による刻み目が施される。文様は割り箸を折ったような工具で押し引き的に刺突が施され、その間に貝殻腹縁文による爪形文が施文される常世式土器。41・42は4本歯の平行線文と、2種の工具による列点刺突が交互に施文される。

7 類 表裏縄文土器 (Fig. 56)

28は内外面に斜行縄文とみうけられる文様がある。胎土に結晶片岩粒を多く混入する点などから本類に分類した。

8 類 条痕文を有するもの (Fig. 56)

有文土器の胴部が多くを占めると思われる。特に11との関係が強いものである。貝殻条痕文が圧倒的であるが、多くは施文具が不明である。明らかに貝殻条痕文といえるものに56・59があげられる。48・57は条痕風の撫でつけが入り、多量の砂粒を含む。55・56・58は幅広い撫で痕がみられ、 片岩が多く入る。

9 類 無文で本群の胴部片が多く含まれ、繊維の混入が極めて少ないもの (Fig. 56) 49~53は内面の口縁部は平滑化がなされているが、それ以外は荒れている。60はまとまって出土しているが、器形の復元はできなかった。外面は丁寧な撫でによって仕上げられている。色調は黒褐色を呈し、砂粒の混入がみられる。61・62は尖底の底部である。乳房状に作出され黄褐色を呈する。分 布 大きく3ブロックに分かれる。北から5~10ラインに少量が点在し、次にU−20Gを中心にして60~80mの範囲でみられた。さらに、南側のP−40Gを中心とし40~50mの範囲に分布がみられる。Ⅷ群士器との共通性がみられる。

VI群土器 早期前半押型文系土器群(Fig. 50・56、PL. 19・22)

149点の破片が検出されたが、多くは1と2に帰属した。いずれも山形押型文土器である。1は4単位の波状口縁をなす深鉢で、器厚は薄く仕上げられている。文様は山形押型文が内外面と口唇部に施文される。外面は波状口縁に沿って1単位横位に施文され、それ以下は縦位に密接して施文される。内面には2段にわたる単位の横位施文がなされる。胎土には結晶片岩粒を混入しており、赤褐色を呈する。2も1と類似する4単位の波状口縁の深鉢で、やや1よりも大きい。底部も残存し

ておりやや乳房状をなす尖底である。文様施文は1と同様になされたが、外面に横位の施文はなく、内面も1単位の横位施文である。胎土に含まれる結晶片岩粒は1よりも多いためか全体にしっとりした趣である。1と2の押型文土器は文様要素、文様構成、器形など多くの類似点が指摘できる。押型文は山が6個、谷が7個、幅2㎝、軸の太さ1㎝である。山が4単位である。2個体とも同一であるが、原体の端部の処理が2の場合は平らになされ、1の場合は山となる違いである。同一原体であっても最初1として製作、使用されたものが再び手を加えて2の原体に再加工されたものといえる。色調は黄褐色である。24~27も山形押型文が施文される。このうち、27は細かな山形押型文が施文され、内面の調整も丁寧になされる。色調は赤褐色を呈し、砂粒の混入が顕著である。分布 P-40Gに著しい集中をみせる。これは、 $1\cdot2$ がまとまって出土したためである。

₩I群土器 早期後半条痕文系土器群(Fig. 50·53~55·57、PL. 19~22)

本群は1,244点と本遺跡で最も多い出土点数を占めている。大半は無文あるいは無文部によって構成される。繊維を混入するためV群土器に比べ、胎土が軟質な感じを受ける。

1 類 太い絡条体圧痕文が施文されるもの (Fig. 50-5、57-63~73・75・82~85・87・91~93)

A種 口縁部と口唇部に絡条体圧痕が施されるもの(64・65・67・70・72・83)

64・72は同一個体である。絡条体条痕が施され、左下がりの斜方向に連続する絡条体圧痕がみられる。65と67は同一個体であり、斜位の絡条体圧痕の下に、横位の絡条体圧痕が1条施文される。70は絡条体圧痕が施文された後に絡条体条痕が施されている。83は絡条体条痕が施された後に絡条体圧痕文が鋸歯状に施文される。

B種 口縁部に絡条体圧痕が施されるもの (63・73・92・93)

63・92・93は同一個体片と思われる。文様は絡条体圧痕を施文した後に絡条体条痕が施される。

C種 口唇部に絡条体圧痕が施されるもの (5・66・69・71・82・91)

5は底部を欠損しているが、尖底を呈する深鉢と考えられる。口唇には鈍角に絡条体圧痕が連続して施文される。外面には絡条体条痕が縦位を基調として施される。内面は部分的に絡条体条痕がみられるが、撫でによって仕上げられる。66・69は同一個体片と考えられる。口唇に絡条体圧痕は部分的に鋸歯文構成をとる。82は鋭角に連続に入る。71・91は同一個体であり、外面に絡条体条痕がわずかに認められる。

D種 隆帯上に絡条体圧痕が施されるもの(75・84・85)

75は口縁がわずかに折り返された上に絡条体圧痕が施文される。84・85ともに口唇上にも絡条体 圧痕が施文される。

E種 凹線と絡条体圧痕が施されるもの(68・87)

68・87は同一個体である。外面は絡条体条痕が施文された後に、凹線が斜めに連続して施文される。口唇部にも絡条体圧痕がみられる。

2 類 細かな絡条体圧痕文が施文されるもの (Fig. 57-76~78・80・81・86)

細片なため詳細は不明であるが、78は内外面に絡条体圧痕が入る。口唇にもみられる。

3 類 刻みと凹線が施されるもの (Fig. 54-13)

13はわずかに盛り上がる平口縁に沿って、斜めの刻みが連続して施される。その下部に凹線が右下がりに連続してつけられている。胴部は丁寧な撫でによって仕上げられている。

4 類 貝殻腹縁文がみられるもの (Fig. 56-40・46・47、Fig. 57-89)

A種 器面に連続して貝殻腹縁が施されるもの(40・46・47)

B種 爪形文が施文されるもの(89)

89は貝殻条痕文の施文された後に貝殻により爪形文が作出される。

5 類 微隆起帯や沈線文により文様が作出されるもの。鵜ケ島台式土器 (Fig. 55-15・16)

A種 微隆起により文様構成されるもの(16)

B種 沈線文により文様構成されるもの(15)

6 類 沈線により文様が作出されるもの (Fig. 57-88・90)

88は内外に貝殻条痕文が施文された後に、沈線区画と弧線や平行線で文様が描出される。口唇に刻みが

入る。90は太く浅い沈線により平行線が描かれる。

7 類 条痕文が施文されるもの (Fig. 57-94~99)

A種 絡条体条痕 (94·97)

B種 貝殻条痕文 (95・96・98・99)

この他に、79は櫛歯状工具によって条痕文が施される。口唇に3本歯の刺突が施される。

8 類 無文(100)

分 布 V群土器と同様な分布域をみせるが、3ブロックの境界が不明瞭となる。10ライン付近に分布するもの、U-20Gを中心に $60\sim80$ mと広範囲に分布するもの、 $K\cdot P-40$ ライン近辺に分布するものに分けられる。V群土器でも指摘できたが、土坑の分布域との関連性が認められる。

₩群土器 前期前半繊維縄文系土器群 (Fig. 57、PL. 23)

本群は208点検出された。

- 1 類 撚糸側面圧痕による平行文様が描かれる。花積下層式土器 (Fig. 57-101)
- 2 類 縄文施文。黒浜式土器 (Fig. 50-4)

4は底部をわずかに欠損するが、ほぼ完形の状態に復元できた。口縁は平口縁で胴部中央が張り 出す深鉢である。文様は斜行縄文LRが器面全体にわたって菱形構成をとる。

分 布 大きく2ヶ所に分かれる。1類がR-51Gに集中し、2類がP-35Gに集中して分布。

IX群土器 前期後半竹管文系土器群 (Fig. 57、PL. 23)

本群は24点と少ない。

- 類 浮線文をもつもの (Fig. 57-102)
 102はJD-2号土坑の8と同一個体である。
- 2 類 縄文施文 (Fig. 57-103~106)

103~106とも同一個体である。口縁は平口縁で無文部から大きく屈曲している。斜行縄文RLが 羽状構成をとる。胎土に結晶片岩粒が多量に含まれる。

- 3 類 縄文および沈線 (Fig. 50-6)
- 分布 U-5ラインと北側にまとまって分布する。

X群土器 中期、勝坂式土器群、加曽利E式土器群 (Fig. 57、PL. 23)

本群は145点検出された。大きく勝坂式土器と加曽利E式土器の二つに分けられる。文様を中心に 5類に分類した。

- 1 類 隆帯と刻み。勝坂式土器終末期 (Fig. 57-107・108)
- 2点は胎土・色調から同一個体である。いずれも明赤褐色を呈し、隆帯に刻みが入り、半截竹管による沈線で文様構成され、地文に縄文RLがみられる。
- **2** 類 隆帯で文様区画し、地文に縄文や条線を持つ。加曽利E 3 式土器 (Fig. 57-112・113) 112の地文は条線である。
- 3 類 沈線で文様区画し、地文に縄文や条線を持つ。加曽利E 3 式土器 (Fig. 57-109・110・11 4・116・117)

6 は J D -10号土坑の 1 層中から試掘調査の際に出土した。底部をやや欠くが、ほぼ完存する小形の深鉢である。文様は口縁がやや肥厚し無文帯が形成され、その下には単節斜行縄文R L が全面にわたって施文される。頸部に波状沈線が 1 条施される。内面は丁寧に撫でられ赤褐色をした良好な焼きの土器である。 $109 \cdot 111$ は条線が入る。

- 4 類 口縁に平行する沈線を有し、口縁部無文帯を持つ。加曽利E4式土器 (115・118・119) 115は縄文がやや羽状構成になる。119は口縁に沿って円形の刺突が2段施される。
- 分 布 大きく3ケ所に分布する。その中でもE-45Gに集中がみられる。

X I 群土器 後期、加曽利B式土器 (Fig. 57、PL. 23)

本群は74点と比較的まとまって出土した。このうち5点を図示した。

- 1 類 磨消縄文をもつもの (Fig. 57-120~122)
- 2 類 沈線文と擦痕により構成されるもの (Fig. 50-3)
- 3 類 格子状沈線を持つもの (Fig. 57-123)
- 分 布 X群土器と似た分布域をみせるが、やや西の沖積地よりの分布を示す。

個体別資料の分布

今回の調査では沈線文土器群や条痕文土器群の比較的まとまって出土をみせ、復元も可能となった。そこで接合しない破片についても胎土や色調から判断して同一個体に帰属するものを摘出し個体別資料の分類を行った。その結果分布域についてFig. 34・35に図示した。これをみるとFig. 51-7の雷文の沈線文土器はP-22G付近を中心に分布をみせる。Fig. 51-8の入り組み文の沈線文土器もP-22G付近に中心があり、Fig. 51-9の貝殻腹縁文が施文された沈線文土器もN-21Gであるがまとまった分布域を示している。これに比べ常世式土器であるFig. 52-10はP-43Gに54-12はM-45Gと分布域を異にしている。VI群土器とした山形押型文土器の2個体はR-40Gと分布域が異なっている。VII群土器としたものの中で子母口式土器はFig. 50-5、Fig. 54-13・14はU~Z、20~30Gにまとまりをみせる。そこでV群土器としたFig. 53-11の竹管文の幾何学的な文様が施文された土器は、V群土器である沈線文土器の分布域よりこれらの条痕文土器に近い分布をみせている。

さらにWI群土器とした鵜ケ島台式土器の分布はT-29GやV-34Gといった付近に分布している。このように土器の分布から土器群の時期差が読み取れる可能性が見えた。今後、土器の分布を分析した結果と石器の分布を重ね合わせた結果から石器の時期が判別できうる可能性が見いだせた。

2 石器

本遺跡から出土した縄文時代の石器は、総数3,501点を数える。これらの器種と石材の内訳についてはTab. 10に示した。このうち縄文時代の遺構からは26点出土しており、残り3,475点は包含層から出土したものである。

石器のほとんどが包含層から出土しているための、それらの所属時期は個々にわたり決定できなかった。しかし、包含層の遺物分布を通じて、各器種と土器群との関係は大づかみに把握できた。また、土器をみると、V群・VII群土器である貝殻沈線文系土器群と条痕文系土器群が主体的であるため、石器の多くはそれらの土器群に伴出したものと考えられる。また、今回、時間的な制約から石器の集計は行なったものの、未実測のものが大半となった。早期中葉から後半の良好な石器資料のため、今後、実測の機会を設け責務を果したいと考えている。

1) 遺構出土の石器

土坑

土坑出土の石器についてはTab. 7にまとめた。遺構の性格が「陥し穴」と考えられる点と関係するかのように際立った器種は出土していない。

石器配置遺構 (Fig. 58、PL. 23・24)

Z-1号石器配置遺構(1・3・4・6)

本遺構からまとまって出土したのは1、3、4の石斧である。1 は裏面に多く礫面を残す黒色頁岩製の片刃の石斧である。3 も同様に片刃の石斧である。次に、4 はやや小形であるが刃部は前の

二つと同様に片刃の石斧である。いずれもY-20Gから4、1、3の順で出土した。素材に偏平な円礫を用いていることから3点には形態、素材、技術的な面で共通性が看取できる。

このほかに、隣接するX-20Gから同様な6の石斧が検出されている。本遺構と密接する石器といえよう。石材は $1\cdot 6$ が黒色頁岩、 $3\cdot 4$ が灰色安山岩である。

Z-2号石器配置遺構(2・5・7)

本遺構からまとまって出土したのは5、7である。2点とも片面に自然面を残す中央にくびれを持つ石斧であり、いずれも0-41Gの出土である。7は隣接するN-41Gから出土した石器であり、石斧の製作途中と考えられるものである。3点とも黒色頁岩製である。Z-1に比べ本遺構の石器はずんぐりとしており両者の違いが時間的なものか、性格の違いによるものか興味深い。

2) 縄文時代包含層出土の石器

石器は合計3,501点出土した。器種別にみると石鏃127点と削器111点、打製石斧79点、多面体磨石24点が目立った。また、黒曜石を用いた局部磨製石鏃がS-21グリッドから1点、N-36グリッドから1点出土しており、押型文土器との共伴が考えられる。この他に削器と打製石斧、多面体磨石は数量からみてV群土器と関連するものである。

これらの石材を硬さや緻密さ、粘りなどから便宜的に次のように分類した。 $A \sim E$ を第1群石材、 $F \sim L$ を第2群石材、 $M \sim P$ を第3群石材、Qを第4群石材、 $R \cdot S$ を第5群石材とした。

第1群石材 緻密な加工に適し、黒曜石や珪質頁岩など遠隔地から搬入される石材である。小形の石器として加工されることは空間的な理由と石材の特徴による。

第2群石材 黒色頁岩や黒色安山岩を代表格とする県内の一般的石器石材である。中形の石器に加工されることは、近い産地から大きい素材が提供され、粘りを持つためであろう。

第3群石材 加工には不適で円礫のまま利用されるものである。目的に適う形状・大きさの素材を 河床から採集したものである。

第4群石材 点紋緑色片岩は石器時代を通じて利用される石材で、縄文時代後期以降は第2の道具に多用される。産地が多野・秩父方面に限定できるため、交易研究上で有利な石材である。

第5群石材 粗粒安山岩は赤城山、榛名山を形成している岩石であり、山麓では至る所にみられる。 きめが粗く柔らかい石材で巨大な素材も入手可能である。石皿をはじめ磨石などに用いられる。

遺物分布

石鏃、打製石斧、削器 V群・WI群土器と共通した分布域にまとまりを見せるながらも、広範囲に 分布する。

礫器、敲石、磨石、凹石 点数的に少ないが、V群・WI群土器と共通した分布域にまとまりを見せるながらも、広範囲に分布する。

特殊磨石 VI群土器と共通した分布であるが V・VII群土器との関連も持つものである。

スタンプ形石器、三角錐形石器 点数的に少ないが、多面体磨石の分布とは違った分布域をみせて いる

剥片 黒曜石製剥片が南西部に集中し、チャート製剥片は2カ所に著しい集中がみられたが、所属 時期や製品は判明できなかった。石鏃や削器の製作跡と考えることが妥当であろう。

V 古墳·平安時代の遺構と遺物

1 住居址

H-1号住居 (Fig. 37·38、PL. 15)

(位置) T・U-46・47グリッド (標高) 108.2m (時期) 9世紀後半 (面積) 10.1㎡ (方位) N-78°-W (形状) 長軸4.14m、短軸3.15mの長方形を呈し、壁高は70cm。 (床面) 全体的に平坦である。使用面において、柱穴は認められなかった。 (掘り方) 床下土坑を中央部のやや南側に検出。 (竈址) 東壁中央部やや南寄りに位置する。残存状態は良好で、主軸方向はN-79°-Eである。全長100cm、幅60cm。 (遺物) 図示した土師器は6点、須恵器は2点である。土師器の内訳は甕7・8、長胴甕6、小形甕5、杯1・2であり、須恵器については、高台付皿3、杯4である。土師器杯は丸底を呈し、体部は内彎し箆削りが顕著に施される。甕5・8は「コ」の字状を呈し、ともに口縁部肥厚、胴部寸詰まりになる点で初源時のものより後出的であり、「コ」の字甕の終末期に属する。6の長胴甕、7の胴丸甕は杯とともに器形的に古式の様相を呈する。須恵器は、皿、杯が共伴し、杯は底径が小さく、体部も浅い特徴を持つ。 (備考) 遺物の形態からみて本住居址の所産時期は9世紀後半代に比定されよう。

H-2号住居 (Fig. 39、PL. 15)

(位置) S・T-42・43グリッド (標高) 108.4m (時期) 4世紀後半 (面積) 12.1㎡ (方位) N-56°-E (形状) 長軸3.60m、短軸3.45mの正方形を呈し、壁高は30cm。壁は垂直に近い状態で掘り込まれている。 (床面) 平坦である。貼り床は認められなかった。 (遺物) 図示したものは土師器が3点で、その内訳は台付甕10・11、小形甕9である。台付甕の胴部から底部には刷毛目が施され、一部撫で消しが認められる。 (備考) 本住居址の所産時期は古墳時代前期石田川期に位置づけられ、年代的には4世紀後半代があたえられる。

2 井 戸

I-1号井戸 (Fig. 39、PL. 16)

(位置) $U \cdot V - 6 \cdot 7$ グリッド (形状) 長径5.05×短径4.52m、深さ2.82mの円形を呈し、さら に下段に円形の掘り込みがみられ、2 段構成となる。覆土上部にはAs-Bが純層で堆積していた。

(遺物) 図示したものは、土師器30点、須恵器 2 点である。内訳は、土師器が13~42、須恵器は長頸壷12、杯43である。また、土師器には2 形態が認められる。一つは15で、器肉が厚く箱形を呈し、体部上半横位の撫で、下半から底部箆削りを認めるものである。他は体部に指頭痕が顕著にみられ、底部箆削りである。この類は総じて器肉は薄く、口縁部に緩いくびれを持ち、体部にやや丸味を持っている。時期的には9世紀中~後葉に比定される。

3 粘土採掘坑

E-1号粘土採掘坑 (Fig. 40、PL. 17)

(位置) $U\sim W-0\sim3$ グリッド (形状)長軸 $10.2\times$ 短軸6.16m、深さ2.69mの不整形を呈する。 平面形は「L字状」を呈し、その中に径2m弱の窪み10数カ所認められた。これらはHr-HPの下層に堆積するチョコレート色土の粘土とその下の灰白色を採掘した跡であり、中鶴谷遺跡の集落と関連するものであろう。また、覆土にはAs-Bの純層がほぼ水平に堆積していた。(遺物)図示したものは、土師杯(44)のみである。これは、整形技法的にはI-1 号井戸に準拠するが、底部に若干丸みを残す点で9世紀中~後葉のI-1 号井戸よりやや先行すると考えられる。

4 炭 窯

K-1号炭窯 (Fig. 41)

(位置) U・V-16・17グリッド (形状) 長軸4.33×短軸2.71m、深さ0.15mの不整形を呈する。 **K-2号炭窯** (Fig. 41、PL. 17)

(位置) T・U-16・17グリッド (形状) 不整形を呈し、長軸4.40×短軸1.62m、深さ0.20m。 K-3号炭窯 (Fig. 41、 PL. 17)

(位置) U・V-21・22グリッド (形状) 隅丸長方形を呈し、長軸5.05×短軸2.31m、深さ0.18m。

5 土 坑

D-1号土坑 (Fig. 41)

(位置) U・V-15・16グリッド (形状) 不整形を呈し、長軸208×短軸171cm、深さ40cm。断面形は摺鉢形。

D-2号土坑 (Fig. 41、PL. 17)

(位置) V-20グリッド(形状) 楕円形を呈し、長径120cm×短径80cm、深さ38cm。

D-3号土坑 (Fig. 41、PL. 17)

(位置) X・Y-21グリッド(形状)不整形を呈し、長軸(165)×短軸99cm、深さ54cm。

Tab. 1 頭無遺跡第 I 文化層のブロック別石器集計表

プロック名	和石刃 核	細石列 核関連 用品	柳石刃	NE 25	影器 削片	10.88	和器	回刃 削器	敬石	使用痕 のある 剥片	剥片	砕片	点数
1ブロック			5							1	34	13	53
2ブロック			3	4	4	1	2			1	24	2	41
3ブロック	1		25		3					3	24	3	59
4ブロック			7	4	5				1		39	5	61
5ブロック		2	23	1						5	31	2	64
6ブロック			9				3			2	4	1	19
7ブロック			8				1				22		31
8ブロック		2	4		1		1	1			8	1	18
9 ブロック			3			1				1	7	1	13
10ブロック			27							1	2	1	31
ブロック外		1	2				1			1	11		16
表採			8		2		1			1	6	2	20
合計	1	5	124	9	15	2	9	1	1	16	212	31	426

Tab. 2 頭無遺跡第 I 文化層のブロック別石材一覧表

		127	> (/////C-/////						
プロック名	建實真岩	从色页岩	黒色 安山岩	黒曜石	粗從 安山岩	ホルン フェルス	頁岩	チャート	点数
1ブロック	53				0				53
2ブロック	24	2	8	4			2	1	41
3ブロック	46	5			8				59
4ブロック	56	4				1			61
5ブロック	58	5	1						64
6ブロック	19								19
7ブロック	13	6	8	4					31
8ブロック	15			2		1			18
9ブロック	11		1	1					13
10ブロック	29			2					31
ブロック外	13	4				1			18
表採	17	1							18
合計	354	27	18	13	8	3	2	1	426

Tab. 3 頭無遺跡第 I 文化層の器種別石材一覧表

粉種	建質页岩	黑色質岩	肌色 安山岩	黑曜石	粗粒 安山岩	ホルン フェルス	頁岩	チャート	热板
細石刃核	1								1
細石刃核関連用品	5								5
細石刃	120			4					124
影器	9								9
影 器削片	15								15
番器	1							1	2
削器	9								9
	1								1
敲石						1			1
使用痕のある剥片	15	1							16
剥片	147	26	18	9	8	2	2		212
染片	31								31
合計	354	27	18	13	8	3	2	1	426
重量(g)	561, 32	186, 5	92. 2	36. 7	81, 1	411.3	3, 5	26. 6	1399. 22

Tab. 4 頭無遺跡第Ⅰ~Ⅲ文化層の石器観察表

1 第 I 文化層 (細石刃文化)

					另1又	16/19	「神中口」	列又化)			_	
No.	器種	石材	プロック	長 mm	幅 mm	厚加加	重量 g	登録番号	屬位	挿図	接 資 No.	備考
4	細石刃	珪質頁岩	外	18.5	10	2	0.4	R-53G1	III a			
40	便用痕の ある剥片	珪質頁岩	外	33. 5	31	4. 5		S-51G6	lV a			
44	細石刃核 関連用品	珪質頁岩	外	39. 5	32	16	12. 6	S-52G1	IV a	42		細石刃核調整剥片
46	剥片	珪質頁岩	3	22	36.5	2.9	1.7	S-52G3	Шb			
47	剥片	黒色頁岩	外	20	26	5	2. 4	S-52G4	IV b			
	細石刃	珪質頁岩	表	30	10	3	0. 5	S-52G表採	-	47		
	剥片	珪質頁岩	3	17.5	13	3. 3		S-53G1	Ша			
	剥片	珪質頁岩	3	28	37	8, 5		S-53G3	Ша	44		
	細石刃	珪質頁岩	3	23	10	2, 5		S-53G4	Шь	48		
	細石刃	珪質頁岩	3	17	6. 5	1. 5		S-53G5	IV a	48		
	剥片	粗粒安山岩	3	37	30	12. 5		S-53G6	IV a	10	31	54+67+70
	細石刃	建質頁岩	3	34	6.5	2. 5		S-53G7	IV a	47		55+69
	細石刃	珪質頁岩	3	27	9	3		S-53G10	IV a	47	10	00 1 00
	細石刃	珪質頁岩	3	22, 5	7	3, 5		S-53G11	IV a	48		
	細石刃	硅質頁岩	5	37-5	9	4		S-53G12	IV a	47	24	60 + 188
	細石刃	注 貝貝石 注質頁岩	3	30	7	3. 5		S-53G13	IV a	47	34	0UT100
	11111	珪質貝石 珪質頁岩	_			_			-			
	細石刃		3	26	10	4		S-53G16	IV a	47		
	細石刃	珪質頁岩	3	27. 5	11	3		S-53G17	IV a	47	0.4	51105150
	剥片	粗粒安山岩	3	48	78, 5	15, 9		S-53G19	IV a			54+67+70
	細石刃	珪質頁岩	3	17	6, 5	1. 9		S-53G21	IV b	47	_	55+69
	剥片	粗粒安山岩	3	29	41	9, 3		S-53G22	IV b		31	54+67+70
	彫器削片	珪質頁岩	3	18. 5	6	3. 5		S-53G23	IV b	44		
72	剥片	珪質頁岩	3	12.5	8	1.5	0, 2	S-53G24	IV b			
73	使用痕の ある剥片	珪質頁岩	3	33	3, 5	4. 1		S-53G25	IV b			
	砕片	珪質頁岩	3	6.5	6	0.8	0.05	S-53G26	IV b			
	剥片	黒色安山岩	5	90.5		0.5	0.0	S-53G28	Шь	40		
	細石刃 細石刃	珪質頁岩 珪質頁岩	表	22. 5 18	5. 5 6	3. 5 1. 5		S-53G表採1 S-53G表採2	1 +	48 48		
	剥片	珪質頁岩	5	31	31	3, 6		S-5364842	III a	40		
	細石刃	珪質頁岩	5	27. 5	9, 5	3, 5		S-54G2	Ша	47		
	剥片	黒色頁岩	5	26	27	11.7		S-54G3	III a		27	81+96+114+126
	剥片	珪質頁岩	5	17.5	13.5	2.2		S-54G4	Ша			
83	使用痕の ある剥片	珪質頁岩	5	48. 5	33	7.8	5. 8	S-54G5	Шь	44		
84	剥片	珪質頁岩	5	24	14	3. 9	0. 8	S-54G6	IV			ļ.————
85	剥片	珪質頁岩	5					S-54G7	IV		28	84+95
86	細石刃	珪質頁岩	5	20	9	3, 1	0.6	S-54G8	Шb	47	11	86 ± 138
	細石刃	珪質頁岩	5	32	8.5	3.5		S-54G10	III b	47	13	88+106+118
	剥片	珪質頁岩	5	13. 3	8. 5	1.5		S-54G11	ШЪ			
	剥片	珪質頁岩	5	15	10	1.9		S-54G12	IV a		36	90+115
	細石刃	珪質頁岩	5	35	7. 5	7		S-54G13	ШЬ	47		
	剥片	珪質頁岩	5	11	9	1.5		S-54G14	IV b			
	細石刃	珪質頁岩	5	8	6	1, 5	0.1	S-54G15	IV b	48		
	剥片	珪質頁岩	5					S-54G17	IV a			84+95
	剥片	黒色頁岩	5	33	42	15. 1		S-54G18	IV a		27	81+96+114+126
	剥片	珪質頁岩	5	16	21	2. 1		S-54G19	IV b			
	砕片	珪質頁岩	5	10.5	10, 5	1.8		S-54G21	IV b			
	剥片	珪質頁岩	5	14-5	19	4.5		S-54G23	IV b			
	剥片	珪質頁岩	5	12. 5	7.5	1. 1		S-54G24	IV b			
	刺片	珪質頁岩	5	13, 5	13. 5	1.9		S-54G25	III a	40	10	00 100 110
106	細石刃 使用痕の	珪質頁岩	5	14 40. 5	6. 9 42. 5	1.8		S-54G28 S-54G29	III b IV a	47	13	88+106+118
109	ある剥片 使用痕の	珪質頁岩	5	56	42	13. 5		S-54G31	IV b	43		
	ある剥片											
	剥片 細石刃	珪質頁岩	5	10, 5	10	1.5		S-54G33	IV b	40		
112	加付入	珪質頁岩	5	24	7	3	0. 4	S-54G34	IV b	48		1

No.	器種	石材	プロッ	長mm	幅加加	厚加加	重量	登録番号	層位	挿図	接資	備考
			ク		11111		8			P	No.	
113	細石刃	哇質頁岩	5	39	13	5	1.5	S-54G35	IV b	47		
114	剥片	黑色頁岩	5	16	29	5, 1		S-54G36	IV b		27	81+96+114+126
115	剥片	珪質頁岩	5	14.5	10	2. 1	0. 5	S-54G37	IV b		36	90+115
116	細石刃核 関連用品	珪質頁岩	5	52.5	31	21	21.2	S-55G1	III a	42	2	116+137。細石刃核 調整剥片
117	剥片	珪質頁岩	5	11	14	2	0.3	S-55G2	III a			
118	細石刃	珪質頁岩	5	36	8	4, 5	0.7	S-55G3	III a	47	13	88+106+118
119	剥片	珪質頁岩	5	45	35	6, 5		S-55G4	Шa			
120	砕片	珪質頁岩	5	5	6	0.8	0.05	S-55G5	III a			
122	細石刃	珪質頁岩	5	22	10.5	4		S-55G7	Шь	48		
	細石刃	珪質頁岩	5	33	9	3		S-55G9	IV a	47		
	細石刃	珪質頁岩	5	20	8	2. 5		S-55G10	IV b	48		
	剥片	黒色頁岩	5	37.5	33. 5	10.1		S-55G11	IV b		27	81+96+114+126
	剥片	黒色頁岩	5	31	22. 5	5.5	3. 7	S-55G12	IV b		_	
	凹刃削器	珪質頁岩	8		10.5	0.5		S-55G13	IV a		_	Lul. deb
	剥片	珪質頁岩	8	8	12.5	2.5		S-55G14	IV a			被熱
	砕片	珪質頁岩	8	5	8	2. 2		S-55G15	IV a	40		被熱
	細石刃	建質頁岩	5	11	5, 5	17.0		S-55G17	IV b	48		
	剥片	建質頁岩 建質頁岩	5	43	19, 5	17. 9	4, 8	S-55G18 S-55G19	IV b			
	細石刃	建質貝岩 建質頁岩	5	22. 5	8	1. 5	0.0	S-55G21	IV b	48		
	細石刃核			64, 0	0					40		116+137。 細石刃核
137	関連用品	建質頁岩	5	29, 5	26. 7	4. 2		S-55G22	IV b	42	2	調整剝片
	細石刃	建質頁岩	5	36	10	4. 5		S-55G23	IV b	47	11	86+138 被熱?
139	細石刃	珪質頁岩	5	17. 5	7	2	0.2	S-55G24	TV b	48		
140	細石刃核 関連用品	珪質頁岩	8	50	18	12	8. 6	S-56G1	Шь	42		細石刃核稜付削片
	剥片	ホルン フェルス	8	18, 5	52	12. 1		S-56G2	III a		14	141+177
	剥片	珪質頁岩	8	31	30	3. 5		S-56G3	III a	-		
	細石刃	建質頁岩	1	15. 5	7	2		T-50G7	IV b	48		
	細石刃	建質質岩	3	27	9	3, 5	0, 5	T-52G1	Ша	47		
	剥片	珪質頁岩 粗粒安山岩	外 3	21	17	5.8	2.0	T-52G2	Ⅲ b			
	剥片	珪質頁岩	3	31 28	17 26	4. 9		T-52G4 T-52G5	IV a IV a			
	剥片	珪質直岩	外	21	23	3. 4		T-52G6	IV a			
	剥片	建 質頁岩	41-	25	29	4. 2		T-52G7	IV a			
	剥片	瓜色真岩	3	21	26	6.8		T-52G9	IV a			
	剥片	珪質貞岩	3	13	18	2. 9		T-52G11	IV a			
	細石刃	珪質頁岩	3	26	7	3		T-52G14	IV b	48		
173	剥片	珪質真岩	4	26	23. 5	4. 5		T-52G18	IV b			
175	剥片	珪質頁岩	3	23	22	3.2	2	T-53G1	Ша			
176	細石刃	珪質頁岩	3	22	7	2. 5	0.5	T-53G2	III b	48		
177	剥片	ホルン フェルス	外	38	43	16. 2	16. 3	U-56G30	IV b		14	141+177
	細石刃	珪質頁岩	3	18	5. 5	3		T-53G3	Шb	48		
	細石刃	珪質頁岩	3	25.5	7	4		T-53G4	IV a	48		
	細石刃	珪質頁岩	3	24.5	7, 5	3.5		T-53G5	IV a	46		
	剥片	珪質頁岩	3	13	7	1.5		T-53G6	IV a			
	細石刃	珪質頁岩	3	36. 5	8. 5	3		T-53G7	IV a	47	8	182+186+604
	彫器削片	珪質頁岩	3	15.5	6	1.5		T-53G8	IV a	44		
		珪質頁岩	3	34	11.5	4		T-53G9	IV a	47	_	100 1 100 1 001
	和石刃	珪質貞岩	3	17	6	2		T-53G11	IV a	48	8	182+186+604
	和石刃核	建質頁岩	3	81.5	52	19, 5		T-53G12	IV a	42	9.4	左側面後方摩耗痕
	細石列	建質頁岩	3	39.5	6.5	5		T-53G13 T-53G14	IV a	47 48	34	60+188
	細石刃 砕片	珪質頁岩 珪質頁岩	3	17 11	7	1, 3		T-53G14	IV a III b	46		
	剥片	建質頁岩	3	15	12. 5	4. 3		T-53G16	IV a			
	細石刃	珪質頁岩	3	35	7, 5	4. 5		T-53G17	IV a	47	19	192+204
	砕片	珪質頁岩	3	10	8. 5	1.8		T-53G17	IV a	71	14	100 1 001
	剥片	黒色頁岩	3	33	51	15. 5		T-53G19	IV b		17	194 ± 206
	利片	粗粒安山岩	3	30	20	7. 9		T-53G20	IV b		- 1	131.200
	测片	租粒安山岩	3	25	18	5. 5		T-53G21	IV b			
	細石刃	珪質頁岩	3	13.5	5	0.5		T-53G23	IV b	48		
	剥片	珪質頁岩	3	33	17	5. 2		T-53G24	IV b			
199		珪質頁岩	3	21	6	3.5		T-53G25	IV b	44		
	彫器削片	注 買貝石	U									
200	影器削片 剥片	粗粒安山岩	3					T-53G26	IV b			

			7		V.5	The late	-		13 .00	Total Control	接	OF STATE
No.	22 NA	石材	E 7	長 one	Ф6б cmm	mm Mc	重量	登録番号	層位	柳殿	資	備考
			2	00.0	· ·	4.00	1000			36728	No	100
	細石刃	珪質頁岩	3	21	8	2. 9		T-53G29	IV b	47	12	192+204
206	剥片	黒色頁岩	3	16	39	9.5	5	T-53G31	IV b		17	194+206
207	剥片	黒色頁岩	3	6	17	6, 5	3	T-53G32	IV b		25	207 + 214 + 672
209	細石刃	珪質頁岩	3	22	9	3	0.4	T-53G34	IV a	48		
210	使用痕の	珪質頁岩	3	29	27	2. 5	1. 7	T-53G35	IV a			
	ある剥片 剥片	粗粒安山岩	3	11	21	3		T-53G36	IV a	_	_	
	細石刃	珪質頁岩	3	29. 5	5. 5	4		T-53G37	Шь	47		
213	使用痕の	珪質頁岩	3	13	23	2. 5		T-53G38	Шь			
	ある剥片										0.5	007 1 014 1 070
	剥片	黒色頁岩	3	26, 5	31	9		T-53G39	Шь	40	25	207+214+672
	細石刃	珪質頁岩	表	24. 5	5	2. 5		T-53G表採1	-	48		被熱?
	細石刃	珪質頁岩	表	17. 5	8	2		T-53G表採2		48		
	剥片	珪質頁岩	5	14.5	10	1.5		T-54G1	Ша			
	剥片	珪質頁岩	5	19	11. 5	1. 9		T-54G2	III a			
	細石刃	珪質頁岩	5	29. 5	8, 5	-3		T-54G5	IV a	47		
	剥片	珪質頁岩	5	23	21	3.9		T-54G6	IV a			
223	剥片	珪質頁岩	5	-11	31	2.8	1.5	T-54G7	IV a		18	223 + 342
225	細石刃	珪質頁岩	5	16	6.5	3	0.2	T-54G9	IV b	48		
226	使用痕の	珪質頁岩	5	37. 5	36. 5	5. 8	3, 4	T-54G10	IVь			
	ある剥片 剥片	珪質頁岩	5	34	38	3		T-54G11	III a			
	細石刃	珪質頁岩	5	16. 5	6	2. 5		T-54G13	IV b	48		
	剥片	珪質頁岩	5	39	32	2. 5				40		
			_					T-54G14	IV b	40	_	
	細石刃	珪質頁岩	5	25. 5	9	3.5		T-54G17	IVь	48	_	
234	細石刃 使用痕の	珪質頁岩 珪質頁岩	表 5	33. 5 28. 5	7 2	2 5		T-54G表採 T-55G6	III a	47		
	ある剥片 細石刃	建質頁岩	5	7	6	1.5		T-55G7	Шь	12		
	細石刃	建質頁岩	8	15	11	3		T-55G10	IV a	48		
	影器	珪質頁岩	5		21	5		T-55G11		45	_	
				35					IV a	40	_	
	剥片	珪質頁岩	8	24	21.5	4.8		T-55G13	IV b	-	_	
	剥片	珪質頁岩	5	9	10.7	2. 2		T-55G16	IV b		_	
252	細石刃	珪質頁岩	5	23	8	4	0, 5	T-55G18	IV b	48		
255	細石刃核 関連用品	珪質頁岩	8	45	17	7	5.3	T-56G1	III a	42		作業面再生
256	削器	珪質頁岩	8	19. 1	14. 4	2. 9	0. 6	T-56G2	Ша	45		
257	剥片	黒曜石 (箱根畑宿)	8	34	23	8.8	8. 4	T-56G3	Ша	44	3	257+265
258	細石刃	珪質頁岩	8	27	13	4	0. 9	T-56G4	Ша	47		
	細石刃	珪質頁岩	8	14	8	1		T-56G8	Шь	48		
	影器削片	珪質貞岩	8	11	3. 5	3		T-56G9	Шb	44		
	細石刃	珪質頁岩	8	11.5	10	2.5		T-56G10	III b	47	_	
	剥片	黒曜石	8	33	21	9. 9		T-56G11	IV b	44	3	257+265
		(箱根畑宿)	0	0.5	00	0.1			13.7			
	剥片	珪質頁岩	8	25	23	2. 1		T-56G12	IV a		_	
	剥片	珪質頁岩	8	39	26	5, 5	4. 8	T-56G16	IV b	46		
	剥片 使用痕の	珪質頁岩	外					T-56G17				
276	ある剥片	珪質頁岩	9	49	41	8. 5	11. 2	T-57G5	III b			
277	剥片	黒色安山岩	9	25	27. 5	8. 2	2	T-57G6	Шь			
	剥片	珪質頁岩	1	18, 5	20, 5	2, 5		U-50G1	Ша			
	細石刃	珪質頁岩	1	10. 5	8	1. 5		U-50G2	Ша	48		
				$\overline{}$					_	-10	-	
	剥片	珪質頁岩	1	14	11	1.5		U-50G4	III a		_	
	剥片	珪質頁岩	1	16. 5	12. 5	1. 9		U-50G5	III a			
287	剥片	珪質頁岩	1	9	10.5	2. 2	0. 1	U-50G6	III a			
288	剥片	珪質頁岩	1	23	23	3. 1	1.4	U-50G7	III a			
289	剥片	珪質頁岩	1	26	19	2. 2		U−50G8	III a			
	剥片	珪質頁岩	1	20. 5	10	1.5		U-50G11	Ша			
_									_		-	
	剥片	珪質頁岩	1	16	11	1.3		U-50G12	III a			
	砕片	珪質頁岩	1	10	14. 5	1. 7	0. 1	U-50G14	Шь			
296	剥片	珪質頁岩	1	13. 5	16.5	2. 7	0.4	U-50G15	Шь			
	剥片	珪質頁岩	1					U-50G16	ΙVa			
	剥片	珪質頁岩	1	13	12	2. 5	υa	U-50G17	IV a			
	砕片	珪質頁岩	1	11.5	9	1.5		U-50G19	Шь			
	砕片	珪質頁岩	1	9	11.5	1.3	0.1	U-50G21	IV a			

1005	Na.	器械	石材	プロック	長皿	幅加加	厚mm	重量	登録番号	屬位	挿図	接 資 No.	備考
505 6 유급 注資百濟 1	303	剥片	非質百岩	_	14. 5	10. 5	1. 5	0.3	11-50G22	IV a			
1906 株式 株式 株式 株式 株式 株式 株式 株										_			
1907										_			
1988 田東京帝 1 11.5				_					-				
131 銀币子 性質性				1						-			
1313 除行 性質問題 1	311	剥片		1	26	32	5	3. 3	U-50G30	-		26	311+575
1314	312	細石刃	珪質頁岩	1	33	8	5	0, 7	U-50G31	IV a	47		
1515 密片 建質頁器 1	313	砕片	珪質頁岩	1	8. 5	9. 5	06	0.05	U-50G32	IV a			
古書語 日本	314	砕片	珪質頁岩	1	7	10.5	0.9	0.05	U-50G33	IV a			
18 18 18 19 19 10 11 12 14 2.1 0.5 0-50336 IV a 19 18 18 18 18 18 19 19			珪質頁岩	1	6	11	0.8	0.1	U-50G34	IV a			
31日 50 주 注意	316		珪質頁岩	1	8	7	1.8	0.05	U-50G35	IV a			
310 総方 独質真岩		ある剥片		0.00		14	7/2	0.00					
1920 別片 注電頁岩 1 8.5 33 1.2 0.1 0-50039				-						_			
321 割片 建氧良岩 1 35.9 16.6 2.3 0.4 0-50c40 1V a 1 1 1 1 1 1 1 1 1			-										
322 神石列 建質百岩				_		_							
2324 附片 建質頁岩				-						-			
2328 湖片 建質音岩				-					-	_	47		
326 副片 建質頁岩 1 10 11.5 1.8 0.2 U-50645 IV a 12 12 13 14 14 15 1.8 1.8 1.8 1.8 1.8 1.8 IV a 1.8										-	-		
327 割片 建筑瓦岩 1 10 11.5 2 0.3 U-50G46 IV a		li-							-	+			
328 副片 建筑页岩 1				_									
330 別片 注質良岩 1 21 20.5 1.7 0.7 0.50650 IV b 1 1 1 1 1 1 1 1 1				_									
330 別片 注質頁岩				_									
331 別片 注質頁岩 1				+						+			
332 別片 注質頁岩 1 11 15 1.2 0.2 0-50651 IV b				_									
333 別片 注質页岩 1 18.5 18 1.8 0.8 0-50G52 IV a				_									
334				_					-				
338 割片 注質頁岩				1		10	_						
339 割片 注質頁岩			珪質頁岩	1		15		0.6	U-50G56	IV b			
340 刻片 注質頁岩 1 33 25 4.1 2.3 U-50659 IV a	338	剥片	珪質頁岩	1	14	15	1.5			IV b	. 0		
341 利片 注質頁岩							2			-			
342 剥片 珪質頁岩 1 12 16 1.5 0.2 U-50661 IV a 18 223+342 344 剥片 珪質頁岩 1 14.5 15 2.8 0.6 U-5161 III a U 347 剥片 珪質頁岩 4 30.1 13 2.8 1.5 U-5262 III b U 350 剥片 珪質頁岩 4 30.1 13 2.8 1.5 U-5263 III b 351 影器削片 珪質頁岩 4 15.5 5 3 0.2 U-5263 III b 352 細石刀 珪質頁岩 4 15.5 5 3 0.2 U-5265 III a 48 353 影器 珪質頁岩 4 15.5 11 2.6 0.4 U-5265 III a 48 354 剥片 珪質頁岩 4 15.5 11 2.6 0.4 U-5267 IV a 355 剥片 珪質頁岩 4 15.5 11 2.6 0.4 U-5268 IV a 356 剥片 珪質頁岩 4 18 35 6.5 3.5 U-5268 IV a 367 剥片 珪質頁岩 4 18 35 6.5 3.5 U-5269 IV a 19 356+410 <													
344 剩片 珪質頁岩 1 14.5 15 2.8 0.6 U-51G1 III a Ua 347 剥片 珪質頁岩 4 30.1 13 2.8 1.5 U-52G2 III b Ua 350 剥片 珪質頁岩 4 8 15 1.1 0.1 U-52G3 III b Ua 351 彫器削片 珪質頁岩 4 15.5 5 3 0.2 U-52G4 III a 44 352 細石刃 珪質頁岩 4 15.5 9 2 0.2 U-52G5 III a 48 353 彫器 珪質頁岩 4 15.5 11 2.6 0.4 U-52G7 IVa 355 剥片 珪質頁岩 4 15.5 11 2.6 0.4 U-52G7 IVa 356 剥片 珪質頁岩 4 18 35 6.5 3.5 U-52G9 IVa 19 356+410 357 剥片 建質頁岩 4 18 35 6.5 3.5 U-52G1 IVb 4 4 12 10.4 U-52G11 IVa 4 14 <t< td=""><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>200 1 240</td></t<>													200 1 240
347 剥片 珪質頁岩 4 30.1 13 2.8 1.5 U-5262 III b II b 350 剥片 珪質頁岩 4 30.1 13 2.8 1.5 U-5263 III b II b 351 影器削片 珪質頁岩 4 15.5 5 3 0.2 U-5264 III a 44 352 細石刃 珪質頁岩 4 12.5 9 2 0.2 U-5265 III a 48 353 影器 珪質頁岩 4 15.5 11 2.6 0.4 U-5267 IV a 355 剥片 珪質頁岩 4 15.5 11 2.6 0.4 U-5267 IV a 355 剥片 珪質頁岩 4 15.5 11 2.6 0.4 U-5267 IV a 356 剥片 珪質頁岩 4 18 35.6 6.5 3.5 U-5269 IV a 19 356+410 357 剥片 珪質頁岩 4 22 21 3.3 1.4 U-52610 III b 19 356+410 359 影器 建質頁岩 4 13 15			The second secon	_	-					-		18	223 + 342
349 剥片 珪質頁岩 4 30.1 13 2.8 1.5 U-52G2 III b					14.0	10	2, 0	0.0		-			
350 剥片 挂質頁岩 4					30. 1	13	2. 8	1. 5		_			
Second Desire										-			
18	351	彫器削片		4	15. 5	5	3			_	44		
354 剥片 注質頁岩 4 15.5 11 2.6 0.4 U-52G7 IV a S55 剥片 注質頁岩 4 24 13 1.2 0.4 U-52G8 IV a S56 剥片 注質頁岩 4 18 35 6.5 3.5 U-52G9 IV a 19 356+410 S57 剥片 注質頁岩 4 22 21 3.3 1.4 U-52G10 III b S58 剥片 注質頁岩 4 13 15 2.5 0.3 U-52G11 IV a S59 IW B 注質頁岩 4 31 26 8 6.4 U-52G12 IV b 45 S59 IW B 注質頁岩 4 16.5 4 2.5 0.2 U-52G13 IV a 48 S51 IW B B B B B B B B B B			珪質頁岩	4	12.5	9	2			III a	48		
355 別片 注質頁岩 4 24 13 1.2 0.4 U-5268 IV a 19 356+410 357 剝片 注質頁岩 4 22 21 3.3 1.4 U-52010 III b 19 356+410 358 剝片 注質頁岩 4 13 15 2.5 0.3 U-52611 IV a 19 356+410 359 彫器 注質頁岩 4 31 26 8 6.4 U-52612 IV b 45 360 細石刃 注質頁岩 4 22.5 6.5 3 0.3 U-52613 IV a 48 361 彫器削片 注質頁岩 4 16.5 4 2.5 0.2 U-52614 IV b 44 362 剝片 注質頁岩 4 11.3 10.8 2.1 0.1 U-52615 IV a 363 細石刃 注質頁岩 4 14.5 5.5 2.5 0.2 U-52616 IV a 48 364 剝片 注質頁岩 4 18.8 26.5 4.5 1.8 U-52617 III a 365 剝片 注質頁岩 4 13.5 19 2.1 0.4 U-52618 IV a 366 剝片 注質頁岩 4 13.5 19 2.1 0.4 U-52619 IV a 367 剝片 注質頁岩 4 12 15.5 2.7 0.4 U-52620 IV a 368 細石刃 注質頁岩 4 17.5 8 2.5 0.2 U-52621 IV b 48 369 砕片 注質頁岩 4 17.5 8 2.5 0.2 U-52621 IV b 48 370 剝片 注質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52624 IV b 371 剝片 注質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52625 III b				-	-						45		
356 別片 注質頁岩 4 18 35 6.5 3.5 U-5269 IV a 19 356+410 357 剥片 注質頁岩 4 13 15 2.5 0.3 U-52611 IV a 359 彫器 注質頁岩 4 31 26 8 6.4 U-52612 IV b 45 360 細石刃 注質頁岩 4 16.5 4 2.5 0.2 U-52613 IV a 48 361 彫器削片 注質頁岩 4 11.3 10.8 2.1 0.1 U-52615 IV a 362 剥片 注質頁岩 4 14.5 5.5 2.5 0.2 U-52616 IV a 363 細石刃 注質頁岩 4 18.8 26.5 4.5 1.8 U-52617 III a 364 剥片 注質頁岩 4 18.5 19 2.1 0.4 U-52618 IV a 365 剥片 注質頁岩 4 13.5 19 2.1 0.4 U-52619 IV a 366 剥片 注質頁岩 4 12 15.5 2.7 0.4 U-52620 IV a 368 細石刃 注質頁岩 4 17.5 8 2.5 0.2 U-52621 IV b 369 砕片 注質頁岩 4 17.5 8 2.5 0.2 U-52621 IV b 370 剥片 注質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52625 III b									-				
357 剥片 建質頁岩 4 22 21 3.3 1.4 U-52610 III b												10	356 + 410
358 別片 珪質頁岩 4 13 15 2.5 0.3 U-52G11 IV a 45 360 細石刃 珪質頁岩 4 22.5 6.5 3 0.3 U-52G13 IV a 48 361 影器削片 珪質頁岩 4 16.5 4 2.5 0.2 U-52G14 IV b 44 362 別片 珪質頁岩 4 11.3 10.8 2.1 0.1 U-52G15 IV a 363 細石刃 珪質頁岩 4 14.5 5.5 2.5 0.2 U-52G16 IV a 364 剝片 珪質頁岩 4 1.8 26.5 4.5 1.8 U-52G17 III a 365 刹片 珪質頁岩 4 13.5 19 2.1 0.4 U-52G18 IV a 366 刹片 珪質頁岩 4 13.5 19 2.1 0.4 U-52G19 IV a 367 刹片 珪質頁岩 4 12 15.5 2.7 0.4 U-52G20 IV a 368 細石刃 珪質頁岩 4 17.5 8 2.5 0.2 U-52G21 IV b 369 砕片 珪質頁岩 4 17.5 8 2.5 0.2 U-52G22 IV b 370 刹片 珪質頁岩 4 22 10 2.5 0.5 U-52G23 IV b 371 刹片 珪質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52G25 III b								3, 5 1 /	U-52010			13	000 410
359 影器 注質頁岩 4 31 26 8 6.4 U-52G12 IV b 45 360 細石刃 注質頁岩 4 22.5 6.5 3 0.3 U-52G13 IV a 48 361 影器削片 注質頁岩 4 16.5 4 2.5 0.2 U-52G14 IV b 44 362 剥片 注質頁岩 4 11.3 10.8 2.1 0.1 U-52G15 IV a 363 細石刃 注質頁岩 4 11.8 26.5 4.5 1.8 U-52G17 III a 364 剥片 注質頁岩 4 13.5 19 2.1 0.4 U-52G18 IV a 366 剥片 注質頁岩 4 12 15.5 2.3 0.6 U-52G19 IV a 367 剥片 注質頁岩 4 12 15.5 2.7 0.4 U-52G20 IV a 29 367+389 368 細石刃 注質頁岩 4 17.5 8 2.5 0.2 U-52G21 IV b 48 369 砕片 注質頁岩 4 17.5 8 2.5 0.2 U-52G21 IV b 48 370 剥片 注質頁岩 4 22 10 2.5 0.5 U-52G23 IV b 371 剥片 注質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52G25 III b			珪質頁岩										
360 細石刃 建質頁岩 4 22.5 6.5 3 0.3 U-52613 IV a 48 361 影器削片 建質頁岩 4 16.5 4 2.5 0.2 U-52614 IV b 44 362 剝片 建質頁岩 4 11.3 10.8 2.1 0.1 U-52615 IV a 363 細石刃 建質頁岩 4 14.5 5.5 2.5 0.2 U-52616 IV a 48 364 剝片 建質頁岩 4 13.5 19 2.1 0.4 U-52617 III a 365 剝片 建質頁岩 4 13.5 19 2.1 0.4 U-52618 IV a 366 剝片 建質頁岩 4 23 15.5 2.3 0.6 U-52619 IV a 367 剝片 建質頁岩 4 12 15.5 2.7 0.4 U-52620 IV a 29 367+389 368 細石刃 建質頁岩 4 17.5 8 2.5 0.2 U-52621 IV b 48 369 碎片 建質頁岩 4 10 7.5 1.5 0.1 U-52622 IV b 370 剝片 建質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52624 IV b 371 剝片 建質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52625 III b											45		
362 剥片 注質頁岩 4 11.3 10.8 2.1 0.1 U-52G15 IV a 363 細石刃 注質頁岩 4 14.5 5.5 2.5 0.2 U-52G16 IV a 48 364 剥片 注質頁岩 4 13.5 19 2.1 0.4 U-52G17 III a 365 剥片 注質頁岩 4 12.5 15.5 2.3 0.6 U-52G19 IV a 367 剥片 注質頁岩 4 12 15.5 2.7 0.4 U-52G20 IV a 29 367+389 368 細石刃 注質頁岩 4 17.5 8 2.5 0.2 U-52G21 IV b 48 369 碎片 注質頁岩 4 10 7.5 1.5 0.1 U-52G22 IV b 370 剥片 注質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52G24 IV b 371 剥片 注質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52G25 III b 372 碎片 注質頁岩 4 5 8 1 0.02 U-52G25 III b	360	細石刃	珪質頁岩	4		6. 5	3	0.3	U-52G13		48		
363 細石刃 珪質頁岩 4 14.5 5.5 2.5 0.2 U-52616 IV a 48 364 剥片 珪質頁岩 4 1.8 26.5 4.5 1.8 U-52617 III a 365 剥片 珪質頁岩 4 13.5 19 2.1 0.4 U-52618 IV a 366 剥片 珪質頁岩 4 12 15.5 2.3 0.6 U-52619 IV a 367 剥片 珪質頁岩 4 12 15.5 2.7 0.4 U-52620 IV a 29 367+389 368 細石刃 珪質頁岩 4 17.5 8 2.5 0.2 U-52621 IV b 48 369 砕片 珪質頁岩 4 10 7.5 1.5 0.1 U-52622 IV b 370 剥片 珪質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52624 IV b 371 剥片 珪質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52625 III b											44		
364 剥片 注質頁岩 4 1.8 26.5 4.5 1.8 U-52617 III a 365 剥片 注質頁岩 4 13.5 19 2.1 0.4 U-52618 IV a 366 剥片 注質頁岩 4 23 15.5 2.3 0.6 U-52619 IV a 367 剥片 注質頁岩 4 12 15.5 2.7 0.4 U-52620 IV a 29 367+389 368 和石刃 注質頁岩 4 17.5 8 2.5 0.2 U-52621 IV b 48 369 平片 注質頁岩 4 10 7.5 1.5 0.1 U-52622 IV b 370 剥片 注質頁岩 4 22 10 2.5 0.6 U-52623 IV b 371 剥片 注質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52624 IV b 372 平片 注質頁岩 4 5 8 1 0.02 U-52625 III b 372 III b 384 III a 385 III a 385 III b 385 I										-			
365 剥片 珪質頁岩 4 13.5 19 2.1 0.4 U-52618 IV a 366 剥片 珪質頁岩 4 23 15.5 2.3 0.6 U-52619 IV a 367 剥片 珪質頁岩 4 12 15.5 2.7 0.4 U-52620 IV a 29 367+389 368 却石刃 珪質頁岩 4 17.5 8 2.5 0.2 U-52621 IV b 48 369 砕片 珪質頁岩 4 10 7.5 1.5 0.1 U-52622 IV b 370 剥片 珪質頁岩 4 22 10 2.5 0.5 U-52623 IV b 371 剥片 珪質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52624 IV b 372 砕片 珪質頁岩 4 5 8 1 0.02 U-52625 III b										-	48		
366 剥片 珪質頁岩 4 23 15.5 2.3 0.6 U-52G19 IV a 29 367+389 367 剥片 珪質頁岩 4 12 15.5 2.7 0.4 U-52G20 IV a 29 367+389 368 細石刃 珪質頁岩 4 17.5 8 2.5 0.2 U-52G21 IV b 48 369 砕片 珪質頁岩 4 10 7.5 1.5 0.1 U-52G22 IV b 370 剥片 珪質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52G24 IV b 371 剥片 珪質頁岩 4 5 8 1 0.02 U-52G25 III b				-						-			
367 剥片 珪質頁岩 4 12 15.5 2.7 0.4 U-52G20 IV a 29 367+389 368 細石刃 珪質頁岩 4 17.5 8 2.5 0.2 U-52G21 IV b 48 369 砕片 珪質頁岩 4 10 7.5 1.5 0.1 U-52G22 IV b 370 剥片 珪質頁岩 4 22 10 2.5 0.5 U-52G23 IV b 371 剥片 珪質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52G24 IV b 372 砕片 珪質頁岩 4 5 8 1 0.02 U-52G25 III b													
368 和石刃 珪質頁岩 4 17.5 8 2.5 0,2 U-52621 IV b 48 369 砕片 珪質頁岩 4 10 7.5 1.5 0.1 U-52622 IV b 370 剥片 珪質頁岩 4 22 10 2.5 0.5 U-52623 IV b 371 剥片 珪質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52624 IV b 372 砕片 珪質頁岩 4 5 8 1 0.02 U-52625 III b						=				-		29	367 ± 389
369 碎片 珪質頁岩 4 10 7.5 1.5 0.1 U-52622 IV b 370 剥片 珪質頁岩 4 22 10 2.5 0.5 U-52623 IV b 371 剥片 珪質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52624 IV b 372 砕片 珪質頁岩 4 5 8 1 0.02 U-52625 III b											48		
370 剥片 珪質頁岩 4 22 10 2.5 0.5 U-52G23 IV b 371 剥片 珪質頁岩 4 12 9 1.1 0.05 U-52G24 IV b 372 砕片 珪質頁岩 4 5 8 1 0.02 U-52G25 III b	369	砕片								-			
372 砕片 珪質頁岩 4 5 8 1 0.02 U-52C25 III b				4		10	2.5			1			
										_			
374 剥片 珪質頁岩 4 19.5 10 2.9 0.4 U-52G27 IV b			珪質頁岩 珪質頁岩										

No.	器種	石材	ブロック	長	幅mm	厚 mm	重量 g	登録番号	層位	挿図	接 資 No.	備考
375	剥片	珪質頁岩	4	14	13	1.5	0.2	U-52G28	IV b			
	細石刃	珪質頁岩	4	20. 5	6	2		U-52G29	IV ь	48		
	砕片	 廷質頁岩	4	9. 7	5	1		U-52G30	IV b		20	378+388
	剥片	珪質頁岩	4	22	13	1. 7		U-52G31	IV b			
	剥片	珪質頁岩	4	23	24	1.5		U-52G32	IV b			
	細石刃	珪質頁岩	4	12. 5	6	2.5		U-52G33	IV b	48		
	剥片 剥片	珪質頁岩 珪質頁岩	4	24 12	10 15, 5	2, 2		U-52G34 U-52G35	IV b			
384		建質页岩	4	8	15. 5	1.1		U-52G36	IV b	-		
	剥片	珪質頁岩	4	27	21	6. 5		U-52G37	IV b			
	砕片	珪質頁岩	4	10	6. 5	0.7		U-52G38	IV b			
	砕片	珪質頁岩	4	8. 5	12, 5	1, 5		U-52G39	IV b			
	剥片	珪質頁岩	4	24.5	31	7, 6		U-52G40	IV b			378 ± 388
	剥片	珪質頁岩	4	15	12. 5	1.5		U-52G41	IV b		29	367+389
	剥片 彫器	珪質頁岩	4	15. 5	17. 5 26	1.9		U-53G1	III a	4.E		
	<u>配</u> 石刃	珪質頁岩 珪質頁岩	4	38 18. 5	6	8		U-53G2 U-53G3	III a	45 48	_	
	剥片	建質页岩	4	18	19	7.6		U-53G4	Ша	10		
	影器	珪質頁岩	4	60	20	5. 5		U-53G6	Шь	45	6	396 + 535
397	敲石	ホルン フェルス	4	81	66	44	380	U-53G7	IV a	46		
398	剥片	黒色頁岩	4	13	24	12	1. 3	U-53G8	IV a		21	398 ± 401
	剥片	黒色頁岩	4	37	43	11		U−53G9	IV a			
	剥片	黒色頁岩	4	45	48	12, 1		U-53G11	IV a		21	398+401
	剥片	非質頁岩	4	32	15	3. 1		U-53G12	IV a	-	21	330 101
	剥片	建質頁岩	1		14			U-53G13	lV a	-	-	
			_	24	_	1.9				4.4		
	影器削片	珪質頁岩	4	28	4	3		U-53G14	IV a	44	-	
	彫器削片	珪質頁岩	4	12	3	2.5		U-53G15	IV a	44		
	剥片	黒色頁岩	4	7	16	4. 5		U-53G16	IV b			
	剥片	珪質頁岩	4	16	15, 5	2. 7		U-53G17	Шр			
	剥片	珪質頁岩	4	28	18	3. 5	1.4	U-53G18	IV a			
409	剥片	珪質頁岩	4	27	15	2.8	1.1	U-53G19	IV a			
410	剥片	珪質頁岩	4	14	16, 5	3, 8	0.5	U-53G20	Ша		19	356 + 410
411	剥片	珪質頁岩	4	35	21	5	2.4	U-53G21	Шь			
417	彫器削片	珪質頁岩	4	15. 5	5	2. 5	0. 2	U-53G27	IVъ			
	剥片	珪質頁岩	表	11	13.8	16	0. 1	U-53G表採1	3-3			
	砕片	珪質頁岩	表	11. 5	9. 2	5. 2		U-53G表採2				
	細石刃	珪質頁岩	6	29. 5	9, 5	3		U-54G1	III a	47		
	使用痕のある剥片	珪質頁岩	6	38	33	3. 5		U-54G2	IV a			
495		建新香 典	6	22.5	10	4	0.7	II-E4C3	TV b	10		
	細石刃 剥片	珪質頁岩 珪質頁岩	6	23, 5	10 37	4.8		U-54G3 U-54G5	IV b	48		
	削器	建質頁岩							-	40		
constitue out	剥片		6	80	36 29	7		U-54G6 U-54G7	III b	43		
	利万 細石刃	建質 页岩	6	35. 5 44	13.5	3, 6			IV a	46		
		建質頁岩				5		U-54G8 U-54G表採1	IV a	46		
	細石刃	珪質頁岩	表	13, 5	4.5	2 1			_	48		
	剥片 削器	珪質頁岩	表	10.9	12. 6	2. 1		U-54G表採2	III. o	40		
		珪質頁岩 珪質頁岩	外加	36. 5	31	6		U-55G1	III a	43		
	剥片 細石刃		外主	26	13	2.5		U-55G3 U-55G表採	IV a	40	-	
	刺片	珪質頁岩	表	13	90 5	2		1 181		48		
_		珪質頁岩	9	22	38, 5	9, 5		U-56G5	III b	44		
	剥片	建質質岩	9	26	15	2		U-57G1	III b			
	細石刃	珪質頁岩	9	18. 5	7. 5	2		U-57G2	Шb			
	細石刃	建質頁岩	9	26. 5	10	3		U-57G3	III b	47		
	細石刃	珪質頁岩	9	13	6. 5	2		U-57G4	ШЬ	48		
	剥片	珪質頁岩	9	21	22	3. 2		U-57G5	ШЬ			
	掻器	珪質頁岩	9	42	32. 5	10		U-57G6	IV a	43		
	剥片	珪質頁岩	9	15. 5	11	2. 6		U-57G7	IV b			
	剥片	珪賀頁岩	9	18.5	16	2. 2		U-57G8	IV b			
456	砕片	珪質頁岩	9	10	8. 5	1.5	0.1	U-57G9	III a			

No.	器種	石材	ブロック	長	幅mm	厚 mm	重量 g	登録番号	層位	挿図	接 資 No.	備考
457	剥片	黒曜石	9	2, 5	2, 4	5. 5	3, 5	U-57G10	III a			鈴木正男氏
		(箱根畑宿)										分析資料
	剥片	黒色頁岩	外	47	66	9		V-49G1	III a			
	剥片	珪質頁岩	1	14	18	2. 1		V-50G2	III a			
	細石刃	珪質頁岩	1	17	6	2		V-50G3	IV a	48		
	砕片	珪質頁岩	2	6	6.5	2		V-51G2	III a			
	剥片	珪質頁岩	4	13	16	3.3	0.6	V-52G2	IV b			
74	剥片	珪質頁岩	外	40	35	3		V-53G3	III a			
79	細石刃	珪質頁岩	外	20	6.5	4.5	0.2	V-53G8	IV a	48		
81	剥片	黒色頁岩	外	24	16	3, 5		V-53G10	IV b			
83	彫器削片	珪質頁岩	表	21.5	5. 5	3, 5	0.3	V-53G表採1	-	44		
84	剥片		表	20.6	13. 1	3.6		V-53G表採2	-			
	細石刃	珪質頁岩	6	37	8	1.8		V-54G2	Шь	47	9	486 ± 492
	細石刃	珪質頁岩	6	29	8. 5	3		V-54G3	Шь	47	-	100 1 102
	細石刃	珪質頁岩	6	39	10	6.5		V-54G4	IV a	47		
	細石刃	珪質頁岩	6	-18	6.5	2		V-54G5	IV a	48		
_	細石刃	珪質頁岩	6	20, 5	6	2		V-54G6	IV a	48	30	490+648
	剥片	建質頁岩	6	50							30	490 + 040
	細石刃	珪質頁岩	6		61	6. 1		V-54G7	IV a	46	0	100 100
				63	8	7		V-54G8	IV b	47	9	486+492
	削器	珪質頁岩	6	14. 3	32. 4	3.4		V-54G10	IV b	44	4	494+495 被熱
	削器	珪質頁岩	6	47	33	4.5	5	V-54G11	IV b	_41	4	494+495 被熱
97	使用痕の ある剥片	珪質頁岩	6	38.5	27	3.9		V-54G13	IV b	44		
00	砕片	珪質頁岩	.6	9.5	15	1.5	0. 2	V-54G16	IV b			
02	剥片	珪質頁岩	6	11	13	1.5		V-55G1	III a			
07	剥片	黒色頁岩	2	35	27	6, 5	4.8	W-50G1	Ша			
09	掻器	チャート	2	43	45	11.1	26. 6	W-50G3	III a			
10	剥片	黒色安山岩	2	23	13	4. 1		W-50G4	III a			
	剥片	珪質頁岩	2	11.5	14.5	2		W-50G5	Ша			
	刺片	珪質頁岩	2	16.5	20, 5	3. 2		W-50G6	Ша	_	_	
	剥片	珪質頁岩	2	16. 5	4, 5	2. 5		W-50G7	Ша			
	影器削片	珪質頁岩	2	13	6, 5	2. 5		W-50G8	ШЬ	44		
	砕片	珪質頁岩	2	10.5	8	0.8		W-50G9	ШЬ	44		
	削器	珪質頁岩	2	30	27			W-50G10		40	- 1	E10 E00
	剥片	思色安山岩	2	34	39	7.5			Шb	42	1	516+539
	利片 利片					9.9		W-50G11	ШЬ	_	22	517+546
		注質頁岩	2	14	18. 5	2. 9		W-50G12	Шр	_		
	剥片	建質頁岩	2	11	12	2		W-50G13	Шь	_		
	剥片	真岩	2	25. 5	21	6. 5	3. 5	W-50G14	IV a			
	测片	頁岩	2					W-50G15	IV a	_		
	雌器	珪質页岩	2	59	34	10		W-50G16	IV a	45		
	刷片	珪質頁岩	_2_	9	14	1.4		W-50G17	IV a			
	削器	珪質頁岩	2	58. 5	35	7. 5	12, 6	W-50G18	IV a	43		
25	影器削片	珪質頁岩	2	11.5	6	2. 5	0.1	W-50G19	IV a	44		
26	剥片	黒曜石 (箱根畑宿)	2	27	43	5.8	4. 5	W-50G20	IV a		15	526+527+529
27	剥片	黒曜石 (箱根畑宿)	2	20	19	4. 5	1. 3	W-50G21	IV a		15	526+527+529
28	剥片	黒色安山岩	2	29.5	18	4. 9	9	W-50G22	IV a			
	剥片	黒曜石	2	29.5	6	2. 4		W-50G22	IV a		15	526+527+529
		(箱根畑宿)									10	020 1 021 1 027
	剥片	黒色安山岩	2	57	22, 5	12.2		W-50G24	IV b			
	剥片	珪質頁岩	2	20, 5	23	4. 2		W-50G25	IV b			
32	細石刃	珪質頁岩	2	10	6	2, 5	0.1	W-50G26	IV b			
	彫器削片	珪質頁岩	2	18	6.5	4	0, 4	W-50G27	IV b	44		
35	彫器	珪質頁岩	2	38, 5	11	4, 9	3.8	W-50G29	IV a	45	6	396+535
36	剥片	珪質頁岩	2	12	10	1.8		W-50G30	IV b			
37	剥片	黒色安山岩	2	12.5	15	4.1	0.7	W-50G31	IV b			
	細石刃	珪質頁岩	2	18	6	2		W-50G32	IV b	48		
Ra	使用痕の ある剥片	珪質頁岩	表	35	21. 5	9. 5		W-50G表採		42	1	516+539
		建断古川	9	10 5	10	1.0	0.0	W 5101	m		_	
	剥片	珪質頁岩	2	18.5	10	1.5		W-51G1	Ша			
	剥片	黒色安山岩	2	36	23	8. 1		W-51G2	III a		16	541±583
	影器削片	珪質頁岩	2	13. 5	4	2.5		W-51G3	III a	44		
	影器	珪質頁岩	2	31.5	20.5	4. 5		₩-51G6	Шь	45	5	545+551
16	剥片	黒色安山岩	2	38	49	12	18.8	W-51G7	Шb		22	517+546
18	剥片	黒曜石 (箱根畑宿)	2	38	25	18	11.8	W-51G9	IV a	43		

			7	1 24	400	7	Section 1		Marie I	Third I	接	The state of the s
No.	器種	石材	ツロ	長 mm	tum	194	重量	登録番号	層位	揮圖	遊 No.	備考
	and the	-1 55 11	2					W. 51010	77.			5.5.1.551
	彩器	<u> </u>	2	13. 5	10	2.5		W-51G12 W-53G2	IV a	45	5	545+551
	剥片 剥片	黒色頁岩 黒色安山岩	7	43 33	32 36	7. 1		W-53G2 W-53G3	III b IV b		32	564+566
	剥片	黑色安山岩	7	40	49	9.7		₩-53G5	IV b		32	564+566
	剥片	黒色安山岩	7	36	21	7		W-53G6	IV b			567+578
	剥片	黒色頁岩	7	20	20	5		W-54G1	Ша			
570	测片	黒色頁岩	7	14	17	2.8	0.6	W-54G2	Ша			
571	細石刃	黒曜石 (箱根畑宿)	7	30	8. 5	6	0, 8	W-54G3	Шр	44	7	571+610
572	剥片	黒色頁岩	7	25, 5	15	5	2.4	W-54G4	Шь			
	剥片	黒色頁岩	7	14	12.5	3, 5	0.6	₩-54G5	IV a			
574	剥片	珪質頁岩	7	17	15	2, 5	0.5	₩-54G6	ШЪ			
575	剥片	珪質頁岩	7	31	26. 5	4. 2	1.8	₩-54G7	Шb		26	311+575
576	細石刃	黒曜石	7	18	9	2	0. 2	W-54G8	Шρ	44		
		(箱根畑宿)									-	
	剥片	黑色安山岩	7	10	10	2. 1		W-54G9	IV a		22	EG7 1 E70
	剥片	黒色安山岩	7	12	19 25	4.1		W-54G10 W-54G11	IV a IV a	_	33	567+578
	剥片	黒色安山岩 黒色安山岩	7	16 29	20	9.5		W-54G11 W-54G12	IV a			
	剥片	法巴女山石 珪質負岩	7	12	15. 5	1.7		W-54G12 W-54G13	IV a			
	剥片	珪質頁岩	7	12	13	2.8		W-54G14	IV a			
	剥片	黒色安山岩	7	36	30	8. 5		W-54G15	IV a		16	541 ± 583
	刺片	黒色頁岩	7					W-54G19	IV a			
-588	削器	珪質頁岩	7	45. 5	51.5	11	21	W-54G20	IV b	43		
589	細石刃	珪質頁岩	7	17	6	2	0, 1	W-54G21	IV b	48		
	剥片	珪質頁岩	7	15	19	3		W-54G22	IV b			
	砕片	珪質頁岩	表	6	10.6	0.8		W-54G表採				
	剥片	珪質頁岩	表	23. 5	8. 6	5	0.7	W-55G表採				
599	制片	黒色頁岩	表			-		W-56G表採		-	-	
601	使用痕の ある剥片	黒色頁岩	2	44. 5	49. 5	8. 4		X-50G2	IV a	46		
	細石刃	珪質頁岩	2	24	8	2, 5		X-51G3	III a	46	8	182+186+604
	細石刃	珪質頁岩	7	37	9	5. 5		X-53G1	IV a	47	-	
606	剥片	珪質頁岩	7	7.5	13	1	0. 1	X-54G1	Ша			
610	細石刃	黒曜石 (箱根畑宿)	7	27. 5	8	5	07	X-54G5	III a	46	7	571+610
611	剥片	注質頁岩 注質頁岩	7	24	23	2. 7	1	X-54G6	III b			
	細石刃	珪質頁岩	7	23. 5	9	4		X-54G7	IV a	48		
	-	黒曜石										
	細石刃	(箱根畑宿)	7	7	7	1.5	0. 1	X-54G8	IV b	44		
614	剥片	珪質頁岩	7	20	13	2.7	0.6	X-54G9	Шь			
615	細石刃	珪質頁岩	7	22. 5	7	3	0.3	X-54G10	III b	48		
620	細石刃	珪質頁岩	10	26	8	4	0.4	X-55G3	ШЬ	47	_	
621	剥片	黒曜石 (箱根畑宿)	10	15. 8	14	4. 4	0. 5	X-55G4	IV b		23	621+652
	細石刃	珪質頁岩	10	9, 5	8	2. 5		X-55G5	IV b	48		
	細石刃	珪質頁岩	10	16	6, 5	2	0. 2	X-56G1	Шь	48	35	623+628
	砕片	珪質頁岩	10	40.0				X-56G5	IV a	1.5		000 1 000
	細石刃	建質頁岩	10	18. 5	5.5	2.5		X-56G6	IV a	48	-	623+628
	細石刃	建質頁岩	10	24	5	2		X-56G7	IV a	48	-	
	細石刃	建質頁岩	10	11	7.5	1 2		X-56G8 X-56G9	IV b IV a	48 48	_	
	細石刃	珪質頁岩	10	20 22. 5	6	1.8		X-56G10	IV a	40		
	細石刃	珪質貝岩	10	22. 5	5, 5	2. 5		X-56G12	IV b			
	細石刃	珪質頁岩	10	14	12	1.7		X-56G14	IV b			被熱
	細石刃	珪質頁岩	10	20. 5	7	3, 5		X-56G18	IV b	48		
	細石刃	珪質頁岩	10	26. 5	6	2. 5		X-56G20	IV b	47	_	
643	細石刃	珪質頁岩	10	24	6. 5	2.5		X-56G21	IV b	48		
644	使用痕のある剥片	珪質頁岩	10	69. 5	47	5, 7	11. 4	X-56G22	IV b	46		
646	細石刃	珪質頁岩	10	25. 5	7	3	0.3	X-56G24	IV b	48		
	細石刃	珪質頁岩	10	14.5	7	2		X-56G26	IV b	48		490+648
	細石刃	珪質頁岩	10	13	4.5	2		X-56G27	IV b	48		
652	剥片	黒曜石 (箱根畑宿)	10	8, 3	16.4	4. 1	0. 5	X-56G30	IV b		23	621+652
653	細石刃	珪質頁岩	10	20	5	2.5	0. 2	X-56G31	IV b	47		
	細石刃	珪質頁岩	10	18	6			X-56G32	IV b	48	-	
	織石刃	珪質頁岩	10	24	5. 5	3	0. 2	X-56G34	IV b	48		

No.	器種	石材	プロック	及 mm	PAG mm	厚 nm	重量 B	遊録番号	層位	挿版	接資 Na	備 考
657	細石刃	珪質頁岩	10	14	4.5	2	0, 1	X-56G35	IV b	48		
659	細石刃	珪質頁岩	10	16, 5	8. 5	2	0.4	X-56G37	IV b	48		
661	細石刃	珪質真岩	10	12	4.5	2, 5	0.05	X-56G39	IV b	48		
662	細石刃	珪質頁岩	10	15	6, 5	2. 5	0.1	X-56G40	IV b	48	24	662+663
663	細石刃	珪質真岩	10	10	.5	2	0.05	X-56G41	IVь	48	24	662+663
664	細石刃	珪質頁岩	10	10.5	5, 5	3	0.1	X-56G42	IV b	48		
672	剥片	黑色页岩	外	5.3	.19	5. 7	0.5	Y-54G1	Ша		25	207+214+672
677	細石刃	珪質頁岩	10	33	7.5	4	0.5	Y-56G1	IV a	47		
678	細石刃	珪質頁岩	10	12	.5	1.5	0.1	Y-56G2	IV b	48		
00A	削器	珪質頁岩	外	9. 5	16.5	3.8	0.5	S-56G11	22			
OOB	影器削片	珪質頁岩	表					表採				

2 第Ⅱ文化層 (ナイフ形石器文化)

Nu	器種	石材	プロック	段 ma	6NS mm	JOX JOX	追服	登錄番号	粉位	押級	接資品	備考
684	剥片	黒色安山岩		20	41.6	13. 5	12.8	U-56G33	V	49		684+685+686
685	剥片	黒色安山岩		30	48.6	13. 3	20, 2	U-56G34	VII	49		684+685+686
686	剥片	黒色安山岩		26.5	32. 3	10.3	8, 7	U-56G35	VII	49		684+685+686
688	台形様石器	黒曜石		43	24	7	1.3	X-50G14	Va	49		
692	ナイフ形石器	黒色頁岩		36	16	11	3.1	Y-52G3	Va	49		

3 第Ⅲ文化層 (ナイフ形石器文化)

No.	器種	石材	ブロック	長加	椒加加	JQL Imn	飛服 g	登録番号	粉飲	## (58)	接資品	備考
687	調整痕の ある剥片	黒色頁岩		73. 7	39. 2	15. 2	59, 5	X-50G13	VII a	49		
689	台形様石器	黒色安山岩		10.8	27. 9	2. 6	0.8	X-51G9	WIa	49		689+690
690	台形様石器	黒色安山岩		43.7	28. 7	7. 1	7.9	X-51G8	₩b	49		689+690
691	台形様石器	黒色安山岩		19	16	7	5. 1	X-51G14	Wa	49		

Tab. 5 頭無遺跡第 I 文化層接合資料一覧表

資料No.	No.	登録番号	層位	ブロック	接合	距離m	器種	石材	
	516	W-50G10	III b	2	E16 E20	0, 2	削器	珪質頁岩	
1	539	W-50G表採	-	外	516+539	0. 2	使用痕のある剥片		
2	116	S-55G1	III a	5	116+137	0, 13	細石刃核関連用品	珪質頁岩	
2	137	S-55G22	IV b	5	110+137			庄 其 只 右	
3	257	T-56G3	Ша	8	257+265	0. 12	剥片	黑曜石(箱根畑宿)	
J	265	T-56G11	IV b	0	231 1 203	0.12	4471	WALE OF CALLEY	
4	494	V-54G10	IV b	6	494+495	0.1	削器(被熱)	珪質頁岩	
4	495	V-54G11	IV b	0	191 490	0.1	FIJ NIF CDXXXX	社員以 有	
5	545	W-51G6	Шр	2	545+551	0. 15	彫器	珪質頁岩	
Ü	551	W-51G12	IV a	2	545 551	0.10	MV-DIT	7,4,4	
6	396	U-53G6	Шь	4	396 + 535	12	影器	珪質頁岩	
О	535	W-50G29	IV a	2	390 333	12	用と有け	- 正真只石	
7	571	W-54G3	Шb	7	571+610	5. 6	細石刃	黒曜石(箱根畑宿)	
7	610	X-54G5	III a	,	5717010	5, 0	新山石 20	無唯有 (相似如何)	
	182	T-53G7	IV a	3					
8	186	T-53G11	IV a	3	182+186+604	16. 7	細石刃	珪質頁岩	
	604	X-51G3	III a	2					
^	486	V-54G2	Шb	6	406 1 400	0.1	/m - x - x -	性所召 中	
9	492	V-54G8	IV b	6	486+492	0. 1	細石刃	珪質頁岩	
	55	S-53G7	IV a		55 60		(m)	工厂的专业	
10	69	S-53G21	IV b	3	55+69	1.4	細石刃	珪質頁岩	
	86	S-54G8	Шь		00 100	0.10	(magaza (takata o)	叶桥五 山	
11	138	S-55G23	IV b	5	86+138	0. 18	細石刃(被熱?)	珪質頁岩	
	192	T-53G17	IV a		100 1 001	0.1	4m - T	T+ 66 TG 14	
12	204	T-53G29	IV b	- 3	192+204	0, 1	和石刃	珪質頁岩	
	88	S-54G10	Шь						
13	106	S-54G28	ШЬ	5	88+106+118	0. 15	細石刃	珪質頁岩	
	118	S-55G3	III a						
	141	S-56G2	III a	8		100	7411	1	
14	177	U-56G30	IV b	外	141 + 177	7, 3	剥片	ホルンフェルス	
	526	W-50G20	IV a						
15	527	W-50G21	IV a	2	526+527+529	0. 1	剥片	黒曜石 (箱根畑宿)	
	529	W-50G23	IV a						
	541	W-51G2	III a	2				P3 6 + 1 111	
16		W-54G15	IV a	7	541 ± 583	11.5	剥片	黑色安山岩	
	-	T-53G19	IV b					m 4 7 111	
17	206	T-53G31	IV b	3	194+206	0.1	剥片	黒色頁岩	
	223	T-54G7	IV a	5			İ	-1.55 - 11	
18	-	U-50G61	IV a	1	223+342	17	剥片	珪質頁岩	
	356	U-52G9	IV a				7411	ml 65 7 11	
19	410	U-53G20	Ша	4	356+410	3, 4	剥片	珪質頁岩	
	378	U-52G30	IV b					ml. CC = 111	
20	388	U-52G40	IV b	4	378+388	0, 1	剥片	- 珪質頁岩	
	398	U-53G8	IV a					E 6	
21	300	U-53G11	IV a	4	398 + 401	0.1	剥片	黒色頁岩	

資料No.	No.	登録番号	層位	ブロック	接合	距離m	器種	石材
	517	W-50G11	Шь					
22	546	W-51G7	Шь	2	517+546	2. 3	剥片	黒色安山岩
0.0	621	X-55G4	IV b		001 1 050		2114	
23	652	X-56G30	IV b	10	621+652	2	剥片	黒曜石 (箱根畑宿)
24	662	X-56G40	IV b	10	cen Leen	0.1	4m → 31	北原石山
24	663	X-56G41	IV b	10	662+663	0. 1	細石刃	珪質頁岩
	207	T-53G32	lV b	3				
25	214	T-53G39	Шр	3	207+214+672	22. 5	剥片	黒色頁岩
	672	Y-54G1	Ша	外				
	311	U-50G30	IV a	1				
26	341	U-50G60	IV b	1	311+575	18. 4	剥片	珪質頁岩
	575	W-54G7	Шь	7				
	81	S-54G3	III a					
0.7	96	S-54G18	IV a	_	81+96+		31114-	田左石山
27	114	S-54G36	IV b	5	114+126	0. 1	剥片	黒色頁岩
	126	S-55G11	IV b					
28	85	S-54G7	IV	-	04105	0.1	31 FF	rt 66 五 円
28	95	S-54G17	lV a	5	84+95	0, 1	剥片	珪質頁岩
29	367	U-52G20	IV a	4	067 1 000	0.1	3.1 FF	北統五出
29	389	U-52G41	IV b	4	367+389	0, 1	剥片	珪質頁岩
20	490	V-54G6	IV a	6	400 1 640	7.1	4m 7: T	rt ffi 교 H
30	648	X-56G26	lV b	10	490+648	7.:1	細石刃	珪質頁岩
	54	S-53G6	IV a					
31	67	S-53G19	IV a	3	54+67+70	02	剥片	粗粒安山岩
	70	S-53G22	IV ь					
0.0	564	W-53G3	IV b	7	504 1 500	0.1	211 144	用力力以出
32	566	₩-53G5	IV b	7	564+566	0, 1	剥片	黒色安山岩
22	567	W-53G6	IV b	7	EC7 E70	2.5	ᅰ	用在小儿出
33	578	₩-54G10	IV a	7	567±578	2. 5	剥片	黒色安山岩
0.4	60	S-53G12	IV a	5	CO 1 100	2.4	⟨m =c* = □	T+66-五 H
34	188	T-53G13	IV a	3	60+188	2. 4	細石刃	珪質頁岩
0.5	623	X-56G1	Шь	10	000 L 000	0.1	έm τ ⊤	**************************************
35	628	X-56G6	IV a	10	623+628	0.1		珪質頁岩
0.0	90	S-54G12	lV a	-	00.1.1.5	0.1	311L (4b45 0)	rt FF 중 보
36	115	S-54G37	IV b	5	90+115	0.1	剥片(被熱?)	珪質頁岩

Tab. 6 頭無遺跡縄文時代土坑計測表

名称	平面形	長軸	短軸	深さ	底面形	長軸	短軸	底穴	角度	出土遺物	備考
ſD−1	楕円形	175	70	80	楕円形	154	43	2	100°		所謂「陥し穴」
[D−2	楕円形	224	119	124	分銅形	186	85	2	90°	VII群土器46・IX群土器1・削器 1・剥片1	所謂「陥し穴」
[D-3	不整形	-	-	-		-	-	-	-	削器 2	落ち込みか
Π-4	楕円形	-		-		-	-	-	-	VII群上器 6	落ち込みか
D-5	不整形	-	-				-	400	-	Ⅷ群土器 1	落ち込みか
JD-6	楕円形	157	76	79	楕円形	144	51	2	70°		所謂「陥し穴」
JD-7	楕円形	214	93	119	楕円形	191	54	2	40°	剥片 1	所謂「陥し穴」
JD-8	楕円形	208	130	117	分銅形	152	57	3	150°	VII群土器 1	所謂「陥し穴」
JD-9	楕円形	230	115	105	分銅形	182	66	2	90°	VII群48・礫器1・剥片3	所謂「陥し穴」
D-10	楕円形	222	122	104	楕円形	154	57	2	60°	X群土器 1	所謂「陥し穴」
D-11	楕円形	248	143	127	分銅形	152	45	2	50°	VII群土器 7	所謂「陥し穴」
		-			_	-	-		70°		
D-12	楕円形	243	151	144	分銅形	170	66	3		WI群土器 1	所謂「陥し穴」
JD-13	楕円形	350	188	126	楕円形	210	87	3	80°	VII群土器 7・剝片 1	所謂「陥し穴」
JD-14	楕円形	202	103	120	分銅形	142	58	3	90°	VII群上器 1	所謂「陥し穴」
JD-15	不整形	- "	-				-	-	20		落ち込みか
JD-16	楕円形	216	117	110	分銅形	167	70	2	50°	V群土器2・VII群土器3・三角錐 形石器1・剥片2	所謂「陥し穴」
JD-17	楕円形	256	166	82	長方形	196	100	2	40°	削器1	所謂「陥し穴」
JD-18	楕円形	211	130	118	分銅形	156	74	3	100°	WI群土器 3	所謂「陥し穴」
JD-19	楕円形	244	139	113	分銅形	178	83	3	20°	WI群土器 2	所謂「陥し穴」
JD-20	楕円形	224	150	124	分銅形	167	80	2	100°		所謂「陥し穴」
JD-21	楕円形	236	113	99	分銅形	199	80	2	60°		所謂「陥し穴」
JD-22	楕円形	245	100	86	楕円形	210	63	2	40°		所謂「陥し穴」
JD-23	楕円形	231	140	107	分銅形	168	93	3	100°	VII群土器1・削器1	所謂「陥し穴」
JD-24	楕円形	222	148	110	長方形	171	51	3	60°	VII群土器 1	所謂「陥し穴」
JD-25	楕円形	234	121	109	分銅形	210	86	3	60°		所謂「陥し穴」
JD-26	楕円形	290	166	106	分銅形	236	105	2	50°	VII群土器 2	所謂「陥し穴」
JD-27	楕円形	250	150	121	分銅形	196	103	3	50°		所謂「陥し穴」
JD-28	楕円形	267	129	128	楕円形	210	71	2	80°		所謂「陥し穴」
JD-29	楕円形	269	131	89	楕円形	215	79	2	70°	₩群土器1	所謂「陥し穴」
JD-30	楕円形	222	139	98	長方形	156	65	2	80°	WI群土器 2・剥片 4	所謂「陥し穴」
JD-31	楕円形	202	112	165	楕円形	167	47	2	100°		所謂「陥し穴」
JD-32	楕円形	196	100	98	楕円形	143	46	2	80°		所謂「陥し穴」
JD-33	不整形	=77	=	-			-		777	石匙1	落ち込みか
JD-34	楕円形	295	205	143	長方形	221	82	3	80°	剥片 1	所謂「陥し穴」
JD-35	楕円形	293	155	109	分銅形	219	84	0	30°		所謂「陥し穴」
JD-36	円形	51	-	40			-	-	-		土坑
JD-37	楕円形	253	161	118	分銅形	173	87	2	70°	Ⅷ群土器 1	所謂「陥し穴」
JD-38	円形	54	-	36			-	-	-	剥片 4	土坑
JD-39	楕円形	194	131	90	楕円形	146	73	3	30°		所謂「陥し穴」
JD-40	楕円形	241	142	99	分銅形	191	83	2	60°	VII群上器 2	所謂「陥し穴」
JD-41	円形	60	-	36	-			-		剥片 1	土坑

註)角度とは、「長軸と等高線」の交わる角度を示す。測定方法は、原則として等高線軸と標高の高い側の長軸方位が 交差する角度を「逆時計廻り」で計測した。

Tab. 7 頭無遺跡縄文土坑の土器集計表

遺構名	VB	VIII	vier	IX	X	合計
JD-2号土坑		46		1		47
JD-4号土坑		6				6
JD-5号土坑		1				1
JD-8号土坑		1				1
JD-9号土坑		48				48
JD-10号土坑					1	1
JD-11号土坑		7				7
JD-12号土坑		1				1
JD-13号土坑		7				7
JD-14号土坑		1				1
JD-16号土坑	2	3				5
JD-18号土坑		3				3
JD-19号土坑		2				2
JD-23号土坑		1				1
JD-24号土坑		1				1
JD-26号土坑		2				2
JD-29号土坑			1			1
JD-30号土坑		2				2
JD-37号土坑		1				1
JD-40号土坑		2				2
合計	2	135	1	1	1	140

Tab. 9 頭無遺跡包含層の縄文土器集計表

数量分類	包含層の点数	捌合
Ⅱ群 撚糸文	6	0.1
Ⅲ群 無文	5	0. 1
V群 沈線文	1, 144	18. 0
VI群 押型文	149	2. 3
VII群 条痕文	1,244	19. 6
VIII群 繊維縄文	208	3. 3
IX群 竹管文	24	0.4
X群 縄文中期	145	2. 3
XI群縄文後期	74	1.2
不明	3, 349	52.8
合計	6, 348	100

Tab. 8 頭無遺跡縄文土坑の石器集計表

器種	削器	石匙	器器	三角錐形石器	刺片	合計
JD-2号土坑	1				1	2
JD-3号土坑	2					2
JD-7号土坑					1	1
JD-9号土坑			1		3	4
JD-13号土坑					1	1
JD-16号土坑				1	2	3
JD-17号土坑	1					1
JD-23号土坑	1					1
JD-30号土坑					4	4
JD-33号土坑		1				1
JD-34号土坑					1	1
JD-38号土坑					4	4
JD-41号土坑					1	1
合計	5	1	- 1	1	18	26

Tab. 10 頭無遺跡包含層の縄文石器集計表

看材	A	В	C	D	Е	F	G	H	1	J	K	L	М	N	0	P	Q	R	S	T	
器標	黒窟石	チャート	メノウ	建何頁岩	忠色珠質賞岩	思 色 頁 岩	費量	黑色安山岩	灰色安山岩	变复安山岩	細粒安山岩	ホルンフェルス	以緣岩	石英因綠岩	ひん岩	容納斯贝母	点紋綠色片岩	粗粒突山岩	抄岩	その他	e M
石鏃	28	52		7	1	20	2	15												2	12
削器	4	12		1		87		5			1	1									11
打製石斧						67		1	4		3	2	1				1				79
磨製石斧						2															
礫器						12	1														13
凹石																		4			
磨石														2	1	1		3			,
敲石																		12			1:
スタンプ 形石器						2					1	1		1	2	1			1		
特殊 磨石														9	2	2		10	1		2
三角錐 形石器						5															
石皿																		3			,
石核		4				9		1											1		1
剥片	29	624	1	5		2, 189	60	45	26	4	10	19				1		45	11	20	3, 08
砥石																			1		
合計	61	692	i	13	1	2, 393	63	67	30	4	15	23	1	12	5	ō	1	77	15	22	3, 50

註)その他の石材の略称については下記のとおりである。 石鏃…珪変1・変凝1。剥片…点頁4・砂頁2・珪凝2・安山1・変玄1・石英1・雲石3・珪変5・雲片1。 珪変…珪質変質岩 変凝…変質凝灰岩 点頁…点紋頁岩 砂頁…砂質頁岩 珪凝…珪質凝灰岩 安山…安山岩 変玄…変質玄武岩 石英…石英 雲石…雲母石墨片岩

Tab. 11 頭無遺跡遺物観察表

番号	亚级番号	器形	大きさ(cm) 口径・器高	成 · 整 形 ①胎士②焼成③色調の残存	方 法 口禄·嗣部	旌部	備考
			14 (H. * 66 m)		横撫で。指	US 60	
1	H-1 • 155	杯	12.4 • 3.8	①細粒.軽石②良好③橙④完形	押え。篦削り	篦削り。	9世紀前半。
2	H-1 • 114	杯	12.7 • 3.6	①中粒. 軽石②良好③橙④完形	横撫で。指 押え。篦削 り。	篦削り。	9世紀前半。
3	H-1 • 284	須恵台付皿	13.7 • 3.0	①細粒, 輝石②良好③灰黄白 ④完形	轆轤。	右回転条 切り。	9世紀中頃。
4	H-1 • 95	領惠杯	13, 3 · 3, 5	①中粒②良好③灰白④2/3	轆轤。	右回転糸 切り再調 整。	吸炭。9世紀中頃。
5	H-1 • 11	小形甕	12.4 • (10.8)	①中粒.輝石②良好③橙④1/3	横撫で。指 撫で。篦削 り		『コ』の字。 9 世紀中頃。
6	Н−1 • 90	長胴甕	20.0 • (8.9)	①中粒②良好③黑~赤褐④口 縁1/4	横撫で。縦 位篦削り。		8世紀的様相。
7	Н-1 • 32	號	21,5 • (8,2)	①中粒②良好③橙④口縁部	横撫で。横 位篦削り。		スス付着。9世紀前半。
8	H-1 • 5	甕	19.0 • (29.0)	①細粒②良好③橙④口縁 1/2・胴1/3	横撫で。篦 削り。		『コ』の字。 9 世紀中頃。
9	H-2 · 6	小形甕	- · (6.3)	①細粒. 輝石②良好③にぶい 赤褐④胴1/2	指撫で。接 合痕顕著。		胴部中~下にス ス付着。
10	H-2 · 1	台付甕	- · (7.9)	①細粒. 輝石②良好③橙④台部1/2弱	篦削り撫で 消し。		台端部折り返し。
11	H-2 · 31	台付甕	- · (5. 2)	①細粒, 輝石②良好③赤褐④台部1/3	内面撫で。		
12	I-1 • 64	須恵長頸壺	- · (14, 2)	①細粒②良好③青灰①胴部 1/2	轆轤。		頸部粘土板接合
13	I-1 · 237	杯	11, 1 • 3, 0	①細粒、輝石②良好③にぶい 褐④1/3	横撫で。指 押え。	篦削り。	
14	I-1 • 45	杯	10.0 • (3.8)	①粗粒②良好③赤褐①1/4	横撫で。	館削り。	
15	I-1 · 262	杯	11.0 · 2.8	①粗粒. 石英②良好③にぶい 掲①1/4	横撫で	篦削り。	
16	I-1 • 225	杯	11.2 • (3.0)	①中粒②良好③橙④1/4	横撫で。指押え。	篦削り。	
17	I-1 • 51	杯	12.0 • (3.2)	①細粒. 輝石②良好③橙④1/2	横撫で。指 押え。	篦削り。	9世紀中~後半 的様相
18	I-1 · 279	杯	11.0 • 3.3	①中粒. 輝石②良好③明赤褐④1/2	横撫で。指 押え。	篦削り。	比率として第2 ~第3
19	I−1 • 46	杯	11,6 • (2,7)	①中粒. 黒雲母②良好③褐④ 1/7	横撫で。指 押え。	篦削り。	四半世紀が多い。
20	I-1 • 17	杯	12.3 • (3.0)	①中粒. 輝石②良好③明赤褐④1/2	横撫で。指 押え。	篦削り。	
21	I-1 • 28	杯	11.6 • 3	①細粒. 輝石②良好③にぶい 赤掲①2/3	横撫で。指 押え。	篦削り。	
22	I-1 • 16	杯	11.8 (2.8)	①細粒②良好③橙④1/4	横撫で。指 押え。	篦削り。	
23	I-1 · 3	杯	11,5 * (3,3)	①細粒②良好③明赤褐④1/4	横撫で。指押え。	篦削り。	
24	I-1 • 243	杯	11.3 • (2.9)	①中粒. 輝石②良好③橙④1/4	横撫で。指 押え。	篦削り。	
25	I-1 • 9	杯	12.0 • 2.8	①細粒, 黒雲母②良好③褐④ 1/4	横撫で	篦削り。	
26	I-1 • 22	杯	11.4 * 3.1	①細粒②良好③橙④1/4強	横撫で。指押え。	篦削り。	
27	I-1 • 77	杯	11.7 • (2.8)	①細枕②良好③明赤褐④3/4 弱	横撫で。指 押え。	篦削り。	
28	I-1 • 42	杯	12.5 • (3,0)	①細粒.輝石②極良③明赤褐 ①体3/4	横撫で。指 押え。	篦削り。	
29	I-1 • 82	杯	12.4 • (3.1)	①細粒. 輝石②良好③にぶい 赤褐①体1/3	横撫で。指押え。	篦削り。	

番号	登級番号	器形	大きさ(cm)	成・整形	方法		伽考
銀雪	TENK III T	SSTS	口径·器高	①胎士②焼成③色調①残存	口禄·鹏部	底部	100.75
30	I-1 • 41	杯	12.2 • (2.9)	①細粒②良好③橙①ほぼ完形	横撫で。指 押え。	篦削り。	
31	I-1 • 8	杯	11.8 • (2.8)	①細粒②良好③暗橙④体2/5	横撫で』指 押え。	篦削り。	
32	I-1 • 6	杯	12.8 • (3.0)	①細粒. 輝石②良好③明赤褐 ④1/3	横撫で。指押え。	篦削り。	
33	I-1 • 40	杯	11.8 • (3.2)	①細粒.輝石②良好③明赤褐 ④体3/4	横撫で。指 押え。		
34	I-1 • 49	杯	12.8 • (2.7)	①細粒②良好③橙④体1/4	横撫で。指 押え。	箆削り。	N .
35	I-1 · 38	杯	13.1 • 2.9	①細粒. 黒雲母②良好③褐④ 体1/4	横撫で。指 押え。	篦削り。	
36	I-1 • 256	杯	13.7 • (2.8)	①細粒②良好③暗橙④体1/4	横撫で。指 押え。	箆削り。	黒色物質多量に 付着。
37	I−1 • 90	杯	12.8 • (3.2)	①細粒②良好③橙④3/4	横撫で。指 押え。		
38	I-1 • 35	杯	13.0 • (3.3)	①中粒. 黒雲母②良好③褐④ 1/4	横撫で。指 押え。	篦削り』	
39	I-1 • 10	杯	12.2 • (2.7)	①細粒.輝石②良好③明赤褐④1/4	横撫で。指 押え。	篦削り。	
40	I-1 • 159	杯	12.9 • (2.9)	①中粒. 黑雲母②良好③褐④1/4	横撫で。指 押え。	篦削り。	
41	I-1 • 110	杯	13.2 • (2.7)	①細粒. 輝石②良好③橙④1/4	横撫で。指押え。	篦削り。	
42	I-1 · 14	杯	12.4 • (2.9)	①細粒. 輝石②良好③橙④1/2	横撫で。指押え。	篦削り。	
43	I-1 • 33	須恵杯	11.4 • (4.2)	①中粒. 輝石②良好③淡黄① 1/3	横撫で。篦 削り。	篦削り。	
44	E-1 · 2	杯	11.7 • 3.3	①中粒②良好③橙④4/5	横撫で。指押え。	篦削り。	

註) ①胎士は細粒 (0.9mm以下) 、中粒 (1.0mm~1.9mm) 、粗粒 (2.0mm以上) とし、特徴的な鉱物が人る場合に鉱物名を記載した。 ②焼成は極良、良好、不良の3段階評価。 ③色調は土器外面を観察し、色名は新版標準土色帖 (小山・竹原1976) によった。 ④大きさは、現存値を () で示した。

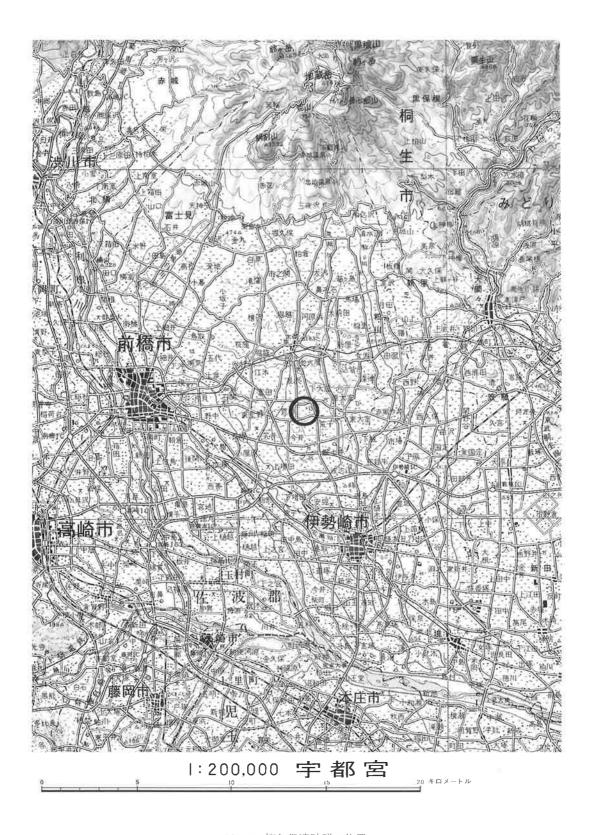


Fig. 1 柳久保遺跡群の位置

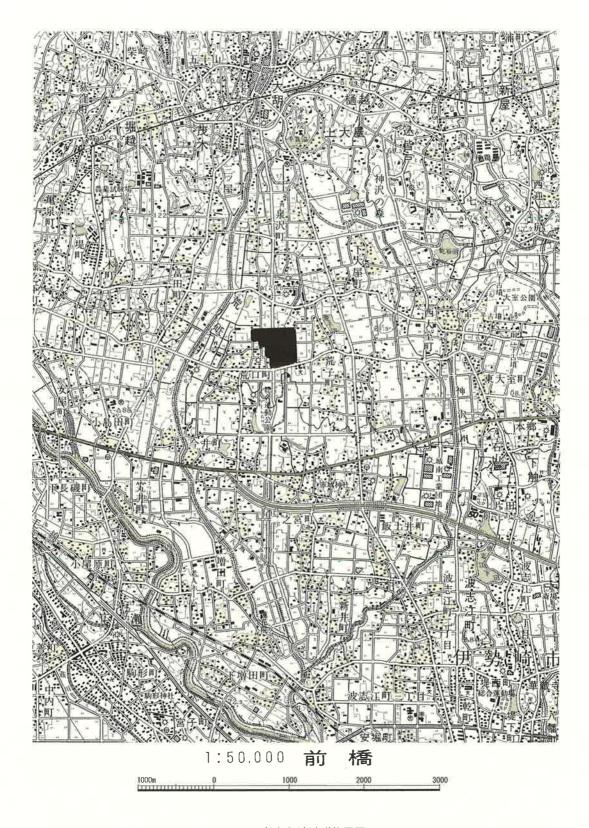
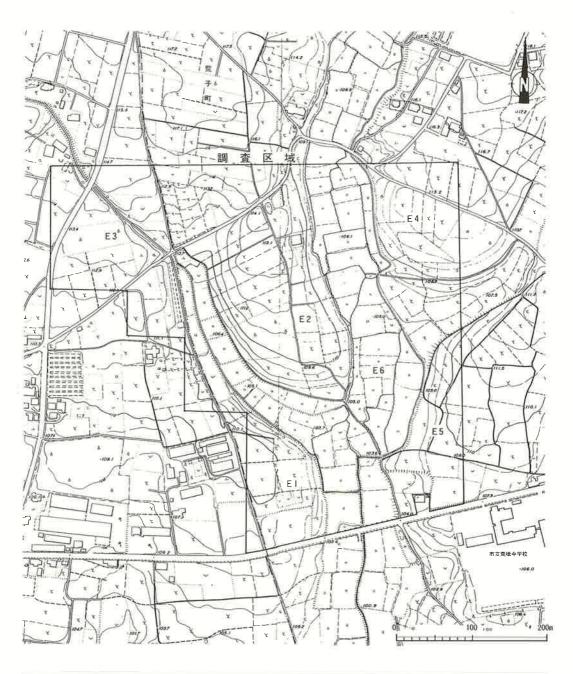


Fig. 2 柳久保遺跡群位置図



遺跡群名	遺 跡 名 (ふりがな)	略称	調査年度	掲 載 報 告 書 名
	下鶴谷遺跡 (しもつるがやいせき)	E 1	昭和59~61年度	柳久保遺跡群 Ι・IV・V
柳久保遺跡群	柳久保遺跡 (やなぎくぼいせき)	E 2	昭和59~61年度	柳久保遺跡群 Ι・VII・VIII
例 久 保 退 跡 矸 (やなぎくぼ	諏 訪 遺 跡 (すわいせき)	E 3	昭和60年度	柳久保遺跡群 III
いせきぐん)	中鶴谷遺跡(なかつるがやいせき)	E 4	昭和61・62年度	柳久保遺跡群 VI
(14 5 4 V)	頭 無 遺 跡 (かしらなしいせき)	E 5	昭和62年度	柳久保遺跡群 🎹
	柳久保水田址(やなぎくぼすいでんし)	E 6	昭和59~61年度	柳久保遺跡群 Ι・III・IV・VII

Fig. 3 柳久保遺跡群周辺図

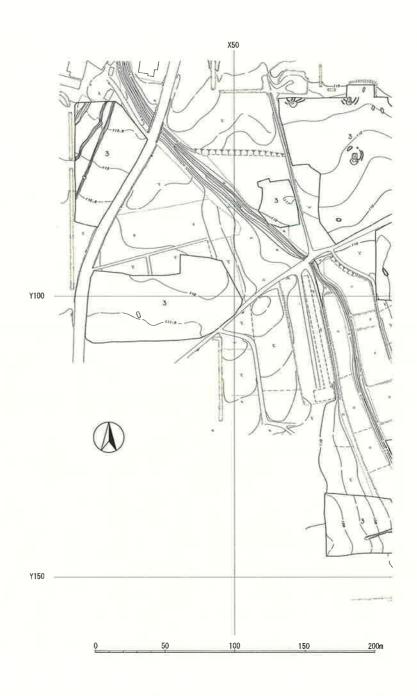


Fig. 4 柳久保遺跡群古墳~平安時代全体図(1)

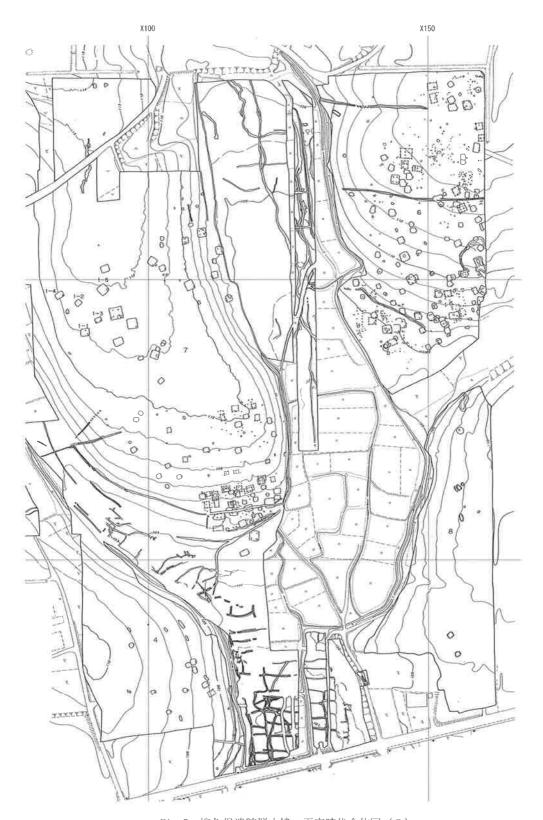
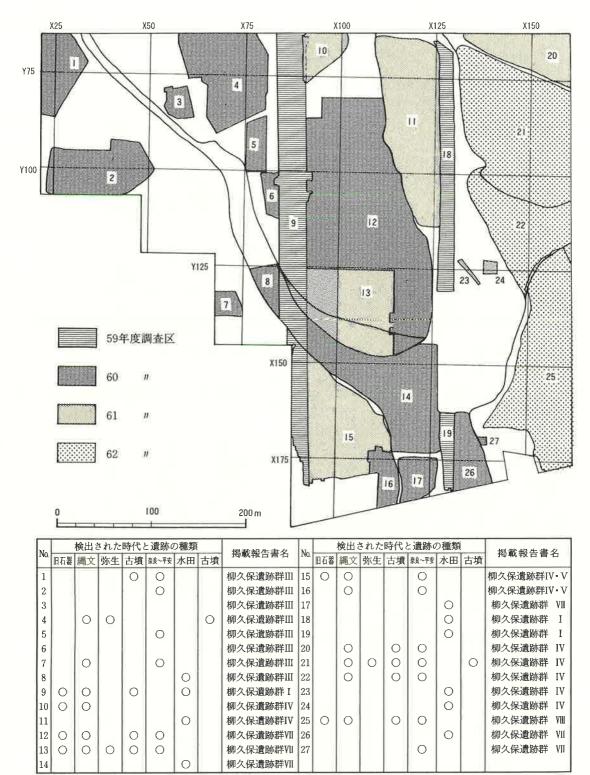


Fig. 5 柳久保遺跡群古墳~平安時代全体図(2)



注)柳久保遺跡群IIは試掘報告書である。

Fig. 6 柳久保遺跡群調査経過図

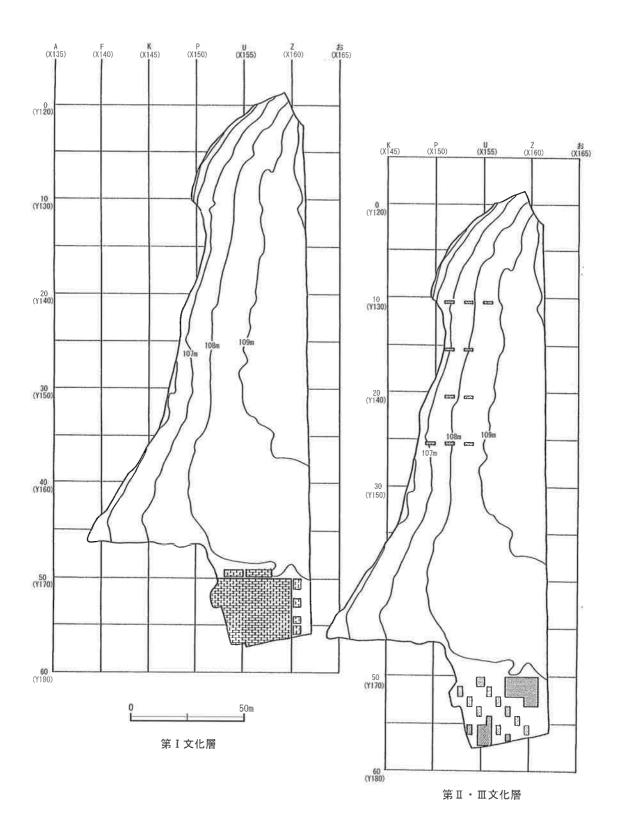


Fig. 7 頭無遺跡旧石器時代の調査区域図

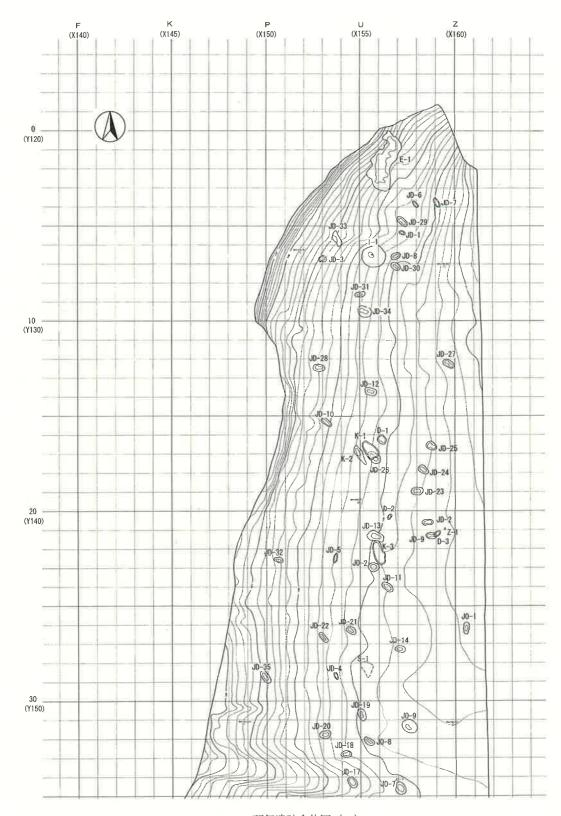
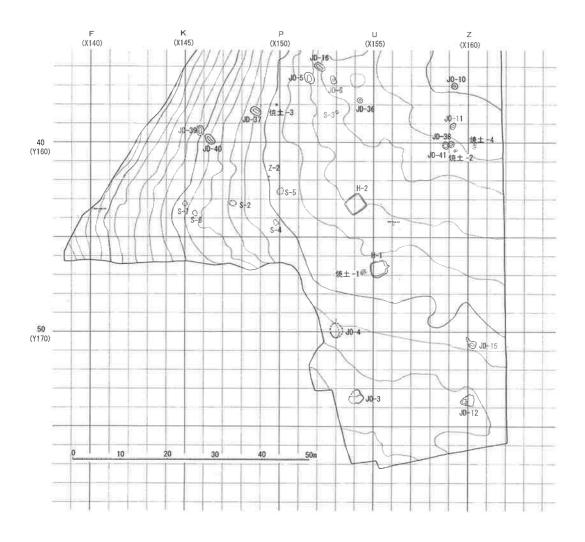


Fig. 8 頭無遺跡全体図(1)



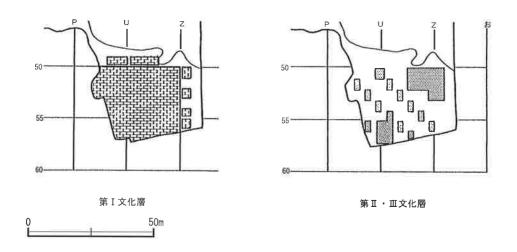


Fig. 9 頭無遺跡全体図(2)

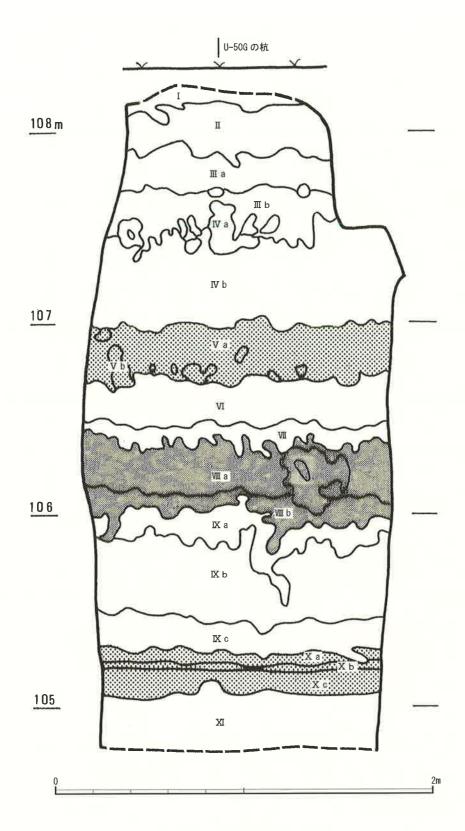


Fig. 10 頭無遺跡標準土層図

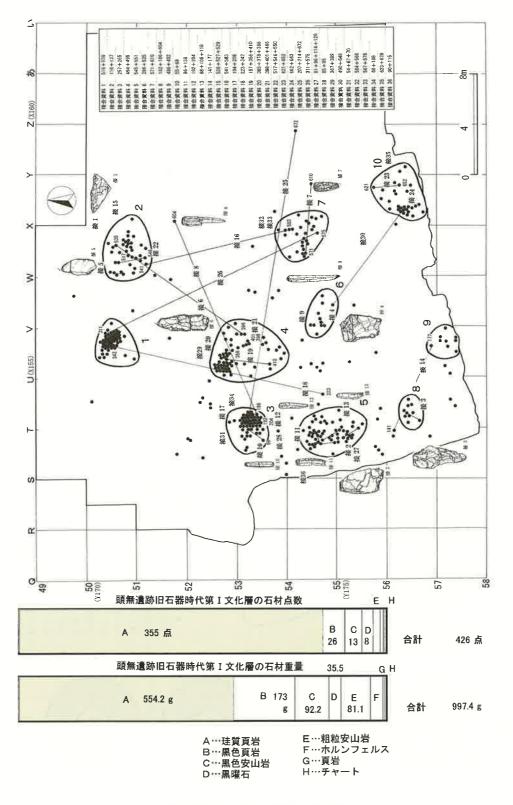


Fig. 11 頭無遺跡旧石器第 I 文化層の遺物分布 (1)

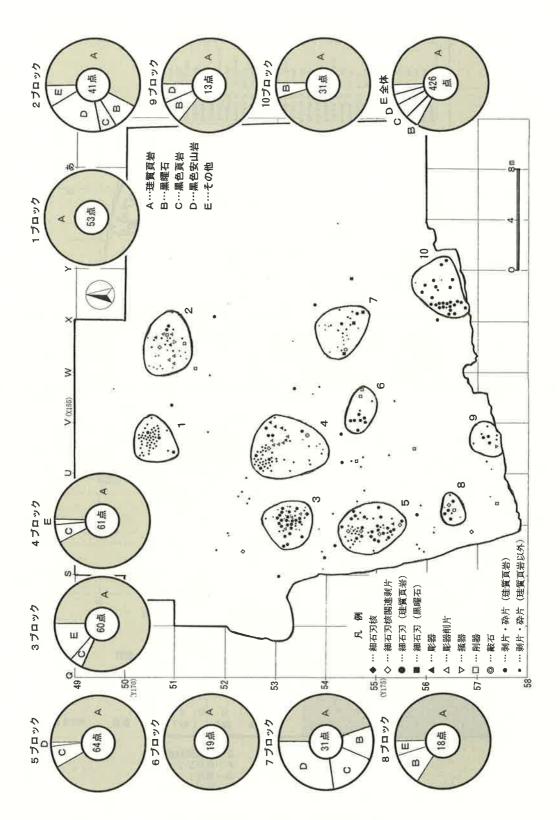


Fig. 12 頭無遺跡旧石器第 I 文化層の遺物分布 (2)

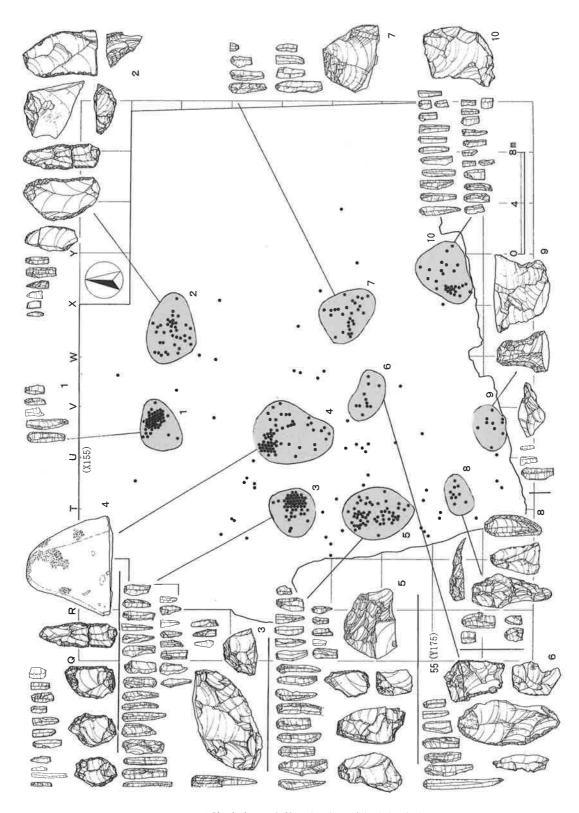


Fig. 13 頭無遺跡旧石器第 I 文化層の遺物分布 (3)

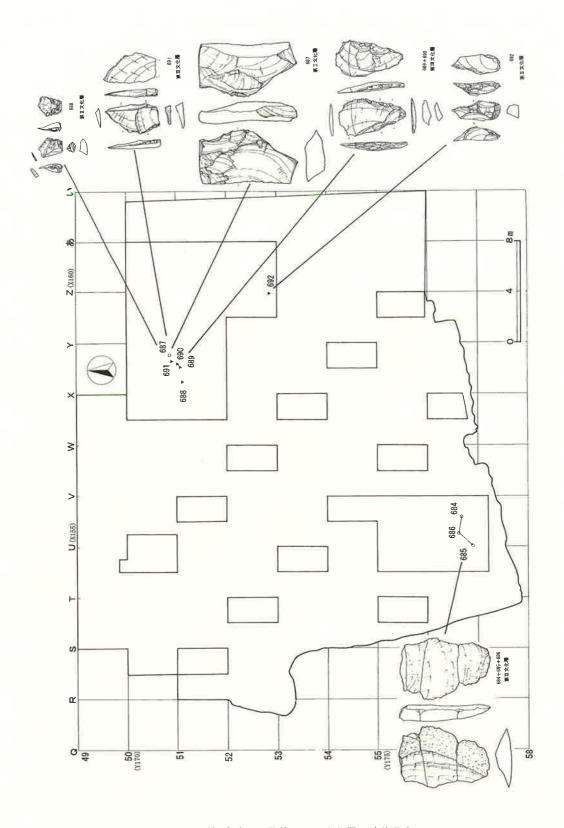


Fig. 14 頭無遺跡旧石器第Ⅱ・Ⅲ文化層の遺物分布

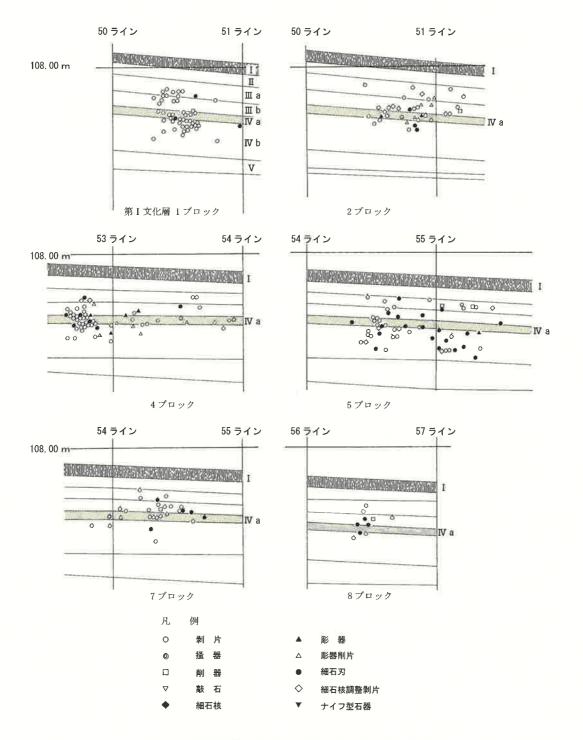
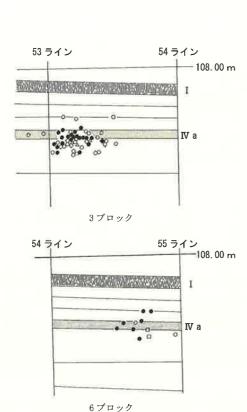
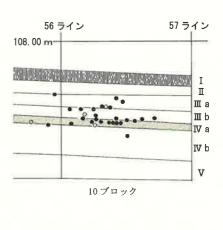


Fig. 15 頭無遺跡旧石器第 I 文化層の遺物垂直分布(1)





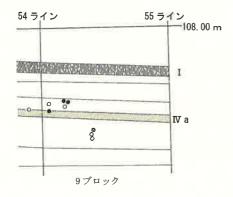


Fig. 16 頭無遺跡旧石器第 I 文化層の遺物垂直分布 (2)

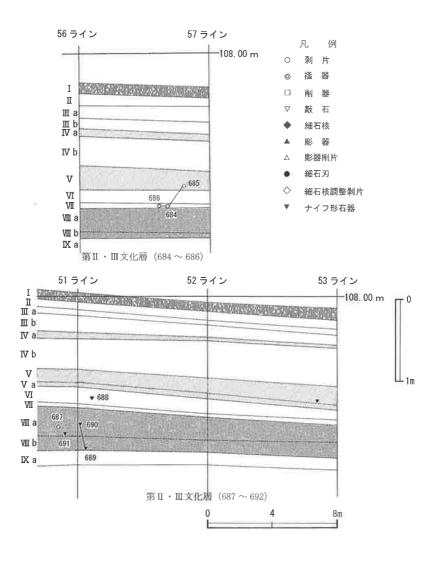
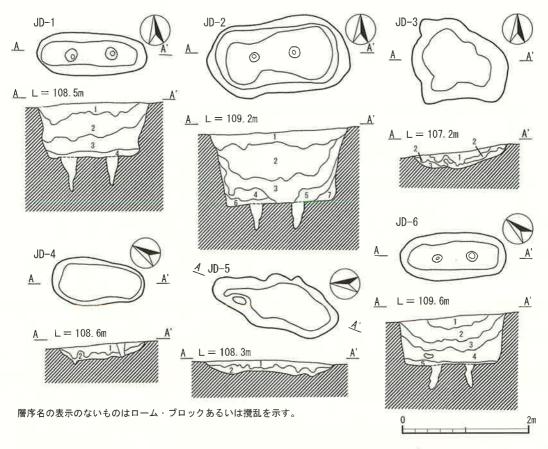


Fig. 17 頭無遺跡旧石器第Ⅱ・Ⅲ文化層の遺物垂直分布



- 1層 褐色細砂層。締まりは良い。粘性やや有り、軽石 35%・スコリア・ローム粒子5%含む。
- 2層 黄褐色細砂層。締まりは良い。粘性はやや有り、 軽石 22%・ローム粒子を 5%程度含む。
- 3層 黄褐色細砂層。締まりは良い。粘性はやや有り、 軽石10%・ローム粒子を15%程度含む。
- 4層 褐色微砂層。締まり弱い。粘性は強い。 ローム粒子を5%・炭をわずかに含む。

2 号縄文土坑層序説明

- 1層 褐色細砂層。締まり良い。粘性やや有り、 軽石 15%・スコリアを少々含む。
- 2層 褐色細砂層。締まり良い。粘性やや有り、軽石12%、スコリア・炭化物・ローム粒子わずかに含む。
- 3層 褐色細砂層。締まり良い。粘性有り、 軽石3%・ローム粒子7%・スコリアを少々含む。
- 4 層 黄褐色細砂層。締まりやや弱い。粘性有り、軽石 3%・ ローム粒子 30%・ロームブロック 10%を含む。
- 5層 黄褐色細砂層。締まり良い。ロームが50%を占める。
- 6層 褐色微砂層。締まり弱い。ローム粒子10%含む。
- 7層 褐色微砂層。締まり弱い。ローム粒子7%含む。

3号縄文土坑層序説明

- 1層 黄褐色細砂層。締まり良い。ややブロックを含む。
- 2層 褐色細砂層。締まり良い。ややブロックを含む。
- 3層 明黄褐色細砂層。締まり良い。ややブロック含む。

4 号縄文土坑層序説明

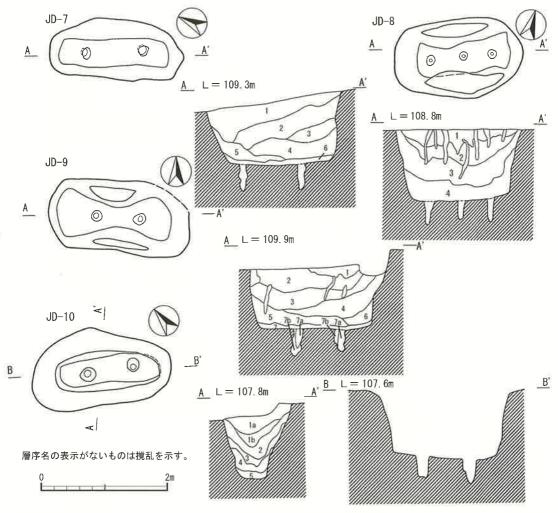
- 1層 黄褐色細砂層。ローム土主体、黒色土ブロック混入。
- 2層 明黄褐色細砂層。ローム土主体、ブロック混入。

5 号縄文土坑層序説明

- 1層 明黄褐色細砂層。ローム土主体、ブロック混入。
- 2層 黄褐色細砂層。ローム土主体、締まり有り。

- 1層 暗褐色細砂層。締まりは良い。粘性やや有る。軽石 20%・スコリア・炭化物・ロームを7%含む。
- 2層 褐色粗砂層。締まり良い。粘性やや有る。軽石 18%。ローム粒子15%・スコリアをわずかに含む。
- 3 層 褐色細砂層。粘性ある。軽石3%・ローム粒子を 40%・炭をわずかに含む。
- 4層 褐色細砂層。締まりは良い。粘性ある。ローム粒子 10%・スコリア・軽石をわずかに含む。
- 5層 黄褐色微砂層。締まりは良い。粘性強くローム粒子 を50%以上含む。

Fig. 18 頭無遺跡 J D - 1 ~ 6 号縄文土坑



- 1層 褐色細砂層。締まりは良い。粘性やや有る。 軽石 12%程度含む。スコリアわずかに含む。
- 2層 褐色細砂層。軽石 5%・ロームブロック 3%・ ローム粒子 10%・スコリアわずかに含む。
- 3 層 褐色細砂層。軽石3%・ロームブロック2%・ 炭化物をわずかに含む。締まり、粘性ともに良い。
- 4 層 黄褐色細砂層。ロームブロック 5%・軽石 3%・ ローム粒子 20%含む。締まり良い。粘性有る。
- 5層 黄褐色細砂層。締まりは良い。粘性はやや有る。 ロームブロック30%程度含む。
- 6層 褐色細砂層。ロームブロック 5%含む。

8 号縄文土坑層序説明

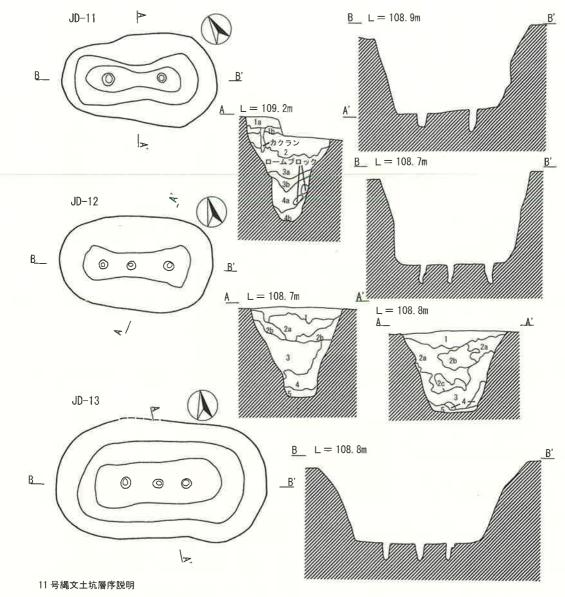
- 1層 黄褐色細砂層。硬く締まり、やや粘性を有する。
- 2層 黄褐色細砂層。黒色土をブロック状に含む。
- 3層 黄褐色細砂層。硬く締まり粘性有り。軽石7%含む。
- 4層 明黄褐色細砂層。やや締まり、粘性を有する。

9 号縄文土坑層序説明

- 1層 黄褐色細砂層。As-SP20%・ローム粒子 20%含む。
- 2層 褐色細砂層。As-SP15%・ローム粒子30%含む。
- 3層 褐色細砂層。As-SP13%・スコリアわずかに含む。
- 4層 黄褐色細砂層。軽石10%・炭2%含む。締まり良い。
- 5層 黄褐色微砂層。軽石7%・ローム粒子3%含む。
- 6層 黄褐色細砂層。軽石10%・スコリアわずかに含む。
- 7層 明黄褐色微砂層。粘土質な砂がまじり土器 1 片含む。
- 7a層 明黄褐色微砂層。7層に似た層である。締まりない。
- 7b層 明黄褐色微砂層。7層に似た層である。締まり有り。

- 1a層 明黄褐色微砂層。均一な層。炭化物片あり。
- 1b 層 黄褐色細砂層~微砂層。炭化物片あり。
- 2層 黄褐色細砂層。軽石15%・ロームと黒色土の混合層。
- 3層 明褐色細砂層。As-BP25%含む。締まり良い。
- 4層 黄褐色細砂層。ロームと黒色土の混合層。
- 5層 黄褐色細砂層。締まりあり。軽石7%含む。

Fig. 19 頭無遺跡 J D - 7 ~ 1 0 号縄文土坑



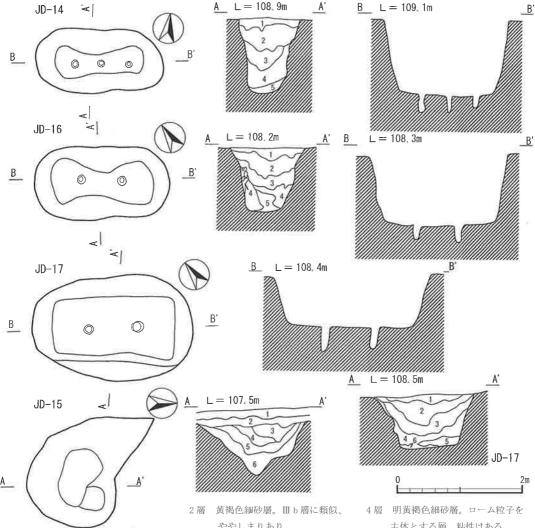
- 1a 層 明黄褐色細砂層。Ⅲ a 層に類似。
- 1b 層 黄褐色細砂層。Ⅲ b 層に類似。
- 2層 暗褐色細砂層。炭化物10%含む。
- 3a層 明黄褐色細砂層。しまりあり。
- 3b層 明黄褐色細砂層。しまりあり。
- 4a層 黄橙色細砂層。しまりあり。
- 4b層 黄褐色細砂層~微砂層。

- 明黄褐色細砂層。ソフトローム 土。しまり弱い。炭化物粒入る。
- 2a層 褐色細砂〜粗砂層。ローム土 65%・黒色土 35%含む。

- 硬くしまっている。
- 炭化物粒入る。
- 2b層 黄褐色細砂層。ローム土70% * 2a層 黄褐色細砂層。しまりあり。
 - 黒色土30%、しまり良い。
- 3層 黄褐色細砂層。ローム土80%・ 黒色土 20%、しまり良い。
- 4層 黄褐色細砂〜粗砂層。ローム土 主体、軽石含有多い。
- 5層 明黄褐色微砂~細砂層。

- 1層 明黄褐色細砂層。やや締りあり。
- 2b層 暗褐色細砂層。黒色土60%・ロー ム土 40%占める層。
- 2c層 褐色細砂層。黒色土 55%・ロー ム土45%・しまりあり。
- 3層 黄橙褐色微砂層。ローム土主体。
- 4層 明黄褐色細砂層。しまり弱い。
- ローム土と暗色帯土のしめる層。 5層 明黄褐色細砂~微砂層。

Fig. 20 頭無遺跡 J D - 11~13号縄文土坑



- 1層 黄褐色細砂層。ローム土40%・ 黒色土20%含む。締まり良い。
- 2層 褐色細砂層。As-SP30%ローム粒 子 30% As-BP3%含む。
- 3層 褐色細砂層。軽石 As-SP25% As-BP わずかに含む。
- 4層 明黄褐色細砂層。As-BP3% As-SP10%ローム 5%含む。
- 5層 明黄褐色微砂層。As-SPわずか に含む。炭化物若干含む。

15 号縄文土坑層序説明

1層 明黄褐色細砂層。Ⅲ a層に類似。 しまり弱い。

- ややしまりあり。
- 3層 褐色細砂層。しまり良い。粘性 ややあり、スコリアを少し含む。
- 4層 褐色細砂層。しまり良い、粘性 ややあり。
- 5層 黄褐色細砂層。しまりよい、ロー ム粒子 40%、炭化物少し含む。
- 6層 暗褐色微砂層。しまり良い、ス コリアを含む黒色土を中心の層。

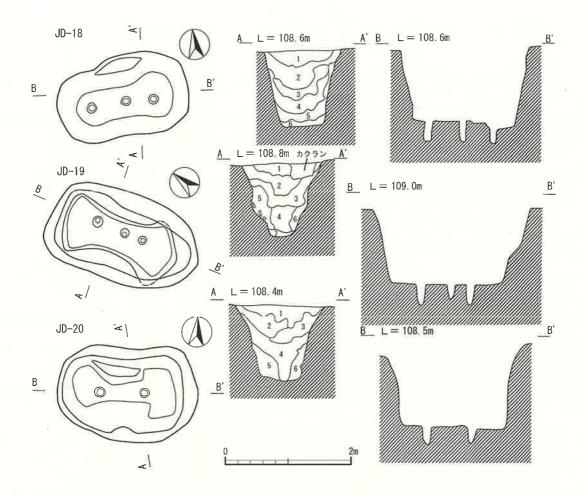
16 号縄文土坑層序説明

- 1層 褐色細砂層。軽石10%・ローム 粒子5%含む。しまり有り。
- スコリアをわずかに含む。
- 3層 褐色細砂層。軽石6%・ローム 粒子 10%含む。しまり良い。

- 主体とする層。粘性はある。
- 5層 黄褐色微砂層。ローム粒子 7% 軽石3%含む。しまり良い。

- 1層 褐色細砂層。しまり良い。粘性 ややある。軽石15%程度含む。
- 2層 暗褐色細砂層。しまり良い。粘 性ややあり、軽石30%程度含む。 スコリアわずかに含む。
- 3層 褐色細砂層。しまり良い。粘性 ややあり、ローム粒子15%・ 軽石 18%程度含む。
- 2層 褐色細砂層。軽石10%・黒色土・ 4層 黄褐色細砂層。しまり良い。粘 性あり、軽石 7%含む。
 - 5層 暗褐色微砂層。しまり良い。軽 石3%含む黒色土層である。

Fig. 21 頭無遺跡 I D - 1 4 ~ 1 7 号縄文土坑



- 1層 褐色細砂層。しまり良い、粘性 はややある。ローム粒子7% 炭化物を3%含む。
- 2層 褐色細砂層。しまり弱く粘性 ややある。ローム 5%、軽石 7% 炭化物わずかに含む。
- 3層 褐色細砂層。しまり弱く、粘性 はある。ローム3%、軽石8%含む。
- 4層 褐色細砂層。しまり弱く、粘性 ある。ローム3%、軽石8%含む。
- 5層 黄褐色微砂層。しまりはややあ り、ロームブロック 3%、 軽石3%含む。
- 6層 褐色微砂層。しまり良い。粘性 はあり、ロームを3%程度含む粘 土を主体とする層。

19 号縄文土坑層序説明

- 1層 黄褐色細砂層。しまり良い。As- 1層 黄褐色細砂層。しまり良い。ロー SP5%、軽石・炭化物、スコリア をわずかに含む。
- 2層 褐色細砂層。しまり良い。炭化 物 3%、軽石 15%、ローム粒子を 3%含む。
- 3層 黄褐色細砂層。しまり良い。軽 石 13%、ローム 20%含む。
- 4層 褐色粗砂層。しまり良い。炭化 物(炭)1個含む。ローム40%、 軽石6%程度含む。
- 5層 明黄褐色糾砂層。しまり良い。 As-BPのブロックを3ヶ所に含む。 5層 明黄褐色微砂層。しまりは弱い。 ローム80%以上の層。
- 6層 明黄褐色細砂層。しまり良い。軽 6層 明黄褐色微砂層。しまりは弱い。 石 15%含むロームを中心とする層。
- 7層 褐色微砂層。粘土のような層。

- ム粒子 20%、軽石 20%程度含む。
- 2層 褐色細砂層。しまり良い。粘性 ややある。ローム粒子 20%、軽石 32%、スコリア若干含む。
- 3層 褐色細砂層。しまり良い。粘性 ややある。ロームブロック3%、 軽石 10%、スコリア 3%、黒色土 ブロック若干含む。
- 4層 明黄褐色細砂層。しまり良い。粘 性ややある。ローム30%、軽石 5%、黒色土ブロック 5%含む。
- ローム粒子 20%含む。
- ローム粒子 20%含む。

Fig. 22 頭無遺跡 I D - 18~20号縄文土坑

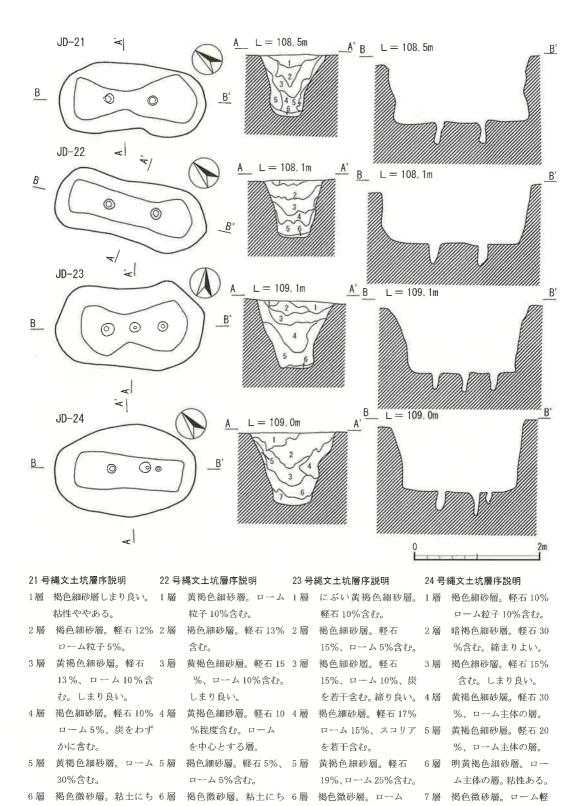


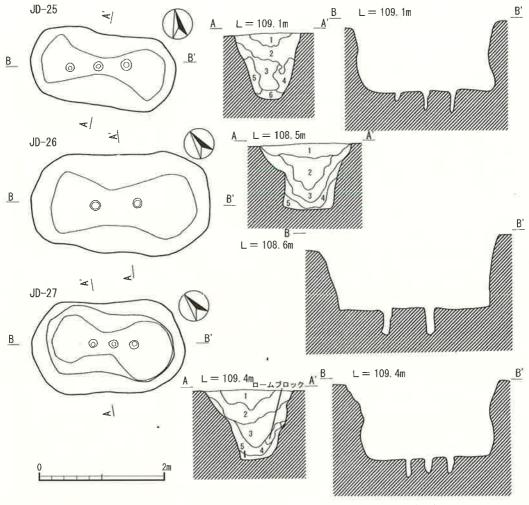
Fig. 23 頭無遺跡 J D - 2 1 ~ 2 4 号縄文土坑

10% 、粘性は強い。

かい層。

かい層。

石混入ない黒色土層。



- ややある。軽石わずかに含む。
- 2層 褐色微砂層。ローム粒子20%、 粘性ややある。
- 3層 黄褐色微砂層。ローム粒子40%、 い。粘性ややある。
- 4層 明黄褐色細砂層。As-SPをブロッ する層。
- 5層 明黄褐色細砂層。ロームを中心 はあるが As-SP は混入しない。
- 6層 褐色微砂層。黒色土を中心とす る層。粘性強い。

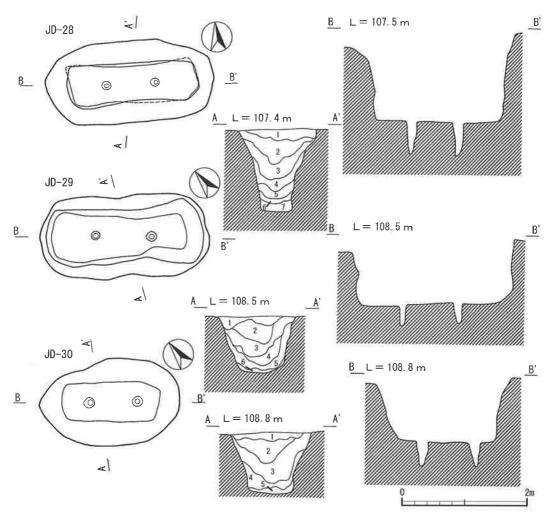
26 号縄文土坑層序説明

- 1層 褐色細砂層。しまり良い。粘性 1層 褐色細砂層。しまり良い。粘性 1層 褐色細砂層。しまり良い。粘性 ややある。ローム10%、スコリ アわずかに3%含む。
 - 軽石3%程度含む。しまり良い。 2層 褐色細砂層。ローム粒子10%、2層 褐色細砂層。しまり良い。粘性 炭化物 3%、軽石 15%、スコリア を 2%含む。
 - 軽石15%程度含む。しまりは良 3層 褐色細砂層。しまりは良い。粘 3層 褐色細砂層。しまり良い。粘 性ややある。ローム粒子20%、 軽石 5%含む。
 - 粘性ややある。ローム粒子 30%、軽石 5%含む。
 - とする層。4層と類似した層で 5層 褐色細砂層。しまり良い。粘 5層 褐色微砂層。しまり良い。粘性 性ややあり、ローム5%程度含 み軽石 (φ 2 ∼ 3 ㎜大淡黄色) を若干含む。

27 号縄文土坑屬序説明

- ややある。軽石10%、ローム粒 子を5% 含む。
- ややある。軽石15%、ローム粒 子を 20%含む。
- 性ややある。軽石18%、ローム 粒子 10%、炭化物わずかに含む。
- クで3%含む。ロームを主体と 4層 黄褐色細砂層。しまりは良い。 4層 黄褐色細砂層。かたくしまって いる。粘性あり。ローム5%、 軽石 12%含む。
 - 強い。軽石3%、黒色土を3%含 也。

Fig. 24 頭無遺跡 J D - 25~27号縄文土坑



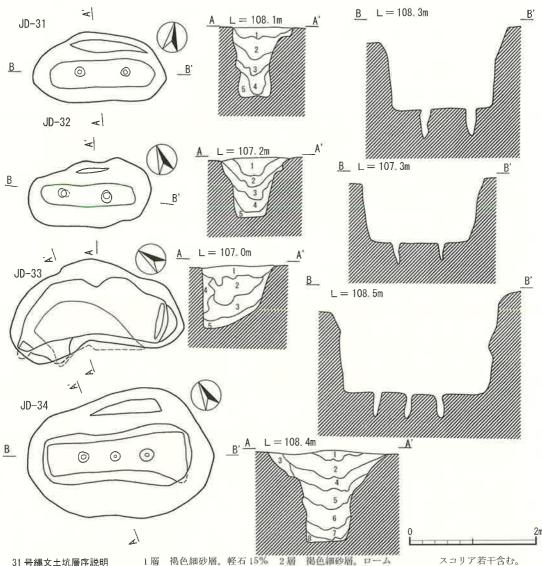
- 1層 褐色細砂層。しまり良い、粘性 1層 黄褐色細砂層。軽石18%、ロー 1層 黄褐色細砂層。軽石8%、ロー ややあり、軽石4%、炭化物・ スコリアをわずかに含む。
- ム10%、軽石25%、スコリア2%、 炭化物若干含む。
- 3層 褐色細砂層。ローム20%、軽石 3層 褐色細砂層。軽石20%、ローム 13%含む。しまり良い。
- 4層 褐色粗砂層。ローム5%、軽石 10%含む。しまり良い。
- 5層 褐色粗砂層。ローム5%、軽石 10%含む。しまり良い。
- 層、As-BP を含む。
- 7層 褐色微砂層。ローム5%含む。 6層 褐色微砂層。炭化物がわずかに含 粘土にちかい層。

29 号縄文土坑層序説明

- ム粒子 5%、炭化物わずかに含む。 粘性ややある。
- 2層 暗褐色細砂層。しまり良い、ロー 2層 褐色細砂層。軽石35%、ローム 2層 褐色細砂層。軽石20%、スコリ 10%、スコリア・炭化物をわずか に含む。しまり良い。
 - 粒子 10%、炭化物 5%含む。粘性 はややある。
 - 4層 黄褐色細砂層。軽石10%、ローム 粒子5%含む。しまり良い、粘性 ややある。
- 6層 明黄褐色細砂層。ローム主体の 5層 褐色微砂層。ローム粒子10%、軽 石、炭化物を若干含む。
 - まれる粘土にちかい層。

- ム5%、炭化物をわずかに含み、 しまりは良い。
- ア 5%、ローム 20%、炭化物を わずかに含む。
- 3層 褐色細砂層。軽石35%、スコリ ア3%、ローム10%、炭化物を わずかに含む。
- 4層 黄褐色細砂層。ロームを40%含 み、中に As-BP のブロックが混 じる。しまり良い。
- 5層 褐色微砂層。しまり、粘性とも に強い。軽石等の混入みられな い粘土にちかい層。

Fig. 25 頭無遺跡 J D - 28~30号縄文土坑



- 1層 黄褐色細砂層。ロー ムを 20%含む。
- 2層 褐色細砂層。軽石 27%含む。炭化物わず かに含む。
- 3層 黄褐色細砂層。 軽石 15%、ローム 20%含む。粘性あり。
- ム 40%、黒色土・ス コリア若干含む。
- 土層。粘性強い。
- 32 号縄文土坑層序説明

- 含む。粘性ややある。
- 2層 黄褐色細砂層。ローム 良い。
- 3層 黄褐色細砂層。軽石10 4層 黄褐色細砂層。ローム %、炭化物僅かに含む。
- 4層 褐色細砂層。ローム粒 5層 褐色細砂層。黒色土を 子 20%含む。
- 4層 黄褐色細砂層。ロー 5層 褐色微砂層。締まりあ る粘土層。

5層 暗褐色微砂層。黒色 1層 褐色細砂層。ローム 10%、軽石10%含む。 締まり良い。

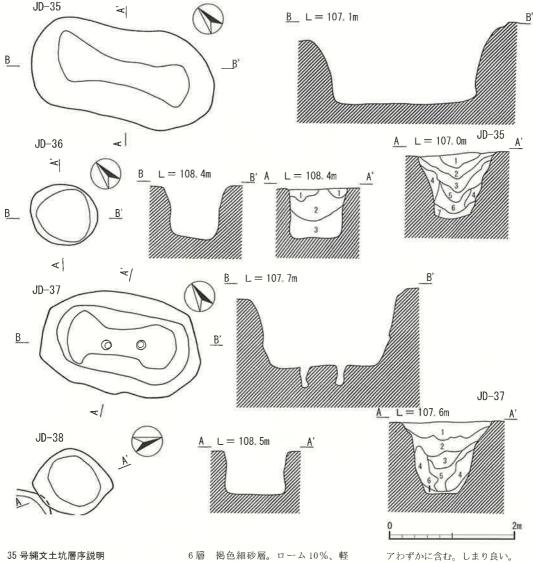
- 20%、軽石 27%、 粘性ややある。
- 粒子30%含む。締まり 3層 暗褐色微砂層。軽石 22%含む。
 - 30%含む。
 - ム 30%含む。

34 号縄文土坑層序説明

- い。粘性あり、スコ リア含む。
- 2層 褐色細砂層。軽石8%、

- 3層 黄褐色細砂層。ロー ムを主体とする層。 締まり良い。
- 4層 褐色細砂層。締まり 良い。粘性ややあり。
- 5層 褐色微砂層。軽石 25%含む。
- 中心とする層。ロー 6層 黄褐色微砂層。ロー ム 20%含む。締まり 良い。
- 1層 褐色細砂層。締まり良 7層 褐色微砂層。黒色土 20%含む。
 - 8層 褐色微砂層。粘土に 近い層。

Fig. 26 頭無遺跡 J D - 3 1 ~ 3 4 号縄文土坑



- 1層 暗褐色細砂層。ローム粒子10 スコリアを若干含む。
- 2層 褐色細砂層。軽石6%、スコリア・ 36号縄文土坑層序説明 粘性ややあり。
- 物・スコリアを若干含む。し まり良い、粘性ややあり。
- 4層 黄褐色細砂層。ローム50%、 黒色土 10%、軽石 5%を含む。
- 5層 褐色細砂層。ローム粒子30%、1層 褐色細砂層。軽石20%、ロー 軽石 12%、炭化物若干含む。

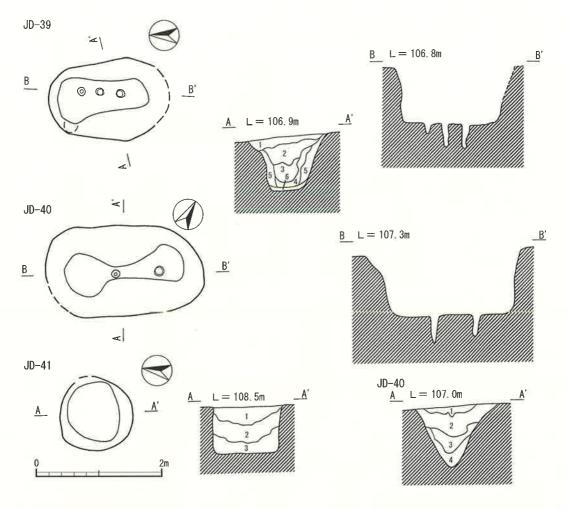
- 石 13%含む。しまり良い。
- %、軽石5%、炭化物2%、7層 褐色微砂層。炭化物2%、軽石 2%、ローム3%含む。

- 炭化物を若干含む。しまり良い、 1層 褐色細砂層。軽石5%、ロー ム7%、スコリア3%含む。
- 3層 褐色細砂層。軽石8%、炭化 2層 暗褐色細砂層。ローム10%、 4層 明褐色微砂層。As-BPを3%含む。 軽石 25%、スコリア 5%含む。
 - 3層 褐色微砂層。ローム粒子15%、 5層 黄褐色微砂層。しまり良い、粘 軽石 20%、炭化物若干含む。

ム粒子 10%、炭化物・スコリ

- 2層 褐色細砂層。軽石8%、ローム 粒子5%、炭化物・スコリア若 干含む。粘性ややあり。
- 3層 褐色細砂層。軽石5%、ロー ム3%、炭化物を若干含む。し まり良い、粘性ややあり。
- しまり良い、粘性ややあり。
- 性ややあり。
- 6層 黄褐色微砂層。軽石を混入しな い粘土にちかい層。

Fig. 27 頭無遺跡 J D - 35~38号縄文土坑



- 1層 黄褐色細砂層。締まりは良い。粘性ややあり。ローム 10%、As-SP を 5%含む。
- 2層 褐色細砂層。締まり良い。粘性ややあり。ローム 5%、 軽石 15%含む。炭化物・スコリアをわずかに含む。
- 3 層 黄褐色細砂層。締まり良い。粘性ややあり、ローム 20%、軽石 13%含む。黒色土(φ5 mm大)のブロッ クをわずかに含む。
- 4 層 黄褐色細砂層。締まり良い。粘性弱く、ロームを 30%含む。軽石(φ2~3 mm大淡茶色)、軽石 (φ2~3 mm淡灰色)を3%含む。
- 5層 明黄褐色微砂層。締まり良い。粘性ややあり、ハードロームを中心とする層。As-Bを5%程度含む。
- 6層 黄褐色微砂層。締まり良い。粘性は強い、軽石(φ 2 ~3 mm大淡黄色)をわずかに含む。粘土に近い層。

40 号縄文土坑層序説明

1層 黄褐色細砂層。締まり良い。粘性ややあり、ハードロー

ム 40%をブロック状に含む。軽石を 3%含む。

- 2層 褐色細砂層。締まり良い、粘性ややあり、軽石 13%、ローム20%、炭化物・スコリアを3%含む。
- 3層 黄褐色微砂層。締まり良い、粘性はややあり、軽石 15%、ローム 30%程度含む。ロームを主体とする層。
- 4層 黄褐色微砂層。締まりが弱い、粘性ややあり、ロームを主体とする層。軽石(φ2~3mm大淡灰色)を5%含む。

- 1層 褐色細砂層。締まり良い、粘性はややあり、ローム 15%、軽石 (ϕ 3 \sim 5 mm大淡黄色)を5%、軽石 (ϕ
- 2 ~ 3 mm大淡灰色)3%含む。
- 2層 褐色細砂層。締まり良い、粘性はややある、軽石 6% を含む。
- 3層 黄褐色微砂層。締まり良い。粘性ややある、ロームを40%含む(中心部に多い)。軽石5%を含む。

Fig. 28 頭無遺跡 J D - 3 9 ~ 4 1 号縄文土坑

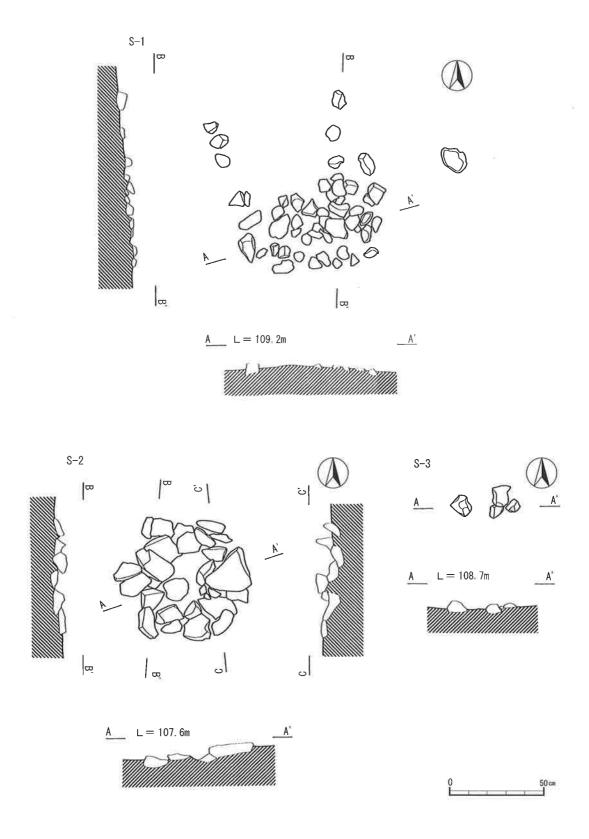


Fig. 29 頭無遺跡 S-1~3号集石

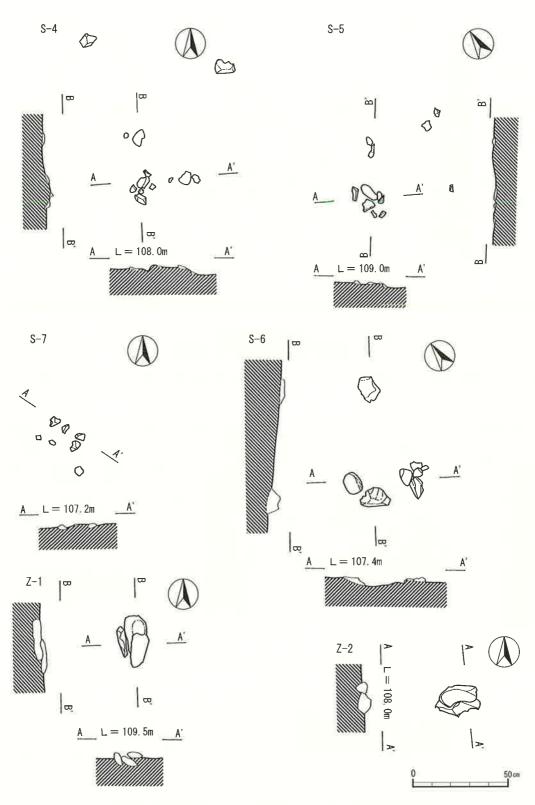
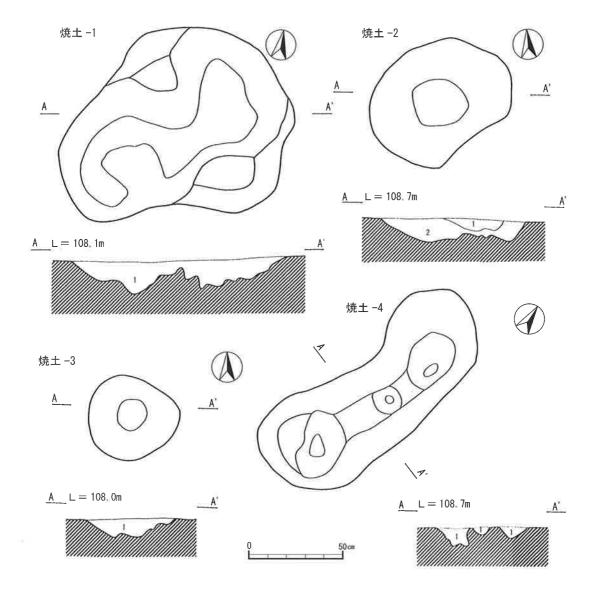


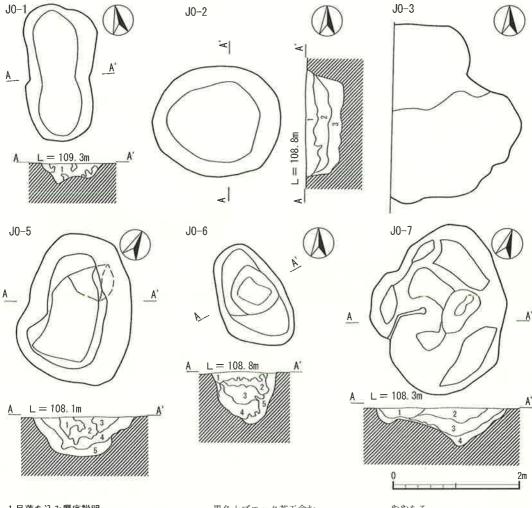
Fig. 30 頭無遺跡 $S-4\sim7$ 号集石・ $Z-1\sim2$ 号石器配置遺構



1号焼土層序説明

- 1層 赤褐色細砂層。しまりは良い。粘性はややある。焼土を40%含む。炭化物7%を東側に多く含む。
- 2 号焼土層序説明
- 1層 赤褐色細砂層。しまりが弱い。粘性はややある。よく焼けた焼土層。
- 2層 褐色細砂層。しまりが弱い。粘性はややある。焼土を20~30%含む。
- 3号焼土層序説明
- 1層 赤褐色細砂層。しまり弱い。粘性はややある。焼土ブロック (ϕ $10 \sim 15 mm$ 大) を 3 個含む。炭化物わずかに含む。
- 4号焼土層序説明
- 1層 褐色細砂層。しまりは弱い。粘性はややある。焼土20%含む焼土層である。炭化物をわずかに含む。

Fig. 31 頭無遺跡 1 ~ 4 号焼土



1号落ち込み層序説明

がない。

2号落ち込み層序説明

- 1層 黄褐色細砂層。ローム粒子 50% 以上含む。As-BP を 3%、As-SP を 5%含む。
- 2層 黄褐色細砂層。As-BP5%、As-SP を20%含む。締まり良い。粘性 6号落ち込み層序説明 はやや有る。
- 3 層 黄褐色細砂層。As-SP10%、As-BP3%含む。粘性あり、締まり良 V10

5 号落ち込み層序説明

- 1層 褐色細砂層。ローム粒子30%、 粘性、しまり共にややある。 3層 褐色微砂層。軽石20%・ローム
- 2層 褐色微砂層。軽石6%。スコリア・

黒色土ブロック若干含む。

- 1層 黄褐色細砂層。しまり弱く粘性 3層 黄褐色細砂層。ローム粒子5%、4層 褐色微砂層。軽石(φ2~3 粘性ややあり、しまり良い。
 - 4層 黄褐色微砂層。ローム20%・軽 石 10%含む。締まり良い。 7 号落ち込み層序説明
 - とする層。軽石 5%含む。締ま り良い。やや粘性あり。

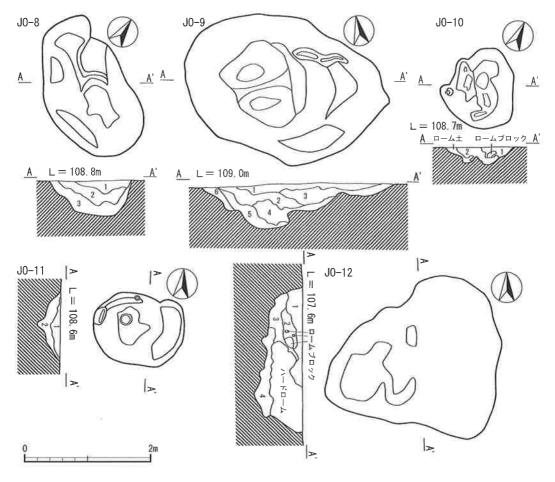
- 1層 褐色細砂層。ローム粒子 20%・ φ 50 mm大の黒色土ブロックを数 個含む。
- 2層 褐色細砂層。φ 50 mm大の黒色土 ブロックを主体とする層。締ま り良い。粘性ややある。
- 粒子5%・締まり良い。粘性

ややある。

加大淡黄色)5%・軽石(φ2∼ 3 ㎜淡灰色)7%含む。

- 5層 明黄褐色微砂層。ロームを主体 1層 褐色細砂層。締まり良い。粘性 ややあり。ロームブロック 20% 含む層。
 - 2層 褐色細砂層。ローム15%、軽石 7%、スコリア少し含む。締まり 良い。粘性ややある。
 - 3層 暗褐色細砂層。軽石8%。ロー ム10%含む。締まり良い。粘性 ややあり。
 - 4層 黄褐色微砂層。ロームを中心と する層。締まり良い。粘性やや あり。

Fig. 32 頭無遺跡 J D - 1 ~ 3 · 5 ~ 7 号落ち込み



8 号落ち込み層序説明

- 1層 黄褐色細砂層。しまり良い。粘性ややあり。ローム粒 子30%・軽石6%含む。
- 2層 褐色細砂層。しまり良い。粘性ややあり。ローム粒子 10%・軽石11%含む。
- 3層 明黄褐色細砂層。しまり良い。粘性ややあり。ローム 粒子を50%以上含むロームを中心とした層。

9 号落ち込み層序説明

- 1層 黄褐色細砂層。しまり良い。粘性あり。ローム土 30%・軽石2%含む。
- 2 層 褐色細砂層。しまり良い。粘性ややあり。軽石 10%・ローム 10% 含む。
- 3層 褐色細砂層。しまり良い。粘性ややあり。ローム 20%・軽石6%含む。
- 4層 褐色細砂層。しまり良い。粘性ややあり。 ロームブロック 3%・軽石 8% 含む。
- 5層 褐色微砂層。しまり良い。粘性ややあり。炭化物をわずかに含む。全体に黒色土を多く含む。
- 6層 黄褐色微砂層。しまり良い。粘性ややあり。

10 号落ち込み層序説明

- 1層 明黄褐色細砂層。しまりややあり。ローム土を主体とする層。
- 2 層 褐色細砂層。1 層に比して、ローム土の混入は少ない。黒色土を主体とする(60%以上)。 しまりや やあり。

11 号落ち込み層序説明

- 1層 黄褐色細砂層。ややしまりあり。ローム土主体。
- 2層 黄褐色細砂層。しまり良い。ローム土主体。

12 号落ち込み層序説明

- 1層 褐色細砂層。しまり良い。粘性ややあり。As-SP を 5%・ロームを 10%含む。
- 2層 黄褐色細砂層。しまり良い。粘性ややあり。ロームを20%含む。
- 3 層 褐色細砂層。しまり良い。粘性ややあり。ローム ブロック状の中に As-YP を 3%含む。黒色土 5% 含む。
- 4層 褐色細砂層。しまり良い。粘性ややある。ローム 20%含む。黒色土中心の層。

Fig. 33 頭無遺跡 J O - 8 ~ 1 2 号落ち込み

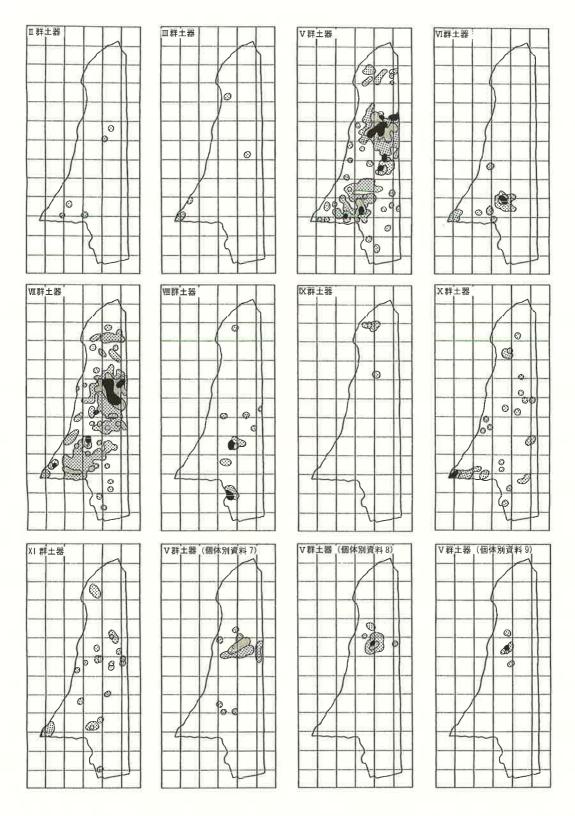


Fig. 34 頭無遺跡縄文包含層の遺物分布(1)

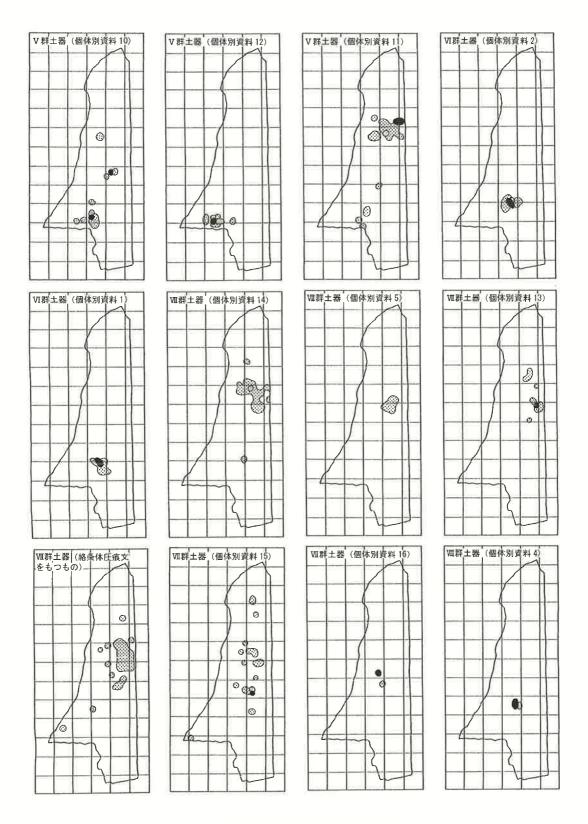


Fig. 35 頭無遺跡縄文包含層の遺物分布(2)

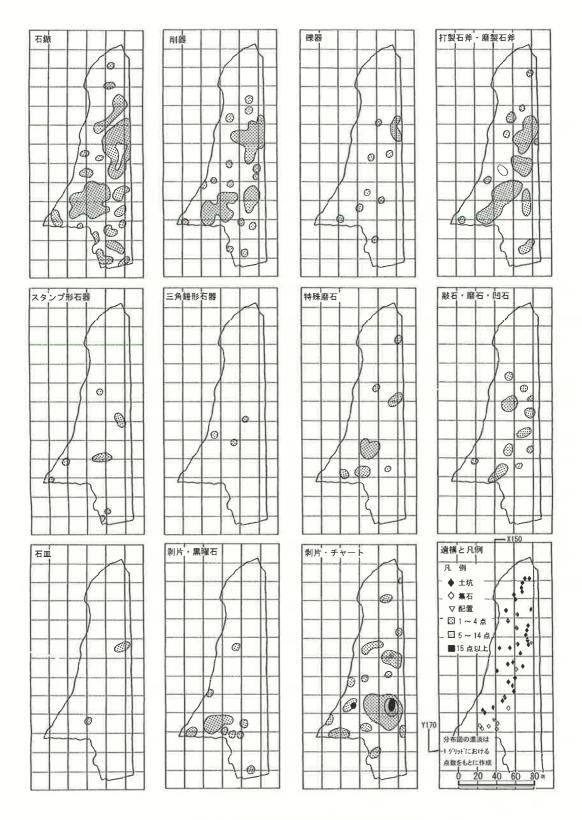


Fig. 36 頭無遺跡縄文包含層の遺物分布(3)

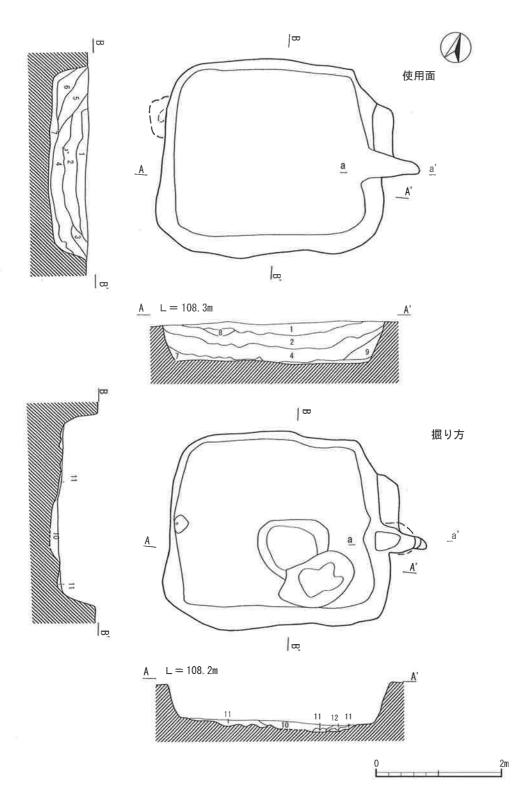
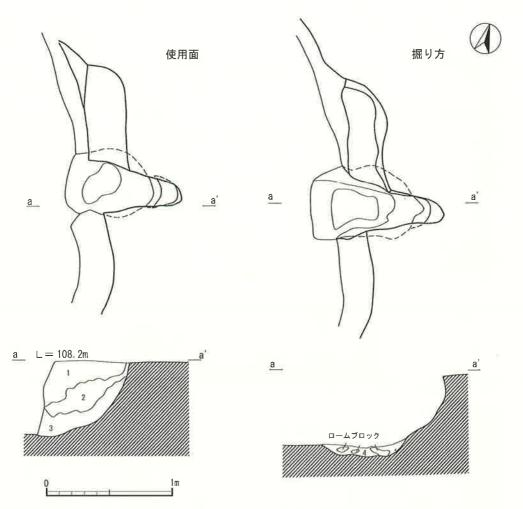


Fig. 37 頭無遺跡H-1号住居址



1号住居址層序説明

- 1層 黒褐色粗砂層。締まり良い。粘性ややある。As-C30%。 10層 褐色細砂層。黒色土を主体とした層。ローム土を Hr-FP をわずかに含む。
- 2層 褐色細砂層。締まり良い。As-C を 20%。Hr-FP をわず かに含む。焼土・炭化物を若干含む。
- 3層 黄褐色細砂層。As-Cを15%含む。締まり良い。
- 4層 褐色細砂層。As-Cを10%、炭化物をわずかに含む。 締まり良い。粘性ややある。
- 5層 褐色細砂層。As-C を 15%・Hr-FP を 3%を含む。締ま り良い。粘性ややある。
- 6層 褐色細砂層。締まり良い。粘性ややある。ローム粒子 30%、軽石わずかに含む。
- 7層 黄褐色細砂層。As-Cをわずかに含む。締まり良い。粘 性ややある。
- 8層 明黄褐色細砂層。Hr-FPを2%・ローム粒子を50%以 上含む。
- 9層 黄褐色細砂層。ローム粒子30%、As-Cをわずかに含

む。締まり良い。粘性ややある。

- 10%、軽石(φ 1 ~ 2mm 大) をロームの中に 50%含 む。締まり、粘性共にあり。
- 11層 黄褐色微砂層。ローム土を主体とする層で、黒色土 を30%、軽石7%を含む。締まりは良い。粘性やや ある。
- 12層 にぶい黄褐色微砂層。黒色土を主体とし、ローム粒 子を5%、軽石をわずかに含む。締まり良い。粘性 はややある。

1号住居址竃層序説明

- 1層 明黄褐色細砂層。ローム土主体。締まりあり。
- 2層 黄褐色細砂層。ローム土主体。締まりあり。
- 3層 黄褐色細砂層。ローム土主体。焼土若干含む。
- 4層 黄褐色細砂層。締まり良い。粘性ややある。 ローム粒子を10%、黒色土を中心とする層(黒色土 とロームの混じった層)。

Fig. 38 頭無遺跡H-1号住居址竃

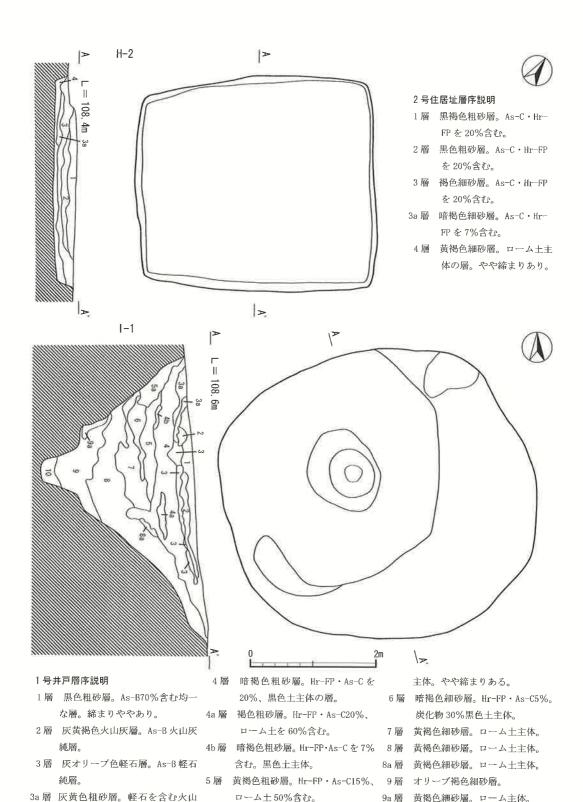
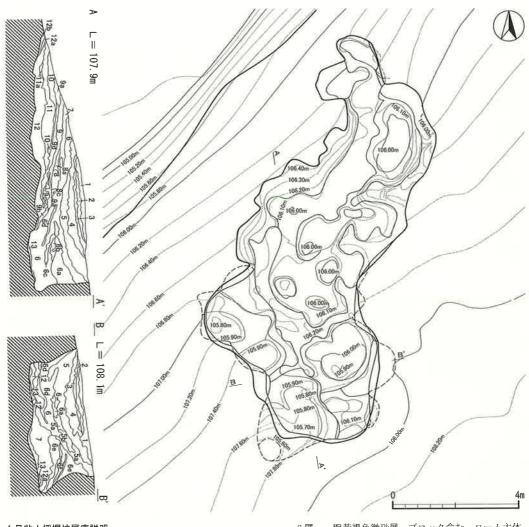


Fig. 39 頭無遺跡H-2号住居址・I-1号井戸

5a層 オリーブ褐色細砂層。ローム土 10層 鈍い黄色粘質土層。締まり弱。

灰混土層。As-B を含む。



1号粘土採掘坑層序説明

- 1層 黒色砂層。
- 2層 灰黄褐色微砂層。As-B火山灰純層。
- 3層 灰オリーブ色粗砂層。As-B純層。
- 4層 黒褐色微砂層。As-C・Hr-FPを20%含む。
- 5層 オリーブ褐色微砂層。As-C・Hr-FP 含むローム主体。
- 5a層 オリーブ褐色粗砂層。As-C・Hr-FP 含むローム主体。
- 5b 層 黒褐色粗砂層。As-C・Hr-FP を 20%含む。
- 6層 黄褐色細砂層。ハードロームブロック含む。ローム主体。
- 6a 層 黄褐色細砂層。ローム土・ハードローム主体。
- 6b 層 黄褐色細砂層。黒色土を含んだ粘土層。
- 6c層 黄褐色細砂層。ローム土を含んだ粘土層。
- 6d 層 黄褐色細砂層。ローム土主体。
- 6e 層 明黄褐色細砂層。上方ブロック下方ハードローム状。
- 6f層 黄褐色細砂層。ブロックをなすローム土主体。
- 7層 黄褐色粗砂層。As-C・Hr-FP 含むローム主体。

- 8層 明黄褐色微砂層。ブロック含む。ローム主体。
- 8a層 黄褐色微砂層。ブロック含むローム土主体。
- 9層 黄褐色細砂層。ブロック含むローム土主体。
- 9a層 黄褐色微砂層。暗色帯ローム土主体。
- 9b層 黄褐色細砂層。黒色土ブロック含む。
- 9c 層 黄褐色粘質土層。ローム・粘土・黒色混土層。
- 9d層 黄褐色細砂層。As-C・Hr-FP含むローム土。
- 10層 黄褐色粘土層。粘性しまりとも強い。
- 10a層 黄褐色細砂層。しまり弱い。ローム土主体。
- 11層 黄褐色粗砂層。しまりない。黒色土主体。
- 11a層 黄褐色粘土層。
- 12 層 オリーブ褐色微砂層。粘性あり、均一な粒子。
- 12a層 オリーブ褐色微砂層。しまり、粘性強い。
- 12b 層 オリーブ褐色微砂層。ややしまりあり。
- 12c 層 オリーブ褐色微砂層。Hr-HP を含む。
- 13 層 オリーブ褐色微砂層。粘土ブロック層。

Fig. 40 頭無遺跡 E-1号粘土採掘坑

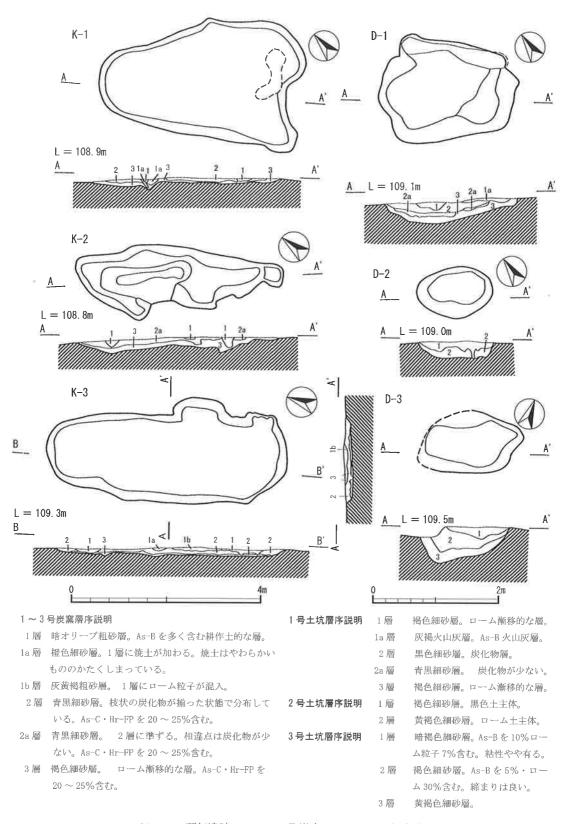


Fig. 41 頭無遺跡K-1~3号炭窯・D-1~3号土坑

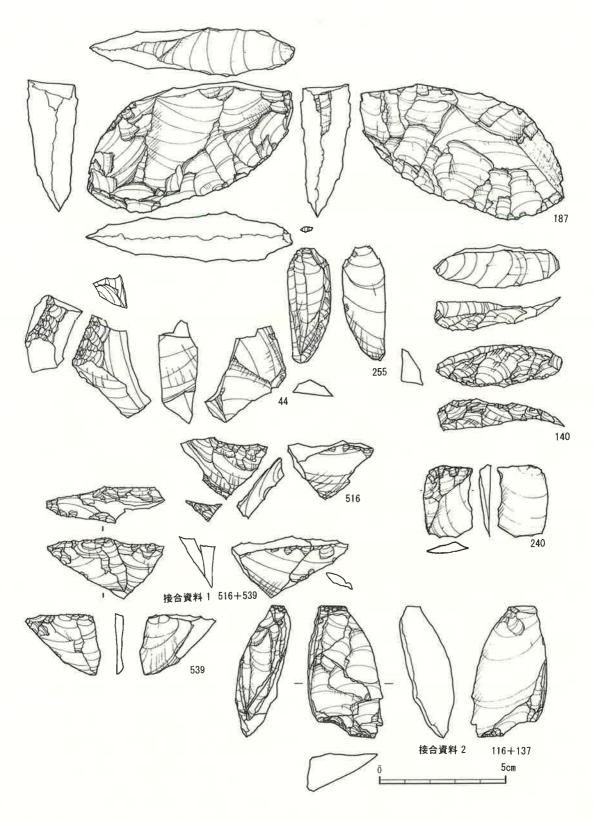


Fig. 42 頭無遺跡第 I 文化層の旧石器(1)

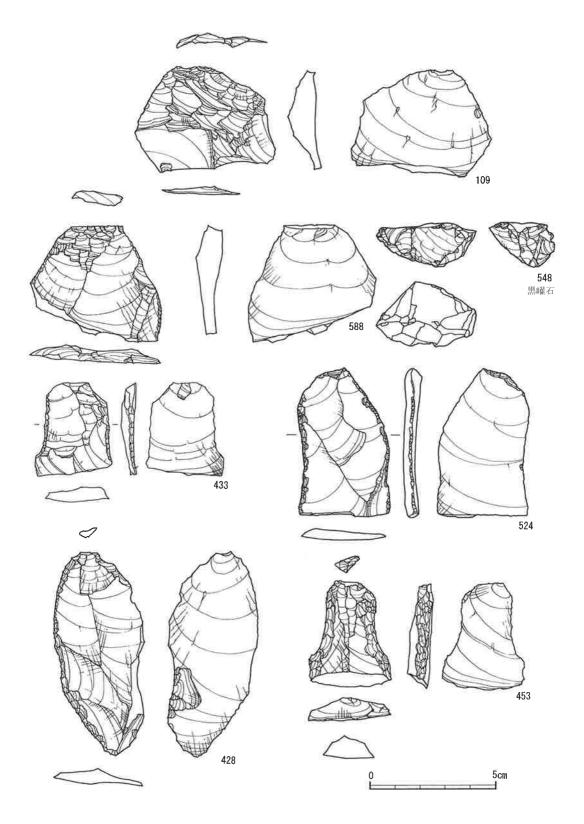


Fig. 43 頭無遺跡第 I 文化層の旧石器 (2)

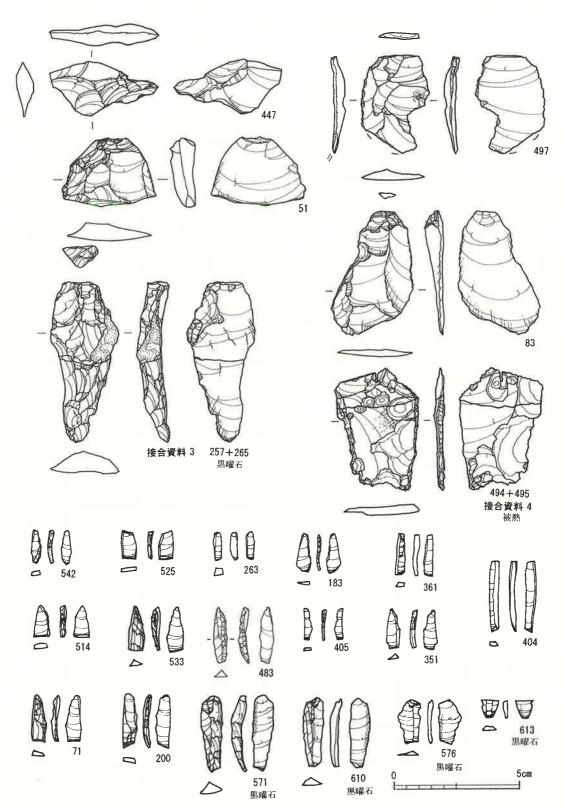


Fig. 44 頭無遺跡第 I 文化層の旧石器 (3)

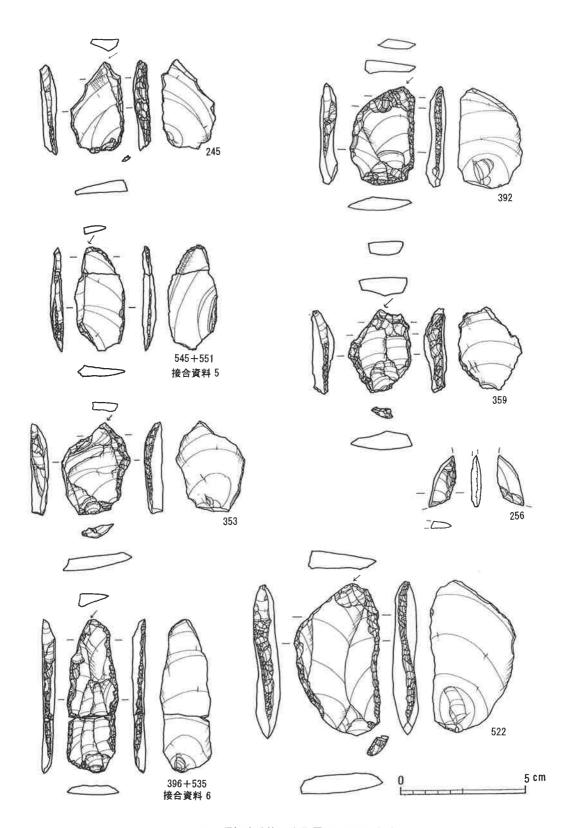


Fig. 45 頭無遺跡第 I 文化層の旧石器 (4)

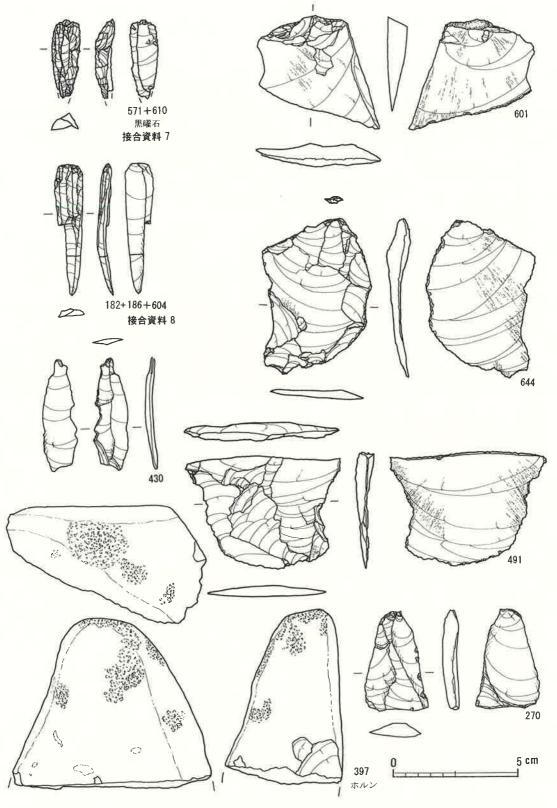


Fig. 46 頭無遺跡第 I 文化層の旧石器 (5)

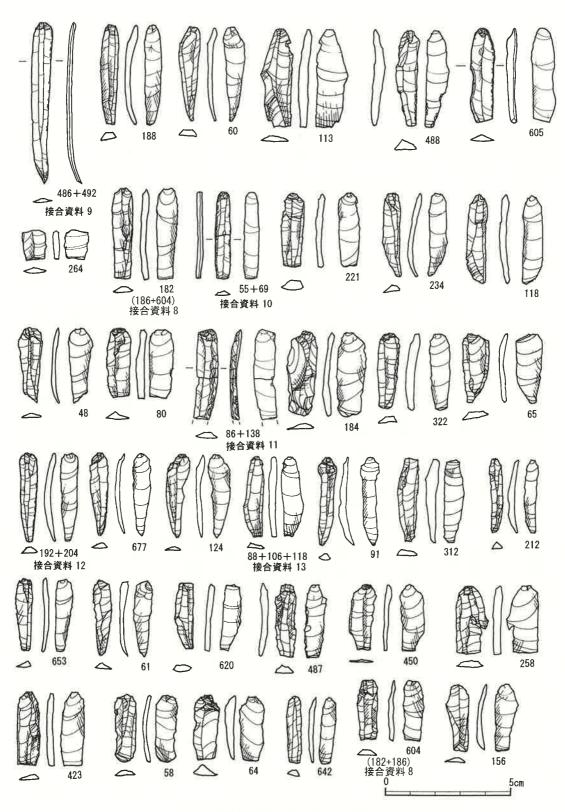


Fig. 47 頭無遺跡第 I 文化層の旧石器 (6)

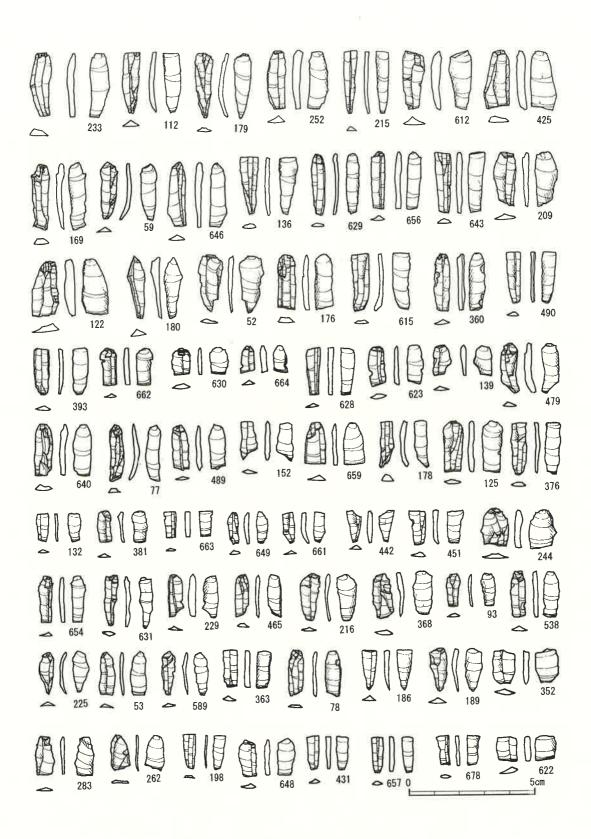


Fig. 48 頭無遺跡第 I 文化層の旧石器 (7)

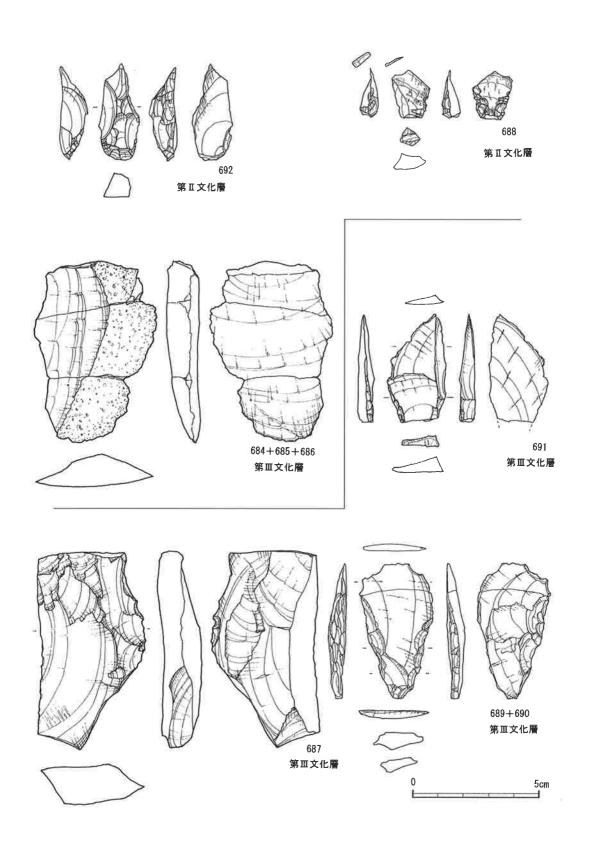


Fig. 49 頭無遺跡第Ⅱ・Ⅲ文化層の旧石器

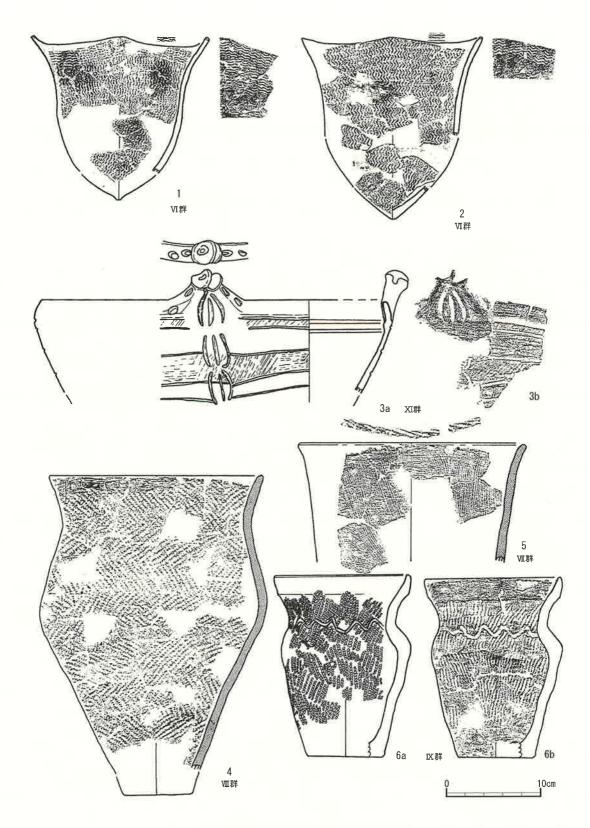


Fig. 50 頭無遺跡包含層の縄文土器(1)

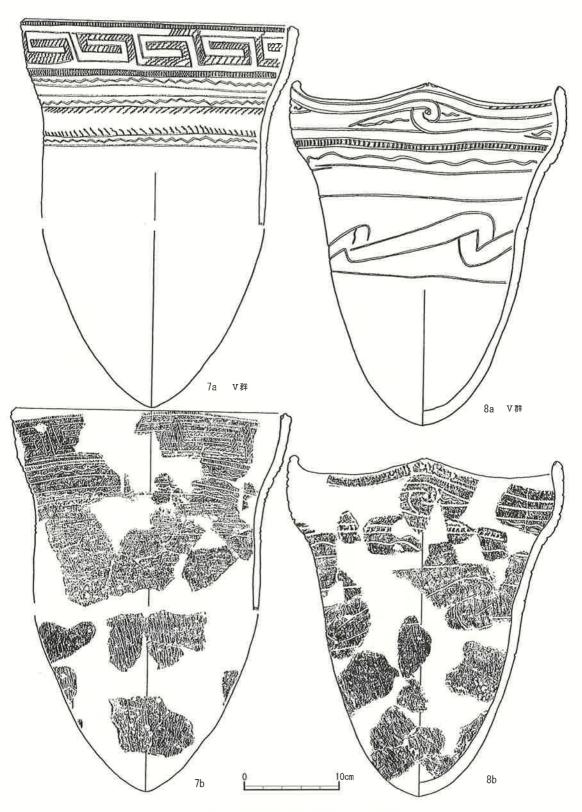


Fig. 51 頭無遺跡包含層の縄文土器 (2)

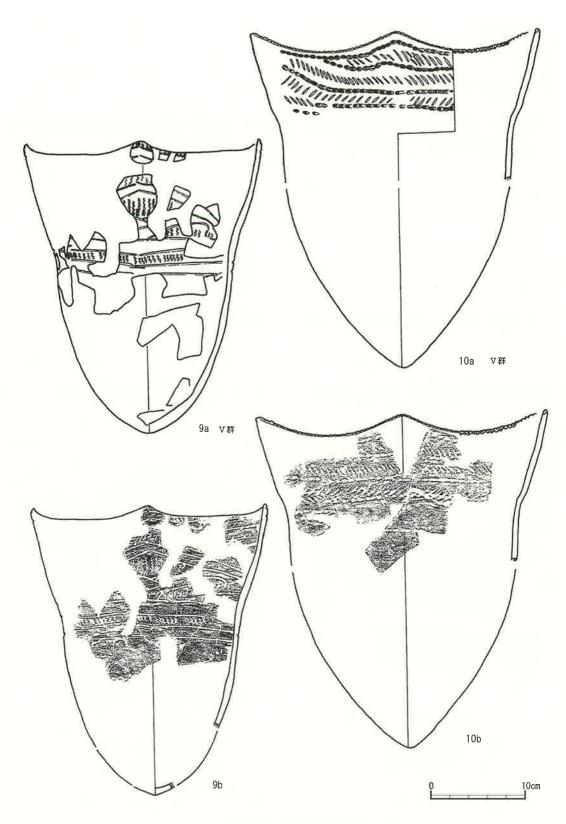


Fig. 52 頭無遺跡包含層の縄文土器 (3)

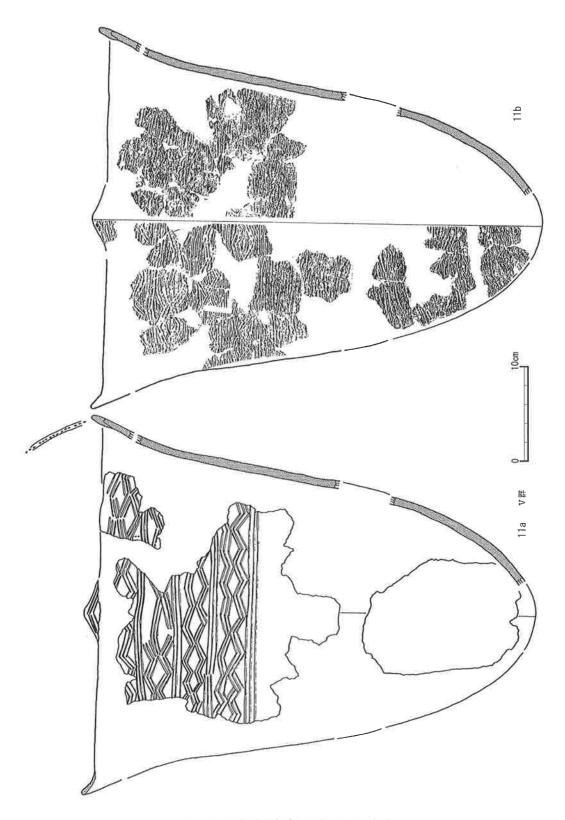


Fig. 53 頭無遺跡包含層の縄文土器 (4)

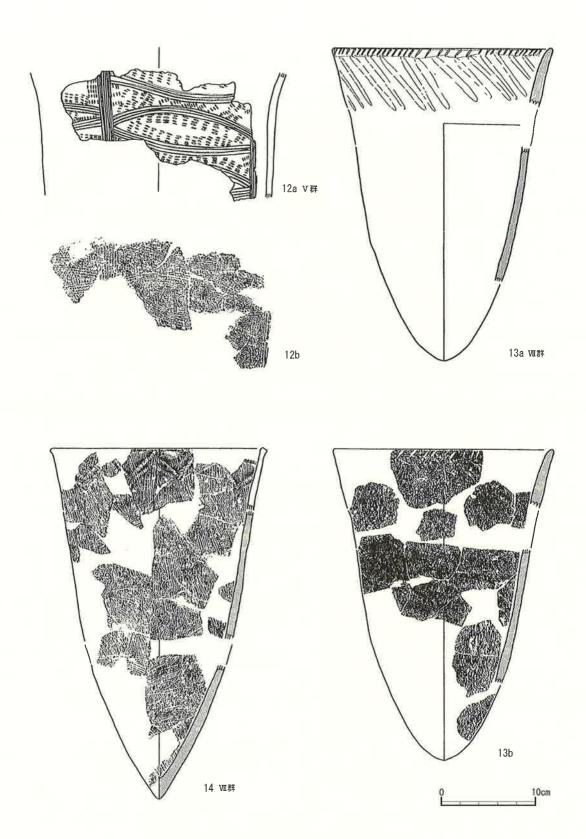


Fig. 54 頭無遺跡包含層の縄文土器 (6)

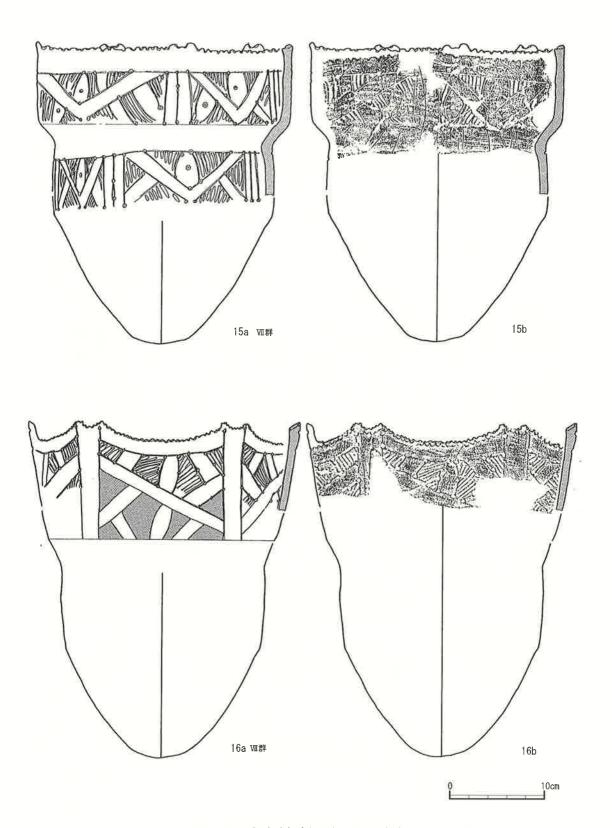


Fig. 55 頭無遺跡包含層の縄文土器 (6)

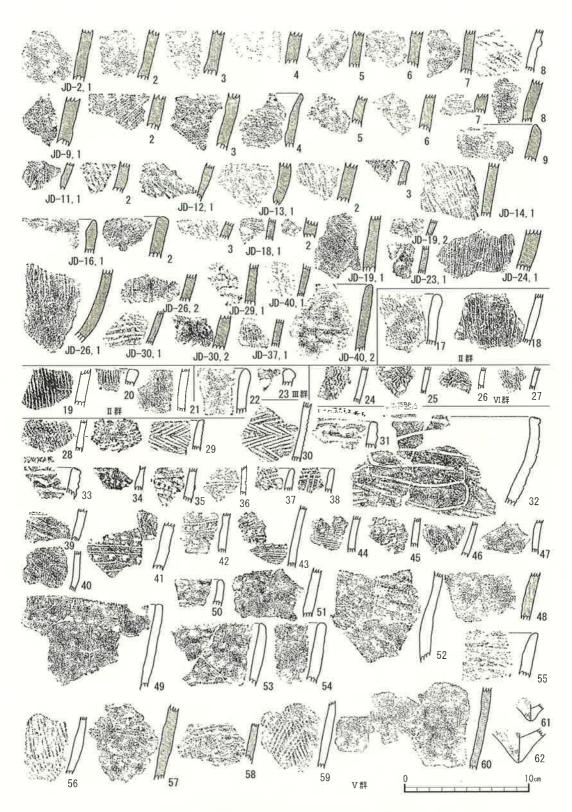


Fig. 56 頭無遺跡縄文土坑・包含層の縄文土器 (7)

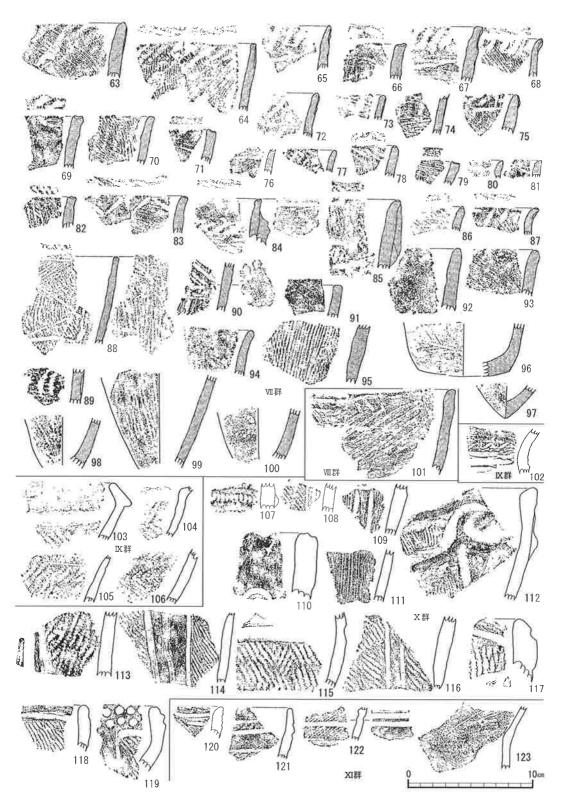


Fig. 57 頭無遺跡包含層の縄文土器 (8)

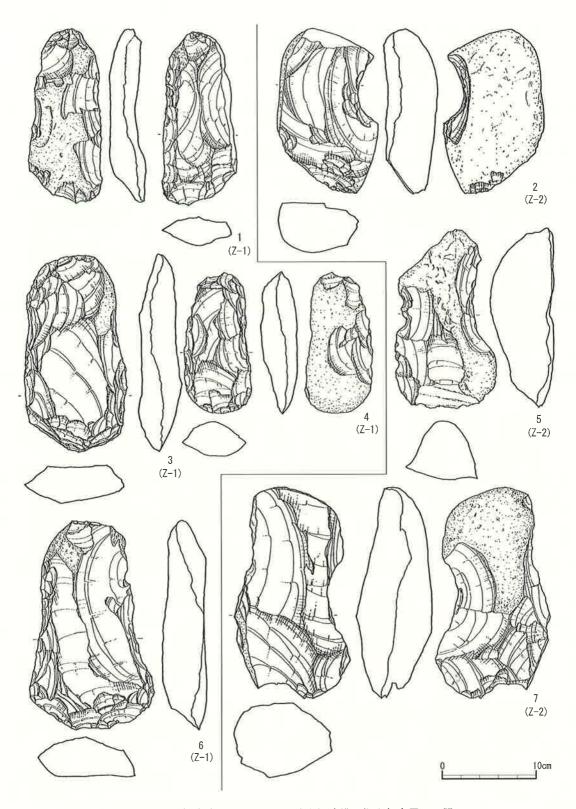


Fig. 58 頭無遺跡 Z - 1・2号石器配置遺構・縄文包含層の石器

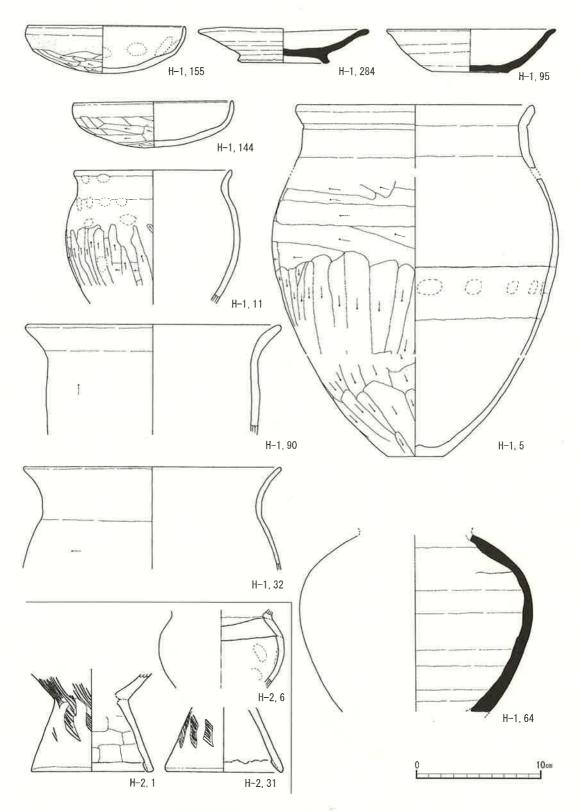


Fig. 59 頭無遺跡H-1・2号住居址、I-1号井戸の土器

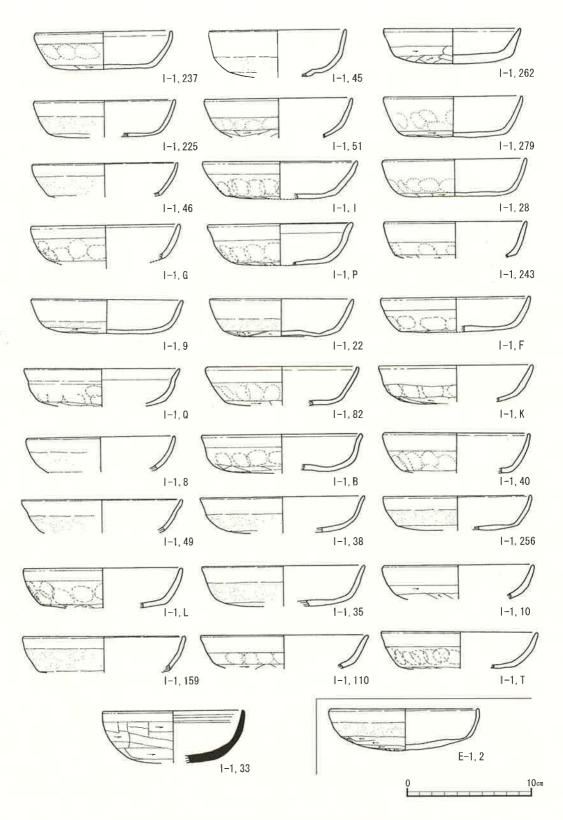
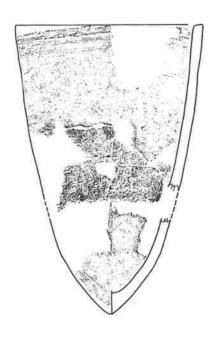


Fig. 60 頭無遺跡 I - 1 号井戸・E - 1 号炭窯の土器

第2部 柳久保遺跡

(60~61E2 柳久保遺跡旧石器·縄文時代編)



柳久保遺跡出土三户式土器



第2部 柳久保遺跡の調査

I 調査の概要

1 調査目的

本遺跡は赤城山南麓の標高110m前後の丘陵性台地に立地する。台地は舌状を呈し、沖積地との比高 $6\sim7$ mである。本台地は南北300m、東西150mで面積40,000㎡で、全面の発掘調査を昭和59~61年度の3カ年にわたって実施した。

昭和59年度に試掘調査を実施した結果、ほぼ全域に遺構・遺物の分布が認められ、特に南部および中央部、北西部に密集していた。検出された遺物から、古墳~奈良時代が主体であったが、縄文時代の遺物もみられた。

昭和59年度の調査では旧石器・縄文時代の遺物、古墳~奈良時代にかけての遺構・遺物を確認した。昭和60・61年度では全面調査を展開させ、旧石器・縄文時代の遺構・遺物をはじめとして古墳~奈良時代にかけての遺構・遺物が多数確認できた。

2 調査経過

昭和58年度に公共座標に基づく植杭を20m方眼で実施してあるため、前回の調査方法と同様に北西に原点を据えて、全体を4mの碁盤目に区切るグリッド方式で行った。調査は重機を用いて表土の除去を行い、Ⅱ・Ⅲ層上面を出した。プラン確認の結果、古墳~奈良時代の遺構が多数検出されため、縄文時代の遺構・遺物の調査はそれらを避けながら順次進めた。

各遺構の掘り下げは土層観察用の土層ベルトを残し、移植ゴテを使い人力で掘り下げた。検出された遺構・遺物の調査は各種図面を作成し、記録をとどめながら進めた。縄文土坑の検出はグリッド毎に掘り下げを行いながら検出した。

発掘調査は、昭和60年5月から12月、昭和61年5月から12月まで行い、遺物整理は昭和61年1月から3月、昭和62年1月から2月まで断続的に行った。本報告書の作成は、昭和63年2月から3月までの期間で行った。

3 遺跡の要約

調査の結果、旧石器・縄文時代、古墳・平安時代の遺物や遺構が検出された。旧石器時代の遺物 は尖頭器 3 点と台形様石器 1 点が検出された。縄文時代の遺構は、土坑14基、集石 5 基、焼土跡 3 基、石器配置遺構 1 基、埋設土器 1 基であり、遺物は、草創期~後期の土器や石器類がみつかった。 弥生時代は後期の土器が出土した。本報告では、旧石器~弥生時代の遺物と遺構について掲載し、 古墳時代以降の遺構・遺物については既刊の『柳久保遺跡群VII1988』を参照していただきたい。

4 層 序

柳久保遺跡の層序はXI層がチョコレート色土層になる他は、基本的に頭無遺跡のものと変化はないためFig. 10を参照にしていただきたい。

II 旧石器時代の遺物

柳久保遺跡から出土した旧石器時代の遺物は、今回の報告分を合わせると7点にのぼる。既に『柳久保遺跡群Ⅰ』に掲載の暗色帯から出土した黒曜石製の縦長の剥片1点、『柳久保遺跡群Ⅱ』に掲載の黒色頁岩製の剥片1点、『柳久保遺跡群Ⅳ』に掲載した珪質頁岩製の周縁加工の尖頭器1点である。

今回、報告する石器は尖頭器3点と台形様石器1点の合計4点である。

台形様石器 X119-Y131グリッドのWI層中から出土した。黒色安山岩の横長剥片を用い、切断と急傾斜の調整が施された台形様石器である。旧石器の調査は2×4mの深掘りを46ケ所設定したが、出土石器はこの1点であった。

尖頭器 (Fig. 79、PL. 32) 1 はチャート製の両面加工の尖頭器でX119-Y120グリッドから出土した。 長さ4.7cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重さ4.6g。 2 はチャート製の片面加工の尖頭器でX96Y105グリッドから出土した。主要剥離面には素材打面の打瘤痕を残している。長さ3.2cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ1.1g。 3 は黒曜石製の尖頭器でX117-Y144グリッドから出土した。長さ2.0cm、幅1.7cm、厚さ1.0cm、重さ3.4g。基部と先端部を欠損する。

Ⅲ 縄文時代の遺構

1 土 坑

JD-24号土坑(Fig. 63、PL. 26)

(位置) X98・99、Y114グリッド(方位) N-128°-W(形状) 楕円形を呈する。長径274×短径 189cm、深さ128cm。坑底穴は2個存在し、P1・径19cm、深さ21cm、P2・径18cm、深さ22cm。(備考) いわゆる「陥し穴」である。

JD-26号土坑 (Fig. 63)

(位置) X121・122、Y130グリッド(方位) N-87°-W(形状) 隅丸長方形を呈し、長軸254×短軸138cm、深さ122cm。(備考) 調査の結果、形状より落ち込みと考えられる。

JD-35号土坑 (Fig. 63、PL. 26)

(位置) X111、Y121・122グリッド(方位) N-72°-W(形状) 楕円形。長径256×短径104cm、深さ143cm。坑底穴は2個存在し、P1・径16cm、深さ60cm、P2・径17cm、深さ53cm。(備考) いわゆる「陥し穴」である。

JD-36号土坑 (Fig. 64、PL. 26)

(位置) X112、Y121・122グリッド(方位) N-123°-W(形状) 楕円形を呈し、長径238×短径132cm、深さ129cm。(備考) いわゆる「陥し穴」であるが、坑底穴は存在しない。

JD-38号土坑 (Fig. 64、PL. 26)

(位置) $X111 \cdot 112$ 、 $Y122 \cdot 123$ グリッド(方位) $N-60^\circ$ -W(形状)楕円形を呈し、長径282 ×短径209cm、深さ141cm。坑底穴は2個存在。 $P1 \cdot 径17cm$ 、深さ33cm、 $P2 \cdot 径14cm$ 、深さ35cm。(備考) いわゆる「陥し穴」である。

JD-40号土坑 (Fig. 64)

(位置) X111・112、Y121グリッド(方位) N-83°-W(形状) 楕円形を呈する。長径274×短径202cm、深さ106cm、坑底穴は2個存在する。P1・径11cm、深さ33cm、P2・径13cm、深さ32cm。(備考) いわゆる「陥し穴」である。

JD-41号土坑 (Fig. 64、PL. 26)

(位置) X118・119、Y125グリッド (方位) N-102°-W (形状) 楕円形を呈し、長径265×短径161cm、深さ113cm。 坑底穴は2個存在。 P1・径12cm、深さ35cm、P2・径11cm、深さ30cm。 (備考) いわゆる「陥し穴」である。

JD-42号土坑 (Fig. 65、 PL. 26)

(位置)X119、Y124グリッド(方位)N -57° -W(形状)円形を呈する。長径124×短径112cm、深さ67cm。

JD-56号土坑 (Fig. 65、PL. 27)

(位置) $X116 \cdot 117$ 、 $Y126 \cdot 127$ グリッド(方位)N-17° -W(形状)楕円形を呈する。長径31 $9 \times$ 短径211cm、深さ122cm。 (備考)形状より落ち込みと考えられる。

JD-57号土坑 (Fig. 65、PL. 27)

(位置) X115、 Y127グリッド(方位) N-89°-W(形状)円形。長径204×短径179cm、深さ90cm。

JD−58号土坑 (Fig. 65、PL. 27)

(位置)X112、Y134グリッド(方位)N-135° -W(形状)楕円形を呈し、長径267×短径188 cm、深さ100cm。坑底穴は2個存在し、P1・径24cm、深さ64cm、P2・径24cm、深さ64cm。(備考) いわゆる「陥し穴」である。

JD-59号土坑 (Fig. 66、PL. 27)

(位置) X114、Y136・137グリッド(重複) 東部をH-32号住居址により切られている。(備考) いわゆる「陥し穴」であるが、坑底穴は存在しない。

JD-61号土坑 (Fig. 66)

(位置) X115、 Y139グリッド(方位) N-2° -W(形状) 楕円形。住居址により切られている。 ため計測不可能。(重複)H-33号住居址により切られている。

JD-64号土坑 (Fig. 66、PL. 27)

(位置) X109、 $Y144 \cdot 145$ グリッド (方位) N-7° -W (形状) 楕円形を呈する。長径274×短径175cm、深さ77cm。 (備考) 調査の結果、形状により落ち込みであると考えられる。

2 集 石

S-1号集石 (Fig. 68、PL. 27)

(位置) $X117 \cdot 118$ 、 Y126グリッド(標高) 109.2m(形状) 礫は、ほぼ円形に集中する。長径50 cmの範囲に赤化・ヒビ割れた礫がみられ、下部に径 43×35 cm、深さ25cmの円形の掘り方が認められた。

S-2号集石 (Fig. 68)

(位置) X115、Y123・124グリッド(標高) 110.0m(形状)赤化した礫が6石存在していた。

S-3号集石 (Fig. 69、PL. 27)

(位置) X115、Y124グリッド(標高) 110.0m(形状) 長径130×短径80cmの範囲に赤化を受けた 礫が集中していた。

S-4号集石 (Fig. 68)

(位置) X114・115、Y145グリッド(標高) 102.8m (形状) 長径35cmに5石の分布がみられた。 礫は赤化・ヒビ割れが認められた。

S-5号集石 (Fig. 69、PL. 27)

(位置) X122、Y141グリッド(標高) 103.2m (形状) 長径140×短径50cmの範囲に礫が分布。

3 焼 土 跡

1 号焼土跡(Fig. 67)

(位置) X99、Y124グリッド (標高) 109.4m (形状) 不整な楕円形を呈する。長径43×短径29cm で、わずかに焼土が含まれていた。

2号焼土跡 (Fig. 67)

(位置) X114・115、Y124グリッド(標高) 110.0m(形状) 3 ケ所に分かれていたが、便宜的に 2 号焼土跡と呼んだ。不整楕円形を呈し、東より長径28、46、23cm。焼土ブロックと炭化物が認められた。

3号焼土跡 (Fig. 67)

(位置) X114、Y124グリッド (標高) 110.0m (形状) 不整楕円形を呈する。長径40×短径34cm。 焼土が良好に残っていた。

4 埋設土器

U-1号埋設土器 (Fig. 67、PL. 28)

(位置) X110、Y147グリッド(形状) Fig. 74-3の土器は底部と口縁部を大きく欠いた状態で正位に埋設。土器のまわりを円礫が囲んだ状態で検出された。土器は、前期諸磯 a 式に比定。

5 石器配置遺構

Z-1号石器配置遺構 (Fig. 67、PL. 27・28)

(位置) X100、Y134グリッド(標高) 107.0m(形状)長さ30cmの打製石斧が、2個ほぼ平行に長軸を南北にして立てて置かれていた。下部を精査したが、掘り込みは検出できなかった。

6 落ち込み

O-4号落ち込み (Fig. 66)

(位置) X119、Y119・120グリッド (形状) 不整形を呈し、長軸130×短軸100cm、深さ40cm。 (遺物) 石器が1点出土している。

IV 縄文時代の遺物

1 土 器

本遺跡から出土した縄文式土器は、草創期から後期にわたった。土器群の分類にあたっては『柳 久保遺跡群V』で用いた分類に従った。

I 群土器 草創期 表裏縄文系土器 (今回は該当なし)

Ⅱ群土器 草創期後半 撚糸文系土器群

Ⅲ群土器 早期前半 無文系土器群

IV群土器 早期前半 無文繊維系土器群 (V群とVII群の無文部)

V群土器 早期前半 貝殼沈線文系土器群

VI群土器 早期前半 押型文系土器群

VⅢ群土器 早期後半 条痕文系土器群

™群土器 早期末葉~前期前半 繊維縄文系土器群

IX群土器 前期後半 竹管文系土器群

X群土器 中 期 勝坂式土器群、加曽利E式土器群

X1群土器 後 期 堀之内式土器、加曽利B式土器群

調査された28,000㎡の区域からの出土総数は5,329点であり、そのうち包含層からは5,292点、遺構から37点が出土した。包含層から出土したもののうち出土量が多いものは、IX群土器とVII群土器で、分類不能な細片等を除いた4,592点の内訳では、IX群土器が1,718点(37.4%)、VII群土器が850点(18.5%)を占めている。

『柳久保遺跡群V(1988)』の中でIV群土器と扱ったものは、62年度の頭無遺跡の整理の過程でその実態が明らかとなった。IV群土器と分類していたものは、頭無遺跡のV群土器とVII群土器の復元資料の胴部に共通するものであった。今回、IV群土器については再分類の必要が生じたが、元のままの分類で報告を行った。

1) 遺構出土の土器

土坑 (Fig. 74-2~4、PL. 32)

調査された土坑のうち土器が検出されたものは、JD-35・36・38・40・41・56の6基であり、Tab.11に内訳を示した。これらの土坑は、いわゆる「陥し穴」と呼ばれるものであり、その機能から遺物が関連をもって出土することは少ない。頭無遺跡でのこの種の土坑の所見と同様である。しかし、WI群土器が他の群を抜いていることは土坑の時期を決定できる要素として指摘ができよう。

埋設土器

U-1号埋設土器 (Fig. 74-2~4、PL. 32)

3が埋設土器の主体をなす土器である。周辺から2と4が出土している。3は底部と口縁部を大きく欠損している。胴下半に煤の付着が認められることから、煮沸具からの転用と考えられる。文様はRLの斜行縄文がみられる諸磯a式土器である。2は底部を欠損するが、ほぼ全体がわかる深鉢である。地文にRLの斜行縄文が施文され、竹管により平行沈線文と円管文がユニオンジャック状に配される。色調は黒褐色を呈し、焼成・胎土とも良好である。4は深鉢の底部片である。文様はRLの斜行縄文が施文される。底部を欠損する。

2) 縄文包含層出土の土器

Ⅱ群土器 草創期後半撚糸文系土器群 (Fig. 74・75、PL. 29)

本群は415点検出された。器形を復元できるものがないため、原体と口縁形態を中心に6類に分類した。

1 類 口縁がくびれ縄文が施文されるもの (Fig. 74-7・11~14・16)

A種 口縁内面にまで施文の及ぶもの(7)

7は口縁が外側にくびれ、縄文LRが口縁内面、口唇、外面に施文される。原体や、胎土が黄褐色を呈し、B類とは異なる。

B種 口縁が肥厚し、施文は口縁内面までなされるもの(11~14・16)

11・14は口縁内面、口唇、外面にLRの縄文が施文される。13は11と同様な施文であるが、RLの縄文が施文される。16はLRの縄文が外面口縁に1単位、さらに指圧痕がみられ、胴部に縄文が施文される。

2 類 1類の胴部を一括したもの (Fig. 75-17・18・20・22・23)

17·18·20·22·23ともにRLの縄文である。

3 類 口縁がくびれ撚糸文が施文されるもの (Fig. 74-8~10・15)

A種 口縁が肥厚し内面にまで施文の及ぶもの(15)

15は内面、口唇に縦、外面に縦位に撚糸文Rが施文される。

B種 口縁が肥厚するが施文は内面に及ばないもの(8・9)

8は口縁部には施文がみられない。原体は撚糸文Rである。9は口唇と外面の2部位に撚糸文Rが施文される。

C種 口縁は肥厚するが、施文は内面にまで及ばず、一部単軸絡条体条痕となるもの(10) 10は口唇に撚糸文Rが施文され、外面は単軸絡条体条痕となる。

4 類 3類の胴部片を一括したもの (Fig. 75-19・21)

2点とも撚糸文Rが施文される。

5 類 撚糸文が粗く施文されるもの (Fig. 75-24・26・28・30・31)

24は口縁が角頭状に仕上げられ撚糸文Rが施文される。26は撚糸文Rが口唇と外面に不規則にみられる。28は粗い撚糸文Lが施文される。30・31は尖頭部である。いずれも撚糸文Rが施文される。

6 類 単軸絡条体を引きずり、条痕となるもの(Fig. 75-25・27・29)

25は間隔をとり不規則に絡条体条痕が入る。27は縦位に絡条体条痕がみられる。29は尖底部である。

分 布 台地の鞍部の先端のX110~X120、Y115~Y122Gに集中し、南部のX120・Y130Gに分布がみられる。

Ⅲ群土器 早期前半無文系土器群 (Fig. 75、PL. 29)

本群は170点検出された。このうち1が復元できたが、その他のものは破片であるため口縁断面形態で3類に分け、底部を含め4類に分類した。

1 類 口縁断面形態が肥厚するもの (Fig. 75-32~37・39)

32~35・37は内外面とも丁寧な調整で仕上げられている。36は横位の擦痕が、39は篦削り状の擦痕がみられる。

- 2 類 口縁断面形態が丸頭棒状のもの (Fig. 75-38・40) 38は撫でによって仕上げられる。40は縦位の篦削り状の擦痕が入る。
- 3 類 口縁断面形態が角頭棒状のもの (Fig. 74-1)

1は内外面とも丁寧な撫でによって仕上げられた尖底の深鉢である。口縁はやや内削ぎ状に作出 される。口縁外面には撫でが1条巡らされるが、文様を意識したものか判別できない。

- 4 類 尖底部であるもの (Fig. 75-41)
- 分 布 Ⅱ群と似た分布を示すが、Y120G以南とやや南に下がる。

IV群土器 早期前半無文繊維系土器群 (Fig. 75-42~50、PL. 29)

本群は253点と比較的まとまって出土している。 $45\cdot 46\cdot 48\cdot 49$ は無文であるが、繊維の東を用いたような擦痕状の条痕文がみられ、片岩とわずかに繊維が混入される。 $42\cdot 47$ は多量の片岩砂粒を混入し、内外面とも撫でにより仕上げられる。50は口唇に刻みを有し、砂粒を多量に含む。 $43\cdot 44$ は口縁部片であるが荒れた器面である。 $43\cdot 44$ がVII群土器に帰属し、その他はV群土器に近似する。分 布 本群はV群およびVII群に吸収されるべきものであることが、両群と(重複)した分布範囲からも認められる。 $X110\sim X120$ 、 $Y120\sim Y1306$ と南西部に集中し、さらに広範囲に点在する。

V群土器 早期前半貝殼沈線文系土器群 (Fig. 76、PL. 30)

本群は307点と量的にまとまって出土した。全般的に砂粒の混入が多く、繊維の混入はみられない。色調は黄褐色~赤褐色を呈し、内面や口唇も丁寧に仕上げられる。文様から次の8類に分けられる。

- 1 類 浅い横走する沈線文によって構成されるもの (Fig. 76-56・59・60)
- 56・60は同一個体片である。口縁は内削ぎ状を呈し、内面調整も丁寧に仕上げられる。59も同様な文様構成をとるがやや沈線間隔があり、内面は荒れている。
- 2 類 太く浅い横走する沈線文により構成されるもの (Fig. 76-67・68) 67・68とも底部に近い破片である。内外面とも丁寧な調整で仕上げられている。
- 3 類 沈線が羽状構成をとるもの (5Fig. 76-7・58・61・62・64・65) 57・58、61・65、62・64はそれぞれ同一個体である。62は口縁部であり突起が付く。
- 4 類 沈線文と貝殻腹縁文、刺突で構成されるもの (66・69~74)

66と74は千本科植物による沈線文らしく筋がみえ、沈線間に貝殻文が押捺される。66は口唇と口縁内面にも貝殻文が押捺される。69・70・72・73は同一個体と考えられる。多量に砂粒を混入し、内外面とも丁寧な調整によって仕上げられている。文様は沈線、刻み、貝殻文で構成され、沈線は横、斜め、縦と様々に用いられる。71は沈線と刺突により施文される。刺突により盛り上がりがつく。

5 類 半截竹管文による沈線文により構成されるもの (Fig. 76-63)

63は千本科植物の沈線文による平行沈線文で鋸歯構成をとると考えられる。

- 6 類 2本同時沈線文により構成されるもの (Fig. 76-77・79~81)
 - 80・81は同一個体片であり、内面に刻みが入る。
- 7 類 狭い沈線文により構成されるもの (Fig. 76-75・76・78・82)

75は口縁部であり、内削ぎ状である沈線間に刺突が入る。78は沈線間に貝殻文が押捺される。76口縁部片で口唇に刻みが入る。82は格子状に施文される。

- 8 類 尖底であるもの (Fig. 76-83)
- 分 布 南西部にあたる斜面であるX118~X121、Y120~Y135Gに集中がみられ、広範囲には広がりを 持たない。

VI群土器 早期前半押型文系土器群 (Fig. 75、PL. 29)

本群は19点検出されたにとどまる。いずれも山形押型文土器である。

51は横位と縦位に山形押型文が施文される。52~55は同一個体片である。大形の山形押型文が縦位に押捺される。胎土に結晶片岩粒を多量に含んでいる。

分 布 台地の南端である沖積地にかかるX100~X113G、Y142~Y144Gの小範囲に分布する。

₩## 早期後半条痕文系土器群 (Fig. 77、PL. 30)

本群は850点検出された。有文土器と条痕文のみ施文された土器の2つに大きく分けられる。繊維はすべてにわたって認められた。

1 類 沈線文と刺突文によって構成されるもの (Fig. 77-84~86・89・93・94)

84と93は同一個体片であり、貝殻条痕文が内外面に施された後に、沈線上に刺突が施文される。86は内外面に貝殻条痕文による調整後、太い沈線上に円形の刺突が入る。口唇に刻みが入る。胎土に結晶片岩粒を多く含む。85は貝殻条痕文による調整後、沈線と円形刺突で文様区画された中に半截竹管文による刺突で充填される。94は沈線に沿って両側に刺突が入る。口唇には刻みが入る。

- **2** 類 隆帯上に刻みを有するもの (Fig. 77-87・90・91・96) 3点とも隆帯の上に押捺や刺突による刻みを有する。
- 3 類 押引文を有するもの (95)

95の隆帯は剥落が著しいため不明な部分が多いが、半截竹管文により縦位の押引文が施される。また、同じ工具により縦位に連続して平行沈線文が引かれる。

4 類 刺突文を有するもの (89)

89は貝殻条痕文による調整後、円形刺突が2段にわたり横位にみられる。結晶片岩が多量に混入される。

5 類 絡条体圧痕を有するもの (92)

92は口縁に斜めに絡条体圧痕が入る。

6 類 貝殻文を有するもの (98)

耳摺状の突起がつけられ、貝殻腹縁文によって文様構成される。内面には貝殻条痕文が施文。

7 類 沈線文を有するもの (88・97・99)

88は鋸歯を重ねた沈線文が内外面に施される。内面の沈線は稚拙である。口唇には半拙竹管文による刺突が施される。97・99は半截竹管文により平行沈線、波状沈線が施文される。

8 類 条痕文を有するもの (100~107)

100は口唇に刻みが入る。外面の横方向に細かい条痕文が入り、内面は荒れている。101~105は口縁部である。内外面とも条痕文がみられる。105は波状口縁の深鉢になると思われる。内外面とも貝殻条痕文によって調整される。口唇には貝殻背圧痕がみられる。106は縦方向に凹線を入れた後、櫛歯状工具による刺突がみられる。内面は貝殻条痕文がみられる。107は薄く内外面とも条痕文により調整され、口唇に刻みを有する。

分 布 台地の鞍部X100~X120、Y108~Y125Gと南部のX120~X122、Y140~Y143Gの2ケ所に広範囲に分布する。土坑との(重複)がみられることは、遺物の出土傾向とも一致をみる。

₩群土器 早期末葉~前期前半繊維縄文系土器群 (Fig. 77、PL. 30)

本群は766点検出された。繊維の混入量が増える点や、縄文施文の有無によってWI群土器と区別した。

- 1 類 隆起帯を有するもの (Fig. 77-108・111・112)
- 108には隆帯はみられないが1類の口縁と考えられる。111と112は隆帯に刻みを有し、0段多条の RLの縄文を羽状構成に施文する。
- 2 類 連続爪形文により菱形文の構成をとるもの (Fig. 77-116・117)
- 116・117は同一個体片である。連続爪形文により菱形文が口縁部に構成される。胴部はRLと LRの縄文によって羽状縄文が施される。
- **3 類** 半截竹管文による平行沈線と連続爪形文による文様構成をとるもの (Fig. 77-114、Fig. 78-118・119)

3点とも半截竹管文により菱(形状)に文様施文される。沈線の交点には円形竹管文がみられる。

- 4 類 平行竹管文を有するもの (Fig. 77-113、Fig. 78-121)
 - 113・121とも半截竹管文により横位に平行沈線が描出される。地文には縄文RLが施文される。
- 5 類 縄文施文を有するもの (Fig. 77-109・110・115)
 - 109・110は撚糸側面圧痕がみられる。115はRLの斜行縄文が施文される。
- 分 布 台地の鞍部に小範囲で数ケ所X100~X103、Y120~Y130GとX120~X123、Y130~Y143Gの分布があり、南端のX102~X112、Y142~144Gにもまとまって分布する。

IX群土器 前期後半竹管文系土器群 (Fig. 78、PL. 31)

本群は検出された縄文土器の中でも最も多く、その数は3,130点を数え47.1%を占めている。本群は竹管文系土器群を扱ったが、大部分は縄文施文の土器である。『柳久保遺跡群 I 』によれば、有文:縄文の割合は1:13になる。

- 1 類 円管文を持つ深鉢 (Fig. 78-122・123)
 - 円管文を持つもの(122)と円孔を持つもの(123)に分けられる。
- 2 類 口縁部に竹管による横走平行線文を描くもの (Fig. 78-127・129・130・132)
- 3 類 櫛歯状工具により平行線文や波状文を描く平口縁の深鉢(Fig. 78-124~126)
- 4 類 半截竹管文による平行線文を持つ深鉢(131)
- 5 類 いわゆる集合沈線文を持つ深鉢 (133~136)

半截竹管文で引かれるもの(134~136)と櫛歯状工具で引かれるもの(133)がある。この他には 縄文施文の土器片が多数出土している。単節斜行縄文RLが大半を占めるが、撚糸文や結節もみられる。

分 布 台地全体X100~X110、Y100~Y113GとX110~X120G、Y117~Y130Gに広範囲の広がりをみせる。 また、南端のX115~X125、Y135~Y147Gにも濃密な分布。

X群土器 中期、加曽利E式土器群 (Fig. 78-137~140、PL. 31)

本群は86点検出され、加曽利E式土器で占められる。137はLRの縄文を有する。138は沈線による区画の中に円形刺突が施される。139は沈線で文様区画をなし、斜行縄文LRが磨消縄文で施文される。140は突起部分であり、円形刺突が施される。

分 布 台地の東斜面沖積地にかかるX112-Y98Gに小範囲で集中するほか、台地中央に点在する。

XI群土器 後期、加曽利B式土器群 (Fig. 78、PL. 31)

本群は321点と比較的まとまって出土した。文様で大きく6類に分類した。

- 1 類 隆線上刻み、8字状添付文の深鉢。内面に1条沈線が巡る堀之内式土器(Fig. 78-141)
- 2 類 平行沈線による磨消縄文を持つ加曽利B式土器 (Fig. 78-142・144・148)
- 3 類 格子状沈線文を持つもの (Fig. 78-146)
- 4 類 注口土器 (Fig. 78-143)

平行沈線文で構成される。沈線間には鎖状のモチーフから変化したと思われる刻みがみられる。 調整は十分になされた精製土器である。

- 5 類 無文で口縁内面に沈線を1条有するもの (Fig. 78-145)
- 6 類 縄文施文の土器 (Fig. 78-147)

無節しの縄文が外面に施文される。口縁内面に沈線が1条施文される。

分 布 台地の鞍部の中央東側のX110~X120、Y100~Y110Gに小範囲で集中する。さらに南端にも点 在をみせる。

2 石器

縄文時代の石器は、総数3,702点が出土している。これらの器種別内訳はTab.14にしめした。このうち遺構覆土から35点出土しており、残り3,667点が包含層から出土した。包含層から出土した石器は同一層準から出土したものであるため、時期の比定が困難である。今後、遺構出土石器の組み合わせや、包含層の詳細な検討を経なければならない。土器を見るとVII群、VIII群、IX群土器が量的に多いため、石器の器種にもそれらの時期が反映していることは十分考えられる。

1) 遺構出土の石器

土 坑

土坑出土の石器についてはTab.12にまとめた。遺構の性格から際立った器種の出土をみない。 石器配置遺構 (Fig.82)

X100-Y134グリッドから刃部を北に向け側面を天地にした状態で向かい合って出土したことから、Z-1号石器配置遺構と命名した。 Z-1出土の $39\cdot41$ は、2点とも片面に自然面を残す大形の撥形を呈する黒色頁岩製の石斧である。

この他に、X114-Y115グリッドから打製石斧が2点出土している。2点とも片面に自然面を残す、全長20cmを超える大形の分銅形石斧である。石材は黒色頁岩を用いる。2点出土したことや石器の大きさから、石器配置遺構であったことが推定される。

2) 縄文時代包含層出土の石器

有舌尖頭器 (Fig. 79) 4 は全長3.9cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm、重さ3.2gを測り、X95-Y104グリッドから出土した。5 は全長5.6cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重さ4.5gを測り、X93-Y102グリッドから出土した。6 は全長6.7cm、幅2.2cm、厚さ0.6cmを測り、X123-Y141グリッドから出土した。いずれも黒色頁岩製である。

石鏃 (Fig. 79) 7はH-15号住居址脇から出土した黒曜石の局部磨製石鏃である。図示しなかったが、この他にX107-Y103グリッドから黒曜石製の局部磨製石鏃が出土している。

石匙・削器(Fig. 79·83) このほか8・9は縦長の祖形石匙である。10・11は削器状の調整を両側縁に行った後、潰しを施している用途不明の石器である。 12・13・43・44は削器である。

打製石斧 (Fig. 80·81) 14~42は打製石斧である。片刃形のものが大部分を占め、これらは石篦との関連を有する。

礫器 (Fig. 83) 45・46は礫器、

石皿 (Fig. 83) 47は石皿で表裏に凹みがある。

スタンプ形石器 (Fig. 84・85) 48~61・63はスタンプ形石器である。

三角錐形石器 (Fig. 86) 62・64~66は三角錐形石器である。

3) 石材

石材は7が黒曜石、10が頁岩、21が点紋頁岩、35・49が輝緑岩、36が灰色安山岩、38・62が変質玄武岩、47・48が輝石安山岩(粗粒)、50・52・60が輝石安山岩(細粒)、57が珪質頁岩、61がひん岩、63が石英閃緑岩であり、それ以外は黒色頁岩である。

Tab. 15の柳久保遺跡包含層の縄文石器集計表をみると、石鏃140点と削器81点、打製石斧99点、スタンプ形石器33点、多面体磨石24点が目立っている。土器とのかかわりについては、WI~IX群に対してまとまりをみせ、さらに、スタンプ形石器33点はⅡ群土器との関連もみられる。

第1群石材(A~C) 石鏃や楔形石器などの小形石器に利用される。

第2群石材(D~M)打製石斧、削器、スタンプ形石器、三角錐形石器と中形の石器に多用され、 石鏃にも加工される点も指摘しておきたい。

第3群石材(N~O)磨石、敲石、スタンプ形石器、特殊磨石に利用される。

第4群石材(Q・R)第3群石材との共通をみるが、石皿等の大形石器の利用が増加する。

4) 遺物分布 (Fig. 70~73)

土器各群の占地が大きく変化しないため、差異を見いだすのは困難であった。石鏃は広範囲の分布を示すのに比べ、打製石斧や削器は東南部に分布する。三角錐形石器とスタンプ形石器や特殊磨石はX115~X122、Y120~Y130Gと共通した分布がみられ、IV・V群土器の分布と重なりをみせる。礫面や主要剥離面を大きく残すトランシェ様の打製石斧(打製石斧D)の分布は、X110~X120、Y116~Y128Gに集中するため、関連が指摘できる。

V 弥生時代の遺物

弥生土器 (Fig. 78、PL. 31)

奈良時代のH-50号住居址より混入の状態で、箆状工具による細い平行沈線文系土器149~158が出土した。総数52点で胎土は赤褐色を呈している。器表面は丁寧な篦削りの後に撫で加工を施しており、ほぼ壷1個体分の破片と推定される。いずれも小破片であり、文様構成は4単位の重層同心円文を交互施文していると考えられ、同心円文各単位の間にはそれらを充填するように、二条同時施文によると思われる平行沈線文が施文されている。胴部から頸部へ移行する部分は無文帯で「く」の字に外反して口縁部に至る。

これら渦紋のモチーフは、新潟県の山草荷式系あるいは、東関東の足洗式系の土器に特徴的なもので、本地区では荒砥前原遺跡 5 T・1 号住居址、5 T・2 号住居址、荒口前原遺跡、荒砥島原A区11号住居址、鶴谷遺跡群 II、伊勢崎市西太田遺跡136号住居址で検出されている。また、本遺跡と

隣接する県調査の頭無遺跡では長野県の百瀬式(竜見町式)土器を出土した住居址も調査されており、これらのものと関連性を示すものと推定される。

本遺跡と文様構成が類似すると思われる荒口前原遺跡例は、百瀬式(竜見町式)の甕と山草荷 I 式土器の搬入品、在地系とおもわれる縄文施文の壷に、種々雑多の外来系要素が折衷した土器群で構成されている。

Tab. 12 柳久保遺跡縄文土坑の土器集計表

遺構名	II B¥	m 8#	VII 8F	IX 8#	会計
JD-35号土坑			7		7
JD-36号土坑			4	1	5
JD-38号土坑	3	1	6	1	11
JD-40号土坑			5	1	6
JD-41号土坑		1			1
JD-56号土坑			6		.6
合計	3	2	28	3	36

Tab.13 柳久保遺跡縄文土坑の石器集計表

器種名	削器	打製石斧	石槟	剃开	合計
JD-24号土坑	1				1
JD-35号土坑				7	7
JD-36号土坑				3	3
JD-38号土坑		2		10	12
JD-40号土坑		1	1	10	12
JD-41号土坑	1			1	2
JD-56号土坑				4	4
JD-59号土坑	1				1
습위	3	3	-1	35	42

Tab. 14 柳久保遺跡包含層の縄文土器 集計表

集計表											
	数量	煮数	al la								
Ⅱ群	撚糸文	415	7.8								
Ⅲ群	無文	170	3. 2								
IV群	無文繊維	253	4.8								
V群	沈線文	307	5. 8								
VI群	押型文	19	0. 4								
VII群	条痕文	850	16. 1								
VII群	繊維縄文	585	11. 1								
IX群	竹管文	1, 718	32. 5								
X群	縄文中期	68	1. 3								
XI群	縄文後期	207	3. 9								
不明		700	13. 1								
合計		5, 292	100, 0								

Tab. 15 柳久保遺跡包含層の縄文石器集計表

石材	Ă	В	С	D	E	F	6	H	1	J	K	T.	М	Ñ	0	P	Q	R	S	7	
器種	思盟石	チャート	建質質器	赤色建賀寶岩	四色 页 程	政治	队色安山岩	灰色安山岩	受政安山岩	細粒安山岩	文祭班岩	ホルンフェルス	関級岩	石英闪綠岩	ひん岩	樹精艇灰岩	点故脉色片岩	机粒安山岩	砂岩	その他	合計
有舌 尖頭器					3																3
石鏃	38	48	5		19		24											1		流紋2 擬砂1 砂頁1 珪擬2	140
楔形石器		2																			2
削器	3	1			70		3					3								珪凝1	81
打製石斧			1	1	83	1		6		2		1	2			1				ガ安1	99
磨製石斧												1								変輝2	3
礫器					10	1				2								1			14
凹石																	15				18
磨石														3	1		12				16
敲石									1					2			10				18
スタンプ 形石器			1		14					3	1			3	3	1	4			石班1 花崗1 変デ1	33
特殊 磨石														5	4		13			石斑1 花崗1	24
三角錐 形石器					9							1								玄武1	11
石皿																	5				5
石核					2																2
剥片	152	145	8	10	2, 585	86	140	27	4	24		1			1	3	24	8	2	砂玄流红 石石建 石 工	3, 236
その他					1	3															4
合計	193	196	15	11	2, 796	91	167	33	ħ	31	3	10	2	13	9	ő	83	10	2	32	3, 702

註)その他の石材の略称については下記のとおりである。 砂頁…砂質頁岩 珪凝…珪質凝灰岩 流紋…流紋岩 凝砂…凝灰岩質砂岩 ガ安…ガラス質安山岩 変輝…変質輝緑岩 石斑…石英斑岩 花崗…花崗岩 変デ…変質デイサイト 玄武…玄武岩 石英…石英

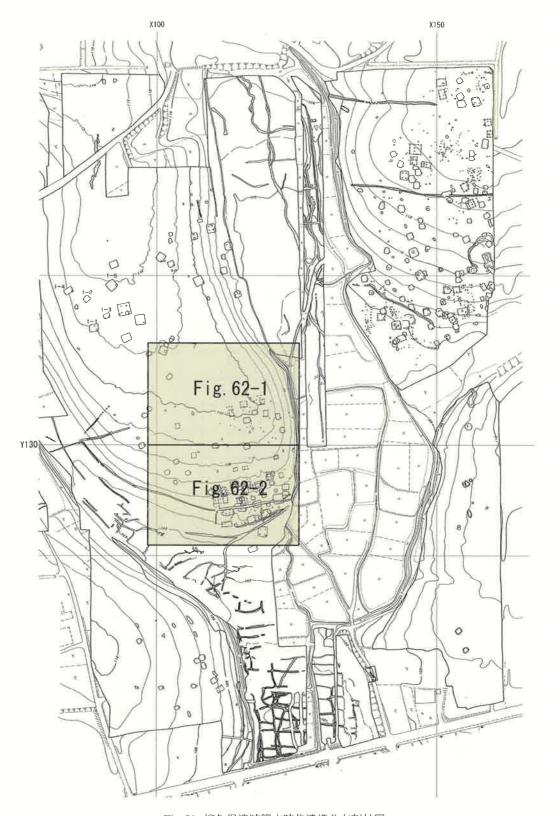


Fig. 61 柳久保遺跡縄文時代遺構分布割付図

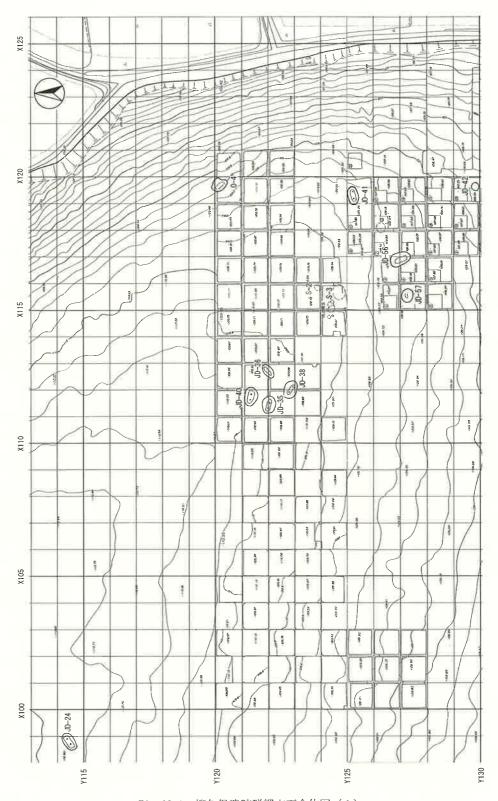


Fig. 62-1 柳久保遺跡群縄文面全体図(1)

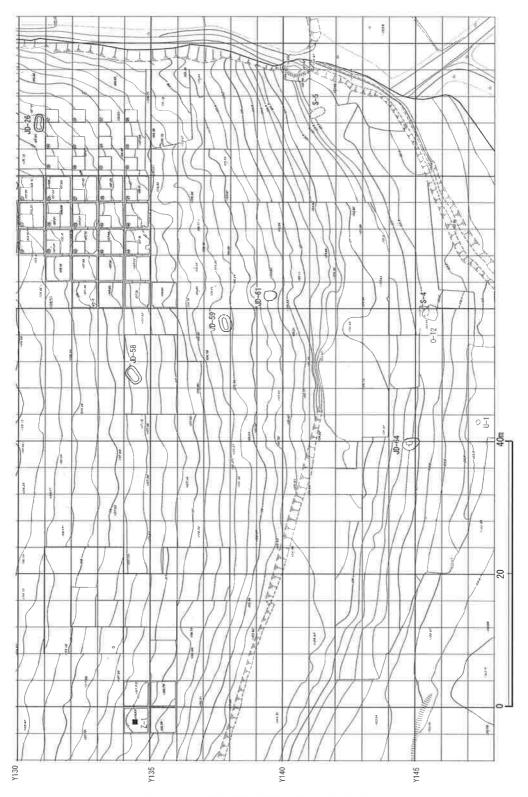


Fig. 62-2 柳久保遺跡群縄文面全体図 (2)

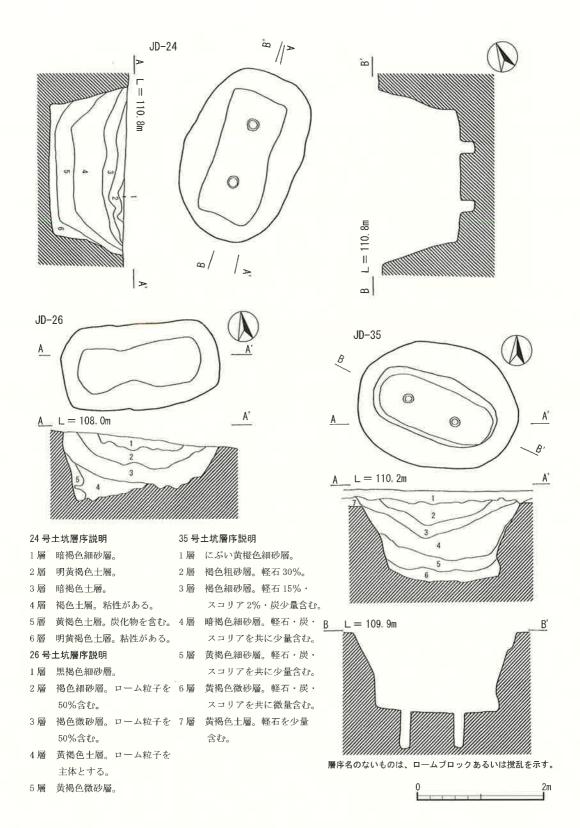


Fig. 63 柳久保遺跡 J D - 24 · 26 · 35 号縄文土坑

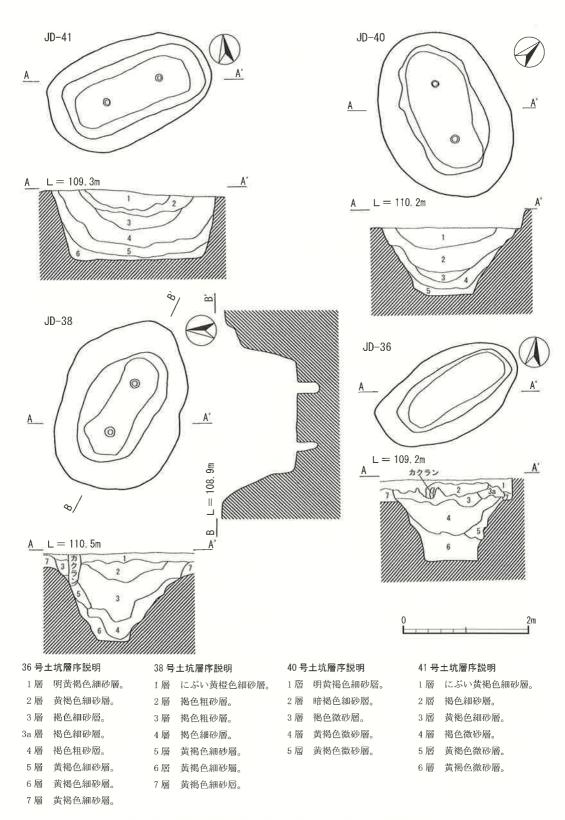
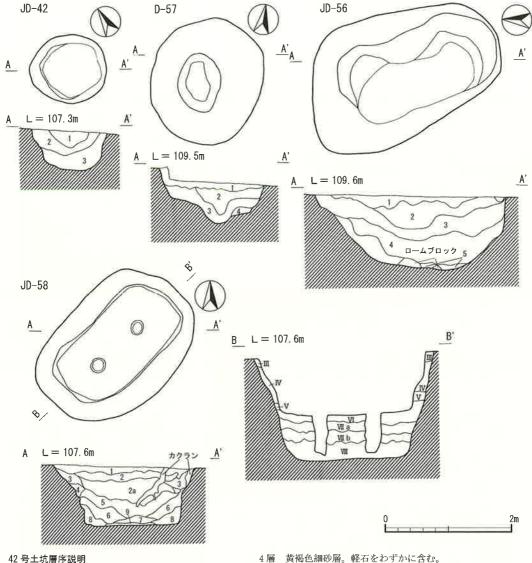


Fig. 64 柳久保遺跡 J D - 3 6 · 3 8 · 4 0 · 4 1 号縄文土坑



- 1層 暗褐色細砂層。軽石を少量含む。
- 2層 褐色細砂層。軽石を少量含む。
- 3層 褐色微砂層。炭をわずかに含む。

56 号土坑層序説明

- 1層 褐色細砂層。ローム粒子を20%含む。
- 2層 黄褐色細砂層。炭化物をわずかに含む。
- 3層 褐色細砂層。軽石・ローム粒子を含む。
- 4層 褐色細砂層。軽石・ローム粒子を含む。
- 5層 黄褐色微砂層。ローム粒子を10%含む。

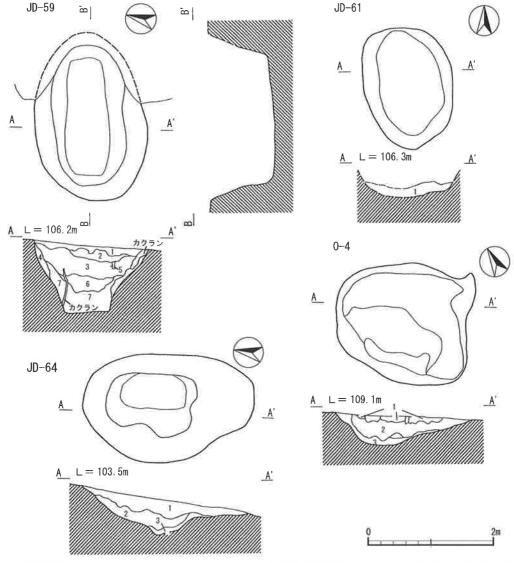
57 号土坑層序説明

- 1層 褐色細砂層。軽石5%含む。
- 2層 暗褐色細砂層。軽石5%含む。
- 3層 黄褐色細砂層。軽石3%含む。

58 号土坑層序説明

- 1層 褐色粗砂層。軽石少量・ローム粒子を10%含む。
- 2層 褐色細砂層。軽石17%・ローム粒子を7%含む。
- 2a 層 褐色細砂層。軽石 25%・ローム粒子を含む。
- 3層 黄褐色細砂層。軽石8%・ローム粒子2%含む。
- 4層 黄褐色細砂層。軽石7%・スコリア・ローム粒子を含む。
- 5層 明褐色細砂層。軽石35%を含む。
- 6層 黄褐色細砂層。軽石13%・ローム粒子30%含む。
- 7層 褐色微砂層。軽石3%・ローム粒子5%含む。
- 8層 黄褐色細砂層。軽石7%・ローム粒子2%含む。
- 9層 褐色微砂層。軽石をわずかに含む。

Fig. 65 柳久保遺跡 J D - 4 2 · 5 6 · 5 7 · 5 8 号縄文土坑



59 号土坑層序説明

- 1層 褐色細砂層。軽石12%・ローム粒子を40%程度含む。
- 2層 暗褐色細砂層。軽石26%・炭化物・ローム粒子をわず かに含む。
- 3層 褐色細砂層。軽石を30%・ローム粒子を10%含む。
- 4層 黄褐色細砂層。軽石3%・ローム粒子をわずかに含む。
- 5層 黄褐色微砂層。軽石を7%含む。
- 6層 褐色微砂層。軽石8%・ローム粒子を5%含む。
- 7層 褐色微砂層。軽石7%・ローム粒子を20%含む。

64 号土坑層序説明

1 層 黒褐色微砂層。軽石を $10 \sim 15\%$ ・ローム粒子を 20 $\sim 25\%$ 含む。

- 2層 黒褐色微砂層。軽石を15~18%・ローム粒子を2%含む。
- 3 層 明黄褐色微砂層。ローム粒子 $30 \sim 40\%$ ・軽石 2%含む。

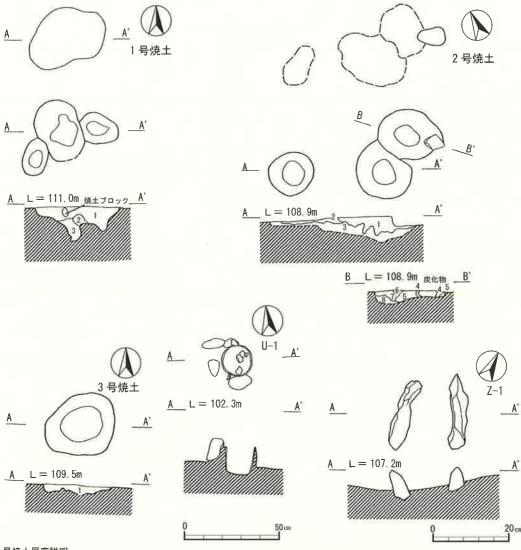
61 号土坑層序説明

1層 褐色微砂層。

4号落ち込み層序説明

- 1層 褐色細砂層。軽石10%・ローム3%含む。
- 2層 褐色細砂層。ローム10%・軽石7%・焼土1%を 含む。
- 3層 明褐色細砂層。軽石5%を含むロームの層である。

Fig. 66 柳久保遺跡D-59・61・64号縄文土坑・O-4号落ち込み



1号焼土層序説明

- 1層 褐色細砂層。しまり良い。粘性やや有り。軽石3%・ ローム粒子1%・焼土ブロック1%を含む。
- 2層 明黄褐色細砂層。しまり良い。粘性あり。軽石をわ ずかに含む。
- 3層 褐色細砂層。しまり弱い。粘性ややあり。焼土2%。 軽石・ロームをわずかに含む。

2号焼土層序説明

- 1層 暗褐色微砂層。しまりあり。粘性ややあり。軽石1%・ 焼土粒子を1%含む。
- 2層 褐色微砂層。しまりあり。粘性ややあり。焼土ブロッ クを若干含む。
- 3層 褐色微砂層。しまりあり。粘性あり。軽石1%含む。 炭化物の混入が認められる。

- 4層 暗褐色微砂層。しまりある。やや粘性に欠ける。軽石 1%・焼土粒1%含む。炭化物の混入が認められる。
- 5層 褐色微砂層。しまり、粘性ともにあり。軽石1%・焼土 粒3%含む。若干の炭化物が認められる。
- 6層 褐色微砂層。しまりはある。粘性にやや欠ける。軽石 と焼土粒を若干含む。
- 7層 褐色微砂層。しまりある。粘性やや欠ける。2・3層よ りやや明るい褐色である。
- 8層 暗褐色微砂層。しまりある。粘性ある。軽石1%含む。

3号焼土層序説明

1層 赤褐色微砂層。焼土層。しまりあり。粘性なし。ロー ム粒子を 20%含む。

Fig. 67 柳久保遺跡1~3号焼土・U-1号埋設土器・Z-1号石器配置遺構

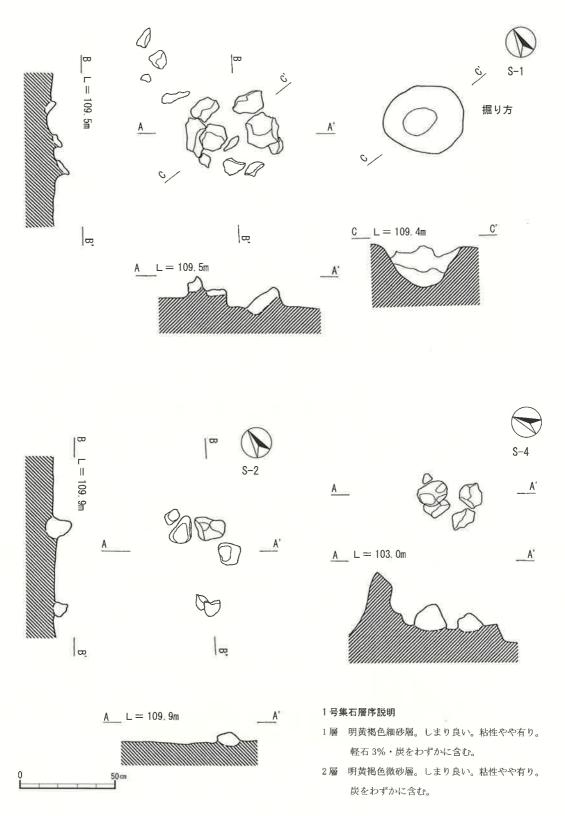


Fig. 68 柳久保遺跡S-1・2・4号集石

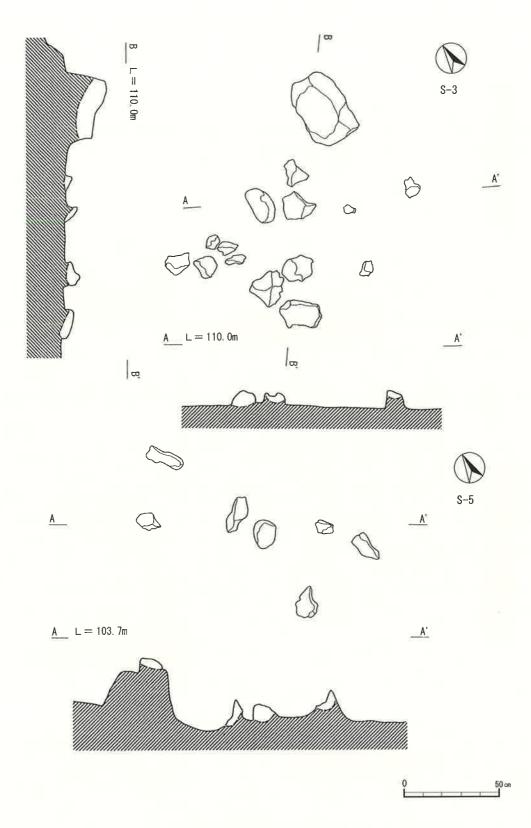


Fig. 69 柳久保遺跡 S-3·5号集石

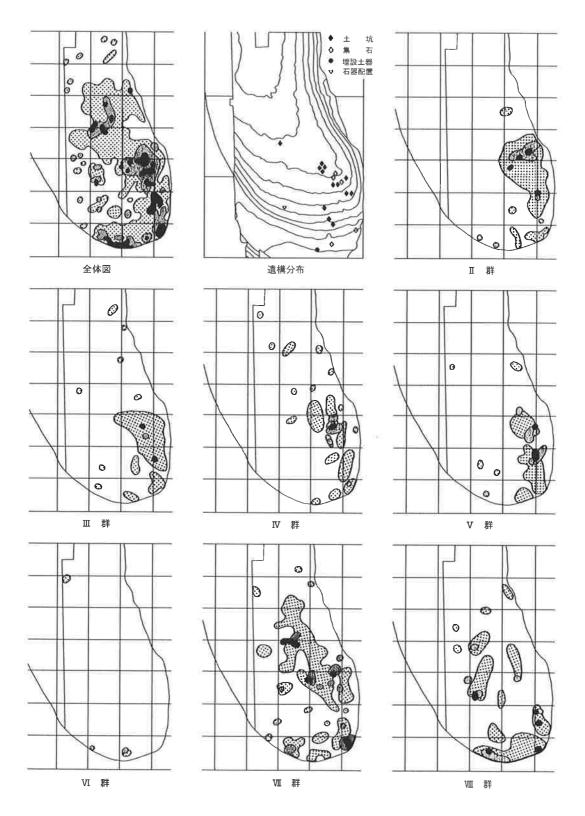


Fig. 70 柳久保遺跡縄文包含層遺物分布 (1)

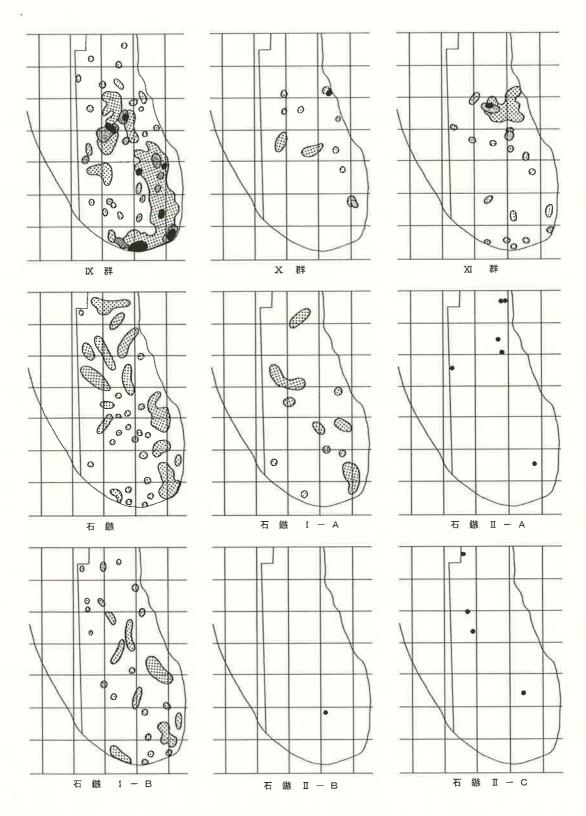


Fig. 71 柳久保遺跡縄文包含層遺物分布(2)

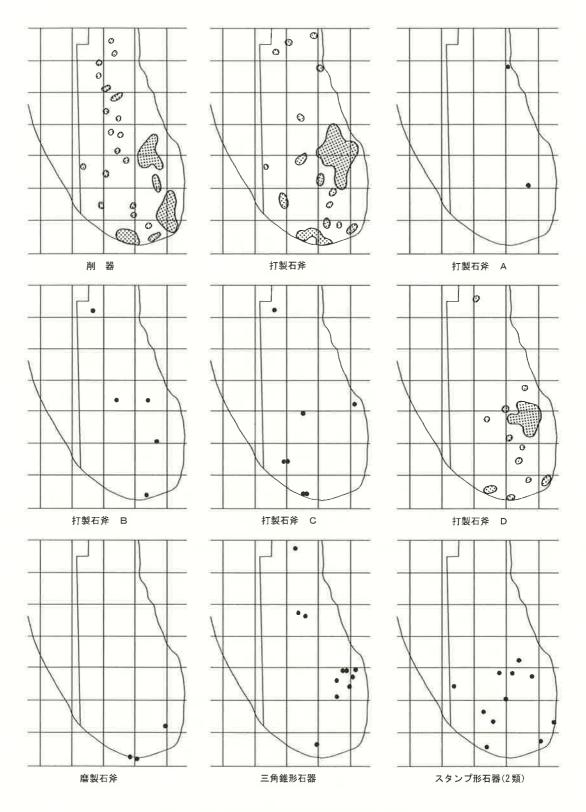
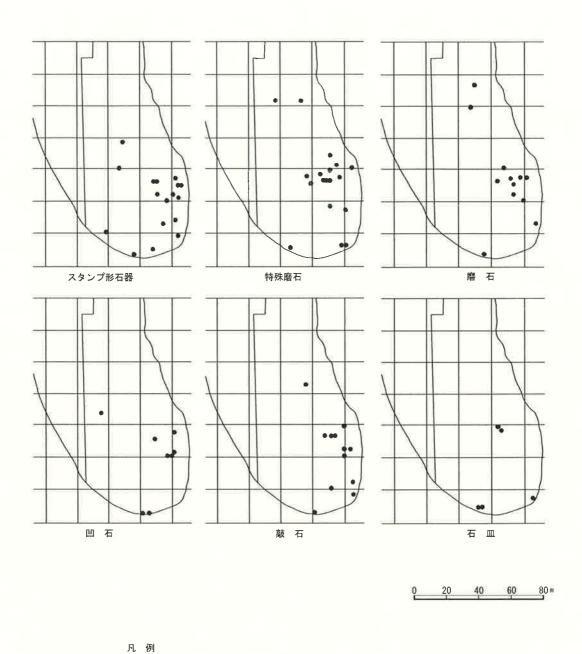


Fig. 72 柳久保遺跡縄文包含層遺物分布 (3)



1 ~ 4 点

5 ~ 14 点

注) 分布図上のスクリーントーンの使用は 1 が リット内(4m 四方)
出土点数を元に概念的に構成したものである。丸印のドットで示
したものは丸 1 個が石器 1 点に該当する。

Fig. 73 柳久保遺跡包含層遺物分布(4)

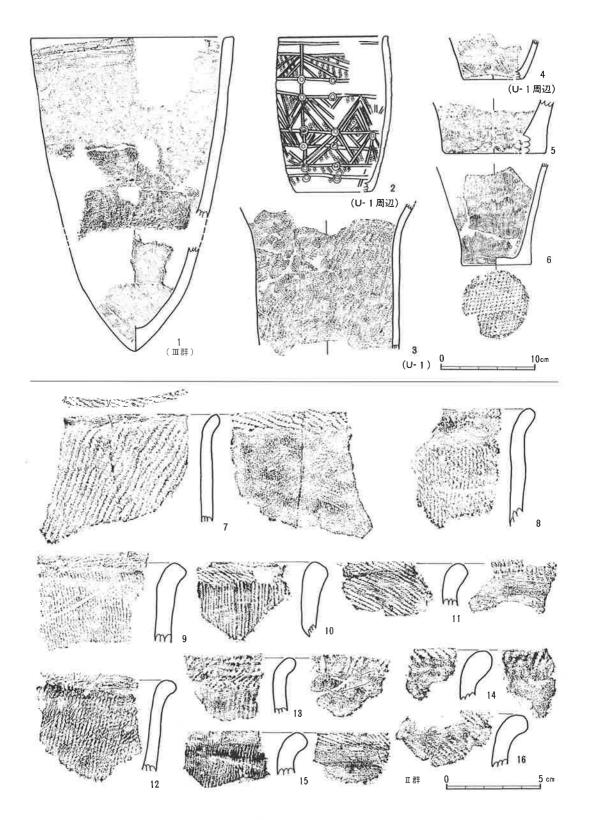


Fig. 74 柳久保遺跡U-1、包含層の縄文土器 (1)

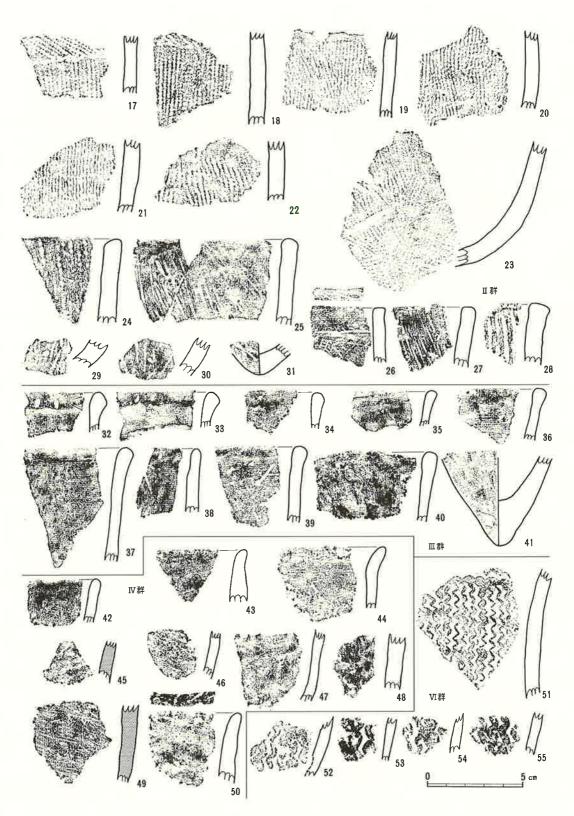


Fig. 75 柳久保遺跡包含層の縄文土器 (2)

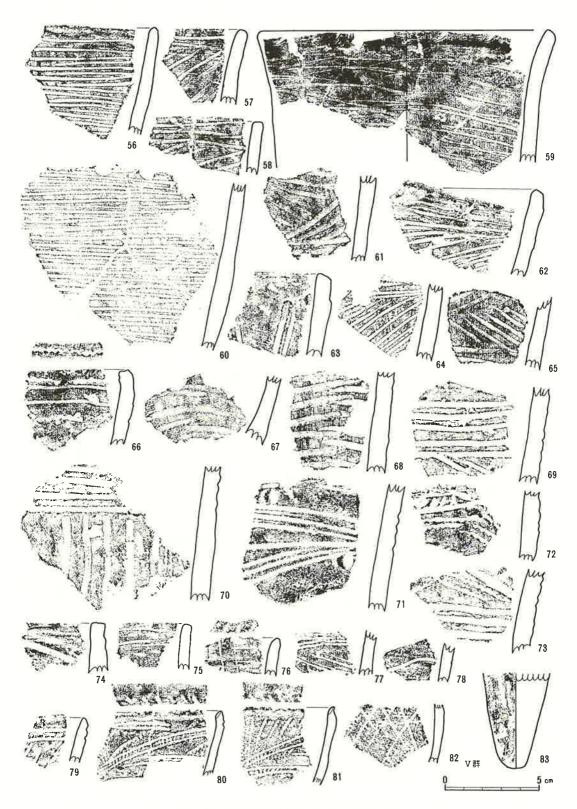


Fig. 76 柳久保遺跡包含層の縄文土器 (3)

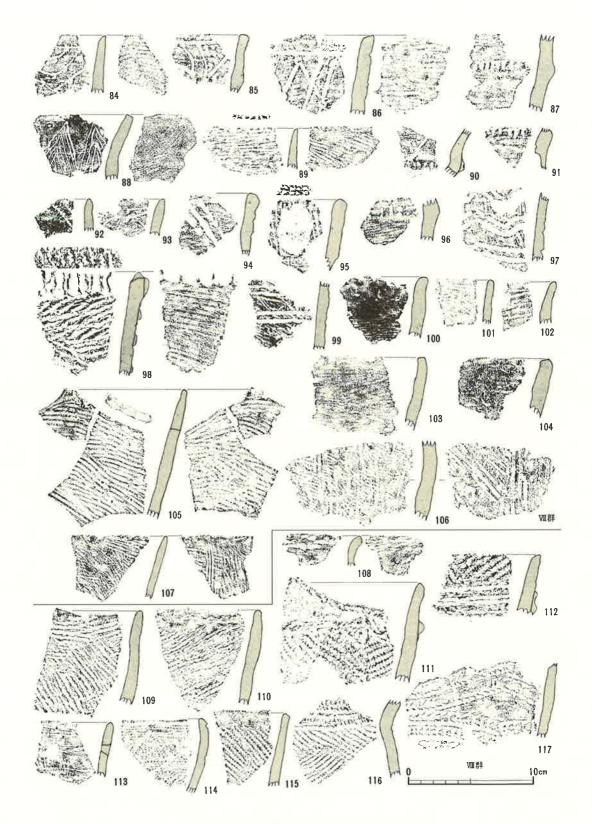


Fig. 77 柳久保遺跡包含層の縄文土器 (4)

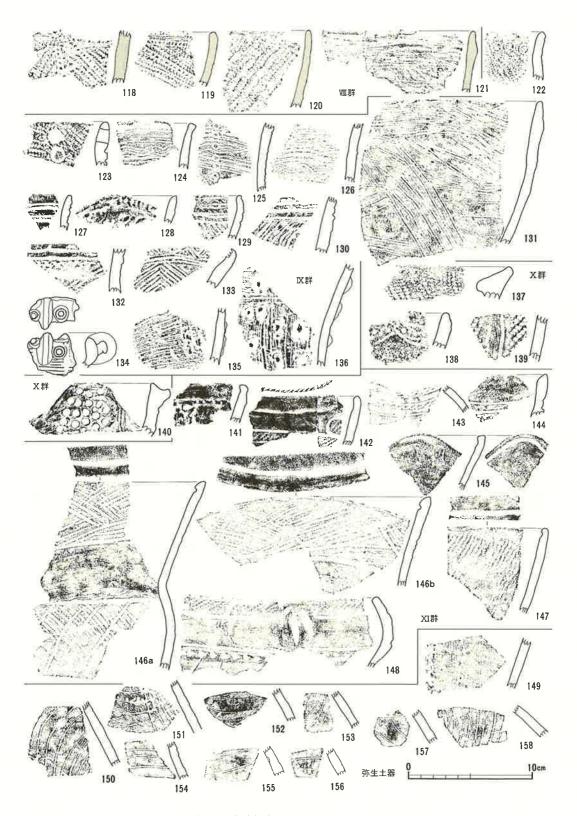


Fig. 78 柳久保遺跡包含層の縄文土器と弥生土器 (5)

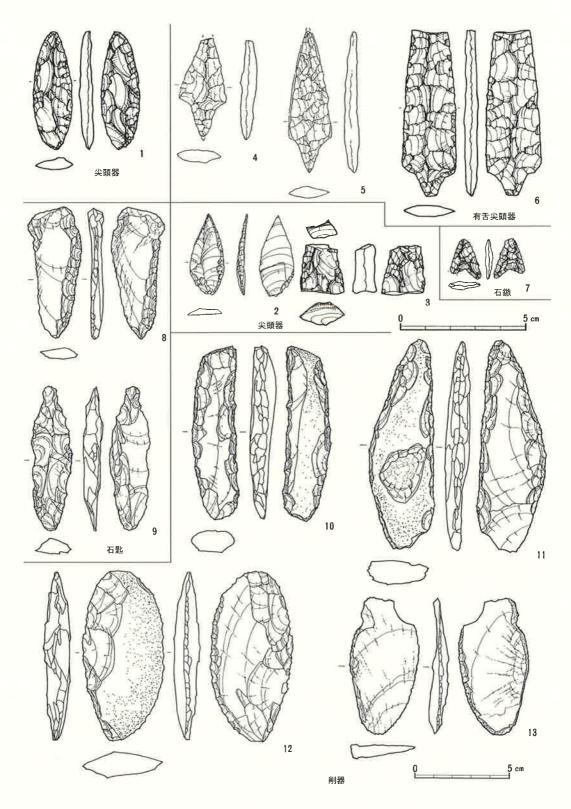


Fig. 79 柳久保遺跡の旧石器・縄文包含層の石器 (1)

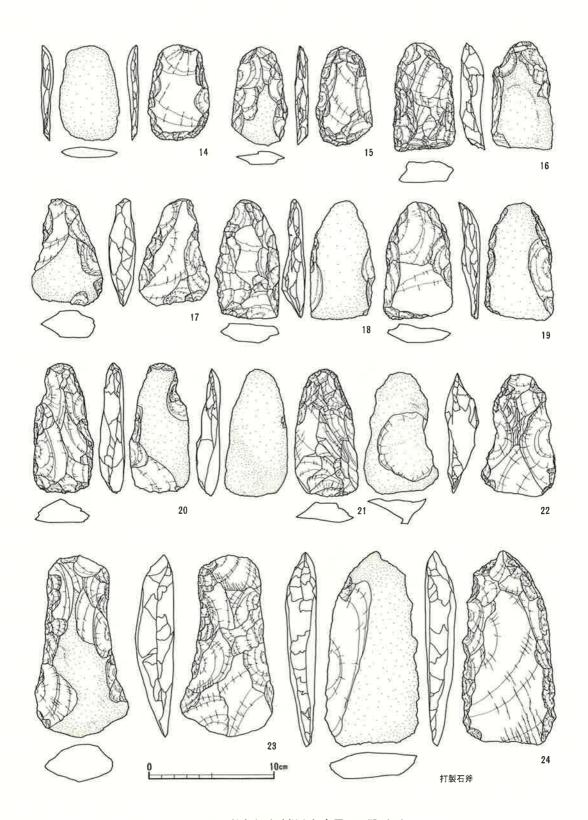


Fig. 80 柳久保遺跡縄文包含層の石器 (2)

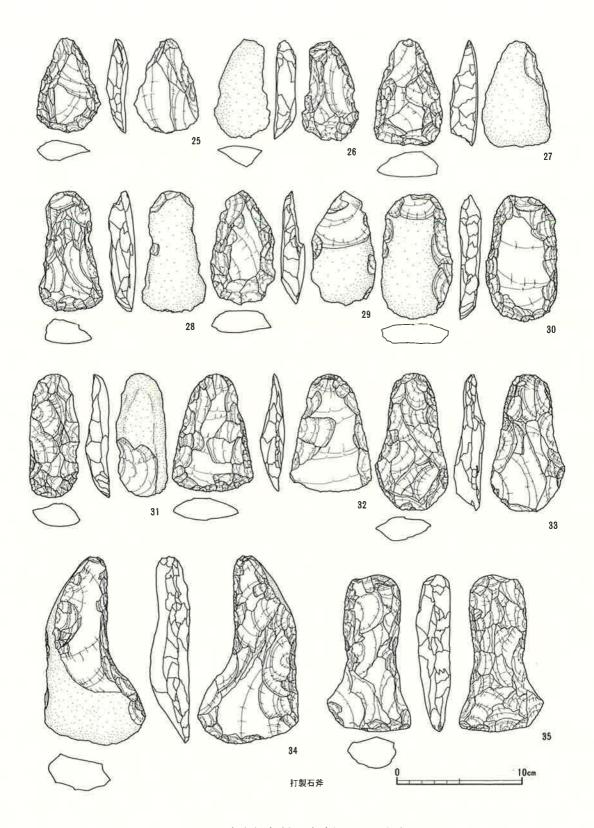


Fig. 81 柳久保遺跡縄文包含層の石器(3)

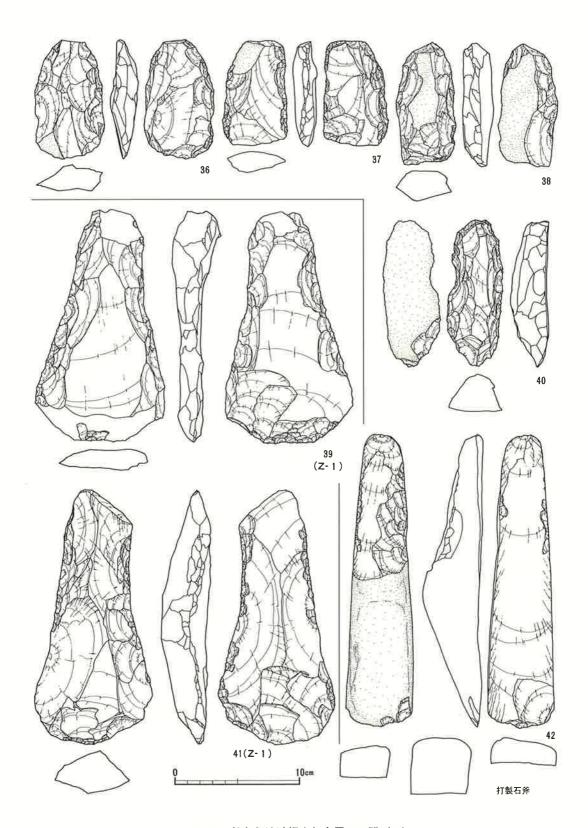


Fig. 82 柳久保遺跡縄文包含層の石器 (4)

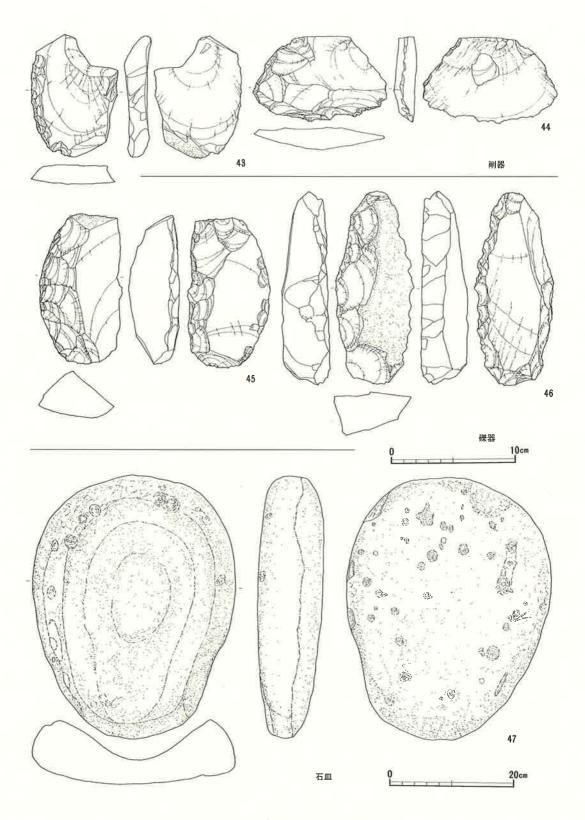


Fig. 83 柳久保遺跡縄文包含層の石器 (5)

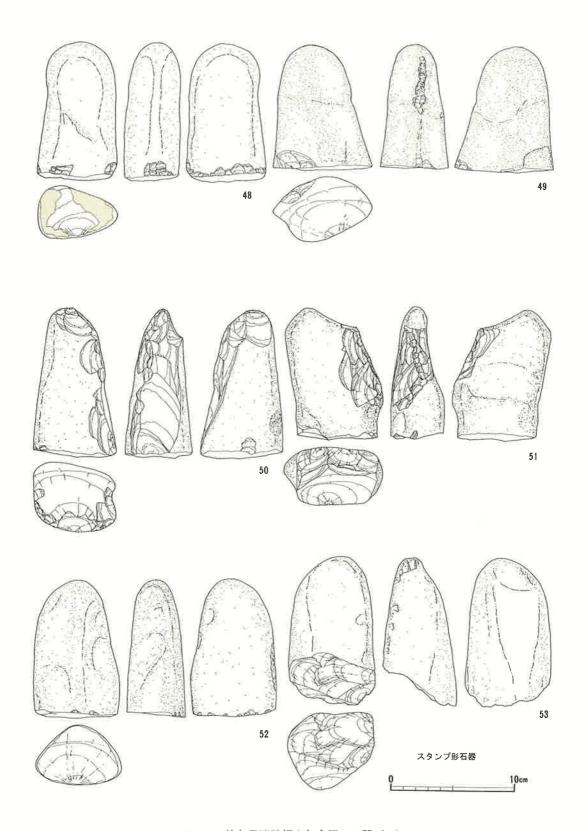


Fig. 84 柳久保遺跡縄文包含層の石器 (6)

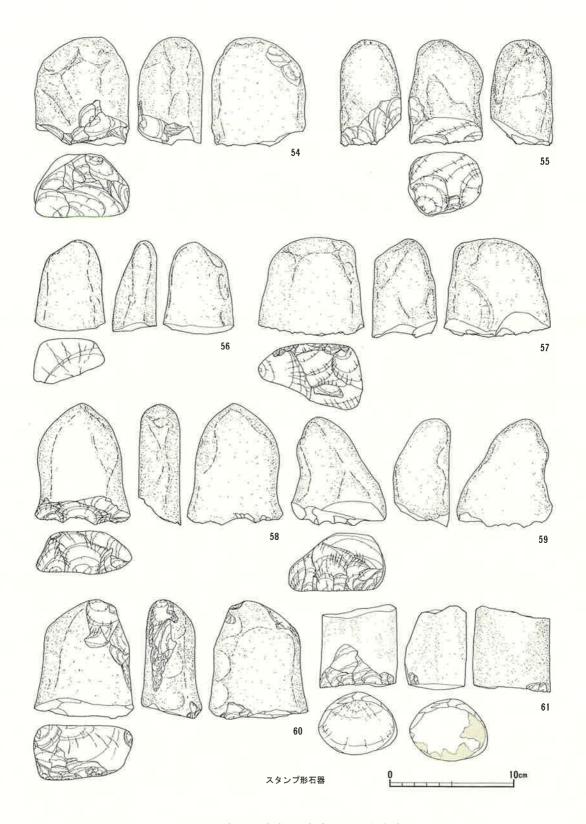


Fig. 85 柳久保遺跡縄文包含層の石器 (7)

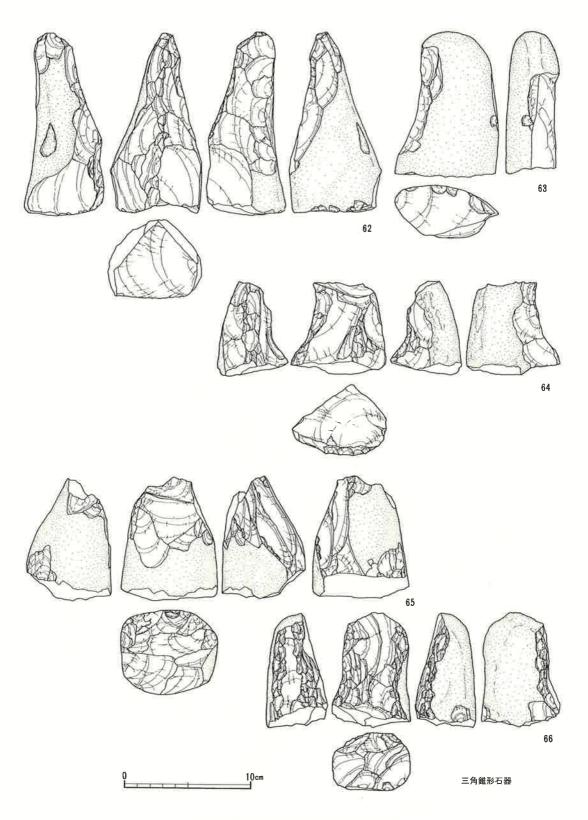
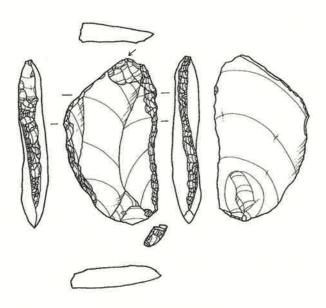


Fig. 86 柳久保遺跡縄文包含層の石器 (8)



第3部 成果と問題点



頭無遺跡出土荒屋型彫器



第3部 成果と問題点

柳久保遺跡群の発掘調査事業は、昭和57年度から昭和62年度の足掛け6年にわたって実施された。 まず、昭和57年度末に分布調査の実施、昭和58年度に現況図の作成・平面座標杭と水準杭の設置、 昭和59年度に幹線道路と宮川河川改修部分の発掘調査と全域の試掘調査を行った。本格的な発掘調 査は、昭和60年度から昭和62年度まで3カ年にわたって実施された。62年度は最終年度であること から初年度からの遺物を展示し現地説明会を行ったところ多数の参加があった。

現在、柳久保遺跡群の地は城南住宅団地として続々と住宅が立ち並ぼうとしている。調査地には、 やがて新しいコミュニティーが形成され新しい人々の歴史が刻まれようとしている。

調査の結果、当初の予想をはるかに上回る成果を挙げることができた。これら成果の詳細は『柳 久保遺跡群 I ~Ⅷ』発掘調査報告書(1985~1988)に譲るとして、ここでは簡潔に各遺跡毎の成果 を観て行きたい。

- 1 下鶴谷遺跡 旧石器時代の遺物、縄文・奈良時代の遺構・遺物がまとまって検出された。この中で縄文時代草創期の撚糸文土器群や復元された鵜ケ島台式土器は特筆されるものである『柳久保遺跡群IV (1987)』『柳久保遺跡群 V (1988)』。
- 2 柳久保遺跡 旧石器〜奈良時代の遺構・遺物が多量に発見された。台地全面に及ぶ調査は古墳時代前期から奈良時代の集落が検出され、集落構成を考える上で台地全体の調査を行ったため完結性を帯びるため貴重なものとされるほか、縄文時代早期沈線文系土器や早期末葉の条痕文土器群もまとまって検出された『柳久保遺跡群 I (1985)』、『柳久保遺跡群VII (1988)』『柳久保遺跡群VII (1988)』。
- 3 諏訪遺跡 柳久保遺跡の西に位置する諏訪遺跡からは縄文・古墳時代の遺構・遺物が散見された。この中で古墳時代の溝は前山遺跡で検出された溝と接続が考えられるものである『柳久保遺跡群Ⅲ (1988)』。
- 4 中鶴谷遺跡 縄文時代・古墳〜平安時代にいたる遺構・遺物が多数検出された。特に『田部』とかかれた20点を超える墨書土器の発見は「上西原遺跡」との関連や本地域の律令体制を考える上で興味深いものであった。『柳久保遺跡群VI(1988)』
- 5 頭無遺跡 旧石器・縄文・古墳・平安時代の遺構・遺物が検出された。特に旧石器時代の文化層が3時期にわたって検出され、第 I 文化層と呼んだ最上部の荒屋型彫器を伴う細石刃文化石器群は群馬県内で初出例である。また、赤城山麓でも標高300~400m地帯に多くみられる「陥し穴」がまとまって検出されたため、赤城南麓一帯に「陥し穴」が分布することが判明した『柳久保遺跡群VIII (1988)』。
- 6 柳久保水田址 As-B層下面で平安時代の埋没水田が広範囲にわたり検出できた。柳久保水田址における水田耕作はプラント・オパールの分析によってHr-FA以降という結果が出されている。また、

As-B層下面で検出された墨画土器を含む一括遺物は『古語拾遺』の記載と関連を有する祭祀跡と考えられる『柳久保遺跡群 I (1985)』。

この他に古墳が柳久保遺跡から4基、中鶴谷遺跡から1基検出されている。いずれも7世紀後半のものである。

I 旧石器時代の文化層と遺物

旧石器時代の遺物は下鶴谷遺跡・柳久保遺跡・柳久保水田址・頭無遺跡から発見された。下鶴谷 遺跡では尖頭器2点、柳久保遺跡からは尖頭器3点、暗色帯下部から出土した台形様石器1点、剥 片2点がみつかっている。また、柳久保水田址からも尖頭器1点出土している。

頭無遺跡からは3枚の文化層が重複して検出された。まず上部の第 I 文化層は細石刃文化石器群に所属するもので合計426点の石器が出土した。中間の第 II 文化層からは台形様石器とナイフ形石器と剥片3点が認められ、下部の第 III 文化層から台形様石器2点と使用痕のある剥片1点が検出された。

頭無遺跡では南面する幅200mの丘陵性台地の西斜面で3枚の文化層が検出された。このうち第 I 文化層と呼んだ細石刃文化石器群は東西40m×南北36m、面積約900㎡の範囲から検出された。さらに分布は南と西に延びることが十分に考えられたが、その部分は残念ながら現存していない。 細石刃文化層の上部には縄文時代の包含層が存在していたため、当初この区域から700点近い遺物が登録されたが、分類の結果、426点となった。

細石刃文化石器群は検出時に垂直分布に幅はあったものの浅間黄色軽石層 (As-YP) と浅間白糸軽石層 (As-SP) の間に位置付けられる。このことは宮城村桝形遺跡や粕川村栗原東遺跡同様な結果がみられたことから、群馬県内の細石刃文化石器群の包含層位は、As-YP降下以前でAs-SP降下以降の時期に位置付けが考えられる。また、細石刃文化の年代は浅間黄色軽石層 (As-YP) の絶対年代が13,000年と出されていることから、少なくともそれ以前であって近接していることが考えられる。

細石刃文化層からは細石刃核1、細石刃核関連用品4、細石刃121、彫器9(7)、彫器削片15、掻器2、削器9、凹刃削器1、敲石1、使用痕ある剥片15、剥片216、砕片31が出土している。これをみると、道具の総数が少なく、掻器・削器も形態的に確立したものはなく貧弱である。彫器7点のうち2点は欠損していた。敲石が僅かに1点認められたが磨石等の加工用具は認められなかった。

このうち彫器は縦長剥片を素材とし、周辺に調整が加えられ左肩に1条グレイバーファシットが加えられる。ファシットは直角方向から先端部にいくとやや主要剥離面側にねじれる特徴から荒屋型彫器の範疇に含まれるものである。

また、細石刃核はスポールや細石刃等から数点の存在が予想されるが、完全なものは1点であっ

た。この細石刃核は両面調整のブランクを製作し長軸から2回のスポールを剥取するもので、作業面からみた場合に打面がやや斜めに形成される特徴を有する。これらの特徴から広義の湧別技法札滑型に属するものであるがスポールが末端まで抜けないで短く剥取される。この細石刃核にともなう同一母岩資料がまったくみられないことからブランクの状態で搬入され、想像をたくましくするならば、片面にみられる磨痕は移動中につけられた可能性も考えられる。細石刃は長さが最大のもので6.3cmを測るものが認められた。微調整は荒屋遺跡に似るが、細石刃の大きさは荒屋遺跡が4mm程度のため後野遺跡に類似する。

また、細石刃以外の道具の素材を作成した石核がみられないため、角二山遺跡で確認されたように 細石刃核ブランク作成の際に生じた剥片を積極的に道具に用いていることが考えられよう。桝形遺 跡や沖餅遺跡などで検出された石刃は本遺跡では認められなかった。

次に細石刃文化石器群の石器石材をみると珪質頁岩が426点中に83% (354点)を占め、なおかつ、ほとんどの道具に使用されている。他の石材は僅かに、敲石にホルンフェルス(1点)、掻器にチャート(1点)、細石刃に黒曜石(4点)が用いられているだけである。地元産の石材である黒色頁岩や黒色安山岩、粗粒安山岩などの出土はみられるが製品としての利用は認められない。

昭和48年に実施された桝形遺跡第2次調査では379点の石器が出土し、その石材の内訳は、黒色頁岩が66%(250点)、チャートが9%(33点)であり、珪質頁岩は10.6%(40点)と少なく、黒曜石が全く使用されてない。また、峯岸遺跡の細石刃文化の石材にも珪質頁岩は認められず、本遺跡の細石刃文化の特徴の1つとして、石材に珪質頁岩を多用することであり、他の石材は石器として用いないという点である。このように本遺跡の石器群は、ひいては荒屋型彫器を有する石器組成には珪質頁岩の使用という極めて強い規範が周辺地域でも認められた。

現在、群馬県内では珪質頁岩の産出地が押さえられていないことや、仮にあっても多量な石器素材を提供できるかどうか今後の課題である。群馬県内にも珪質頁岩の産出する可能性は強いが(註3)、現段階では、本遺跡に搬入された珪質頁岩は、大量の石器製作が行われた荒屋遺跡のある魚野川流域が候補地としてあげられる。

この他に搬入石材である黒曜石が13点を数え、このうち12点は同一母岩であった。同一母岩資料のうち剥片1点(U-57GNo.10)の分析を鈴木正男教授らに依頼した。その結果、箱根系畑宿産(註4)という報告をいただいた。

これらの石器群はおよそ10ケ所の集中をみせ、集中の大きさは4~6mの範囲で石器数は20~60点と多少のバラツキをみせている。接合関係をみると、 $1\cdot5$ 、 $1\cdot7$ 、 $2\cdot3$ 、 $2\cdot4$ 、 $2\cdot7$ 、の関係がとらえられ、個体別資料の分布はAとした箱根系畑宿産の黒曜石 $2\cdot7$ ~10にみられ、2と7に個体別資料A・C・Eが共通してみられる。このように個体別資料の分布や接合関係から集中は一時期に形成されたものと考えられ、外縁部の集中に珪質頁岩以外の石材が多く認められた。細石刃は $3\cdot5\cdot6\cdot10$ に集中し、彫器関係は $2\sim4$ に偏在し、さらに4から敲石が出土している。削器は $2\cdot6\cdot8$ にまとまる。 $1\cdot7$ からは剥片・砕片がまとまって分布がみられた。このように

各集中により機能の差異が想定され、さらに機能の類似する集中が隣接する傾向が読み取れた。

以上の様に頭無遺跡で検出された第 I 文化層の石器群は広義の湧別技法の細石刃核、荒屋型彫器、石材に珪質頁岩を有する山形県角二山遺跡に代表される東北日本的様相を持つものであり、従来から東北、北陸の日本海側に多く検出されてきた。近年、太平洋側で茨城県後野遺跡や千葉県木戸場遺跡で同様の資料が発見され、最近、神奈川県大和市長堀北遺跡での発見が報道された。

また、太平洋側における湧別技法と荒屋型彫器を持つ細石刃石器群の南限地帯に本遺跡は位置付けられる。湧別技法による細石刃文化石器群は東北地方の太平洋側で検出されていないことから頭無遺跡の石器群は日本海側から太平洋側に文化が伝播する経路に位置する遺跡といえよう。本遺跡の石器群は、荒屋型彫器の南限地帯に位置し、当該文化がこれより西方へ文化要素進出の前線基地として意味を持つものである。さらに、荒屋遺跡・月岡遺跡に代表される日本海側の遺跡と後野遺跡・木戸場遺跡等の太平洋側の遺跡を結ぶルート上に位置しで重要性があるものといえる。

このほかに群馬県内で細石刃文化の遺跡は「幌加技法」等による舟底形細石核を持つ宮城村桝形遺跡や富士見村龍ノ口遺跡があげられる。「野岳・休場型」細石刃文化の一群が新里村峰岸遺跡や大胡町田の上遺跡が挙げられる。今回の発見で、本遺跡で湧別技法と荒屋形彫器を持つグループが検出されたため細石刃文化における三者の存在が明確となった。三者の石材を比較した場合、本遺跡では珪質頁岩が圧倒的に多いが、「幌加技法」に基づく桝形遺跡の石材は黒色頁岩が主体的に用いられている。「野岳・休場型」である峯岸遺跡や武井遺跡の場合は黒曜石・チャートを主体としているようにそれぞれ石材の用い方に特色をみせている。今後、三者のこういった石材の違いや系統的関係、編年確立が研究の課題といえる。

Ⅱ 縄文時代の遺構と遺物

1 遺 構

本遺跡群における縄文時代の調査は、包含層、土坑や集石が中心となり住居址の検出も下鶴谷遺跡で6軒の検出に終わっている。それらは前期花積下層式期3軒、諸磯a式期3軒である。

今回、石器配置遺構と呼んだものが柳久保遺跡で1カ所、頭無遺跡2カ所で検出できた。石器配置遺構としたものは、包含層から極めて大型石斧が並列しながら刃部を赤城山に向けた状態で検出されたために注意を払った。

柳久保遺跡では打製石斧2点を平行に並べ立てて刃部を赤城山に向けた状態で出土した。頭無遺跡では打製石斧3点が刃部を赤城山に向けた状態で出土した。

今回の調査で、「陥し穴」といわれる土坑は諏訪遺跡で1基、下鶴谷遺跡で1基、中鶴谷遺跡9

基、柳久保遺跡10基、頭無遺跡36基の合計57基とまとまって検出された。頭無遺跡でまとまった数を検出できたことは調査手法の改善による。それは、遺構の検出面をハードローム層で確認したためである。包含層であるソフトローム層では縄文時代の遺構の検出はできない。他の遺跡でも同様な方法をとれば、現在検出されている数をかなり上回るものと考えられる。これらの「陥し穴」の時期は、WT群土器がまとまって出土していることから、その時期に該当するものと思われる。

頭無遺跡から検出された33基の「陥し穴」は、南北方向に延びる台地に展開する。地形的に見ると、南部から北部に向かって次第に谷が深くなる。検出されたいわゆる「陥し穴」も地形に沿って 北部に向かうにつれて多くなっている。

検出された「陥し穴」を、底部平面形や底部に存在するピットの数等の特徴により分類してみると、平面形は楕円形や小判形のものがほとんどである。平面形が楕円形のもので底部にピットを2個有するものは20基検出された。このうち、底面形が小判形のものが6基、分銅形のものが11基、長方形のものが3基であった。また、分銅形のものでオーバーハングしているものが3基検出された。特に、底面が小判形の $JD-1\cdot6\cdot7\cdot10\cdot31\cdot32$ 号土坑は、他の土坑に比べ開口部の広さも横幅もぐっと狭く、大人が1人入って動くのがやっとの広さしか有さない。壁も開口部方向に朝顔状に開くものでなく、ほとんど垂直的に掘り込まれている。

また、平面形が楕円形で、底部にピットを3個有するものが12基検出された。このうち、底面形が分銅形のものが8基、長方形のものは4基検出された。分銅形の土坑のうち、オーバーハングしているものが2基あった。ほとんどは朝顔状に底部から開口部に向かって開いている。

規模的にみると、底部にピットを2個有するものと3個有するものとでは、底面が分銅形のものにおいてあまり違いは見られない。しかし、長方形のものでは底部に3個のピットを有するJD-13・34号土坑のように長特大のものも認められた。

さらに、明らかに土坑であるが、底部にピットを有さないものが1基検出された。平面形は楕円 形であり、底面形は分銅形をしている。調査途中、断ち割りを実施してみたがピットは認められな かった。

これらのいわゆる「陥し穴」を坑底穴数で分布をみると2個のものと3個のものでグルーピングできる。2個のものは大きくジグザグに配され4基~6基で直線的に3群で構成される。3個のものも3基~5基単位で3群にわけられる。分布域が一致することから2時期にわたる変遷も想定できるが出土遺物が僅少なため決定できない。

このようにみると、本遺跡において検出された土坑は、縄文時代の獣を捕るために掘られた陥し 穴の様相を呈してくる。つまり、本遺跡地は縄文時代においては、動物を捕らえるための狩り場で あったろうと推察されるのである。これは、本遺跡地は西側がかなり急な勾配を持つ斜面であり、 沖積地となっているため動物を捕らえるには都合が良かったと考えられる。

そして、本遺跡の丘陵部における分布は、同一箇所にまとまって分布している。それも、源頭部 を取り巻くように配置されている。平面形態から見ると、細長いものがほとんどで、動物が落ちや すいように開口部が広く、簡単にはい上がれないように底部は狭く深くなっている。さらに坑底穴には先の尖った逆茂木が設置されており、これに刺さってほぼ致命的となる。これらの土坑が捕らえる対象の動物は、イノシシ・シカであったと考えられる。これらの土坑を使用した狩猟法は、消極的な方法をとり非追い込み猟の色彩が強いと考えられる。陥し穴の配置単位は比較的小さく、これを使用したであろう狩猟集団も、比較的小規模な協業体制を取っていたと考えられる。このような狩猟法は現生北方狩猟民のシカ類の狩猟に多用されている。陥し穴は、ワナ猟の機能と著しく類似しているが、通常、ワナとは異なる。陥し穴は狩猟季節以外でも撤去することができないため、他の空間的利用が著しく制限される。そのため、陥し穴自体は時代が経つにつれてある程度維持されながら、ワナへの転換等により次第に消滅していったと考えられる。

2 遺物

1) 縄文土器

土器は包含層の状態で多数検出された。時期的には縄文時代草創期から早期・前期が中心となり 中期や後期の遺物も僅かながら検出されている。量的に多くの縄文時代の土器や石器が検出された のは、下鶴谷遺跡・柳久保遺跡・頭無遺跡であった。

下鶴谷遺跡からは撚糸文土器群と無文土器群群と条痕文系土器群と繊維縄文系土器群、竹管文系 土器群がみつかり、これに伴う石器類も多数検出された。詳細は『柳久保遺跡群V』に報告したが、 三角錐形石器と撚糸文・無文系土器群の関連はその遺物分布から導き出された。

頭無遺跡では $V \sim VII$ 群士器がまとまって検出された。このなかで押型文土器としたVI群は2個体が復元できた。2個体は器形・大きさや施文具も共通し、4単位の波状口縁を持ち底部はV群の沈線文土器の器形との類似がみられる。胎土に結晶片岩を混入することはII・III群土器の特色とみられるがV群土器の中にも結晶片岩や砂粒の多量の混入が認められることから、いずれかの判断は難しい。遺物分布では直接的にV群との関連は認められないが、少なからずV群との関連は考慮しなければならない。

V群としたものの多くは田戸上層式土器に位置づけられる。また、このなかでV群2・3類は八戸市田面木平遺跡や売場遺跡で検出された物見台式系統の土器と共通する文様構成と器形をもつ。 V群2類7は新東京国際空港No.7遺跡の例と共通し雷文に貝殻腹縁が入る。また、V群6類10はいわき市竹之内遺跡や会津高田町の松沢遺跡の常世式土器とされたものと文様構成が共通する。 V群5類12は佐野市出流原小学校内遺跡や福島県会津高田町松沢遺跡のものと共通する。このなかでV群5類11は胎土に結晶片岩粒を多量に含有し、僅かに繊維を含んでいる。貝殻条痕文によって器内外面に貝殻条痕を施した後に多段の平行線と鋸歯文を3本歯の工具で施文している。口縁は突起がみられやや小波状をなし、底部は丸底ないしは尖底である。類例は宮城県大寺遺跡にみられるが、時期的には確定できない要素も含んでいる。 WI群土器の1・2類の多くは絡条体圧痕を有する土器であり、繊維を僅かに含んでいる。これらは遺物分布からV群土器の範囲と異なるがV群3類の10が両者をつなぐ範囲に分布がみられた。

柳久保遺跡ではⅡ群土器がまとまってみられた。特にⅡ群1類A種は口唇がまくれるもので、後続する井草式 I 土器との変遷を看守できる土器である。また、下鶴谷遺跡で出土した I 群の土器とも関係がみられ、時期的には下鶴谷遺跡 I 群→柳久保遺跡 II 群1類A種→Ⅱ 群1類B種という流れで押さえられよう。またⅢ群の復元個体は口縁に撫でがみられることから、文様を意識したものと思われる。器形や口唇形態から平坂式土器から三戸式土器にかけてのものとみられる。

V群は、この時期の東海地方の編年は上ノ山式→入海 I 式→入海 II 式→石山式→天神山式→塩屋式という流れが考えられている。

またVII群 4 種98は目黒区下沼部遺跡や浦和市大古里遺跡で出土した貝殻腹縁を多用する入海 I 式平行の土器である。VII群 5 類97・99は沈線文土器であり下吉井式であり群馬県内では初出例といえる。

2) 石器

有舌尖頭器が 3 点検出された。これらの有舌尖頭器のうちFig. 79-4は舌部が大きく張り出すもので時期的には埼玉県橋立遺跡の例と共通をみせる。有舌尖頭器の時期はグリッド出土の石器のため、共伴土器は確定できないが、時期的には端気遺跡群 II で検出されたように爪形文・撚糸文土器との関連がみられることから II 群 1 類との関連性が問題とされるところである。

Ⅲ 弥生時代~平安時代の遺構と遺物

昭和59年に群馬県教育委員会で実施した頭無遺跡からは弥生時代中期後半の住居址が3軒発見されているが、柳久保遺跡群の調査では弥生時代の遺構は検出されなかった。ただ、僅かな遺物が柳久保遺跡と中鶴谷遺跡で出土している。柳久保遺跡で出土した土器は新潟県に分布する山草荷式土器と関連を有する土器であり、中鶴谷遺跡では櫛描波状文の土器が数片みつかった。

柳久保遺跡群における集落形成は縄文時代前期以後、久しく認められなかったが、古墳時代になると柳久保遺跡を中心に集落形成がなされる。

まず柳久保遺跡に4世紀後半の集落が10軒みられ、大きく2時期の集落が本台地に形成される。 2~3世代にわたって住まわれ、集落に近接した沖積地部分についてプラントオパール分析を試験 的に実施したが、その結果にはイネのプラントオパールは検出できなかったため、生業として水田 耕作が行なわれていた蓋然性は低い。

やや間隔をおいて次の5世紀の集落は15軒もやはり柳久保遺跡に形成される。この時期の集落も

2回の建て替えがおこなわれる。最初に10軒で構成されたものが後には6軒の集落構成となる。大 形住居は勾玉をはじめとした特殊遺物を多く所有し住居址内施設も充実をみることから集落の中核 的存在として卓越する。竪穴状遺構と呼んだものは炉を有し小規模であることから「厨房施設」と 考えられ集落構成を考える上で看過できない施設といえよう。4世紀の集落と同様に水田の検出が できないため水田耕作は行われていなかったと推定できる。このことは遠隔地に水田耕作を行って いたかあるいは畑作中心の生業がなされていたことと推定されるが鉄器の保有率が40%と極めて高 いことが指摘できる。

7世紀になると本台地に5軒の住居がみられる。またこの時期になると隣接する台地の中鶴谷遺跡にも集落が形成され、柳久保遺跡の北地点に5基、中鶴谷遺跡に1基の古墳の造営もなされる。また、本時期に至って台地周辺の谷地に開田がなされ水田耕作が行われた事がプラントオパール分析の結果から判明した。古墳時代になると柳久保遺跡に5軒と中鶴谷遺跡に集落がみられ、柳久保遺跡の北に柳久保古墳群と呼んだ5基の古墳と中鶴谷遺跡に古墳が造成される。これらの古墳群の年代は7世紀代に比定でき中鶴谷遺跡や柳久保遺跡の集落と有機的な関連が押さえられる。

また、次の奈良時代になると下鶴谷遺跡7軒で、柳久保遺跡では住居址23軒・掘立柱建物址25棟、 中鶴谷遺跡では住居址81軒・掘立柱建物址13棟の集落構成がなされる。続く平安時代になると下鶴 谷遺跡、柳久保遺跡の集落は奈良時代を以て終焉をたどるが中鶴谷遺跡や頭無遺跡では9世紀前半 まで集落が構成される。

柳久保遺跡群で特筆される資料は柳久保遺跡の集落構成とその変遷である。また、大形住居址を中心とする構成はその意義づけとともに成果とされる。隣接する中鶴谷遺跡からは20点を超える「田部」の墨書土器が出土した。今回の出土した「田部」は名を示すと考えられる例も含まれることから、人名にかかわるものであった可能性が強い。古代の史料上での「田部」はしばしばミヤケの工作者として登場するように、この地域の開発に関連してこよう。中鶴谷遺跡の北方700mに昭和60年に近接して群馬県教育委員会で調査を実施した「上西原遺跡」が存在する。古代寺院もしくは郡衙の2つの解釈がある。今回の調査で「上田〇寺」といった例が上西原遺跡と関係してくれば寺院的様相を示す塑像などの遺物から方形区画は寺院的な様相を帯びてこよう。

また、時代的には後続するが、柳久保水田址で検出された鬼の描かれた杯と墨書のある杯を含む 土師器10数枚と豚の橈骨と馬歯は一括遺物であり、その出土状態から齋部弘成撰『古語拾遺』に書 かれた御歳神を祭る農業祭祀と符合をみせる。これらの祭事の成立基盤には上西原遺跡など地域を 代表する遺跡の存在は看過できない事象といえる。

註

註1 宮城村桝形遺跡の調査区断面と粕川村栗原東遺跡調査地点断面の踏査による。断面の踏査にあたって示準 デフラの同定は早田 勉氏にお願いした。また、栗原東遺跡の踏査にあたっては粕川村教育委員会文化財担 当の小島純一氏に出土層位のご教示を戴いた。

- 註2 いわゆる「硬質頁岩」については本多朔郎による組成分析がある。それによれば、Ⅰ)砕屑性のもの。 Ⅱ)珪藻質のもの。 Ⅲ)頻灰質のものにわかれるという。今後こういった方法で産地が確定できないものであろうか。本多朔郎 1977 「いわゆる硬質頁岩 (hard shale)の組成について」 日本鉱物学会・日本鉱山地質学会・日本岩石鉱物鉱床学会。三学会連合学術大会講演要旨集 1977
- 註3 群馬地質研究会飯島静雄氏のご教示による。
- 註4 黒曜石の産地推定にあたっては金山喜昭氏に全面的なご援助をいただいた。 分析は鈴木正男(立教大学)、金山喜昭(町田市郷土博物館)、福岡 久(日本大学)、戸村健児(立教大学)の四氏による。用いた手法は、熱中性子放射化分析と判別分析方法によっている。 分析に用いた資料は、頭無遺跡No.457(E5-U57G-No.10)の黒曜石剥片である。

参考文献

前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985 『柳久保遺跡群 I』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985 『柳久保遺跡群Ⅱ』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986 『柳久保遺跡群Ⅲ』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1987 『柳久保遺跡群IV』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988 『柳久保遺跡群V』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988 『柳久保遺跡群VI』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988 『柳久保遺跡群VII』 前原照子・浜田博一・前原 豊 1986 「前橋市柳久保水田址出土の特殊遺物」 群馬文化第205号 前原 豊・関根吉晴 1988 「新遺跡レポート 柳久保遺跡群」 歴史読本第33巻第9号 前橋市教育委員会 1986 『柳久保遺跡群パンフレット』 前橋市教育委員会 1987 『柳久保遺跡群Ⅱパンフレット』 前橋市教育委員会 1987 『柳久保遺跡群見学会パンフレット』 前橋市教育委員会 1988 『柳久保遺跡群の発掘調査Ⅲパンフレット』 前橋市教育委員会 1985 「石器の道」 文化財調査報告書第15集 前橋市教育委員会 1986 「むらの移り変わり」 文化財調査報告書第16集 前橋市教育委員会 1986 「祭祀遺構」 文化財調査報告書第16集 前橋市教育委員会 1984 「城南住宅団地造成区域埋蔵文化財調査」文化財調査報告書第14集 前橋市教育委員会 1985 「昭和60年度柳久保遺跡群」文化財調査報告書第15集 前橋市教育委員会 1986 「昭和61年度柳久保遺跡群」文化財調査報告書第16集 前橋市教育委員会 1987 「昭和62年度柳久保遺跡群」文化財調査報告書第17集 前橋市教育委員会 1988 「昭和63年度柳久保遺跡群」文化財調査報告書第18集 前橋市教育委員会 1984 『アラトダヨリ』No. 1~5 前原 豊・関根吉晴1988「柳久保遺跡群頭無遺跡」『第2回東北日本の旧石器を語る会予稿集』 群馬県教育委員会 1984 『昭和58年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報』 群馬県教育委員会 1984 『昭和59年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報』 群馬県教育委員会・荒砥北部遺跡群発掘調査会 1986『昭和60年度荒砥北部遺跡群』 群馬県教育委員会 1985 『堤東遺跡』 群馬県教育委員会 1986 『上西原・向原・谷津』 群馬県教育委員会 1987 『丸山・北原』 宮城村教育委員会1975 『桝形遺跡』

茨城県教育財団 1980『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 3 沖餅遺跡』 青森県教育委員会 1985『売場遺跡発掘調査報告書(第1・2次調査)』

橋本勝雄1988「研究ノート 千葉県佐倉市木戸場遺跡A地点第1・2ユニットから」

『研究連絡誌4』千葉県文化財センター

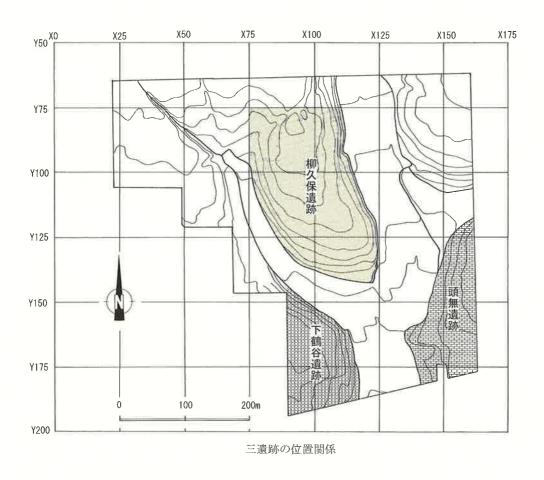
千葉県文化財センター 1988 『佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡』

粕川村教育委員会1985「旧石器時代」『粕川村の遺跡』

茨城県勝田市教育委員会 1976『後野遺跡』

青森県教育委員会 1985『売場遺跡発掘調査報告書(第3・4次調査)・大タルミ遺跡発掘調査報告書』

いわき市教育委員会 1982『竹之内遺跡』 安孫子昭二1980『下沼部遺跡』東京都教育委員会 財団法人千葉県文化財センター 1984『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IV No.7遺跡』 富樫泰時 1995「貝殻沈線文土器」縄文土器大観1 草創期・早期・前期 小学館 高橋 誠1986「型式学的方法 沈線文土器」季刊考古学17



凡 例

- □ 1 グリッドあたりの土器破片数が1~4点を表わす。
 □ 1 グリッドあたりの土器破片数が5~14点を表わす。
 □ 1 グリッドあたりの土器破片数が15点以上を表わす。
 - 注)遺物分布図上の1つのメッシュは 20m四方である。但し柳久保遺跡は 40m四方である。

Fig. 87 各遺跡の縄文包含層遺物分布(1)

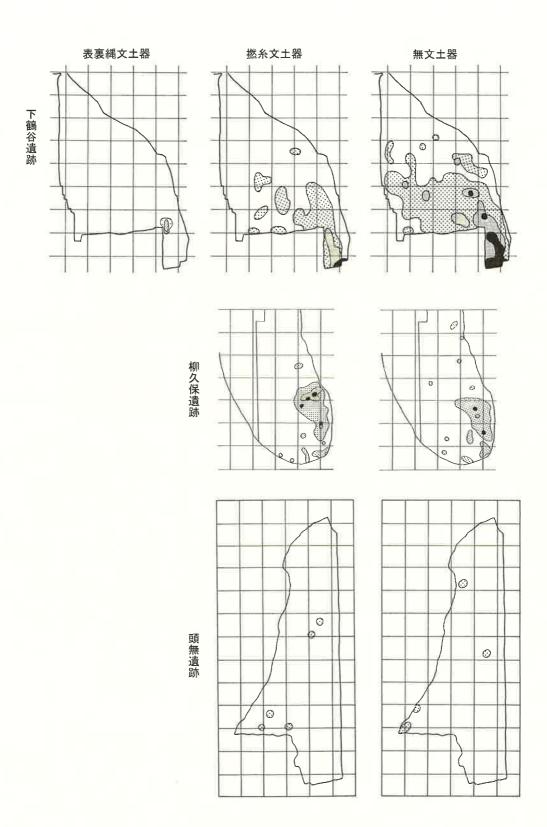


Fig. 88 各遺跡の縄文包含層遺物分布(2)

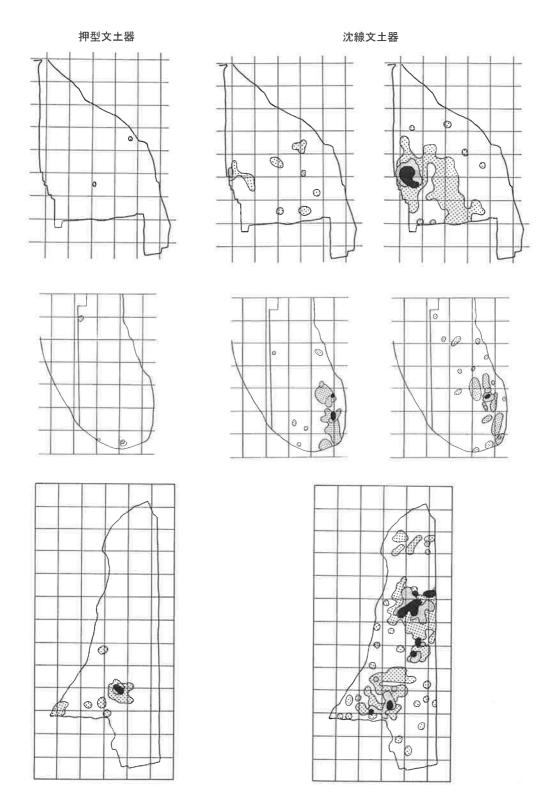


Fig. 89 各遺跡の縄文包含層遺物分布(3)

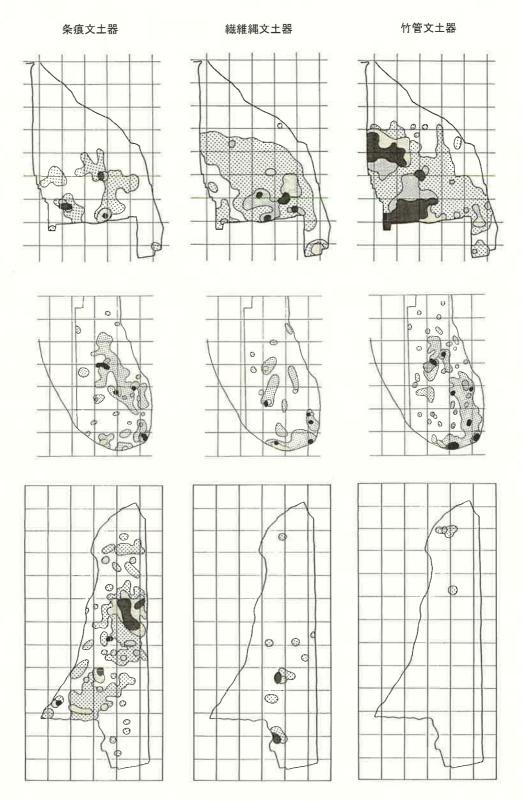


Fig. 90 各遺跡の縄文包含層遺物分布(4)

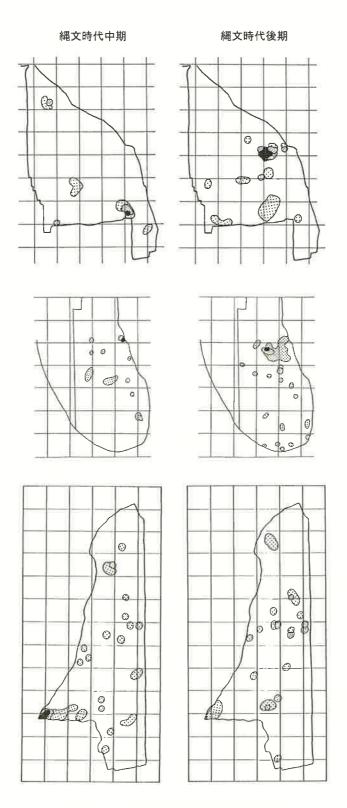
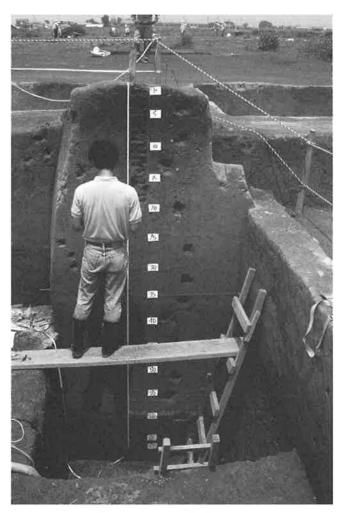


Fig. 91 各遺跡の縄文包含層遺物分布(5)



第4部 付 編



頭無遺跡テフラ分析資料の採取



付 編

1 頭無遺跡における火山灰土壌のテフラ分析

早田 勉 (パリノ・サーヴェイ株式会社)

1 はじめに

柳久保遺跡群・頭無遺跡は、赤城火山南麓の傾斜の緩い 火山麓扇状地上に位置している。扇状地は、谷によってか なり開析されているが、谷はその後の堆積物によって埋積 されているため、扇状地面と谷底の低地との比高は比較的 小さい。扇状地上には、風化した火山灰が厚く堆積してい る。

頭無遺跡では、風化火山灰層から多くの旧石器時代の遺物が発見された。旧石器時代の遺物が含まれている地層(遺物包含層)の年代を知るために、様々な自然科学的手法が用いられている。このような手法の中で、我国において特に盛んに用いられている方法に、火山灰編年学(テフロクロノロジー)という方法がある。 火山灰編年学とは、すでに噴出年代がわかっている示標テフラ(テフラとは火山噴出物のうち、火山ガスと溶岩流を除いたすべてのものを指す)を地層中に探し、そのテフラの層位から、地層の年代を知る方法である。最近では、日本各地で示標テフラ層のカタログが作られている。カタログには、分布、火山ガラスの形態、色調や屈折率、したテフラが示標テフラであるかどうか識別するための特徴が載せられている。

関東平野北西部には、周辺の多くの火山から噴出したテフラが堆積しており、早くからテフロクロノロジーを用いた考古学的な研究や地質学的な研究が行われている。本分析は、頭無遭跡の土層中に示標テフラ層を発見し、遺物包含層の年代を知るための資料を作成することにある。とくに今回の分析で重要視したテフラは、浅間一板鼻黄色軽石層を初めとする浅間・榛名両火山起源のテフラの他、約2.1~2.2万年前に南九州から噴出し、日本全国の旧石器時代の示標テフラとして利用されている姶良 Tn 火山灰(AT)である。

2 分析試料と方法

野外において、肉眼による標識的な断面の観察を行ない、示標テフラの検出を行なった。その結果、 $I-1\sim9$ までの示標テフラ層を確認することができた(図 2)。このテフラのうち I-2は、白色の軽石が散在する褐色風化火山灰層、 $I-7\sim9$ は一連の降下テフラの純層である。それ以外のテフラは、各々単独に降下・堆積したテフラの純層である。本分析では、各テフラ層の層相や重鉱物

組成などから、示標テフラとの対比を行った。

次に AT の層位を把握するために $5 \, \mathrm{cm}$ ごとに試料採取を行った。分析には、一般に AT 層準に近いと予想された暗色帯上部付近の $II-32\sim41$ の試料を対象とした。 AT の層準は、軽鉱物組成を求め軽鉱物中における火山ガラスの割合から判断した。

分析の方法は、次の手順で行なった。

- 1)約40gを秤量
- 2) 超音波洗浄と 1/16mm 以下の分析篩による篩別を 繰り返し、粘土分を除去
- 3) 定温 (80℃) 乾燥
- 4) 分析篩によって、1/4~1/8mm の粒子を篩別
- 5) テトラプロモエタン (比重 2.96) よって重液分離
- 6) 偏光顕微鏡下で、鉱物を同定

なお、重鉱物組成・軽鉱物組成は、各々重鉱物・軽鉱物 を 200 粒以上同定した。

さらに、火山ガラスについては、新井(1972)の方法によって屈折率の測定を行ない、より詳細な精度で対比を行なった。

3 分析結果

3-1 野外で観察できるテフラ層

野外においては、上位より $I-1\cdot I-2$ に含まれる軽石、 $I-3\cdot I-4\cdot I-5\cdot I-6\cdot I-7\sim 9$ の合計 7 枚の示標テフラ層が確認された。各示標テフラの重鉱物組成を表 1 と図 3 に示した。以下、各テフラ層について

I-1: 層厚約 4cm の黄色降下軽石層で、ブロック状に認められる。軽石の最大径は、4mm程度である。重鉱物組成は、斜方輝石>磁鉄鉱=単斜輝石で、普通角閃石は含まれていない。色調や重鉱物組成から、本テフラ層は、約1.3~1.4万年前に浅間火山から項出した、浅間一板鼻黄色軽石(As − YP: 町田ほか、1984)に対比される。

I-2: 垂直方向に約 $30 \mathrm{cm}$ の幅をもって認められる白色 軽石の濃集層である。軽石の最大径は $6 \mathrm{mm}$ である。

軽石のみを選別して分析できなかったので精度に問題が残るが、ごく少量の普通角関石が含まれる。色調や鉱物組成から、約1.5万年前に浅間火山から項出した、浅間一白糸軽石(As - SP:町田ほか、1984)に対比される可能性がある。

I-3: 層厚 3cm の黄色降下軽石層で、ブロック状に認められる。軽石の最大径は 3mm である。直上に厚さ 2cm の灰色粗粒火山灰層がのる。重鉱物組成は、斜方輝石>単斜輝石>磁鉄鉱である。層相や重鉱物組成などから、約 $1.6\sim2.1$ 万年前に生じた数回の浅間火山の噴火に伴う、浅間一板鼻褐色軽石群(As-BP: 町田ほか、1984)の一部のテフラに対比される。As-BPの上部に相当することから、堆積年代は、1.6 万年前に近い年代と堆定される。

I-4: 層厚 7cm の黄橙色降下軽石層で、ブロック状に認められる。軽石の最大粒径は 6mm である。重鉱物組成は、斜方輝石>単斜輝石>磁鉄鉱で、ごく少量のカンラン石が含まれている。層相や重鉱物組成から、本テフラ層は As - BP の一部と考えられる。

I-5:層厚 5cm の黄橙色降下軽石層で、ブロック状に認められる。上位のテフラ層、とくに $I-2\sim 4$ と比較して暗灰色の岩片に富む。軽石の最大径は 6mm である。重鉱物組成は斜方輝石>単斜輝石>磁鉄鉱で、ごく少量のカンラン石と普通角閃石を含む。層相や重鉱物組成などから、本テフラは As - BP 0- amのテフラと考えられる。

I-6: 層厚 5cm の黄橙色降下軽石層で、ブロック状に認められる。軽石の最大径は 6mm である。本テフラ層は暗色帯中に層位がある。本テフラの重鉱物組成は、I-5 と同様に斜方輝石>単斜輝石>磁鉄鉱で、ごく少量のカンラン石と普通角閃石を含む。層相や重鉱物組成などから、本テフラは As-BP の一部と考えられる。

さて、As-BPについては、新井(1962)や町田ほか(1984)は、数枚のテフラを一群として扱っている。しかし、碓氷川流域や榛名火山南東では、As-BPのうち最下位のテフラは暗色帯中にあり、層相も上位のテフラとは異なっている。榛名火山を調査した森山(1971)もこのことを認めており、As-BPの最下位の降下軽石層を「室田軽石(MP)」と呼び、他のテフラと区別している。I-6も明らかに暗色帯中にあることから、MPである可能性が大きい。いずれにしても I-6は、As-BPの最下部に近いと考えられることから、堆積年代は約2.1万年前と考えられる。

I - 7 ~ 9:全体で層厚 24cm の、白〜黄色降下軽石層である。下位より黄色の降下軽石層(層厚 15cm: I - 9)、青灰色風化火山灰(層厚 3cm: I - 8)、白色の降下軽石層(層厚 6cm: I - 7)の3枚のテフラ層から構成されている。軽石の最大径は27mmである。重鉱物組成 I - 9が普通角関石>斜方輝石⇒磁鉄鉱、I - 8が普通角関石>斜方輝石>磁鉄鉱、I - 7が普通角関石>斜方輝石→磁鉄鉱物>単斜輝石で、いずれも普通角関石に富むテフラである。層相や重鉱物組成などから、本テフラは4.1万年前に榛名火山から噴出した、榛名一八崎軽石層(Hr - HP:新井、1962。大島、1986)に対比される。

3-2 AT の層位

ATは、南九州の姶良カルデラ(錦江湾)から噴出し、ほぼ日本全国を覆った巨大噴火に伴うテフラである。噴出年代は、約2.1~2.2万年前と考えられる(町田・新井、1976)。ただし、最近は約2.4万年前とする考え方もある

(松本ほか、1987)。関東地方北西部では、保存状態さえ良ければ厚さ数 cm の純層として確認することができる。

頭無遭跡では、ATを純層として確認できなかったことから、ATに特徴的に含まれる火山ガラスの量比を指標として、降下層準の把握を試みた。

No. $32 \sim 41$ には、透明の火山ガラスが多く含まれる(表2、図4)。火山ガラスは、バブル型に富み、軽石型(とくに繊維状)のガラスも多い。またごく少量の中間型ガラス(分厚いタイプ)も含まれる。火山ガラスの屈折率は、No. 34 の試料を用いて測定したところ、 $1.498 \sim 1.501$ であった。火山ガラスの形態や屈折率などから、本テフラ層はATに対比される。

さて火山ガラスの量が最大となる試料はNa.35である。また、火山ガラスが多く野外での層相が変化するのはNa.36である。これらのことからATの降灰層準は、Na.35あるいはNa.36すなわちVII層からVI層基底部にあると考えられる。

以上述べたテフラのほかにも、IXb層上部には最大径3mmの赤橙色スコリアが散在している。木テフラ層は赤城火山の南麓一帯に広く分布しており、今後示標チフラとなる可能性がある。

4 まとめ

テフラ分析の結果、頭無遺跡の土層のおおよその堆積年 代が、次のように明らかとなった。

土. 層 指標テフラ 堆積年代 第IVa層 As - YP約1.3~1.4万年前 第IVb層中部 As - SP 約1.5万年前 第VI層最上部 As - BP 上部 約1.6万年前 第IV層中部 As - BP 下部 (MP) 約 2.1 万年前 第VII~VI層基底 AT 約2.1~2.2万年前 第 Xc ~ Xa 屬 HP 約 4.1 万年前

5 結語にかえて

テフロクロノロジーによって、遺物包含層の年代を知る 手掛かりが得られたが、今回の成果は他の分野にも貢献することが多い。ここでは、地形発達史と土壌生成論の立場 からの今回の分析結果の意義について述べる。

(1) 地形発達史上の意義

テフラ分析によって、風成テフラの基底部の $Xa\sim C$ 層は、約4.1万年前のHr-HPに対比されることが明らかとなった。 $Xa\sim C$ 層の下位には灰色の粘土(III層)が堆積しており、さらにその下位には砂礫層が堆積している。粘土層は重粘土質で、空気にさらされると暗褐色に変色する。このような粘土層は、通常は離水後に湿地性の環境が続き、その時に堆積したテフラや洪水のときのけん濁物質と考えられることが多い。砂礫層は、おそらく扇状地を構成する堆積物である。いずれにしても、扇状地の離水の時期は、約4.5~4.1万年前と考えてよさそうである。

頭無遺跡周辺の扇状地は、ところどころに下位の岩屑流 堆積物の流れ山を残しながら、比較的広い面積で広がって いる。現在のところこの扇状地の構造は明らかにされておらず、岩屑流の発生に伴って形成された火山麓扇状地的性格をもつのか、あるいは気候変化に影響を受けて形成された扇状地であるのかはわからない。今後、多くの野外調査によって示標テフラとの層位関係を明らかにし、その横造を調べる必要がある。

(2) 土壌生成論的意義

今回の分析では、比較的堅い褐色風化火山灰層の最上部に As-YP が認められた。したがって、より上位の比較的柔らかい黄褐色ローム層(III b、III a 層)および黒褐色土層(III B)は、約 1.3 万年前よりも後に堆積したと考えられる。 III b 層とIII a 層では、後者の方がより明るい色調を呈し、縄文時代の遺物を含んでいる。なお、II 層には、約4世紀中頃に浅間火山から噴出した浅間 C 軽石(As-C:石川ほか、1979)が含まれているので、おそらく古墳時代以降の堆積物と考えられる。

一般的に第四紀後期に活動した火山のテフラが分布する 地域では、表層部に黒ボク土が堆積している。黒ボク土の 基底の年代は、全国的にみると約1万年前と考えて良い(町 田ほか、1986)。ところが頭無遺跡においては、約1万年 前以降の縄文時代の遺物(縄文時代草創期~後期後半)が、 黒ボク土ではなく黄褐色土に含まれているのである。考古 学的にみれば、遺物は全体として2次的に動いたとは考え られないので、この黄褐色土は累積性の土壌であると考え られる。頭無遺跡ほどではないにしても、黒ボク土中に黄 褐色~褐色土が認められる地点は、浅間火山東南麓の軽井 沢周辺や榛名火山東麓など比較的多い。とくに浅間火山東 南麓では、上下に縄文時代中期の加曽利 E 式士器が検出さ れる浅間 D 軽石 (As - D: 能登、1975) の上位、As - C の下位に褐色土が認められる。各々の地点での黄褐色~褐 色土の層位や生成要因などについては、今後の研究を待つ として、現段階では、少なくとも完新世のある時期(とく に縄文時代)に黄褐色~褐色土(以下、褐色軟質風化火山 灰層 BSS と呼ぶことにする)が形成されていることは事 実として認められよう。

さて現在、関東地方北西部の緩斜地において、人間の直 接的な干渉を受けない地域があるとすれば、そこには植生 に由来する腐植が集積し、暗褐~黒色土の形成が期待され よう。黒ボク土の黒い色の程度は、腐植に由来する炭素の 量によって決定される。埋没した黒ボク土の炭素が、長い 年月を経た後に分解し、黒味が薄れることも考えられてい る (たとえば、町田ほか、1986) が、最近の完新世におい てはこのような現象は起こりにくいと考えられる。した がって、BSS は腐植の少ない土が堆積したためと考えられ る。一般に関東地方北西部では、褐色風化火山灰(赤土、 ローム) の母材として、中村(1970)が述べたように、火 山噴火によって形成された裸地からの飛砂あるいはすでに 風化した粒子すなわち二次堆積物とする考え方が有力であ る。これは赤土の層厚が、給源火山である浅間山に向かっ て増大しない (新井、1962) ことからも裏付けされる。一 方、町田(1964)が述べたような、多数の小規模噴火に由

来する細粒テフラが堆積して母材となるすなわち1次堆積 説も考えられる。しかし、後者の場合は富士火山などのよ うに噴火間隔がとくに短い火山にのみあてはまると考えら れる。赤城火山や榛名火山については縄文時代に活動した 例は知られていないし、浅間火山が同時期に小規模な噴火 を、最近の噴火間隔以上に頻繁に繰り返したという報告例 も今のところない。したがって、頭無遁跡ではBSS の生成 要因について火山活動に由来するという考え方以外にも、 考えておいた方がよさそうである。

頭無遺跡での確かな生成要因の解明は、今後の研究を待っことにするが、本稿では可能性がある要因として扇状地の形成に伴う飛砂の増大を考えてみたい。層状地は通常、河川の氾濫によって形成されるもので、形成途上にある扇状地上の植生は貧弱である。このような場所では強い風が吹くと細粒物質が移動し、いわゆる飛砂の供給源になる。このような飛砂が堆積する地域では、腐植の集積がさまたげられ、黒味が薄い土壌すなわち BSS が形成されることになろう。

では次に、頭無遺跡周辺地域における層状地の形成時期を考えてみる。BSS の堆積に関係する層状地の形成期としては、まず榛名火山東南麓に分布する相馬ケ原扇状地の形成期が考えられる。相馬ケ原層状地は、陣場岩屑流の堆積以降に形成きれた火山麓扇状地で、扇状地の形成は、約1.4万年前から、約1.3万年前ころまで続いている。頭無遺跡では、この時期の堆積物は堅い褐色風化火山灰層でBSSではない。よって、本稿ではこの層状地の形成とBSS は関係がないと考えられる。

小野ほか(1983)によれば、北海道から本州中部にかけ ての河川では、約10,000年前ごろまで上流部では谷壁か らの岩屑供給が続き、河床上昇をもたらしていた場合が多 い。そして約10,000年前以降、これらの地域では河川に よる急速な下刻が生じたとしている。赤城火山の最高点の 標高は、現在1,828mで、約2.5万年前以降顕著な火山活 動が知られていないことから、最終氷期後半もこれより低 かったことはないと考えられる。高度から、赤城火山山頂 部はかなり機械的風化が卓越していた地域と考えられ、上 記の河川上流部の状況と似ていたと考えて良い。上述のこ とから約10,000万年前以降、上流部から下流に向かって 砂礫が移動したことが予想される。移動に伴って下流側の 傾斜が緩やかになる地点では、河床が安定するまで扇状地 の形成が行なわれたのであろう。また完新世の中でも強い 降雨が増大した時期には、赤城火山の山体の侵触が進み、 山麓に扇状地性の堆積物が広がったかも知れない。後者の 可能怯の例としては、赤城火山南東の粕川・荒砥川扇状地 があり、その形成時期は考古学的な成果から縄文時代中期 後半から後期初頭の間であることがわかっている(小島、 1981)。したがって、このような扇状地からの飛砂が、頭 無遺跡の BSS の母材となっていると考えられるのである。 なお、扇状地の形成には、人間活動が関与している可能性 もある.

扇状地起源の飛砂以外にも、崩壊や地すべりに伴う褐色

風化火山灰の二次堆積も考えられるが、いずれも BSS の起源を確定するまでには至っていない。

以上のように頭無遺跡のBSS の堆積は、周辺地域の地形発達史と大いに関係している可能性がある。今後はBSS の土壌学的特徴の把握や正確な層位の認定を行なうとともに、地形発達史的研究も合わせて調査が進められなければならない。

引用文献

新井房夫 (1962)「関東盆地北西部地域の第四紀編年」群 馬大学紀要自然料学編 10、P1 ~ 79

新井房夫 (1979)「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定-テフロクロノロジーの基礎的研究-」第四紀研究 11、P254 - 269

小島純一 (1981) 稲荷山にて、「安通、洞A3 - 昭和54年 度県営圃場整備事業に伴う発掘調査事業概要」粕川村教育 委月会

町田 洋 (1964)「Tephrochronolgy による富士火山とそ

の周辺地域の発達史-第四紀末期について- (その1、その2)」地学雑誌 73、P293 - 308、337 \sim 350

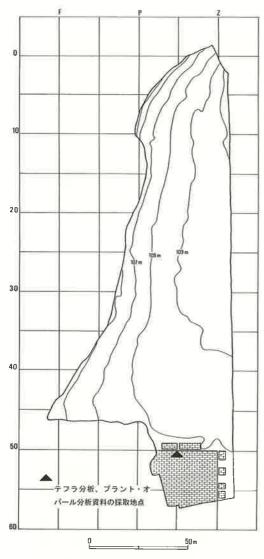
町田 洋・新井房夫 (1976)「広域に分布する火山灰ー姶良 Tn 火山灰の発見とその意義-」科学 46、P339 - 347。町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984)「テフラと日本考古学ー考古学研究と関係するテフラのカタログー」渡辺直経編『古文化財に関する保存料学と人文・自然科学』P865 - 928

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史郎 (1987)「姶良 Tn 火山灰 (AT) の C14 年代」第四紀研究 26、P79 - 83 森山昭雄 (1971)「榛名火山東・南麓の地形一とくに軽 石流の地形についてー」愛知教育大地理学報告 36・37、 P105 - 116

中村一明 (1970)「ローム層の堆積と噴火活動」軽石雑誌 3、 P1-7

小野有五・堀 信行・遠藤邦彦・安田喜憲 (1983)「古環 境による日本とその周辺の古気候復元」気象研究ノート 147、P21 - 45。

大島 治 (1986)「榛名火山」日本の地質関東地方編集委員会編『関東地方』、P222 - 224。



u-50G の杭 108m 5 Ша ШЬ IV a 154 IV b 20 107 v V a VIVII V**II** a VIII b 106 IX a IX b IX c X a X b X c 105 65 ΧI 2m 図2 テフラ分析資料採取地点

図1 分析資料採取地点

表1 野外で観察できる示標テフラの重鉱物組成

24.2	- カント・はないくく のいいがく といる一部 かれてん							
	OL	ОРХ	CPX	НО	OPQ	OTHE	合計	
1-1		105	37		42	35	219	
2		119	54	3	20	5	201	
3		132	46		24	8	210	
4	1	121	67		15	6	210	
5	1	133	50	1	28	5	218	
6	1	118	55	3	20	10	207	
7		71	4	96	33	5	211	
8		69		113	18	5	205	
9		31		131	28	14	204	

 OL
 : カンラン石
 OPX
 : 斜方輝石

 CPX
 単斜輝石
 HO
 : 普通角閃石

 CPQ
 : 不透明鉱物
 OTHE
 : その他

表 2 A T 付近の軽鉱物組成

	BW	INT	PM	QZ	FELD	OTHE	合計
11 - 32	67	4	15	16	58	68	228
33	71	9	9	15	75	36	215
34	105	1	8	21	37	82	254
35	78	1	8	33	8	82	210
36	53	1	2	40	24	109	229
37	66	2	6	24	19	120	237
38	28	6	1	27	38	103	203
39	7	2	2	32	33	153	229
40	8	1		39	50	117	215
41	2	1	2	35	29	143	212

BW : バブル型ガラス IN PM : 軽石型ガラス QZ FELD: 石英 O

INT : 中間型ガラス QZ : 石英 OTHE : その他

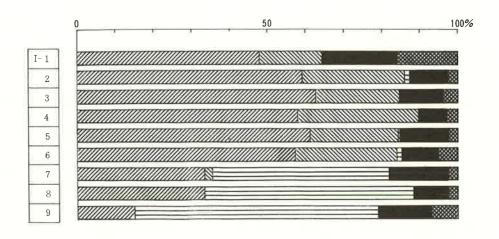




図3 野外で観察できる示標テフラの重鉱物組成 (ダイヤグラム)

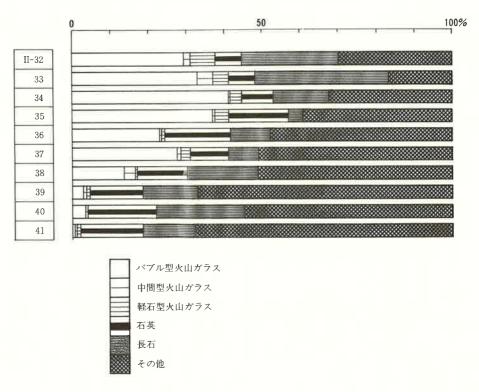
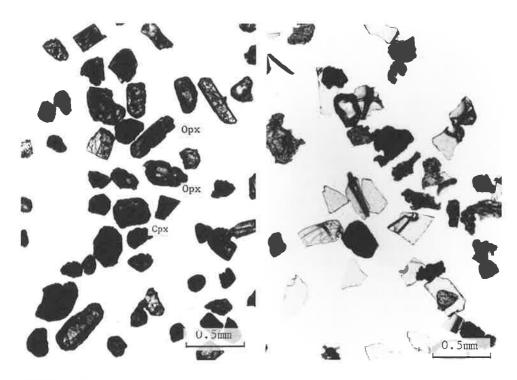


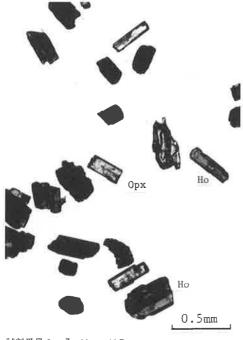
図4 AT付近の軽鉱物組成(ダイヤグラム)



試料番号 I-1 As-YP

試料番号Ⅱ-34 AT

0px: 斜方輝石 Cpx: 単斜輝石 Ho: 普通角閃石



試料番号 I — 7 H r — H P

図 5 偏光顕微鏡写真

2 頭無遺跡における火山灰土壌の プラント・オパール分析

杉山 真二(有限会社 古環境研究所)

1 試 料

現地調査を行なったのは昭和 62 年 8 月 3 日である。調査を行なった $1 \cdot U - 500$ 地点は、頭無遺跡南端の緩傾斜地に位置しており、ここに深さ約 3.5 mの試堀坑が掘削されていた。

試料は試堀坑の壁面において、各層ごとに容量 50cc の 採土管を用いて採取した。採取した試料数は14点であり、 これらすべてについて分析を行なった。

2 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原、1976)」をもとに、次の手順で行なった

- (1) 試料土の絶乾 (105℃・24 時間) および仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量し、ガラスビーズを添加(直 径約40 μ m、約0.02g)

※電子分析天秤により、1万分の1gの精度で秤量

- (3) 脱有機物処理(電気炉灰化法または過酸化水素法)
- (4) 超音波による分散 (150W・26KHz・15 分間)
- (5) 沈底法による徴粗子 (20 μ m 以下) 除去
- (6) 乾燥ののち封入剤 (オイキット) 中に分散し、 プレパラート作成

(7) 検鏡·計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール (以下、プラント・オパールと略す)をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行なった。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行なった。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。 試料1g中のプラント

オパール個数 (Sp) は、次式にしたがって求めた。 $Sp = \{(Gw \times a) / Sw\} \times (\beta/\alpha)$

ただし、Gw は添加したガラスビーズの重量、a はガラスビーズ 1g 中の個数、Sw は試料の絶乾重量、 α と β は計数されたガラスビーズおよびフラント・オパールの個数を表わしている。

植物体生産量の推定値(Bw、単位 t/10a・cm)は、 次式にしたがって求めた。

 $Bw = Sp \times As \times K \times 10$

ただし、As は試料の仮比重、K は換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体各部乾重)を表わしている。

これに層厚かけて、その層で生産された植物体の総量 (t / 10a) を求めた。なお換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキタケ、ウシクサ属はススキ、キビ属はヒエの値を用いた。機動細胞珪酸体 I 個あたりの地上部全重(単位:10-5g)は、それぞれ 2.94、6.31、0.48 1.24 12.20 である。

3 分析結果

同遺跡で検出されたプラントオパールの分類群は、次のとおりである。イネ科について、ヨシ属、ウシクサ属(ススキなどが含まれる)、シバ属。タケ亜科について、A1タイプ(おもにネザサ節)、B1aタイプ(ミヤコザサ節)、B2タイプ(おもにネザサ節を除くメダケ属)、その他、不明について、Aタイプ、Bタイプ、棒状、その他(風化が激しく、同定不能なものも含まれる)。および材木起源である。以上については、顕微鏡写真を参照されたい。

なお、タケ亜科の細分は、杉山・藤原 (1986) によった。 以上の分類群について同定・定量を行ない、分析結果の 数値データを表1に示した。また主な分類群についてグラ フ化し、図2に示した。

4 考 察

全体的にタケ亜料の占める割合が高いことが特徴的であり、IV b層ではプラント・オパール総数の93%にも達している。

ここで特に注目されるのは、ネザサ節とクマザサ属の変遷である。クマザサ属はIXc層以降しだいに増加しはじめ、IVb層では極大に達し圧倒的な卓越が見られる。このことから、当時はクマザサ属が優勢なイネ料植生であったもの

と推定される。

その後、III b 層を境にしてクマザサ属とネザサ節の優勢 は逆転し、II層(黒ボク土) - III a 層ではネザサ節の卓越 が見られる。クマザサ属は落葉樹の林床でも生育できるが、 ネザサ節は何らかの要因で森林群落が破壊された結果、侵 入する(室井、1960)といわれている。したがって、当時 は森株で覆われたような状況ではなく、ネザサ節が生育す るような比較的開かれた環境であったものと推定される。 このことは、ウシクサ族(おもにススキと思われる)や他 のイネ科の増加からも裏付けられる。

以上のように、タケ亜科は当時の遺跡周辺の植生を構成する主要な要素であったものと思われる。また、その有用性から燃料や道具、建築材などとして盛んに利用されていたものと考えられる。

プラント・オパール総数(不明を含む)は、ローム層ではほぼ 45,000 個/ g 未満であるが、II 層(黒ボク土) III a 層ではおよそ 17,000 個/ g ときわめて高い値となっている。

II層(黒ボク土)に供給された植物体の総量(10a あた乾重)を算出したところ、ネザサ節(ゴキダケとして算出)は40.9t、ウシクサ族(ススキとして算出)は31.0tと推定された。このように、黒ボク土の形成時にはネザサ節やススキなどのイネ科植物が繁茂し、多量の有機物を供給したものと推定される。樹木起源のプラント・オパールはIX

a層でごく微量見られたが、風化がはげしいため同定は困難であった。

参考文献

杉山真二・藤原宏志 (1986)「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-」 考古学と自然料学 19、69 — 84

杉山真二・藤原宏志 (1987)「川口市赤山陣屋遺跡におけるプラント・オパール分析」『赤山一古環境編-』川口市 遺跡

調査会報告第10集、281-298

藤原宏志 (1976)「プラント・オパール分析法の基礎的研究

(1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-」 考古学と自然料学 9、15 - 29

藤原宏志(1979)「プラント・オパール分析法の基礎的研究

(3) 一福岡・板付遺跡 (夜臼式) 水田および群馬・日高 遺跡 (弥生時代) 水田におけるイネ (0. sativa L.) 生産 量の推定-」考古学と自然料学 12、29 - 41

室井 綽(1960)「竹笹の生態を中心とした分布」富士竹 類 植物園報告 5、103 - 121

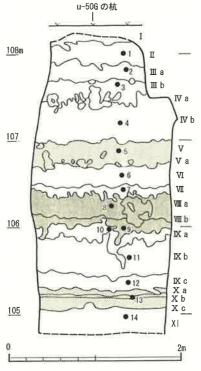


図1 プラント・オパール分析試料採取地点

表 1 頭無遺跡におけるプラント・オパール分析結果(単位: $\times 100/8$)

	1	木	科		A	ケ 亜	科		不		明			
試料名	ヨシ属	ウシク サ 属	シバ属	A 1 a (ネザサ属)	Bla(クマザ) サ属)	B1b (ミヤコザサ節)	B2 (メダケ属)	他	A	В	棒状	他	樹木 起源?	計
II	9	147	9	496	37	9		147	50		64	715		1683
Ша		173		412	96	48	29	249	58		144	528		1737
ШЪ	9	83		65	74	9	9	27	18		18	204		516
IVb				63	618	80			18		9	27		815
v				63	261	108		9				9		450
VII		7		22	203	44		7			7	87		37
VIIa				27	107	27		27	9		9	98		304
VIIb				33	122	65		8				89		31′
IXa			8	23	123	8		23			8	138	8	339
IXb				27	63	18		18			9	45		186
IXc					93	17						8		4
XI				8				25		117	16	184		35

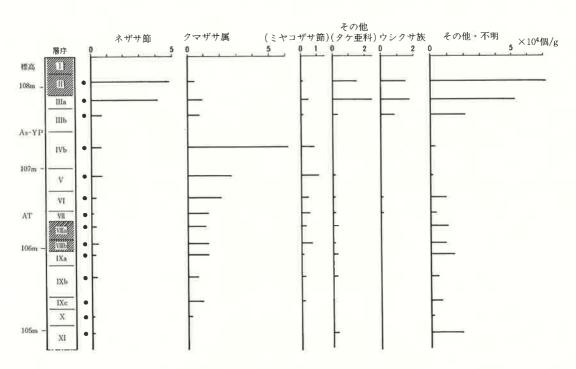


図 2 前橋市、頭無遺跡におけるプラント・オパール分析結果

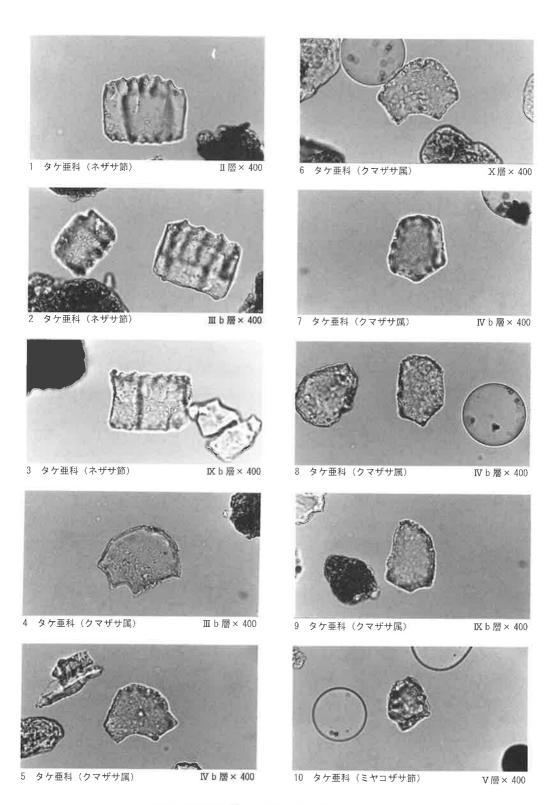


図3 前橋市頭無遺跡から検出されたプラント・オパール

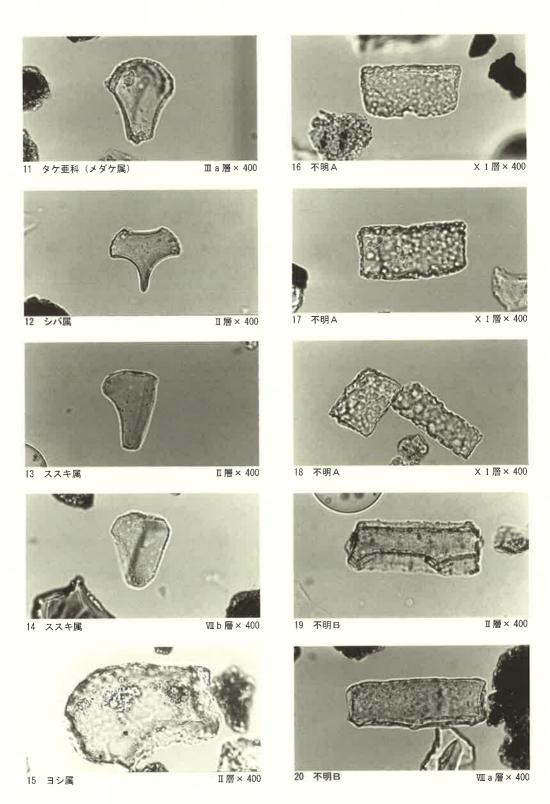


図 4 前橋市頭無遺跡から検出されたプラント・オパール

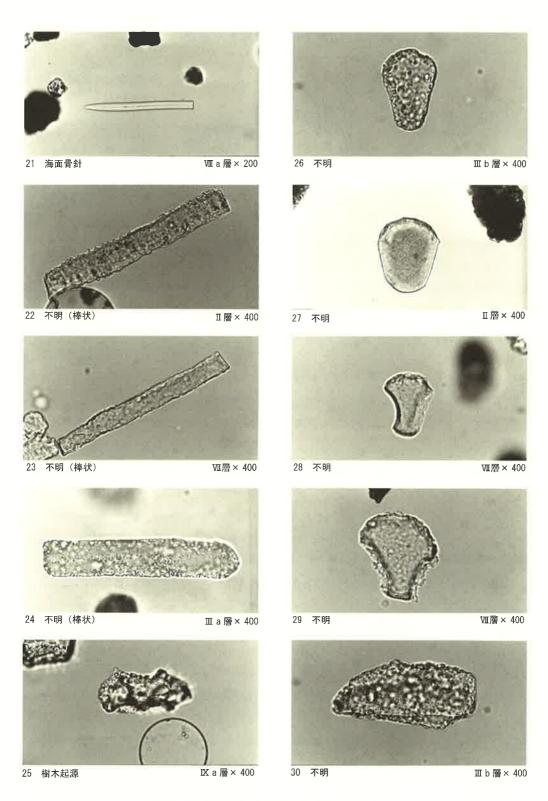


図 5 前橋市頭無遺跡から検出されたプラント・オパール

3 頭無遺跡出土の細石刃文化石器群について

小林達雄 (國學院大學教授)

(1)

旧石器時代文化は、三時期に大別される。即ち第 I、II、II 期である。頭無遭跡の遺物群は、この第II 期のいわゆる 細石刃インダストリーに所属する。日本列島の殆ど全域を 席捲した細石刃インダストリーは、その細石刃を作り出す 技法によって、システム A とシステム B の二つの流れに区 別されるが、とくにシステム A は北海道からシベリア大陸、アラスカ方面にも広く分布が認められている。本州においても、山形県から新潟県にいたる日本海側に安定した内容の存在が知られ、さらにその系統をひくと推定される石核 は富山県に及んでいる。一方、太平洋側では茨城県の後野 遺跡を南限とし、さらに群馬、埼玉、神奈川県下に、そのシステム A の系統の流れが知られていた。そして最近、千葉県佐倉市佐倉工業団地予定地内に、システム A の安定した内容が発見され、さらに南に下ることが明らかにされたのである。

こうした情況下にあって、本頭無遺跡の石器群はシステム A、太平洋海岸地方のみならず、内陸部においても内容をそのまま維持して南に広がっていたことを示すものとし重要である。

つまり、頭無遺跡は旧石器時代第Ⅲ期において、システム A の分布圏の南限界線が関東地方から新潟県方面を網羅する地域であることを明らかにした。なお、そのシステム A の系統をひくか、あるいはそのシステム A と関係、交渉をもって細石刃製作の技法の上に影響をとどめるインダストリーは南関東から中部地方、富山県より西方、少なくとも岡山県方面にも認められている。従って、頭無遺跡は、システム A の勢力圏の縁辺に位置するとともに、これより西方へのシステム A の文化要素進出の前線基地としての意味をもつのである。

(2)

頭無遺跡のシステム A は、細石刃核製作において、まず第一に両面加工のブランク(最終的な石器の形態をつくるのに先立って、定形的な形態を用意したもの)を用意し、その長軸方向に縁辺を剥離して打面を設ける基本に則っている。但し、北海道から山形県の角二山遺跡にみられるがごとき、いわゆるスキースポールを数多く剥離する(システム AI)ということは、なかったようである。即ちシステム A II であり、新潟県月岡、荒屋遺跡と似ている。しかし、この二遺跡は、スキースポールを全くつくらないわけではなく、頻度は低いがあることはある。頭無もまたスキースポールと一切無線であると速断するのは暫くまつこととしたい。

本遺跡出土の典型的な細石刃核は(図1)ブランクに打 面を設けただけにとどまり、細石刃の剥取に進んでいない 状態を示す。しかし、細石刃核は相当磨滅しており、細石 刃を必要に応じて剥取するために持ち運びしていたことを よく物語っている。つまり、細石刃核のブランクは、本遺 跡以外の場所で製作されて寄り道しながら持ち込まれたも のと推定される。たしかに、両面加工のブランク1個の作 製は、子供の頭大の塊から除々に段取りを踏みながら剥離 を重ねて、ようやく掌中に入るほどの大ききに仕上げるこ とができるのである。従って、その過程には大量の石屑が 生ずるのであり、本遺跡はこれに相当する剥片類は殆ど見 当たらない。多くの剥片類は後述の荒屋型彫器の製作など にかかわるものと考えられる。また、もしもブランクを本 遺跡で作製するとすれば、重量のある大きな礫を持ち込ま なくてはならなくなることを意味している。ところが、本 遺跡は石材の産地から相当距離があるため、その運搬だけ でも仕事量は膨大なものとなることとなり、現地でフラン クを作って効率良く運搬していた合理性が理解しうる。

システムAと不即不離の関係を有するのが荒屋型彫器であ る。本遺跡の荒屋型彫器は、石材に頁岩を用いることを はじめとして、形態も全く典型に適う。つまり、外形と 大ききそしてグレーバーファシットが主要剥離面にねじ れ加減である点などかその主たる要素となる。この機能、 用途については多くの研究者が取り組みながらも、依然と して解明は進んでいない。荒屋型彫器のなかには、図3の ごとく、グレーバーファシットの幅を限定しようとする細 加工が認められ、用途との関係が見究められねばならな い。また、多くの場合、グレーバーファシットの主要剥 離面側の縁辺に摩痕あるいは刃コボレが認められる。本 遺跡においても実体顕微鏡などによる観察が必要である う。これに関連して、グレーバーファシットの再生によっ て生ずるスポールの観察が重要である。スポールはグレー バーファシットが使用によって刃が潰れるなどして、 鈍化 したときに、起死回生策として、古い刃が取り除かれる ことであり、いわば古い刃即ちスポールにこそ最も使用 によって生した磨痕や刃コボレが残されているのである。 スポールの観察分析の重要たる所以である。

細石刃の先端が鋭く尖るのは、システム A の特徴の一つ である。システムBの円錘形石核から剥取される細石刃の 全体が細長い短冊形を呈し、先端が尖らないことと対照 的である。また、荒屋遺跡においては、その先端が更に「ノ」 の字形に曲がる特徴的な癖を示すものが少なくない。本遺 跡ではどうか、検討の要がある。ざっと見渡した限りでは、 殆ど目につかなかった。さらに細石刃に細加工をもつ例 がある。数例とも右側緑のみに施されているが、荒屋例 と共通する。なお、荒屋例には、先端の主要剥離面の右 縁辺にのみ、部分的に細加工を施す特徴がある。しかし、 本遺跡例には見当らない。今後の分析が進められねばな らない。本遺跡の石器群の大部分は頁岩で作られている。 加えて、黒曜石、黒色頁岩等が僅かに含まれる。いずれ の石材も本遺跡付近あるいは群馬県内には見られないも のであり、遠方より入手されたものである。黒曜石の原 産地同定の研究は相当進んでいるので、その分析に供す

べきであろう。最も大量に必要とした頁岩は新潟県、山形県、福島県方面からもたらせたものであり、この頁岩が北からのシステム A の南下と密接に関係するものと考えられる。

黒色の粘板岩の薄い剥片の周縁に細加工を施した石器について、その表面がハジケて剥落したクレーター状の痕跡を示す点が注目される。あるいは加熱して剥離作業をするという方式も考えられるところであり、荒屋遺跡にも例がある。

(3)

頭無遺跡の石器群は、とくに狭い範囲に集中する、いわゆるユニットがある。それが同時に存在したものではなく、 幾度かの滞留移動の中で残されたユニットである。それ故 今後、群馬県内で頭無と同じインダストリーの発見が期待 される所である。

本遺跡のユニット群の相互の内容の比較検討は今後もっとも期待される分野である。一つには、同一母岩別がユニット間にどのように分布するのかを見極める必要がある。接合資料があるかどうかについては、相当の時間とエネルギーが見積らねばならず、それに対処し得る足る時間的余給が整理作業から本報告書作成までに確保されることを強く希望し、期待するものである。

柳久保遺跡群頭無遺跡の全貌は、第Ⅲ期旧石器文化の在 り方を解明する上で重要であるばかりでなく、旧石器文化 終末から縄文文化開幕という日本列島先史時代文化の最初 かつ最大なる歴史的事件の解明にもかかわって重要であ り、その内容の充分なる検討と報告の期待されるところが 大きい。

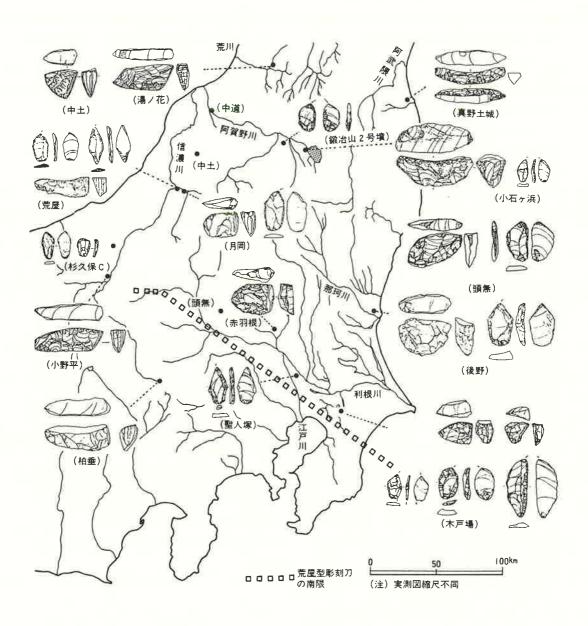


図1 頭無遺跡と関東を中心とした関連遺跡(橋本勝雄1988を一部改変)

4 植物珪酸体 (プラント・オパール) 分析による 遺跡周辺の古環境推定

杉山真二(古環境研究所)・前原 豊(前橋市教委)・大工原 豊(安中市教委)

1 はじめに

花粉分析や種子分析、材同定などの植物遺体分析法は、 遺体の保存上の間遺から対象がおもに水成椎積物に限られ ているが、植物珪酸体(プラント・オパール)分析は台地 上で堆積した土壌にも適用され、さらに焼土や灰、土器胎 土でも分析が可能である。このような利点により、古代人 の生活の舞台であった台地上についても、古植生・古環境 の検討が行われるようになった。

2 遺跡周辺の古埴生・古環境推定

群馬県前橋市頭無遺跡は赤城山南麓の扇状地上に位置している。ここでは榛名一八崎軽石層(Hr - HP, 約4.1~4.4万年前)の下層までの土層について分析を行った。その結果、およそ1万年以前までのローム層ではクマザサ属が卓越しているが、その上部の黒ボク土ではクマザサ属は急激に減少し、かわってネザサ節やウシクサ属(ススキ属など)が優勢となっている。ネザサ節はクマザサ属よりも比較的温暖なところに生育していることから、およそ1万年前を頓に寒冷から温暖への環境変化があった可能性が考えられ

る。なお、ネザサ節やススキ属は森林の林沫では生育しにくいことから、黒ポク土の形成時期はネザサ節やススキ属を主体とする草原植生が姫続されたものと推定される。このような植生変化はほぼ全国的に認められるが、その時期や植物珪酸体組成は地域によって若干の速いがある。関東以南では、ブナ科などの樹木起源の植物珪酸体が検出されることが多いが、今後調査事例を増やすことによって、カシ林やシイ林、クスノキ林などの照葉樹林の存在や分布拡大の様相の解明に役立つものと考えられる。

3 遺跡周辺の植生と人々の生活様式

タケ亜科やススキ属などは遺跡周辺の植生を構成する主要な要素であったものと考えられる。これらの分類群は住居跡内の焼土や灰なピから多量に検出されることから、燃料や生活用具、建築材(屋根材など)などとして盛んに利用されていたものと推定される。さらに、ササ類の存在はこれを食料とする鹿などの動物の存在をも想定させる。このように、遺跡周辺の埴生と当時の人々の生活とは密接な関係にあったものと思われる。

5 柳久保頭無遺跡における火山灰の再検討

早田 勉(株・古環境研究所前橋研究所)・新井房夫(群馬大学名誉教授)

1 はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、浅間、榛名、赤城など北関東地方とその周辺の火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

堆積年代の不明な石器や土層が認められた柳久保頭無遺跡においても、筆者の一人(早田)により野外における土層断面の観察、軽鉱物組成、さらに重鉱物組成によって、示標テフラの層位の検討が行われている。しかし、その後新たに示標テフラが発見されたことや、放射性炭素(14 c)年代測定が多く実施されテフラの年代観が変わったことなどから、改めて詳細な再検討を行うことが望まれるようになった。そこで、すでに採取されている試料を対象に、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析と屈折率測定を行って示標テフラの層位を検討し、石器や土層の年代に関する資料をさらに収集することになった。調査分析の対象となった地点は、本遺跡の基本的な土層断面の6255である。

2 テフラ組成分析

(1) 分析試料と分析方法

頭無遺跡において採取された試料のうち 19 点の試料について火山ガラス比分析、とくに分析が必要と判断された 8 点について重鉱物組成分析を行い、テフラの降灰層準お よびテフラ粒子の特徴の把握を行った。分析の手順は、次 の通りである。

- 1) 試料 15g を秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3)80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により 1/4~1/8mm の粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で 250 粒子を観察し、火山ガラスの形態 別比率を求める(火山ガラス比分析)。
- 6) 偏光顕微鏡下で重鉱物 250 粒子を観察し、重鉱物組成 を求める(重鉱物組成分析)。

(2)分析結果

テフラ組成分析の結果を、ダイヤグラムにして図1に、 火山ガラス比と重鉱物組成の内訳を表1と表2に示す。火 山ガラス比分析では、試料36や34に透明なバブル型(平 板状)火山ガラスが比較的多く認められる(4.8%)。この 火山ガラスは、その特徴から約2.4~2.5万年前*1に始 良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰(AT,町田・新井, 1976,1992,松本ほか,1987,池田ほか,1995)に由来す ると考えられる。したがって、産状から試料36付近にAT の降灰層準があると考えられる。このことは前回の分析結 果を支持している。

また分厚い中間型ガラスや軽石型ガラスは、若干ながら 試料 24 から上位で増加し、試料 12 や 10 にとくに多く認 められる。これらの試料の重鉱物組成は、いずれも斜方輝 石や単斜輝石の多い「両輝石型」を示すが、角閃石がごく 少量認められるものもある。

3 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

62E5の試料のうち、下位の土層と層相が変わり、中間型や軽石型ガラスが増加しはじめる試料24や、前回の分析で浅間白糸軽石(As-Sr,約1.8万年前;中沢ほか,1984,町田・新井,1992,早田,1996)の降灰層準の可能性が考えられた試料20、浅間板鼻黄色軽石(As-YP,約1.3~1.4万年前*1;新井,1962,町田・新井,1992)の層位があるとされたIVa層基底部の試料16、さらに今回中間型や軽石型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準のある可能性が考えられた試料12の4点について、温度一定型位相差法(新井,1972,1993)により屈折率の測定を行い、示標テフラとの同定精度を向上させることになった。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表 3 に示す。試料 24 には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が認められる。斜方輝石の屈折率 (y) は、1.703-1.708 である。試料 20 にも、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が認められる。斜方輝石の屈折率 (y) は、1.703-1.708 である。試料 16 には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率(y)は、1.704-1.709 である。試料 12 には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が認められる。斜方輝石の屈折率 (y) は、1.706-1.711 である。

4 考察-示標テフラの層位

前回の分析結果では、第 X c ~ X a 層が榛名八崎軽石 (Hr-HP, 約4.1万年前*1; 大島, 1986)、第 VII層 ~ VI層基底部に AT、第 VI層中部に浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group, 約1.9~2.4万年前*1; 新井, 1962, 早田, 1996) 下部 (室田軽石, As-MP, 約2.4万年前, 森山, 1971, 早田, 未公表資料)、第 V 層最上部に浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group, 約1.9~2.4万年前*1; 新井,

1962, 早田, 1996, 未公表資料) の上部、第IV b 層中部に As-Sr、第IV a 層に As-YP の降灰層準があると考えられた。

これらのうち、Hr-HP、As-BP Group 上部については、 土層観察により一次堆積層として認められており、同定に 問題ないと思われる。また AT については今回の分析で追 証されたことから、一般に AT の直上にある As-MP の層位 についても、とくに再検討を行う必要はないと考えられる。 なお、As-BP Group 上部とされたテフラについては、層相、 岩石記載的な特徴にさほど違いが認められないことから、 As-BP Group 中・上部としておきたい。

ここでとくに検討を要するテフラは、As-Sr以上のテフラである。今回分析を行った試料のうち、試料24と20の間には、とくに大きな岩石記載上の違いは認められなかった。この試料中に含まれるテフラは、火山ガラスの形態、重鉱物の組み合わせ、斜方輝石の屈折率(γ)などから、As-Srと考えられる。したがった産状を合わせて考慮すると、As-Srの降灰層準は第IVも層下部に下がる可能性も考えられる。また試料16に含まれるテフラは、火山ガラスの形態、重鉱物の組み合わせ、斜方輝石の屈折率(γ)などから、約1.7万年前*1に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第1軽石(As-Ok1,中沢ほか,1984,早田,1996)に由来すると考えられる。さらに試料12に含まれるテフラは、火山ガラスの形態重鉱物の組み合わせ、斜方輝石の屈折率(γ)などから、As-YPに由来すると考えられる。

試料 1 には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれており、斜方輝石の屈折率 (γ) は 1.707-1.711 である。このテフラは、火山ガラスの形態、重鉱物の組み合わせ、斜方輝石の屈折率などから、約 $1.3\sim1.4$ 万年前 * 1 に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP,新井,1962,町田・新井,1992)に由来すると考えられる。

以上のことから、本地点では第Xc~Xa層にHr-HP、 第VII層~VII層基底部にAT、第VI層中部にAs-BP Group下 部 (As-MP)、第V層最上部にAs-BP Group中・上部、第IV b層下~中部にAs-Sr、第IVa層下部にAs-Ok1、第IVa層 最上部~III b層にAs-YPの降灰層準があると考えられる。

5 まとめ

柳外保頭無遺跡 62E5 のテフラについて、テフラ組成分 折や屈折率測定により再検討を行った。その結果、下位よ り榛名八崎軽石(Hr-HP,約4.1万年前*1)、姶良 Tn 火 山灰(AT,約2.4~2.4万年前*1)、浅間板鼻褐色軽石 群(As-BP Group)下部(約2.4万年前*1)、浅間板鼻褐 色軽石群(As-BP Group)中・上部(約1.9~2.2万年前*1)、 浅間白糸軽石(As-Sr,約1.8万年前*1)、浅間板鼻黄色 軽石(As-YP,約1.3~1.4万年前*1)のほか、新たに 浅間大窪沢第1軽石(As-Ok1,約1.7万年前*1)の降灰 層準を検出することができた。

*1 放射性炭素 (14C) 年代。

参考文献

新井房夫(1962)「関東盆地北西部地域の第四紀編年」群 馬大学紀要自然科学編 10、pl-79

新井房夫 (1972)「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定ーテフロクロノロジーの基礎的研究」第四紀研究 11、p254-269

新井房夫(1993)「温度一定型屈折率測定法」『日本第四紀 学会編第四紀試料分析法-研究対象別分析法』p138-148 荒牧重雄(1968)「浅間火山の地質」地団研専報、№ 14、p1-45

池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 (1995) 「南九州、姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流 中の炭化樹木の加速器質量分析法による 14C 年代」第四紀 研究 34、p377-379

町田 洋・新井房夫 (1976)「広域に分布する火山灰一姶 良 Tn 火山灰の発見とその意義」科学 46、p339-347 町田 洋・新井房夫 (1992)『火山灰アトラス』東京大学 出版会、276p

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987)「姶良 Tn 火山灰 (AT) の 14C 年代」第四紀研究 26、p79-83 森山昭雄 (1971)「榛名火山東・南麓の地形-とくに軽石 流の地形について-」愛知教育大学地理学報告 36・37、 p105-116

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 (1984)「浅間火山, 黒斑 ~前掛期のテフラ層序」日本第四紀学会講演要旨集No. 14、 p69-70

大島 治 (1986)「榛名火山」『日本の地質関東地方編集委員会編「関東地方」』p222-224

早田 勉 (1996)「関東地方〜東北地方南部の示標テフラの諸特徴-とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて-」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書7』 p256-267

表1 62E5における火山ガラス比分析結果

試料	bw	md	pm	その他	合計
2	1	5	4	240	250
4	0	16	4	230	250
6	0	9	8	233	250
8	2	16	11	221	250
10	0	28	17	205	250
12	0	26	17	207	250
14	2	23	6	219	250
16	0	21	7	222	250
18	0	15	8	227	250
20	3	10	4	233	250
22	1	6	2	241	250
24	1	5	5	239	250
26	1	3	2	244	250
28	1	2	5	242	250
30	0	1	4	245	250
32	4	1	2	243	250
34	12	4	1	233	250
36	12	1	1	236	250
38	1	11	6	242	250

数字は粒子数。bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型。

表 2 62E5における重鉱物組成分析結果

試料	ol	орх	срх	ho	bi	mt	その他	合計
12	0	139	42	1	0	67	0	250
14	0	125	49	$\overline{4}$	0	70	Ö	250
16	0	141	56	0	0	52	0	250
18	0	166	32	1	0	50	0	250
20	0	148	36	0	0	65	0	250
22	0	151	67	3	0	29	0	250
24	0	146	62	1	0	41	0	250
26	0	136	66	1	0	47	0	250

数字は粒子数。ol:カンラン石,opx:斜方輝石,cpx:単斜輝石,ho:角閃石,bi:黒雲母,mt:磁鉄鉱。

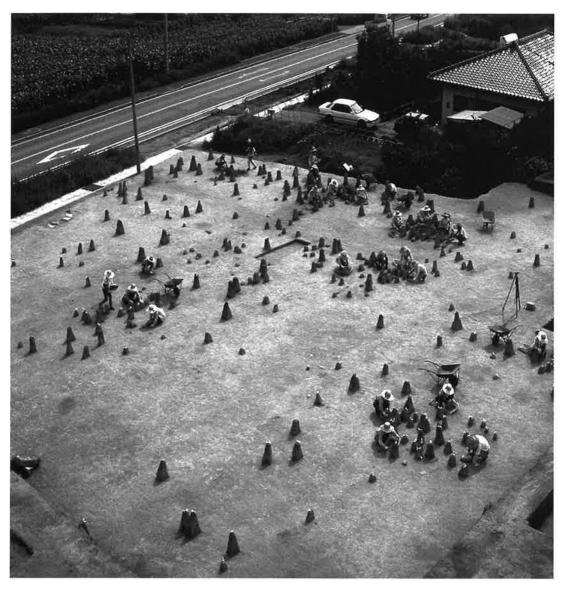
表3 62E5における屈折率測定結果

武料	重鉱物	орх (γ)
12	opx>cpx, (ho)	1.706-1.711
16	opx>cpx	1.704 - 1.709
20	opx>cpx, (ho)	1.703-1.708
24	opx>cpx, (ho)	1.703 - 1.708

opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石。ho:角閃石。 ()は量の少ないことを示す。屈折率の測定は、 温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993) による。



写真図版



頭無遺跡細石刃文化層発掘風景





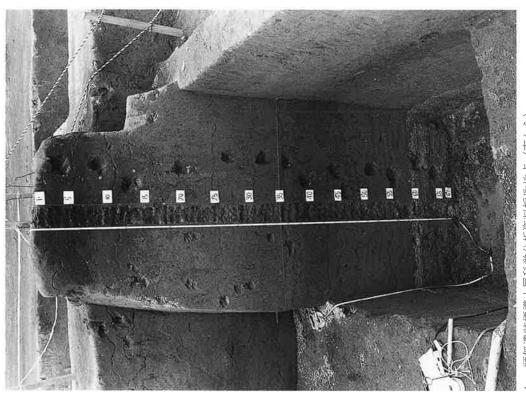
頭無遺跡全景(南から



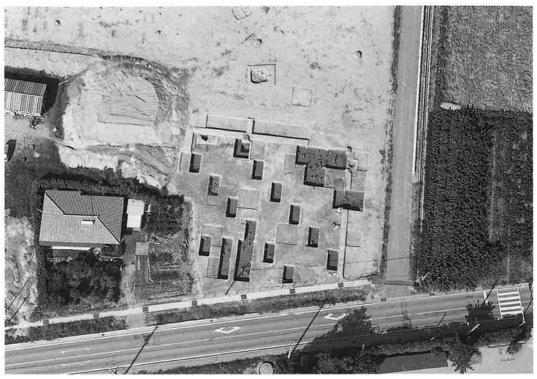
頭無遺跡全景 (東から)



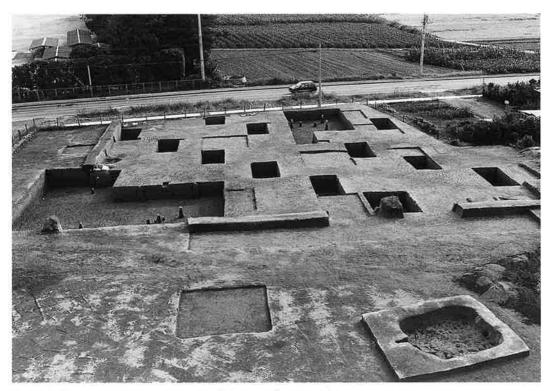
2. 頭無遺跡標準土層 (南から)



頭無遺跡標準土層科学分析資料採取地点(南から)



1. 頭無遺跡旧石器時代第Ⅱ・Ⅲ文化層調査区全景(上空から)



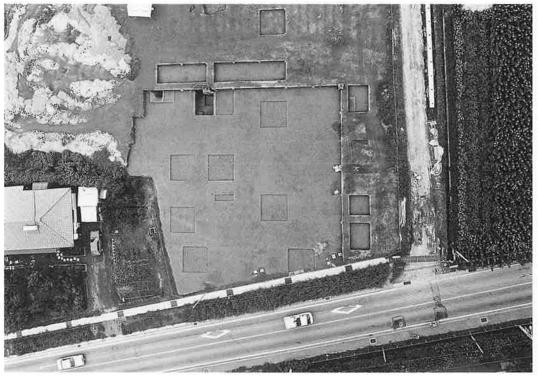
2. 頭無遺跡旧石器時代第Ⅱ・Ⅲ文化層遺物出土状態(北から)



1. 頭無遺跡旧石器時代第Ⅱ・Ⅲ文化層遺物出土状態(東から)



2. 頭無遺跡旧石器時代第Ⅱ・Ⅲ文化層遺物出土状態(北から)



1. 頭無遺跡旧石器時代第 I 文化層調査区全景(上空から)



2. 頭無遺跡旧石器時代第 I 文化層遺物出土状態 (西から)



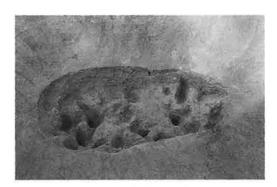
1. JD-1号縄文土坑(東から)



2. JD-2号縄文土坑(東から)



3. JD-3号縄文土坑(東から)



4. JD-4号縄文土坑(西から)



5. JD-8号縄文土坑(東から)

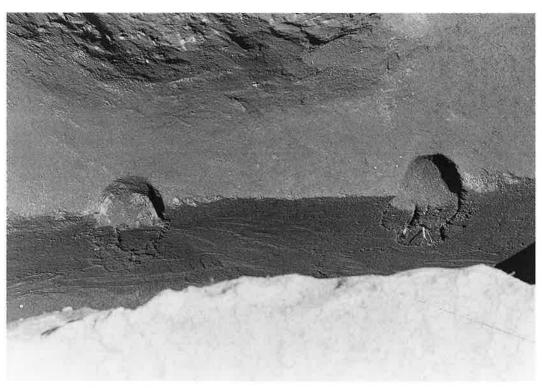
P L . 8



1. JD-5号縄文土坑(南から)



2. JD-6号縄文土坑(北から)



3. JD-9号縄文土坑(南から)



4. JD-7号縄文土坑(北から)



5. JD-9号縄文土坑(西から)



1. JD-10号縄文土坑(東から)



2. JD-10号縄文土坑(南東から)



3. JD-11号縄文土坑(南東から)



4. JD-12号縄文土坑(西から)



5. JD-12号縄文土坑(南から)



6. JD-13号縄文土坑(西から)



7. JD-13号縄文土坑(西から)



8. JD-14号縄文土坑(東から)

P L . 10



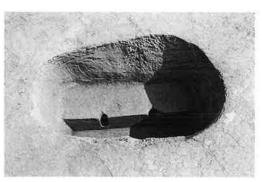
1. JD-15号縄文土坑(東から)



2. JD-16号縄文土坑(南から)



3. JD-17号縄文土坑(南東から)



4. JD-17号縄文土坑(南西から)



5. JD-18号縄文土坑(東から)



6. JD-19号縄文土坑(北東から)



7. JD-19号縄文土坑(北東から)



8. JD-20号縄文土坑(西から)



1. JD-21号縄文土坑(南東から)



2. JD-22号縄文土坑(南東から)



3. JD-23号縄文土坑(東から)



4. JD-24号縄文土坑(南東から)



5. JD-25号縄文土坑(東から)



6. JD-25号縄文土坑 (東から)



7. JD-25号縄文土坑 (東から)



8. JD-26号縄文土坑(南東から)

P L 12



1. JD-27号縄文土坑(南東から)



2. JD-27号縄文土坑(南東から)



3. JD-28号縄文土坑(東から)



4. JD-29号縄文土坑(東から)



5. JD-30号縄文土坑(南東から)



6. JD-31号縄文土坑(西から)



7. JD-32号縄文土坑(東から)



8. JD-33号縄文土坑(東から)



1. JD-34号縄文土坑(東から)



2. JD-35号縄文土坑(南東から)



3. JD-36号縄文土坑(南東から)



4. JD-39号縄文土坑(東から)



5. JD-38号縄文土坑(南から)



6. JD-39号縄文土坑(西から)



7. JD-40号縄文土坑(南東から)



8. JD-41号縄文土坑 (西から)

P L 14



1. S-1号集石(東から)



2. S-2号集石(北から)



3. Z-1号石器配置遺構(北西から)



4. Z-2石器配置遺構(東から)



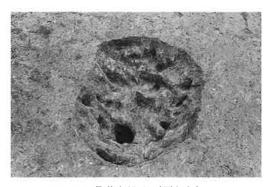
5. JO-5号落ち込み(南から)



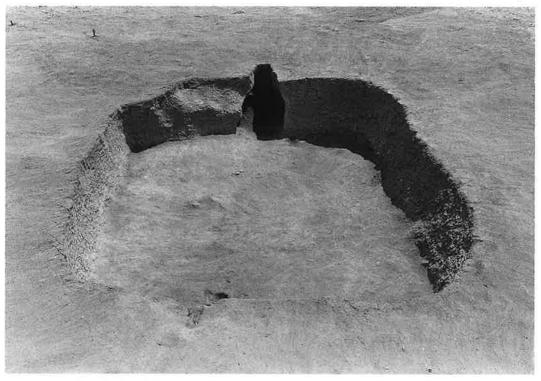
6. JO-6号落ち込み(南から)



7. JO-9号落ち込み(南東から)



8. JO-11号落ち込み(西から)



1. H-1号住居址 (西から)



2. H-1号住居址 (西から)



4. H-1号住居址(東から)



3. H-1号住居址(西から)



5. H-2号住居址(北東から)



1. [-1号井戸(西から)



2. I-1号井戸 (西から)



4. E-1号粘土採掘坑(南から)



3. E-1号粘土採掘坑(北から)



5. E-1号粘土採掘坑(酉から)



1. E-1号粘土採掘坑(北から)



2. K-2号炭窯(北西から)



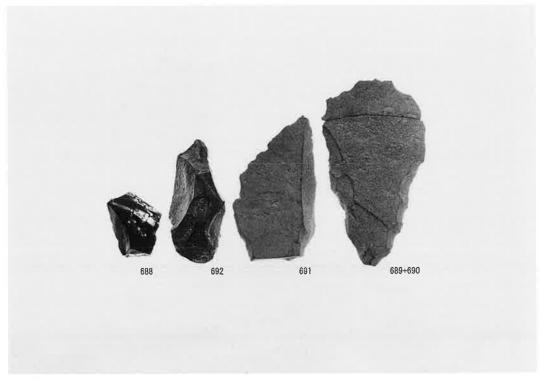
4. D-2号土坑 (南から)



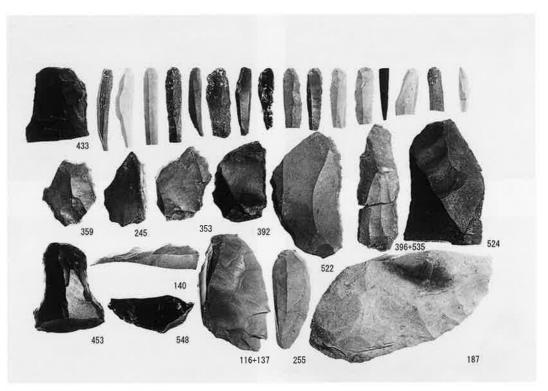
3. K-3号炭窯(北から)



5. D-3号土坑 (西から)



1. 頭無遺跡旧石器時代第Ⅱ・Ⅲ文化層の石器



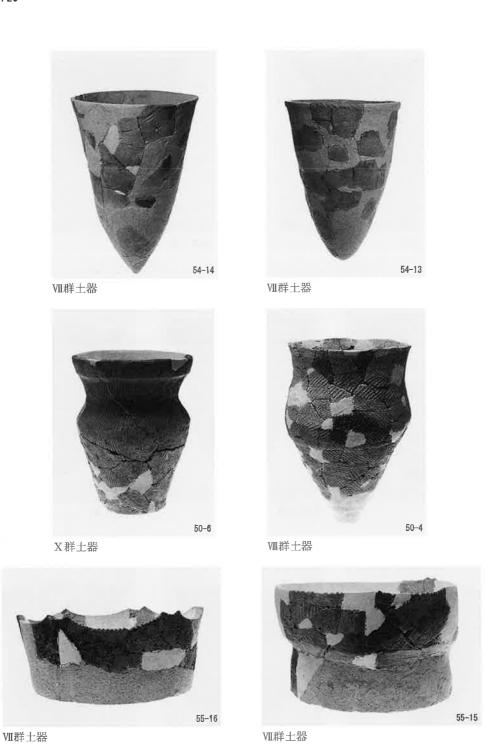
2. 頭無遺跡旧石器時代第 I 文化層の石器



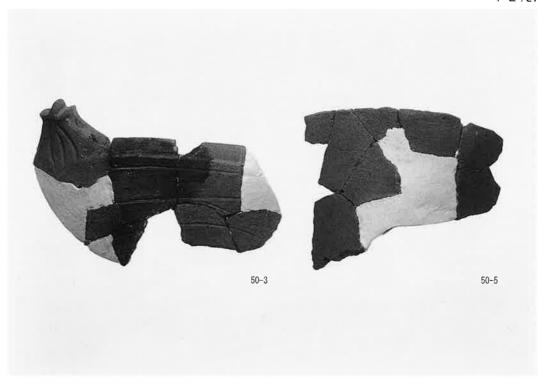
1. 頭無遺跡縄文包含層出土の土器

V群土器

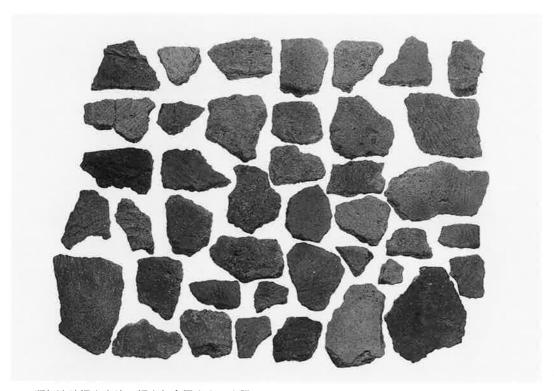
V群土器



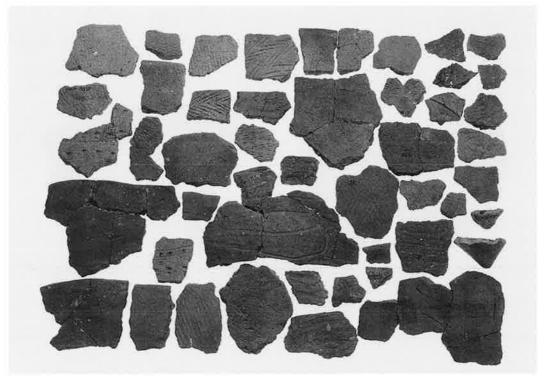
1. 頭無遺跡縄文包含層出土の土器



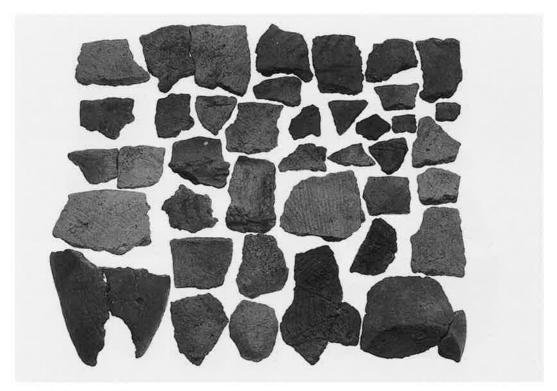
1. 頭無遺跡縄文包含層出土の土器



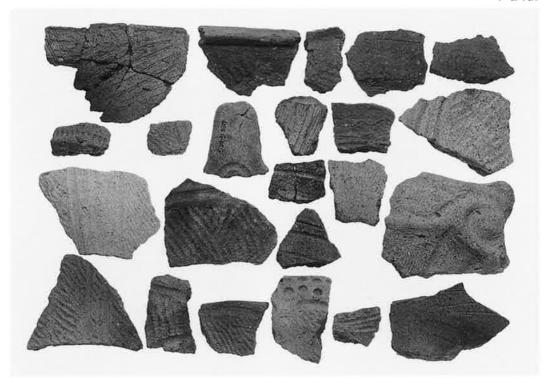
2. 頭無遺跡縄文土坑・縄文包含層出土の土器



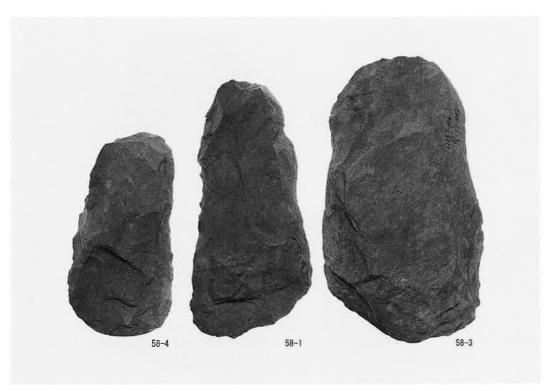
1. 頭無遺跡縄文包含層出土の土器



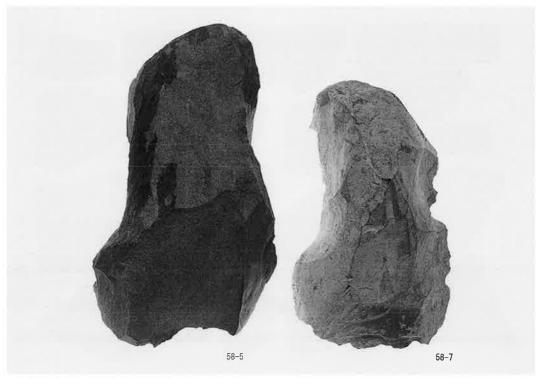
2. 頭無遺跡縄文包含層出土の土器



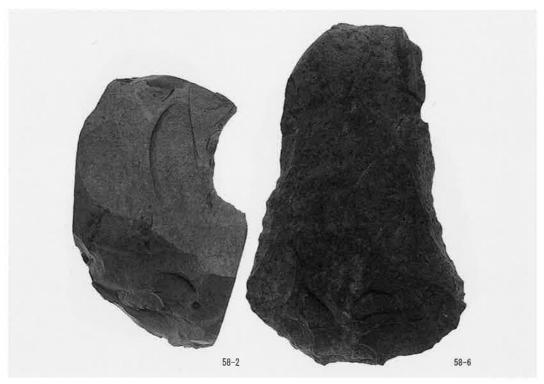
1. 頭無遺跡縄文包含層出土の土器



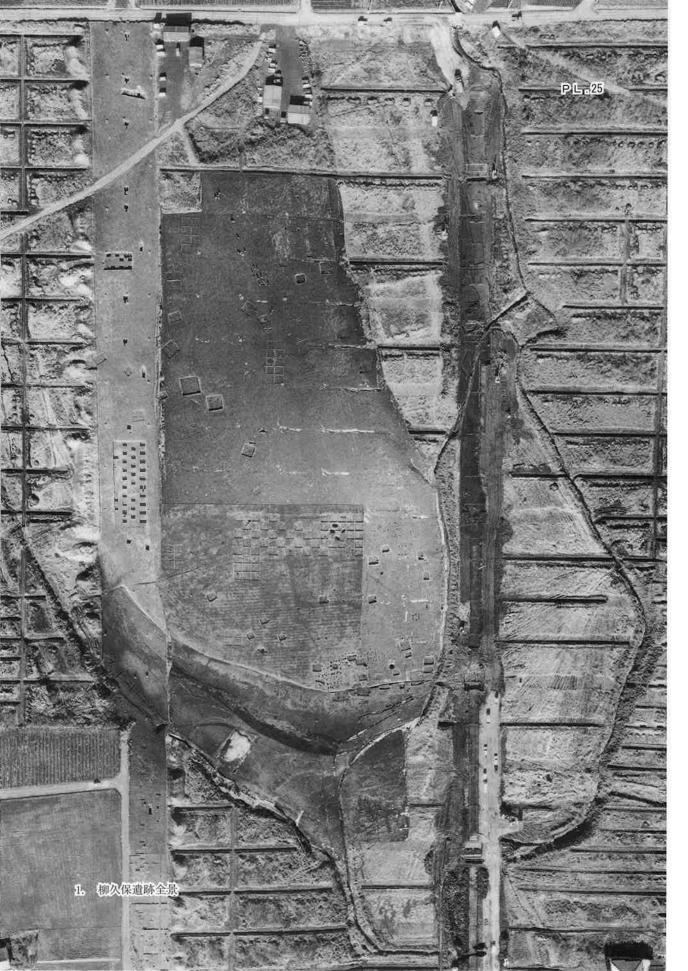
2. 頭無遺跡 Z-1号石器配置遺構出土の石器

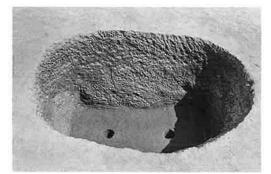


1. 頭無遺跡 Z - 2 号石器配置遺構出土の石器



2. 頭無遺跡縄文包含層出土の石器





1. JD-24号縄文土坑(北から)



2. JD-35号縄文土坑 (東から)



3. JD-36号縄文土坑(北西から)



4. JD-38号縄文土坑(北西から)



5. JD-35・36・38号縄文土坑(南から)



6. JD=42号縄文土坑(南西から)



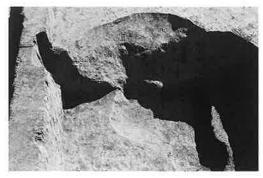
7. JD-41号縄文土坑(西から)



8. JD-59号縄文土坑(北から)



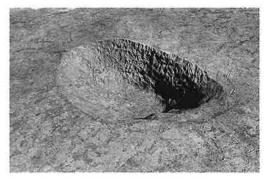
1. JD-56号縄文土坑(西から)



2. JD-57号縄文土坑(東から)



3. JD-58号縄文土坑(南西から)



4. JD-64号縄文土坑(南西から)



5. S-1号集石(南から)



6. S-3号集石(南から)



7. S-5号集石(南から)



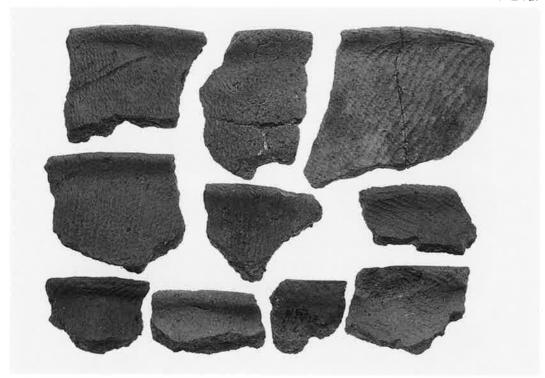
8. Z-1号石器配置遺構(南から)



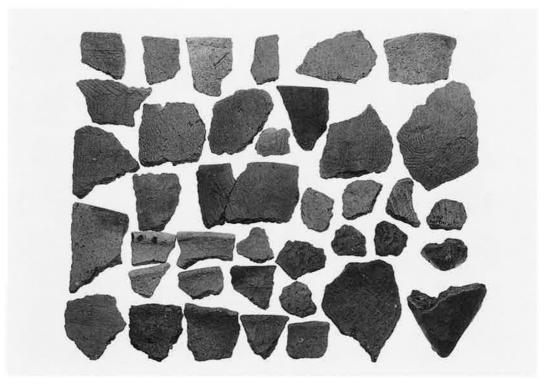
1. Z-1号石器配置遺構(南から)



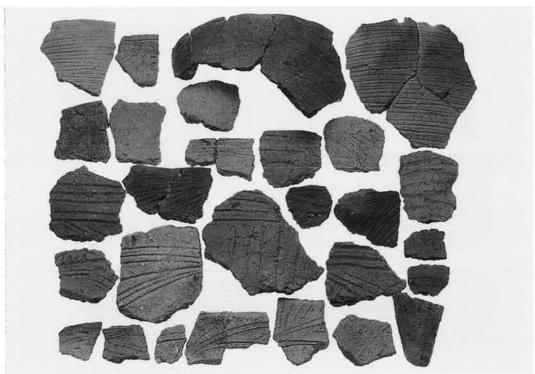
2. U-1埋設土器 (南から)



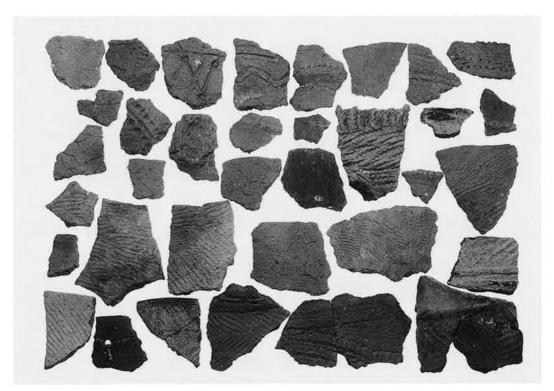
1. 柳久保遺跡縄文包含層出土の土器



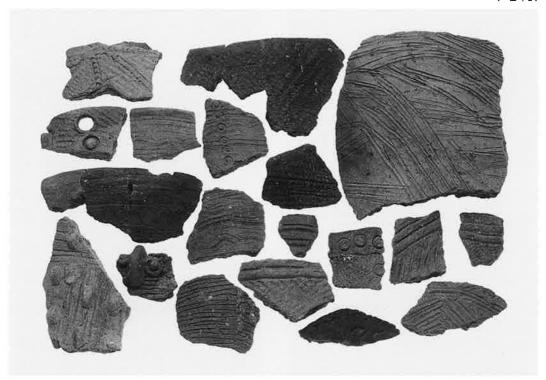
2. 柳久保遺跡縄文包含層出土の土器



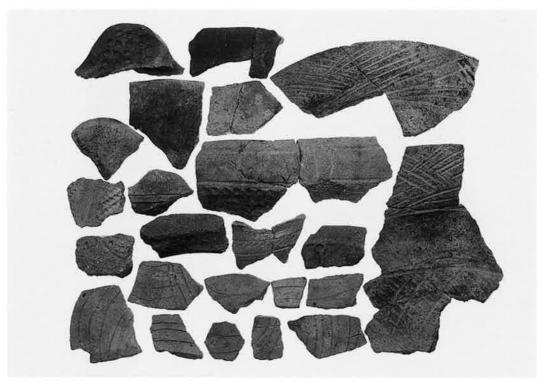
1. 柳久保遺跡縄文包含層出土の土器



2. 柳久保遺跡縄文包含層出土の土器



1. 柳久保遺跡縄文包含層出土の土器



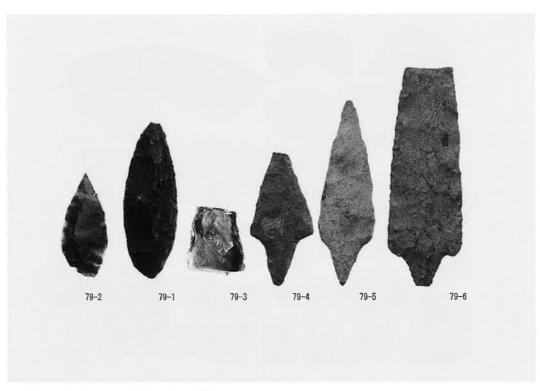
2. 柳久保遺跡縄文包含層出土の土器



1. 柳久保遺跡縄文包含層出土の土器



2. 柳久保遺跡縄文包含層出土の土器



3. 柳久保遺跡出土の旧石器・縄文時代石器

調査要項

開 発 面 積 200,000㎡

調 査 原 因 住宅団地造成

調 查 依 頼 者 前橋工業団地造成組合管理者 清水一郎

遺跡名称 柳久保遺跡群頭無遺跡(かしらなしいせき)

遺跡 記号 62E5

遺跡所在地 群馬県前橋市荒子町字頭無1327-6番地ほか

調 查 期 間 昭和62年4月21日~昭和62年10月21日

調 査 面 積 12,000㎡

調 査 主 体 者 前橋市埋蔵文化財発掘調査団団長 関口和雄

調 査 担 当 者 前原 豊・関根吉晴

遺 跡 名 称 柳久保遺跡群柳久保遺跡(やなぎくぼいせき)

遺跡記号 60E2、61E2

遺跡所在地 群馬県前橋市荒子町字柳久保1310番地ほか

調 查 期 間 昭和60年5月13日~12月27日、昭和61年5月2日~12月20日

調 査 面 積 28,000㎡

調 査 主 体 者 前橋市埋蔵文化財発掘調査団団長 関口和雄 調 査 担 当 者 遠藤和夫・前原 豊・福田瑞穂・関根吉晴

事 務 局 事務局長 福田紀雄・事務局次長 濱田博一・局員 松本卓・諸田陽子

発掘調査参加者

阿部シゲ子 粟岡エミ子 天沼キヨノ 飯島民弥 飯島勝亥 飯島いし 石綿信雄 井上 環 石関秀男 石田博子 岩木 操 井野岳史 江口よしの 大淵幸子 落合高男 大田一郎 大川きよ 大森友江 小淵丑子 女屋千恵子 小島勝雄 小管将夫 小屋政雄 高坂登美枝 高坂享太郎 高坂キョ子 高坂とも 斎藤まき子 新保タマ子 高橋キョ子 田村愛子 田村よしの 千明香根子 渡木秋子 長岡徳治 根岸容子 巾 千恵子 藤塚チエ子 藤倉とみ 星野ふじ 前原アヤ子 松倉菊江 松倉リツ 宮川いち子 村山ふで 村山君江 村山松子 茂木 順 本木みのる 山口きく江 横沢和代 吉田光子 吉田松枝 久保田海一郎

柳久保遺跡群垭

印刷 1988 (昭和63) 年 3 月 20 日 発行 1988 (昭和63) 年 3 月 31 日

編集・発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

群馬県前橋市上泉町664-4

Tel 0272 - 31 - 9531